

風俗双紙

風俗双紙



マツ特集号

11

100





目次

口絵・目次カッタ……古正英男画

角田澄夫（三四）

仙波健児
(五四)

冬谷夷太郎（六二）

机 吾 朗（一二九）

佐
戸
泉（四六）

●美容師夫婦は艶事がお好き……………(一八八)

● 文壇早稻田色情地圖……………(二〇〇)

陸
朗(三二二)

▽日本慘虐刑罪史△妖美やわ肌呪縛…葛飾八郎（一六二）

..... (一九二)

陣出達朗

小島功画

實用風流読本……………(一一三)

◎松谷天光愛戀の裏面史……(七六)

◎岩田専太郎を巡る女………（一八四）

榛葉英治
(八五)

峯秀太郎(二二七)

羽井鯨亭（二七六）

☆そどみあすとおり☆

丹阿弥春彦(二四八)

工藤 頼 夫 (二〇三)

向後等(一五六)





風 俗 双 紙

新しい風俗と文化を結ぶ雑誌



創 刊 号

獵奇官能小説

血

み

ど

ろ

の

妖

精

角田澄夫

雪代の欲望

いつか戸外は湿った夜景になっていた。高台になっているので、眼下にネオンの街が一望に眺められた。

五色の明滅——雪代はいつもそれを見ていて、妙な息苦しさを感じる。何故か解らない、説明のつかないネオンの魔術であった。

殊に、この廊下に立って中央に見える広告塔のネオンは不気味だった。

心臓の形に青くフチどられた中に、赤い細かい光の点滅が暫く続くと、その心臓の両端から下方へ、赤い点線が除々に伸びていった。そしてその赤い点線が最下位と思われるところに達する



と、今度は逆に青い線が伸び上り、最後にその赤と青のフチどられた中に、ある薬品の文字が浮出すのだった。

心臓から二筋下へ、赤い線が点滅しながら伸びていくところは、如何にも心臓から滴り落ちる血汐を思わせた。青い逆な上昇線は、浸す

ような死の訪れを暗示している。雪代はその広告塔を気

味悪く思いながらも、何時

もついその薬品名を示す

浮出した文字が消え、

心臓の血の滴りがは

じまるまで見てし

まう。

「おゝ寒いッ」

思わず背をすぼ

めた。三月に

なったばかり、夜気

はガラ

ス



戸越しにまだ冷たかった。

「杉や、杉ッ」

雪代は今日新しく来たばかりの女中を呼んだ。

「此処の戸を閉めて頂戴、そしてカーテンを引いてね」

杉子にそう命じた。杉子はいわれるまゝに戸をひき、カーテンもひいた。

「まあ、高い背」

雪代はカーテンを引く杉子の背が、雪代より高いのに驚ろいていた。

雪代も女としては大きい方だった。

五尺三寸八分、夏村はよく、風呂からあがって身体を拭く雪代の裸体をしみじみみて、

「まったく立派だよ、お前の裸、彫刻だってこんな美事なものはないだろうよ」

そう感嘆していった。

「いや、そんなに見つめていては……」

雪代は夏村の視線から逃れるように、湯上りタオルで素早く腰を覆うのだが、実は男の刺すような視線の痛さ、快感だった。もっと身をくねらせ、その視線の痛さに堪えながら、夏村をも楽しませていたい。ふとそうした誘惑がくる。雪代は自分でも、処女のように引緊った乳房と、すんなり伸びた下肢に自信があった。芸妓に出でいたところから、雪代は乳房だけは客の自由にさせなかった。

執拗に弄ぶ男があると、雪代はいった。

「よしてよ、形が崩れるから、お乳だけは私の一人の人のために大切にしておきたいの」

そうして護った乳房は今、夏村だけに与えている。だが、夏村が私の一人のひとというのでもなかった。商事会社を経営して金もあり、肌合いも知れた夏村が、その頃の周囲の中で、最も条件がよかったというに過ぎない。こうして夏村のかくれた女になってもう二年たつが、私の一人のひとはこれから現われるのか、或はまたこのまゝ現われずに終るのか、それは雪代にもわからないのだ。

「お前、身長どのくらいあるの」

雪代は杉子の背に自分の背をびったりつけて計ってみた。

「あつ、やっぱり高いわ」

並んでみると、心もち杉子の方が上になった。くろりと廻って向き合ると、雪代の唇は杉子のおとがいに触れる位置になった。

「奥さんもお高いですわ、私いままで恥ずかしい位だったんですの、

でもこれからは奥さんがいて安心……」

二人は笑いあった。

杉子は今朝来た時のまゝの銘仙の花模様の着物の上にエプロンをかけていた。浅黒い腕の肌がむき出しになっている。雪代はその小麦色の肌を何となく魅惑的に感じた。

新聞広告を出したその日、杉子は来たのだった。廿五才、ふっくらした下ぶくれの頬が娘らしく可愛いかったが、口紅もつけない唇の赤さは、どこか少年のような面影もあった。気のせいか杉子の体臭が、若草のような香りを放っているように雪代には思えてしかたなかった。

杉子の前に二人も三人も応募者はあったが、雪代は一目みて杉子をきめてしまった。

今はじめてみたエプロンからむき出された小麦色の肌のよさだけではなく、杉子の全体のきりっと引緊まった感じ、眼の美しさにも雪代にとっては魅惑的なものがあつたのである。

「夕食の仕度が済んだらお風呂に這入らない？ 今夜は夏村も来ないし、一緒にゆっくり這入りましようよ」

雪代はいった。いつも新入りの女中が来た時のように、杉子の肉体を見たい不思議な欲望が雪代にあつた。

同性の肌

雪代の家で、この二年ほどの間に、何人の女中が代つたろう。時々夏村が来るほかは、猫と犬と雪代だけの暮し、そう酷使する訳でもないのだろうにと、近所でも不思議がったが、それほど女中の居

付は悪かった。

雪代の変態癖のためかも知れない。いや確かに、雪代の趣味にはついてゆけないところがある。雪代は同性の肌が好きなのだ。

私は娘の頃、こうされて寝たのよ、とても嫌な姐さんに、でもそれが後でとても楽しみになったの、誰れでもきつとそうよ」

雪代は一緒に寝た女中たちによくそういった。しかし田舎から来たばかりの女中は、そうされた翌朝すぐ、荷物をまとめて暇をとっていった。

杉子の前に居た咲子はそれでも長く続いた方で、伯父が縁談を持ってきたからといって、辞める時にはその楽しみがかなり解っていたようにだった。

咲子はやっぱり初めて来た日に、雪代と一緒に風呂に這入った。

咲子は背が低い方で、そのかわり身体は白く、むっちり肥っていた。腰が厚く広く、お腹が三カ月位のふくらみようだったので、雪代は笑った。

「お前はきつと脂肪が多いのよ、だからお腹が厚いんだわ、ほら私なんてこんなに薄いのに」

雪代は緊まった自分の腹部を見せた。胴の細まりも、雪代の方がもとより形よくびれ方だった。

「まあ背中も広いこと」

咲子の脂肪の塊りのような背に、また雪代は吹き出した。

だが、こうして何気ない馴らし方が新入りの女中には大切だった。咲子はその手に乗って雪代を主人と思う片苦しさもすっかり解けたようだった。

「お前の身体も洗って上げるわ、奥さんになっても知っておくのが

大切よ、身体を柔らかくして私に委せて……」

「あら、奥さま、そんなこと、お手が汚れますわ」

咲子はそういって腰をひいた。

「いいのよ、いいのよ」

雪代は片腕を咲子の首に巻いて胸に抱き締めるようにすると、咲子の身体を洗ってやった。

「あっ」

咲子は小さく叫んだ。そして手術でも受ける時のように顔をしかめた。雪代も花柳界に入って、かってこのように洗われた時のことを思い出した。

夜、夏村の来ない時は、咲子は必ず呼ばれた。雪代が咲子の肌を愛撫し始めると、彼女は最初激しく拒んだ。雪代は仕方なく、咲子の両手をしごきで縛ってしまった。

「恥ずかしがることはないの、楽しむのよ、いい、楽しまなければダメよ」

両手を縛られまゝ、咲子はう、う、と低くこらえる声を洩らし

た。

「もう、奥さん、もう止めて……」

咲子はそう必死に哀願する。すると雪代はいつまでもわざと、その愛玩を止めようとしなかった。

杉子にもそれを教えたい衝動を雪代は感じていた。

「私は後で結構ですから、奥さまお先へ」

風呂へ一緒に這入ろうといわれて、杉子はそういった。

「あら、だって私も久し振りにお背中流して貰いたいのよ」

困った、というように、杉子は深い困惑の表情をした。

「でも、私あの、今晚は身体が……」

辛うじていう声だった。雪代もさすがにそう聞いてはそれ以上強いるわけにはいかない。あきらめねばならぬことだった。「そうだったの、なら、私一人で這入るわ」

雪代はそういて石鹼とタオルをとり、ひとり浴室に這入っていった。

臘涙の責め

翌日—夏村が来た。

「忙しくてやりきれんよ、

まったく。命はすりきれるばかりだ。今のうち

に人生をせいぜ

い楽しまなくっ

ちゃあ—

夏村がいうのへ、雪代はふふと笑いながら返す。

「何とか仰言って、案外柳橋あたりで忙しんじゃあないんですの」

「バカをいいなさい、決算期で追われているんだよ」

それは本当らしかった。夏村は酒もそこそこに夕食を済ますと、

「もう用事はないんだらう、早く寝んだらどうだい」

「まあ、せっかち屋さんね、いま寝るわ」

雪代は帯を解きながら、夏村にいった。

「あなたが本当に会社のお仕事で忙しかったのかどうか調べてあげる」

長襦袢一枚になって、雪代は夏村の方へ手を延ばした。

「僕も、お前が留守に浮気をしなかったかどうか、調べてやろう」

夏村は雪代の手を両手につかむと、其処にあった革のバンドで結えてしまった。

「さあ、僕のものだ、調べが済むまで許してはあ



げ
ないよ

冗談で始め

たことだった

が、革バンドは思

いの外きつく手首に食

い入った。

「痛いっ、調べさせて上げる

からこの手を解いてっ」

「ダメ、ダメ、その手は桑名さ」

夏村は雪代の長襦袢の腰紐を解いてと

うとう裸にしてしまった。

雪代は身をよじってうつ伏せの位置に変えよう

としたが、背が痛んで旨くそれが出来なかった。夏

村は悶える白蛇のようにくねる雪代の裸体を、しばらく

みつめていたが、静かにその裸体を愛撫しはじめた。

胸から降りて、また腹部の小高い丘に這いあがるなだらかな肉体

の屈曲を追って夏村の掌は静かに這う。雪代はその生温く、生きた

蛇のような掌の感触に、いっそう悶えた。

「もういいやっ、やめてっ、調べるなんていやよっ」



雪代は

思わず叫ぶ

ような調子にな

った。そして腿を

高く上げて防いだ。

夜の光の下に、その雪代の

ポーズは妖艶だった。夏村は

その美しい肉体の豊かなうねりに

酔い、掌の愛撫はますます執拗にな

っていった。

「よししてっ、よししてっ」

雪代は全身にひびくむず痒ゆさに、ほとんど悲鳴

をあげんばかりに五体をよじらせた。

「さあ、これからいよいよ調べるんだ」

夏村は益々興に乗っていく。思いつきから始めたその試みが、彼

には思いのほかに気に入った。

至高な美を土足で汚す快感を彼は覚えた。雪代の自由を奪われた肉

体を花園にたとえたとしたなら、彼はその花園を自由に荒すことの

できる発狂した園丁の位置にあった。彼は立ち上って、戸棚の隅か

ら荷造り用の麻縄を取ると、それで雪代の両足首と両腿を堅く縛り

あげた。

「いいかい、少し熱いだろうがね、最後まで辛棒したらお前は潔白なんだ。僕に隠したことがなかったら最後まで辛棒おし」

夏村は妙なことを思いついたのだ。一本のローソクを手にする、ライターをカチリと鳴らせて火を点じた。

雪代はあつと叫んだ。何をするのだろうか、脱れようとしても自由を完全に奪われた下肢、両手首の革バンドは益々きしって強く締まるだけだった。

彼はローソクの焰に悪鬼のように顔を染めて、その実験に取りかかった。雪代のなめらかな全裸の肉体の上に膿涙を落すのである。

先ず彼はそれを乳房の谷に落した。熱した膿の滴りは白い脂脂を浮かせた肌の上に、ジ、ジ、ジと音たてて、すぐ白い花瓣のように固まった。

「あつ熱っ」

雪代は小さく叫んだ。斜め向いの部屋には、新参の女中の杉子が寝ている。もし悲鳴が聞こえたりすれば、駆けつけてくるかも知れないのだ。雪代はそれを思って声をおしころしていた。

「どうだい、お前の年令だけ、廿七だけ落すよ、だがもし白状することがあるなら途中でやめる、お前が潔白を証明したいんなら廿七落すまで頑張るんだ」

「いいわ、頑張るわ、白状することなんて無いんだもの、その代り私が調べるときもこうするわ、あなたは卅七よ」

「いいとも」

夏村は悪魔の微笑を浮かべた。憎らしい悪魔っ、雪代はきつと唇を噛んだ。

「二つ、三つ」

夏村は一定の間を置いて膿の雫を落していった。胸から腹へ、乳房の小山ではそれが火山の溶岩のように腋へ流れ落ちた。

「ひっ、熱いっ」

叫ぶまいとしても声は洩れた。だが熱膿はつぎつぎと肉体の上に降りつづけた。雪代はしびれるような痛みの中で、だんだん気を失っていった。

妖精の秘密へ

「お前は昨夜、何んにも気づかなかった？」

翌朝、夏村を送り出してから、雪代は杉子に尋ねた。

「はい、何も、奥さま」

杉子はすぐ答えた。

「嘘、嘘、お前は私たちの寝室を覗いていたんだわ、私の声がお前の部屋に聞こえない筈はないもの、それに本当に知らないなら、もっと違った答えがある筈だわ」

雪代はそういつてじっと杉子の目を見つめた。杉子は面を伏せた。

「やっぱり見たのね」

「いいえ、本当に、何も……」

「なら、嘘でない証拠を私に見せてくれる。」

「昨夜のようにするのよ、お前は廿五」

「あらっ、そんな、奥さま……」

「そら、やっぱり知っている。まあ何でもいいわ、こちらにいらっ

しゃいよ」

雪代は杉子を寝室に誘った。そして室内に這入ると、杉子の両手をとった。そこには確かに女の柔かい弾力があつた。

「奥さま、何をなさいますの」

「いいの、私のいうとおりに……」

「いけません、奥さま」

杉子は激げしく自由を奪われることを拒んだ。必死に拒む杉子の力は、それを押さえようとする雪代の力よりも勝っているようだった。それに背も杉子の方が高い。二人はもつれたまゝ、畳の上に倒れた。

「杉子っ、私に抵抗するのっ、私は主人よ」

「でも、奥さま乱暴遊ばすんですものっ」

二人はなおも争った。裾が乱れて露わな丸い女の膝がもつれ、からみあつて争鬭は暫らく続いた。杉子が雪代に組敷かれて、両手を頭の上で縛られてしまったのは、杉子にやはり主人に対する無意識の服従心理が働いたためかも知れなかった。

「あゝ疲れたっ、でももうお前は私のものよ、私の自由に身を捧げるんだわ」

雪代は勝ち誇つたようにいって、杉子の帯を解いた。

「あつ、奥さま勘忍してっ」

杉子はその時絶叫した。それは普通の女性が羞恥にあげる声よりも、悲痛の響が深いように思えた。杉子は両手を頭の上に縛りあげられたまゝ、のたうつように身をまがいて雪代の手を脱れようと努力した。だが、素早い雪代の動作は転々する杉子の移動を追って、遂に帯を解き、褌袴の肌を開いた。

「あつ、勘忍っ」

杉子の頬は、かっとなえるように染まった。小麦色の柔かい肌だがその胸にあるべき管の隆房の乳起は、当然あるべくして無かった。いや、それは男のもののように、僅かなふくらみに過ぎない。「まあ、お前っ」

雪代は奇異の目を見張った。浅黒い肌に、ぶっくり盛り上った乳房を期待して、秘かな愉悅にときめいていた雪代の興奮は、熱した刀身が水桶に冷やされていくように、みるみる冷めていった。だがはっと気づいた。杉子の肉体は男ではあるまいか？

「奥さま、許してっ、すっかり申しあげます、だからこの手を解いてっ」

杉子は苦痛にうめくような声で、哀願をこめていった。だが雪代は手を解かうとはしなかった。というより、その哀願も耳に入らぬもののように、好奇の手は杉子の白いパンティの××××××××雪代はそこに何を発見したか？杉子の胸の上に顔を落すと、暫らくじつとそのまゝの姿勢でいたが、やがてそれは静かなすすり泣きとなった。涙が杉子の胸の浅いくぼみに溢れ、腕に伝い流れていった。杉子もその熱い涙を肌感じて、くっくつと涙線に湧く涙を食いしばっている。

杉子の肉体の不思議——杉子は両性であった。悲しい宿命の肉体に、雪代は驚ろきよりも、むしろ説明のできない感傷が、潮のように胸にこみあげるのをこらえかねた。

「半陰陽、お前がそうだったのね、私は一生お前を離さないわ、私だけが前を守ってあげる」

雪代は堅く杉子の両性の肉体を抱きしめた。そして囁やくように

いった。

「さ、これから秘密に遊ぶのよ、私はあなたの女をよろこばせてあげればいい、それとも男の……」

雪代は狂乱したように杉子の小麦色の両性の肌へ、挑んでいった。それは全身をかけて、男性としての杉子に火を点けているようでもあった。

鑊と鉄

雪代は杉子の肉体を知ってから、その秘密の遊びを夏村に見つけられる夢をよくみた。そしてその度びにはっと目を覚まして、冷たく流れる肌の汗を拭った。

どの男もがそうであるように、夏村も嫉妬深い。あの臘涙の調べが、もし本当の雪代の身体に聞く必要からの調べだったとしたら、夏村は果してあれだけで済ましたかどうか？

杉子は男として完全に雪代を愛した。また女として雪代からの愛撫を受けた。二人の間は奇怪な愛欲に充たされていたが、それだけに雪代にとって、夏村への発覚が厭だった。しかもその発覚は、雪代の肉体が杉子を知ってから、夏村へだんだん興味を失っていきそうな危険が昂まる意識と共に深い恐れともなった。

杉子への度重なる接近が夏村への嫌悪を深め、その肉体が示す嫌悪を、夏村がいつまで気づかずにいよう。その時夏村はどうするか？女と女の遊びだけには、少しも感じなかった罪の意識が雪代にだんだん重かった。

——杉子は雪代のつやのある雪の肌に、食い入るように細をかけ

た。そして、その乳房を噛み、柔らかな腹部、ときめくみづおち、腿にも愛撫の歯型をつぎつぎとつけていった。雪代は歯型を印される度びにうめく。歯型から血が吹きあがることもあった。血ぬられた唇を喘ぐように、白い雪代の肌を食いむさばる杉子は、ふと男の獣欲にぬれた顔であった。パーマの髪も、そこでは乱れた男の長髪のように、杉子はあの男性の乳房をみせて、雪代の女を弄ぶ。雪代は全身の痛みが、何時か虐げられる悦びに変っていくのだった。

こうした愉悅の時、夏村が突然帰ってきた。

「雪代っ、お前はやっぱり僕を裏切っていたのかっ」

夏村は怒りを爆発させた。杉子もそこへ、縛ったまま転がされた「さあ、お前たちをもう二度と愛し合うことができなくしてやる」

夏村は叫んだ。此処は何処か海辺の家であろうか。断涯を洗う波音のようなものが、断続して雪代の耳に聞こえた。

あの海の底へ、杉子と二人の肉体が投げ込まれ、人魚のように白く漂いながら、やがて深海の底へ沈んでいく。きっとそうなのだ、雪代な何となくその想像にとらわれていた。

しかし夏村は、海へ投げ込まうとするようすはなかった。大きな鉄と鉄鑊をとると、それを爐の真赤な焰で焼きはじめている。

鑊と鉄鑊を焼く夏村の無気味な笑い。その鑊と鉄鑊がどんな役目を果たそうとしているか、考えるまでもなく、雪代の胸を苦痛の予感が締めめる。

「さあ」

夏村は真赤に火焔を吹いて焼けきった鉄を取った。

「いいか、これがお前の男の最後だ、よく覚えておくがいい」

焼けた鉄は、まず杉子の足裏を焼いた。じっと白い煙が立って、杉子の苦痛の音が長く尾を引く。

杉子の足の肌は破れて、血が鉄の上に滴り、すぐじゅっと生臭く消えていった。

血に濡れた鉄を高くかざして、

杉子の生命を絶った夏村が、妖鬼のような笑いを声なくあげると、今度は火焰の中から真赤な鏝を取上げた。

雪代の番だ。

「あっ」雪代は叫ぶ。がその苦痛は思った。ほどではないのだ。むしろこそぐるような快感が五体に拡がっていった。夏村の汗をほとばしらせた顔が、だんだん大きく迫ってきた。雪代はさも堪え切れない苦痛をこらえるように、肉体をくねらせていった。

火の拷問

「そんな夢だったの、此頃ひっきりなしにそんな夢をみてしまう。みんな二人の罪がさせるのね」

雪代はその翌日、杉子に昨夜みた恐ろしい夢を話をした。

「まあ、本当だったらどうしましょう」

杉子も顔色が青くなった。

「でも、その鏝のとき、割合楽しかった。まさか本当だったら楽しいどころか生命もないだろうのに、今でも試してみたいような気がするの、ふふふ」

雪代は思い出して笑った。鏝の誘惑は事実だった。あの裁縫用の鏝を焼いて、試してみたら楽しいのかも知れない、昨夜目を覚まし

てから考えた位だった。

「お前にも試してあげようか、きつといいわよ」

「飛んでもない、血が吹き出しますわ」

杉子は恐れるばかりだった。

「でも身体を焼くっていいわね、私を焼いてくれる？ そうね、夏村に知れないように背中がいいわ」

雪代は急に目に活気を点して、熱心になった。

「私を焼いて、お前は悦びを感じない？ もしも私がお前の肌を焼けば、悦びが感じられそうなの……」

雪代の欲求を、杉子はどう拒みようもなかった。命ぜられるまゝに、雪代の全裸の両手を縛って床柱につなぐと、足もうつ伏せに開かせたまゝ別の床柱に堅く縛りつけた。

火鉢の中では、炭火の上に二本の火箸が焼けていた。

「思い切っているのよ、私を憎い女だと思ってね」

雪代は火箸の苦痛を思っ目目を閉じた。やがてその火箸は赤く焼け上った。

「うっ」

真赤な鉄の火箸が、やがて雪代の白いむっちりとした肉づきをみせた背に押された。

「夏村、許してっ」

雪代はそう叫んだ。火箸を手にした杉子の手は妖しくふるえた。杉子の加虐を、雪代は夏村のものに幻想している。

雪代の焼ける肉体をみつめて、杉子には夏村に対する嫉妬が次第に昂まるのだった。夏村の持物である肉体へ烙印する愉快さと、その男に屈服を哀願する女への妬心が、いりまじって杉子を襲っていく

るのだった。杉
子は焼火箸を雪代の背の肌へ次第
に力をこめて当てた。



「う、うっ」

雪代は肉体をのたうたせ、その苦痛に堪えようとする。床柱に結えた麻縄は、ぎっぎっときしんで血が静かに、白のパンティを染めた。

で鳴った。

やがて、その火の拷問は止んだ。だが、杉子の昂奮は暫らく続いていた。

「さ、今度はお前よ、私と同じ苦しみ、楽しさを知らなければいっ

つ」

雪代はそういつてきかなかった。
あっと杉子が声を立てる間に、両手はもう縛られてしまっていた。麻縄はそして杉子の両足にも巻かれていった。

「焼鰻がどんなに楽しいか、私がこれから教えてあげるわ」

雪代は杉子の両足を縛った縄を鴨居に通すと、それを逆吊りに吊りあげてゆく。

杉子は血がかつと顔面におりるのを感じて息をつめた。裾がまくれてぱつとその顔の上に落ちた。

「いい、暫らくの辛棒よ、お前が苦しければ苦しいだけ、私も苦しい。そしてそれが反って二人の間の悦びだってことがだんだんわかるんだから……」

雪代はそういうのだが、まったくそんなサジズムの心理がいまはあった。

雪代は焼火箸を炭火の焰から抜きとると、逆吊りにされた杉子の腿に、その先端をあてた。

「うっ、苦しいっ」

痛みと苦しさに、杉子はもがいている。そのため、逆吊りの姿態

はゆるくきりもみに廻転した。

「まあ、弱い、お前は男のはずなのに……」

杉子の苦痛にしかめた表情が、雪代には堪えられぬ悦びであるように、なおも火箸の先端は荒く杉子の腿をえぐった。皮膚が破れ「ふふふ、きれいな花模様」

雪代は悦慮に上ずった目で、じつとそのパンティに染まる血を眺めていた。

「さ、もう許してあげる、私の大切なお前をこれ以上虐められないわ」

雪代は危うく失神しようとしていた杉子の鴨居の縄をゆるめた。杉子はぐったり畳の上に降りた。

雪代は杉子の露わな小麦色の鹽の肌に、まだ吹きつづける血の泉を見ると、それに唇をつけて、きず口をやわらかい舌で覆った。血の味が塩辛く雪代に感じられた。

血にぬれたパンティ——雪代はそれをも静かに膝の方に脱がせた。

両手と両足まで縛られたまゝの杉子が、雪代のパンティを脱がせる手を拒んで身体をねじった。

「いいの、私のもの、私のもの、私のほかには誰れもいはいしないわ」

雪代はそういうと、腿の血の滴りに濡れた、その杉子の両性の肌へ、血をふくんで真赤に彩られた唇を静かに近づけた。そして狂おしく杉子の腰をかき抱くと、いつまでもその接吻を続けているのだった。

——終——

あぶ「すとお」
醜婦淫樂

一米まとわぬ恥かしい姿に、つたゞ代の前にローソクがもう一本余計に立てられた。眞蒼の顔をして、齒を喰いしぼりながら……

佐戸泉

久保川祐画



お嬢さま処女

政代はまずい容貌をしていて、そのうえ、すこしビッコをひいていた。

小児マヒとかいったような先天的な欠かからではなく、十八の時、自動車にはねられたのが原因である。

父は日本橋で有数の呉服問屋をやっていたし、財をつくしてあらゆる名医の診断をうけたのだったが、どうしたわけか完全に治癒しなかった。

たとえ、醜女でビッコであつても、結婚の相手に困るほどの家柄ではなかったし、比較的すくすく育って来た彼女が、どうして吾一のような男と一緒にになったのか不思議でなら



なかった。

吾一は政代以上の醜男であつたし、なによりも父の一使用人にすぎなかつた。

四尺足らずの小男で鼻は左右に大きくアグラをかき、眼だけがいつもギラギラ陰惨に光っている。眉毛は殆ど形をなしていないし、頭髮も五十男みたいに禿げあがっている。それでいて吾一は今年やつと二十八になつたばかりの若さであつた。

吾一の父も母も、生きているのか死んでいるのかさっぱりわからない。五ッ位のときに政代の父の金吾に拾われて育てられたのだが金吾も政代も決して自分の家族の一員のよう扱ひ方はしなかつた。

いや、むしろ普通の使用人以上に虐待さ

れどおしだつたと云つたほうが適切であるかも知れない。

「拾つてやつたんだから、とことんまで使つてやれ」そういつた奴隷に対するような氣持が働いていたのだらう。

吾一は表面従順にはしていたが、口惜しくて口惜しくて仕方がなかつた。いつかは、この復讐をしてやらなければいけないと、固く決心していたのだつた。

そして、その鋭先が娘の政代に向けられ、とうとう暴力で犯してしまつた。

まつわる体毛

吾一はその時のためにかねてから、すっかり準備を整えていた。

生花を習いに行くにも、ちよつとした買物に出掛ける時でも、政代は醜男の吾一を連れてはいかないで、たいてい清一という美男の番頭か、又は女中の千代をお供にしたがえていたが、ちよつどその日は敷入りで、吾一のほかは皆暇を貰つて郷里へ歸つたり、東京の親戚の家へ遊びに行つたりしていて留守であつた。

政代は余程一人で出かけようかと思つたが

・途中が不要心であつたし、ちょっとした買物もしたいと思つていたので、

「吾一やすまないけど、今日は私のお供をして、京橋まで行つておくれ……だけど、くれぐれも断つておくれ、人通りでは絶対に私から遠く離れていることよ」

不承不精ながら護衛役兼荷物運搬係を命じた。

「へい、よろしゅうございます……」

ニコツとして頭を下げたが、その時、キラッと吾一の瞳が異様に光ったことには、勿論政代は気がつかなかつた。

着飾つてはいるが、ビッコをひいた醜婦の政代が勝手口からシナをつくりながら出ていく。

十米ばかり離れて、吾一が小さな身体を左右にふりながら、小走りでおくれまいとする目と鼻の京橋であつたし、すっかり復興したはずの日本橋人形町界隈にも、こんな淋びしいところがあるかと思われるくらい、戦災で焼けたゞれたまゝの壊れたコンクリート、赤く錆びついた鉄骨がむき出しになつたまゝで辺り一面瓦礫の山とゴミ捨て場みたいになつていゝところがあつた。

勝気なようでも、やっぱりお嬢さま育ちで

ある、

「吾一や、もっと近くへ寄つておくれ」

振返つて吾一に会釈をした。

ニコツと、うれしそうに鼻をふくりました吾一は弾丸のように政代のそばへ駆け出してきた。

しかし、吾一はその勢いを一向にゆるめようともしないで、そのまゝ彼女に背後からぶつかつていった。

「あッ！」

短かく叫んで、前のめりに転がつた足のわるい政代はしたたかに顔を瓦礫にぶつけて、瞬間、めまいがしてしまつた。

顔が破れて、鮮血がにじんでいる。

「く、く、く……」

奇妙な笑い声を立て、吾一は彼女を援け起そうともしないで、羽織の下から帯を掴んだ。

そのまゝ引摺るようにして、すぐ前の壕の中へ政代を投げこんでしまい、自分もその後にくつと、勝手を知っているらしく、内側から戸をおろし、カチリ、と、錠をおろしてしまつた。

「ツ、吾一や、お前は何をしようというんだい……」

ひりひりいたむ顔に手を当てながら、政代は真暗な壕の中で叫んだ。

「……………」

吾一は無言のまゝ、マッチをすり、蠟燭に火をつけた。

無人だと思われた壕の中に食器類がおかれこわれかゝつたテーブルまであつた。それに片隅にはボロボロの夜具が二つ折りになつたまゝれ見おぼえのあるズボンがさがつていた。

「お嬢さん」

「えッ」

ギリリと光る吾一の眼に射すくめられて、政代はブルブルと小刻みに身体をふるわした。

「お嬢さんは今日から俺のものになるんだぞいゝか……く、く、く」

笑い声を立てながら、獲物をねらう鷹のよういきなり襲いかゝつていった。

「いやです。放してッ！」

必死に逃がれようとする政代の帯をもつて解きにかゝつた。

どうして小男にこんな力がと思われるくらい、あらそうことの出来ない強力さだった。

帯も細紐も着物も襦袢も……そしてズロース一つきりにされた政代は、抵抗ですつか

り疲れ果ててしまった。それでも、吾一がさらにズロースに手をふれた時は必死に力をふりしぼって拒んだ。勝誇ったような吾一の顔をねらって、ガブリとその肩先に歯を立てた「あーッ……」

さすがに吃驚りして手を放してしまったが顔をしかめながらも「く、く、く……」

無気味な笑い声を立ててちょっと肩口を抑えただけで、にじみ出る鮮血にもかまわず、今度は慎重にかまえて政代を背後から組み伏せていった。手を後手にねじ上げてしまうと政代のしごきでその手を縛りあげた。

こうなつてはいくらばたつかせても、ズロースを脱がされることを拒むことは出来なかった。

一糸まとわぬ恥かしい姿になった政代の前にローソクがもう一本余計に立てられた。

真蒼な顔をして、歯を喰いしぼりながら、思いきり憎悪の瞳を吾一に投げかけている政代の裸身をなめまわすように吾一は肩、乳房、腹部……と見おろしていった。

醜い容貌とは似ても似つかない素晴らしい肌をしていた。餅肌とでもいうのだろうか、雪のように白い肌が弾力をもって盛り上り、

殊にお碗を伏せたような二つの隆起がやゝ上むきに乳首をもたげ、そのまわりが薔薇色に恥らしいの色をにじませていた。

ビッコにもかゝわらず下脚もよく発達しており、太腿の辺りにはかくすことの出来ない艶やかな曲線が波打っていたので吾一はゾクッとして生唾を一つ大きくのみこんだ。

讚美というよりも驚愕の気持であった。

驚愕から羨望、嫉妬さらには憎悪の気持にかわつていった吾一は、そこから視線をはなそうともしないでつかつかと、二、三步踏み出していった。

「吾一、よしてッ、吾一ッ」

立上つて逃げようとする政代をラクビー選手がタックルするように驚づかみにしていた「あッ、痛いッ……」

クニヤクニヤッと、その場にくずおれてしまった政代は腰をくねりながら、ポロポロッと大粒の涙を流してしまった。

さっきまでの勝気な冷淡な態度が一ぺんにくずれて幼なさともじめさをむき出しにしていた。

吾一の指には十数本の××がまるで生物のようにまつわりついていた。

政代は吾一の奇怪な姿を目の前にして、お

そろしくなつてしまった。

「吾一、許して、これまでニギ使つてゐるかったわ、ね、勘弁して」

哀願するように優しい声を出したが、それには一ことも答えようとしないで、××した姿のまゝ、淫らな瞳でギリリとにらみすえた

処女出血

しかし政代は吾一が何を要求しているかを知ると、必死になつてもがいた。

吾一は容易でないことを知ると、さらに彼女の自由を奪うため両足をそれぞれテーブルの脚にゆわえつけた。

テーブルはコンクリートでかたまつたおそろしく重量のあるものなので、いくら政代が足をばたつかせてみてもびくともしなかった。政代は終始、苦痛のために身悶えたが……どうにもならなかった。

絶望と汚辱とのために気が遠くなつてしまった。

政代の白魚のような肉体からドロツとした鮮血があふれ出て板の上をつたわった。

吾一は何故そうした現象が起るのか知らなかった。

しかし政代が鮮血によって血ぬられること
吾一にとってこの上もないよろこびだっ
た。

はつきり征服することが出来たしるしだと思
った。

それだけに、鮮血に対する尊敬と愛着の念
が湧きあがってくる。ことにそれが、しびれ
るような××の後のものだと思えば……

吾一はその場にひれ伏すような姿勢をとっ
て長い舌でペロペロと舐めつくしていった。
生暖かいような、塩っぱいような、どろっ
とした不思議な味と香りをぐっと、のみこん
でしまう。

ようやく絶望からさめた政代がうつろな眼
を薄くひらいて、吾一のこの奇異な動作を見
ていたが、不思議と憎めなくなっていた。

その動作をこの上ない愛情のしぐさと考えて
いたのかも知れない
が……しかし、舐め
終った吾一が顔をあ
げ、口のまわり一杯
に鮮血をつけている
姿を見て、再び失神
してしまった。
その姿がちょうど

人喰人種の土人のように生々しいものであつ
たからだろう。

リンチの構圖

吾一は政代をそのまま父の家に帰そうとは
しないで、壕の中の不思議な二人の生活が初
めた。

誰も都心の真ん中でこうした生活が営まれ
ていることに気がつきはしないだろう。

吾一は政代を暴力で犯してしまつたけれど
それだけでは彼の復讐心が消え去つたわけでは
なかった。

政代は主従の関係を改めようとはしなかつ
たし、その度ごとに抵抗してきた。

抵抗されればされる程、彼は惨忍な征服慾
に燃え、リンチを加えることによって××す

る以上の快感を味ちようになつていった。

両手、両足を後ろに縛りあげて仰向けにさ
せた吾一は、政代のヘソの上にローソクを立
てた。

ちよつとでも身体が揺れれば、ローが肌
にたれさがって、焼けつくような痛みであつ
た。

こらえようとすればする程、ローソクはゆ
れて、熱湯のようなローがしたたり落ちてく
る。

熱さと痛みをこらえようとして政代は全身
びっしょり汗をかいてしまつた。

ぬれぬれとした肌から玉のようなしずくが
肩に横腹に、そして内股の辺りにたれさがつ
ていく。

いくら人が住んでいても地下の壕なので天
井から時たま、ポタリポタリと氷のような雫
が落ちてくる。

やけたゞれた柔肌に
水滴が落ちると、さら
に痛みは倍加されるの
だった。

汗と涙で苦痛に歪ん
だ政代の顔が、この世
のものとは思えないく



らい醜かった。それが
吾一にとっては無上に
たのしかった。

血を見なければ収ま
らなくなっていた吾一
は、××してももはや
血の出ないことを知る
と、両手をゆわえたま
ゝ天井に吊しあげてお
いて、太いロープで柔
肌を鞭を加えていった

ビシッ、ビシッ、

深夜の壕の中で無気
味な音がしても、誰も
気づく者はいない。

「ひーっ」

その度ごとに悲鳴を
あげる政代の肌が紫色
にかわり、ついには破
れて、タラ、タラッ
と鮮血が糸をひく。

「く、く、く……」

勝ち誇った吾一の醜
い頬に笑いが浮び上る
「た、たすけてーッ」



救いを求めれば求め
る程、鞭は強くなり、
ついには失神させてし
まう。

全身血まみれの政代
の肌を吾一の舌が舐め
まわしていく

「く、く、く……」

そして、異常に昂奮
しきった吾一は……

復讐と征服

政代は吾一にどんな
にされても、父のもと
には帰ろうとは思わな
かった。

しかし、一物も持ち
出していなかっただけ
になによりも生活の不
自由さが堪えられなか
った。

吾一も何か職を求め
てゐるらしかったが……

……そうした留守の時、とうとうカギをこじあけて、何十日ぶりかで戸外へ出ることができた。

彼女は一体何処へ行ったのだろうか？

自由の天地を得て、再びこうした地獄のような壕の中へ舞い戻ってくることはなからう。

吾一は政代が逃げ出したことを知ると、すっかり慌ててしまひ、世にも悲しい表情で蒼めていた。

しばらく顔を両股に突っ込んで茫然としていたが、やがて立上ると、金吾のところに居た服装に着換えて、壕を出て行った。

吾一はすぐ政代の姿を見つけ出すことが出来たし、敏捷な小柄を利用して、彼女の行動の一切をノゾキ見してしまった。

嫉妬と屈辱と競争心とで、今にも乗り出そうとしたが、ようやくこらえて、壕に返ってきた。

——清一め、よーし今に殺してやるゾ。

でも、どうして、あの時、乗り出せなかったのだらう。清一は頭がよくって、決して自分みたいな者のワナにはひっかからないという卑下からだったろうか、それとも、政代は俺の方が完全に征服しているんだぞ、という

内心の優越感からだったろうか……そう呟きながらも、吾一の殺意はそれ程強いものではなかった。

複雑な浮かない表情で壕まできてみると、ローソクの灯りがポーッと戸口から洩れていた。

「おや、誰か居るのかな？」

それは、再び帰っては来ないだろうと思っていた政代自身だった。

素知らぬ顔をしてはいってきた吾一は、政代が微笑を持って迎えてくれるかと思った。

しかし、彼女は依然として無表情のまま、冷たい視線を彼に投げかけていた。

「おまえ、どっかへ行ってたな」

「いゝえ」

服装がスッカリ変り、テーブルの上には珍しい御馳走までおかれてあるのに、白らばくれているのだ。

吾一はむらむらっと、怒りがこみあげてきた。

そして、無性に賣めてやりたいと思った。

政代は拒みながらも、不思議とこれ迄のような強さを示さなかった。

素裸にした彼女をテーブルの上に仰向けにさせ、四つのコンクリートの足に結えつけた

政代の肌にはうっすらと脂が浮び、なまめかしいまでに美しかった。

胸の隆起さえ、秘密をたゝえているようにで

吾一は嫉妬のために逆上していた。

「お前はこゝを抜け出して、どこへ行ってたんだ」

「……………」

「俺はちゃんと知っているんだぞ、清一と逢見をしてたろう」

「……………」

さすがにギクリ、と、したらしいが、政代はあくまで頑強に黙り続けた。

「ちゃんと、見ていたんだ、この乳房も清一に……畜生ッ、俺は許さないんだぞ……こんなものがあるからなんだ」

ガブリと乳房に噛みついていった。

「ひーっ」

悲鳴をあげる政代があやしく臀部をくねらせる。

こんもり盛り上った乳房に歯型がつき、紫色にはれ上った。

「これなんだ、これが吸い妥妥ていやがるんだ」

ギラギラ瞳を輝やかせながら、今にも喰いつくような形相をして、××を鷲づかみにし

た。

いつかの時のことが思い出された、

吾一は自分になくて彼女にあることが憎らしくなってきた。

「一本ずつ×いてやるんだ」

憎悪をなるべく長く愉しむためなのか、吾

一は親指と人差し指にからませながら丹念に×いていった。

「あーっ、痛い、吾一、それだけはよしとちよくだい」

そう哀願されてやめる彼ではなかった。縛られて不自由ながらも腰をくねらせて拒もうとする彼女の肉体へ、さらにアブの手がのびる。さすがに何本も×られているうちに、苦痛はさらに増し、その跡が鳥肌のように腫れ上っていった。

そこから、やがて血があふれ出し、たらたらとさがっていく。

「く、く、く……」

よろこびにふるえた吾一が歓喜の声をあげる。

×られた××をローソクの灯にかざし、嫉妬の視線をなげかけて、きたならしいように床板に投げつけていたが、湧きあがる血を見たところには、すっかり嫉妬の念が去り、歓喜

と羨望とで、またいつかのよう自分につけてみた。

「く、く、く……」

土人のように踊り狂う吾一は、しかし、それでも政代をすっかり征服したような気持ちになれないでいる。

彼女が御馳走のために買ってきたニワトリの毛を抜いて、くすぐり初めた。

さっきの苦痛から意識をさました政代が、くすぐったさのため、けらけらと笑い初めた——いつの間にかよろこんでいやがる。

そう思うとまた無性に腹立たしくなった。

しかし、それも一刻の間だけであった。そのうち笑い声がやみ、「うー」というような苦痛のうめき声にかわっていった。

そしてそのまゝ意識を失った政代。

生憎と水がくまれて来ていなかった。とっさに考えついた吾一はコップに身がまえた。

ちやうど尿意を催したばかりであったからである。

そのコップを政代の口のところに持っていると、異様な臭気のために、意識を取り戻した。

「飲め！」

無理矢理、口にそゝいだ。

臭気と気味悪い生暖かさと、しおっからさのため、口をゆがめて、

「こ、これなによ」

吾一をにらみつけた。

「ふん、これは俺の××だ」

「えッ」

「く、く、く、もう飲んでしまったぢやアないか」

吾一は完全に政代を征服出来たと思った。

「俺だって、お前のを飲んでやるぜ」

それから初めて、妥協的な言葉を使った。

「……………」

政代もそうした吾一の野性さにいつの間にかとりつかれていたのだ。

それでなければ、清一と別れて、再びこうした淫楽地獄にかえってきはしない。

責められてよろこぶ女に変わっていたのだ。

それ以来、政代と吾一の世にもおぞましい又彼等にとって何よりも楽しい、淫楽地獄へと落ちて行くのだった。

後——政代の父、金吾の狂ほしいまでの捜査にもかゝわらず政代の姿は再び父の下へも、清一の下へも現れなかった。

(終)

Ⅱ 異常性愛秘録 Ⅱ

経血愛執譜

それには、女の不浄物が入れてあつたのだ——伸介はそれを見た瞬間、今までにない心のさわぎを感じた。何人もの女の不浄物は彼の前に何人もの女が裸体を投げ出して……

仙波健児

妖夢の誘れ

薄いカーテンの向うで脱衣している女の姿態が影絵のようにボンヤリうかんでいた。結核患者千田伸介はそれをはっきり見とどけようとして、枕元にあった度の強い眼鏡をかけた。

そのとたん何と不思議なことだろう。それは透視レンズのようにカーテンの存在を消して女のヌードを手にとるように写して来たのであった。

「あッ、チエ！」

透き通るように色白く、むっちりしたその裸体が、日ごろから伸介がひそかに想い続けている看護婦人見チエだと知ると、彼は鶴のようにやせ細った体をぶるっと大袈裟にふるわせたのだ。

チエは伸介の存在に気がつかないように窓から射しこむ明るい陽光に全身をさらしたままいつまでも立っていた。

フルーツのように新鮮な乳房、丘のようにもり上った臀部、それが伸介の若い情念をかりたてるようにキラキラと妖しく光り



出した。伸介は体が火のように熱くなり、チエの白く豊かな裸体に抱きつかれたように錯覚すると、たえられないように、「あー」と声をふるわした瞬間、チエの体は煙のように消え、伸介は目をひらいた。妖しい夢であった。額に吹き出した脂汗が生れつき紫色のあざのある頬に流れ、骨張った背には冷たい寝汗が寝巻を通してふとんまでぬらしていた。

だが、伸介は、まだ夢の中にいるように興奮した肉体をそのままほてらしながら、ベッドの上に座りこんだ。

(ああ、何と言ふ美しい休だつたろう)
と、再び夢を想い出そうとした時、彼は急に便所へ行きたくなり、病室を出て廊下のすみにある便所へ入りかけると彼は「あッ」と叫んで足をとめた。
今、夢に見たば



か
り
の
看護婦
チエが宿直だとみえて寝巻姿で女便所へ入った後姿が見えたからだ。
伸介はチエに気づかれなかったのを幸い、男便所で用が足りるもの

をわざわざチエが入った大便秘所の隣えそつと姿を消した。

妖しい夢は、彼を誘惑したのだ。伸介は便所の中で、隣に入ったチエの肉体をもう一度ながめようとしているのだが、度の強い彼の眼鏡は再び透視レンズの役を果してくれなかった。

だが、境界になっている板の向うで、深夜の静けさのためか、チエの用便の音と、呼吸までがはっきりときこえて来たのである。

伸介は、あざのある骨張った顔に不気味な笑いを刻むと、板にぴたり耳をつけてむさぼるように音をきき、興奮した体を自ら愛しはじめたのである。

その喜びがクライマックスに達すると、彼は思わず、

「チエさん」

と、叫び、板え体を投げ出すようにもたれかかった。その声をきいたためか、チエがかわてて便所から出て行った様子が分った。

伸介は、疲れも感じないよう便所を飛出すと、チエが入っていた便所の中へそつと入って行った。

恋しい女の白い体をのぞいた妖しい夢。それが、若い伸介の生命をむごたらしく

むしぼんで行くことも知らずに……。暗い表には、春になる生暖い風が不気味な音をたてて吹き荒れていた。

醜くき失醜

伸介はこのごろ急激に衰弱した肉体を力なくベットに投げ出し、生命を縮めて行く恐しい想いとは知りながらも、天井を見つめて、今宵も便所の中のチエを頭にえがいていた。

「千田さん！」

と、突然ドアをノックする音に、はっとなって、

「どうぞ……」

と、答えると、チエがいつもと違った真剣な顔で入って来た。

「千田さん、この数日、先生も驚くほど弱ってしまったのだけど、そのことについて私、心配だから注意しに来たのよ」

伸介はチエの言葉をきいて、チクリと胸を刺された思いがした。あの夜以来彼はチエが便所へ行く時間を見計って、まるでダニのようにその後をつけて隣の便所に入りこんでいたのだ。そればかりではない。聴覚による楽しみでは満足出来なくなった彼

は、病院に五つある大便所の境界の板え穴さえあけ視覚による喜び、俗に言う「窃視」を楽しもうとして、二、三度チエの体をのぞくことに成功したが、その小さくくりぬいた穴はいつか誰れかの手によってふさがれていたのである。

「僕に注意って、どんなことですか」

彼はなんにも知らない様子で反問した。

「あのね、千田さん、あなたは何故入院なさったのか知っているでしょう」

「勿論、病気を治すためです」

「そのあなたが、逆に病気を重くしているではありませんか」

「……………」

「あなたは、このごろ、私のあとをつけてお便所に入り……穴まであけて変なことをしているでしょう」

チエは、いつものやさしさとは全然違った鋭い調子ではっきり言った。

「あなたの行為は患者さんをはじめ院長先生まで知って心配しているのよ、それではまるで変態ぢやあないの、私が一生懸命お世話をしたってなんにもならないでしょう」「チエさん、もう何も言わないで下さい。僕があんなことをするのは、あなたが好き

で好きでたまらないからだ。僕のようなあざのある醜い結核患者は、健康な人のようにまともにあなたに気持を訴えられないため、あんなことをするよりほかに方法は無いのです……」

伸介は、もう恥しさもすてて、泣き出しそうな気持で自分の心をぶちまけたのである。

「いくら、私を想っていて下さっても、そんなことをするなんて、悪いことだわ。もし、あなたが私を愛し、私と結婚する気持があるなら、少しでも自分の体を大事にして一日でも早く全快するように努力しなければならぬぢやあないの」

「それでは、僕の体が治ったら、こんな顔でもチエさんは結婚してくれると言うのですか」

伸介は上半身をおこすと、チエの色白いきれいな顔を見つめながら声をふるわせた

「……でも、ねえ……」

「チエさん、はっきり言って」

「そりゃあ、私は、あなたをお気の毒だと思つて、今まで一生懸命お世話して来たのよ」

「チエさん、たのむ、僕と結婚して下さい」

い」

返事が待ち遠しいように伸介は、そう強く言う、ベットから飛び下りてチエの腕をつかんだ。

「いけないわ、体に毒だから、やすんでいて」

「チエさん、僕は、あなたがいなくては生きていけないのだッ」

あざのある顔を悶死人のように恐しくゆがめて伸介は、骨張った体を、チエの豊かな体にのしかけて行った。

「何をするの、千田さん、はなして……」

病人とは言え情慾に憑かれた恐ろしい力を発揮し躍りかかって来た伸介のために、チエは床の上にだらしなく体を投げ出し、あざのある不気味な顔をすぐ目の上に見て思わず、

「悪魔ッ！」

と、叫んだ。その唇にかみつくようにヤニくさい伸介の唇が重なった。

「たのむから、結婚すると言ってくれッ」

「言うから、はなして下さい、はなして……」

力のぬけたのを幸いチエは、いきなり立上ると、唇をぐいながら、

「千田さん、私には夫婦約束した人があるんです。あなたのような変態性慾者は大嫌いよッ」

と、投げつけるように言って病室を飛び出して行った。

伸介は背負い投げをくったような気持で尻餅をついたまま、

「畜生ッ、勝手にしやがれッ！」

と、自暴気味にうめき、油気のない頭髮をかきむしった。

不淨愛好の狂態

命をかけて愛しぬいた女にすてられた男の辿る道は自暴だ。だが伸介の場合は違う「チエばかりが女ではない。女は星の数ほどある」

と、反抗的になった。然し所詮は結核患者で醜い男であってみれば、他に女を求める方法は異常でなければ許されなかった。

伸介が選んだ道は、便所の窺視、つまり女便所のぞいてチエ以外の女によって慰められると言うことであった。

療養を忘れ去ったように伸介が昼間から病院を飛出し夜おそくまで便所のぞきに狂

い出したのはチエにふられた習日であらうであった。

駅や映画館の便所、町角の共同便所等彼はさながら色里を縫って歩くようにいたる所の便所で色々な女性を相手に楽しんだ。

四月に入ってから間もない日のこと。彼は夢遊病者の如くフラフラと銀座でデパートに入った。そして目的の便所の前に立つたが、ここは女と男がはっきり区別されている上に、使用者が多いため、容易に女便所へ入ることが出来なかった。

場所が派手なだけに、きれいな女たちが出入りしているさまが、彼の心を激しく昂奮させた。

彼は二、三十分すきをうかがっている。幸いにも一人の若い洋装の女が入っただけで、あとから人の来ないのをチャンとに、伸介はいきなりそのとなりの便所に飛びこむことが出来た。

町や駅の便所と違ってデパートの便所は境界も厚い壁で出来ていて、くりぬくことは容易でなかったが、壁に耳をつければ隣りからの音はよくきこえた。

もう一ヶ月余りも便所の音をきいている彼には、女の姿を見なくても、その音や気

彼は、女の姿を見なくても、その音や気

配だけで、相手が娘か人妻か、または未亡人か老婆かが分るような気がした。

それほど彼の研究？は進んでいたのである。伸介はその時も相手が娘だと思いがながら楽しんでいると、便所の隅に瀬戸びきの器がおいてあるのに気がついた。

彼はなんだろうと思ひながらフタをそつとあけてみた。

「あッ！」

思わず叫んだ。それには、女の不浄物が入れてあったのだ。水洗便所では、不浄物をすてると故障するためにその器が設備されてあったわけである。

伸介はそれを見た瞬間、今までにない心のさわぎを感じた。何人もの女の不浄物は彼の前に何人もの女が裸体を投げ出して、いるような錯覚にとらわれた。

と、同時に、伸介は一年前ほど、ベットの上で読んだ本の中に、

「女の不浄物、ことに処女の経水は胸の病いに効果がある」

と、言ひ一節を思い出した。

「そうだ、これは俺の病気を治す薬なのだ。神様が俺の前に与えて下さったのに違いない」



と、彼は信じた。そう思うと伸介は、もう隣の女のことなど忘れ、器にあざのある顔を近づけた。野良犬が残飯をかくように、その醜い病犬はクンクンと鼻をならし、激しい食欲におそわれたようにグググッと喉に音をたてた。

これを食べ吸うことによって食欲を満足し、病気が治ると信じた病犬は、先づその匂いに陶酔したようにうっとり眼をとじた。

それから、他の犬共が近寄ってくることを警戒する如く、表の様子に気をくばり別状がないと知ると、病犬は赤い舌をのばして殆飯？をなめはじめた。

すると、かあッと音をたてるように全身が熱くなり、肉体が興奮して来た。病犬はさながら食欲と性慾を同時に満足させるようにそれをなめ吸いつつ、不自然な行為にとりかかった。

「うおッ！」

遠吠えに似た妖しい叫びが上ったと思うと、続いて、

「ガバッ」

と、不気味に喉が鳴って、口から鮮血が吹き出した。それはタイルの床を白い壁を

赤くそ

めて容易にと

まろうとはしなかった。

そして死人のようにぐったりとや

つれ果てた体を海老のように曲げたま

ま横たわり、骨張った肩先を荒く波打たせている。

だが、断末魔に近いようなその体でありながらも、なお慾がすてきれず残りの残飯の入った器をしっかりと抱きしめながら不気味な顔に心よい笑いを刻んでいるのであった。

伸介は全く一匹のうえた病犬に化してしまったのである。

奇しき因縁

激しい喀血までするほど衰弱した体でありながら、伸介はなおも野良犬となつてえものを求めに巷をさまよった。

えものを与えた時の喜びは、病いの悪化に對する恐しさよりはるかに大きかったからだ。伸介はそのためなら命を縮めてもいいとまで思いつめた。まるで「窃視」「不浄

物愛好」

の鬼に等しかった

のである。それは、恋人の

ために命をすてる犠牲的な気持と少しも変らなかつた。

彼はもうチエなどと言う女のことなんか爪のアカほども頭になかつた。彼の行く所には限りなく色々な形態の女が求められた。可愛い娘、美しい人妻、妖艶な年増女等――。

「俺はどんな女とでも結ばれ、喜びを得ることが出来るのだ」

窃視による慰め、汚物による快感、それが彼にとっては変態極まる男女関係であつたのである。

棺桶からぬけ出したようにやせ細って活気のない伸介の体は、一たび便所の前に立つとうえた狼がえものにくらいつくように



恐しい力が湧き、あざのある右頬が痙攣しくぼんだ大きい眼が青い先を発した。

今日もまた上野の共同便所の前に立った伸介は、和服姿の美しい娘を発見すると、その後に続いてとなりの便所に入った。

落書にぬりつぶされた境界の板には、すでにいたづらしたものがあると見えて一寸角ほどの穴があいていた。これは幸いと思いい用を足すふりをして隣の様子をうかがっていたが、まるで人がいないように少しも音がきこえてこなかった。

「こいつは不思議だぞ……」

と、思いながら、伸介は、その小さい穴に目を近づけた時、

「ホッホホホ」

と、突然隣から女の笑い声がおこり、びっくりして目をはなした。

「ちよいと、あなたも私と同じことをしているのね」

続いて声がすると、穴からのぞいている女の目が見えた。

「……………」

伸介は驚きの余り返えす言葉がなかった。

「ねえ、お話があるから一しよに出ません

か、そう言う」と女は便所から出て行った。

伸介も誘われるままに続いて出た。

「あなた、私を見ながら楽しもうとしたんでしょ」

二十四、五にもなるか、瓜実顔のきれいな顔に妖しい笑みをうかべて女は伸介の手を取って歩き出した。

「君も、同じことをしようとしたのか」

伸介は思い切って言った。

「ええ、私、悪い癖があるのよ、これと言うのも、私の体が不具のため……」

「ええ、そんなに美しくて不具とは……」

「私にわね、あるべきものがないのよ。そのために恥しくて結婚する気になれず、あんなことをして楽しむようになったの、でも、私と同じ気持のあなたと知り合っ

たんだか本当に嬉しくなったわ」

女は伸介と腕を組んだまま元氣そうに歩いた。

「僕だって、この通り醜い顔の上、悪い病

気があるので結婚出来ないために、あんなことをおぼえたんだ」

伸介は妙にこの不思議な女がなつかしく思われ正直に話した。

「これも何かの縁だわ、ねえ、私のアパー

トえ来て一しよにくらさないこと」

ぐいと手を握って来るのを、伸介は好奇心にかられて、承知したとばかり握り返えしたのであった。

血に呪われた不浄鬼

不思議な女の名は馬高トキと言うダンス一くづれの二十五になる独身者だった。麻薬中毒のため頭が若干狂っていたために、恥かしくもなく伸介にあんなことを語り、自分のアパートえ誘いこんで来たものであった。

「君と一しよに生活出来るのなら、僕たちはもう二度とあんな変態的なことをしなくてもすむね」

「そうよ、私が不具女でもあなたは愛してくれる」

「そんなこと問題じゃあないさ。然し僕だって胸を病んでいる上に、こんなあざがあるんだぜ」

「かまわないわよ、ねえ。今晚とまってい

らっしゃってもいいのでしょう」

「このまま、一しよにいたってかまわない病院から荷をとってくればね」

「じゃあ、一しよに暮してよ。私ね、はっ

きりはいえないけれど、薬品のブローカーをしてから生活に心配はいらないわよ。それではもうやすみましようか」

と、言つて、トキは一組のふとんを敷き伸介を先にねかしてから枕元で着物をぬぎはじめた。その時、伸介の頭の中に忘れていたあの夜の妖しい夢がよみがえつて来た。フルーツのような乳房、丘のようにもり上った白い臀部――

伸介は、変態的な自己愛撫こそ互いにし来たが、正常な関係ははじめてだけに二人は二匹の野獣と化して狂いはじめた。

だが、互いに目的をとげたが、それは全然身に込めがなくて、逆に不快さを感じるほどの関係であつた。

「ふん、あんた、どうかしてるのねえ」

トキは冷たく言つて、邪魔なように伸介の体を突いた。

「君こそ不具だ。全然、僕を喜ばせないじゃあないか」

「でもねえ、私たちあんな変態的なことをしたため体がおかしくなつてしまつたのかも知れないわ。私ね、急にあなたが上厕所にいた時のことを思い出したの。ねえ、一しょにお便所へ行ってみないこと」

トキに誘われて伸介はアパートの便所へ行った。夜がふけていたのでほかに人がいなかった。

「さあ、あなた先に入つてちょうだい」

伸介は先に入つて行くと、それを戸を少しあけた所からトキは嬉しそうにながめていた。そしてニヤニヤと妖しく笑つた。

「やっばり、そうよ、私たちは、この方がよっぽど楽しいのよ。さあ、私が代りましよう」

伸介は代つて入つたトキの姿をのぞいた。排泄物の音が美しい音楽のようにきこえた。そして、伸介は、今、愛し合つて来た正常な男女の行為よりもはるかに楽しい慰めをすませて、はじめて満足することが出来た、徹底的に窃視に狂つた二人の変態極まる生活が、それ以来飽きることなく続いて行つた。二人が変態生活に入つて一週間目であつた。恐しい不自然な行為が崇つてか、病気が一層深刻化したためか、伸介は高熱を發し、足腰がたたなくなつて、トキのアパートの一室でねこんでしまつた。

その枕元に座つたトキは、

「ねえ、さあ、お便所へ行つて楽しみましようよ、しっかりして、あなた、起上れないの」

いの

と、目の色をかえ、たえられないように伸介に要求した。

「トキ、僕は、苦しくて、死、死にそうだが、それなのに君は、この上、僕を苦しめるのか」

伸介は苦しうにトギレトギレに声をふるわせた。

私はね、もともとメンスになると、とてもじつとしてはいられなくなるのよ。どうしても駄目なら、私は、ほかの男の所へ行つてくるわ！」

投げすてるように言つて立上つたトキに「ええ、お前がメンス、おお、私の体にはもつて来いだ。さあ、私に薬をのましてくれッ！」

伸介は人間が變つたように元気で叫ぶと溺れる者がわらをつかむものすごい勢いで起上ると、トキの体を押し倒した。

飢えた病犬は、雌犬に躍りかかると、がぶりとかみつき流れる血を喉をならしてすつた。だが、それは長くは続かなかつた次第に呼吸が激しくなると、唇を真赤にそめた病犬はガクリと首をおとして二度と血を吸う力を全く失つてしまつたのである。

獵 奇 変 態 秘 録

針 血 の 執 妄

ゆう子は自分の白い太腿を弓子のそれに近づけてみた。そこに集まった二匹の大蛇は、友を得たよろこびに互いに身をすりよせて、呼吸までも交しあうように生き生きと……………

冬 谷 夷 太 郎

中 野 正 美 画



女の客

刺青師彫達の仕事場、女は無雑作に足を投げ出して横坐りにすわった。

二十三、四というところだろうか、グレイのスーツのすんなりした姿態。女の足の絹靴下をすきとおる白さがあざやかに美しかった美貌である。

「あの、彫って頂きたいんですけど……」
女は妖艶な上目使いで彫達をみた。彫達はもう六十に近い。江戸時代から続く名跡の彫師である。いまは五代目であるが、やがて還暦を迎えようという年令で、彼は今でも仕事には一切眼鏡を使わないほど達者だ。二十代から彫りはじめ、四十年に近い彫師の生活のうち多くの名作を残し、がえん彫りが得意で、がえんの、達の名は彫師の世界でも聞こえていた。

しかし、戦後は新らしい機械彫などに押されて振わず、その仕事場はよほどの消息通でもなければ知らない筈だった。

この女は何処で聞いてきたのか、彫達は女の顔をみつめながらいった。

「頼まれれば彫りもしますが、一体何処へ彫りなさる？」

「何処へって……腕以外のところでしたら何処でも、背中でも、お腹でも結構ですわ、あらっ、お腹ってのは無いのかしら？」

彫達は笑った。

「はゝゝ、面白いお嬢さんだ、お腹の彫りだつて無いことありませんぜ」

腹部に彫る刺青は俗にドブ割とか貝割とか呼ばれる。

「刺青は一口に『がまん』といって相当痛い、姐さんくらえなさるかね」

彫達は女をみすえた。

「私平気よ、だつて切痕なんかでも、あんまり感じないんですもの、不死身よ、きつと」

「ほう」

彫達は感心した。

「どら、とにかく肌をみせて貰おう」

彫達は乗気になったようだった。女はちょっととまどつて聞いた。

「肌って、どこをお見せすればいいんです」

「そうさな、ま、彫る場所だね」

女は暫く考える風に、だが思いきりよくスーツを脱ぎはじめた。

仕事場は八畳である。黒塗の四角な机が一脚、座敷の隅には薬種問屋にあるような小抽斗の沢山ある古い波い簞笥がある。絵柄や針を入れておくものであるらしい。仕事場の中央には緋の毛せんが敷かれ、傍らに毛布が四、五枚。女はその毛せんの上で一枚一枚脱いでいった。上衣、セーター、肌着、シュミーズ。

服の上からみたすんなりした姿態は、肌を出す、堅くしまつて肉付がよかった。女は遂にパンティ一枚になって立った。

かがやくようなバラ色の肌であった。裸体をみながれている彫達の老いの目もさすがにはっとしたようにその肌を食い入るようにみつめていた。

白いやわらかな喉、こんもりしたふくらみに梅の蕾をおいたような乳房、その乳房の谷





から腹部へかけての艶めかしい起伏、力のもった腹部、秀れた彫刻家でも、この魅力ある女体を再現することは恐らく至難であろう。

女はかすかな冷たい笑いを浮かべたまゝ毛せんの上に坐った。

彫達は進みよって、その背部の肌を調べた。刺青にむいた肌は、あまり脂肪がのりすぎていてはダメだ。脂が薄く、しかもモチのように弾力があって、キメのよい花瓣のような皮膚。

彫達は女の肌を調べながら、思わずうむつと唸った。この女がまったく刺青に理想の肌をもっている。

「失礼だが、×を見せてくださらんか」

「あらっ」というように、女は振向いて彫達の顔をみた。だが彫達の目には、人肌に魅せられた名人の真けんな一途さがあるだけだった。

女はやがて観念したように、つと彫達の方に向き直った。彼は腹部から腿まで、気味わるい程の勁掘さで十分に検討しおえた。

「で、何処に、どんな図柄を入れなさるつ

もりかな。だが、別に場所も絵もお望みがなければ、わしは一世一代の腕にかけて、わしのとっておきの絵柄を無料で入れて進ぜよう。いかがなものですか、これはわしの願いだが……」

彫達は次第に熱のこもった口調になっていた。

刺青の針

「私、魔除けに彫りたいんですの、魔除けっておわかりになりますか？ふふ、私、ある男に騙されて汚されちゃったんですの、それからもう男に憎しみだけしか感じませんわそれで、もし男が来たら、私肌にこんなものがあるのよって見せてやりたい。男の驚ろく顔、それで私は復讐したいんです。だから腕以外でなるべく凄そうな絵がいいわ。映画か何かで見たんだけど、胸に「やもり」ってのはどうかしら？」

日はいつか暮れていた。電燈が点った。女のバラ色に上気した頬が美しい陰をもった。

彫達もやや気を呑まれた形だった。

「うむ、胸に「やもり」も面白いが、あんなの美しい胸に彫ったら、やもりも結構凄まじいところかむしろ男の欲情を煽るかも知れん。そういう目的で彫るなら、むしろあんなの肉体の美しさを破壊するもんでなけりゃあいかな、だが御両親は御承知かな」

「あら、私は家を出てしまっているんですの。時々母に会いに帰るだけ。でも母にも秘密よ、私の肌に私が彫るんですもの自由ですわ、私が決めればそれでいいのよ」

これこそ理想な肌だ。彫達はそう思った。今こそあの願いが達し得られよう。

若い張り切ったバラ色の肌に、針を入れる時の興奮、吹き出る血汐、苦痛にゆがめる美しい眉、刺青師の味く醍醐味、針の三昧境が老いた彫達の血を湧き立たせ、パンティ一枚の眼前の若い女は、幻想のうちに三十年前のあの女ゆう子に置きかえられていく。

彫達は三十の男盛りだった。

晩春のことである。

ゆう子は全裸になった。仕事場には彫達と

二人きりであった。

「どうだこの前は、痛んだかな」

彫達は針を並べながら聞いた。

「ええ、熱が少し出ましたけど、もう何でもありませんわ」

「うむ」

彫りは内股であった。彼が下彫りの時代から、こんなきれいな餅肌は知らなかった。これから以後の彫師の生活にも、再び現われるかどうか。肌が美しいように、丸顔のゆう子は整った顔立で、目の美しい女だった。濃い眉、きりっとしたもみあげ、束髪にした襟足の白さもまた濃艶だった。

若い彫達は、こんな美しい肌に血を吹き出させて、針が入れられる彫師の冥利に、心がさわがしく波立つのをおさえることができなかった。

むっちりした内股のすきとおるような白さをそれを拇指と人差指でぐっと圧迫する。そして緊張させた肌に、彼は朱針を入れた。ゆう子は足指をかすかに引きつらせて痛みを堪えた。

内股の彫りは極めて難所とされている。柔らかいうえに、たるみも多い。そのため墨を入れた後で、美しい絵に上らない場合が多いのである。

いま彫達がゆう子の太腿に彫りすすめているものは「大蛇」であった。白い太腿を三巻ほどした大蛇は、赤い炎の舌をのぞかせながら、急所をのぞいている。きわどい絵柄だ。絹針八本を束ねて、そのうわばみの筋彫をすませたうえに朱を入れていく彫達の手は、いつか憑かれたもののよう絵柄を追った。ゆう子は目を堅く閉じたまま、時々低く、うつうつと唸った。全裸の肢態は苦痛をこらえるために波うち、くねらせる。

「動くな、こらっ」

彫達は夢中で怒鳴る。彼も汗みどろ、手早やく着ていた単衣をかなぐり捨てると、彼もまた褌一本の素裸になって、女のやわらかい足に、おのが筋張った足をからませて押さえつけた。

女を仰向かせ彫る時もそうした。彼はふとその美しい女体に強く誘われていくのを意識

した。だが、その時、女体にうごめく筋彫だけのうわばみが、彼の湧き立つ情欲を、ぐっと押さえつけるように睨んでいた。彼は冷水を浴びせられたようになった。

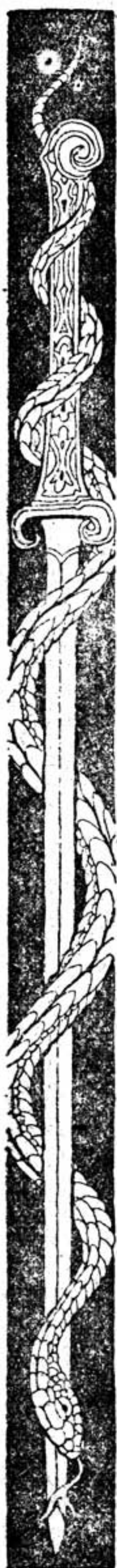
肌に吹く血

「大蛇」の彫りは三カ月半かかって上った。彫達としてはかなり気に入った出来だった。よい思い出になった。

しかし、あの「大蛇」は如何にも品格のない彫りになってしまったことを、彫達は後になって気づいた。どう考えても品位がなかった。少くとも名のある彫師が扱う代物ではなかった。女の依頼ではあったし、当時は彼も乗気になっていたのであるが、いま考えるとやはりいけないところがあった。

彫達がそう考えてきたのは、彫ってから三年もたってからであった。

「大蛇」が女の急所をうかがうという図柄は如何にも面白いが、唯獵奇と興味だけのものである。いわゆる逃げ手がない。その逃げ





手のないところに下品さがあった。

腹部に、例えば一匹の蛙を置くとすれば、それが逃げ手となる。或は腹部にもう一匹の

小蛇をおいて睨み合わせたとすれば、いっそ妻さもあったかも知れない。彫達はしきりに悔まれた。

矢も楯もたまらず、その女を求めて歩いた。山の手で酒場を経営しているといったのは嘘ではなかったが、彼が訪ねた時には、その酒場をたたんで、桐生の方に引移ったという後だった。

彼は桐生に飛んだ。だが居ると聞いた桐生の何処を探してもゆう子はいなかった。

いらい、彫達は女を探し続けている。探しあてたなら、彼はゆう子にもう一匹の蛇を彫り加えるつもりだった。

ゆう子の肌は、きょうこに似ている若い女の肌によく似ていた。

「あんたの腹と、それから内股に入れさせて貰いたいんじゃないが、どんなものだろう」

彫達は女をみつめた。

「えっ、内股？」

若い女は驚いて聞きかえした。だが、しばらくしてその意味が如何にもわかったというようにふふふと笑った。

「いいわ、内股結構よ、そうそう珍しい刺青、私してみたい」

女は夢みるような目になった。

翌日から女は来た。弓子という名前だった。きょうは和服に着替えてきた弓子は仕事場に入ると、するすると帯を解き、着物、長襦袢もぬいで、あのバラ色の肉体を毛せんの上に立たせた。

「先生、どこからはじめますの、お腹、それとも……」

純白のパンティの上の腹部に手を置いて、弓子は聞いた。

「下からだ、そのパンティも脱いでくれないかな」

「まあ、これも……」

弓子はさすがにためろろ風だったが、しかしそれも思い切ったように、後向きのまゝバ





彫達は針を調べ、墨を用意した。

「さ、寝て……」

弓子は仰向いて、両腿をびったりつけたまま其処に寝た。

大切なところに、白い三角巾がちよ

こんと置かれたまゝ、肉

付のい

いす

んな

り

られぬらしい。

くつくつと低く笑いながら、のぞき込むように下絵を入れている彫達の筆に堪えていたが、とつぜん腿をすぼめて身をくねらせた。筆が逃げる。

「だ、だめじゃないか、またやり直しだ」彫達はかたりと筆を置くと、くねる白蛇のような弓子の肉体を睨みつけていた。

「済むまで動いてはいかん、そうだ、暫らく辛棒して貰おう」

彼は座敷の隅にあった細紐をもって弓子の上にかがむと、両手を頭上に縛り上げてしまった。

「先生、私の自由を奪って、本当に刺青するだけなんでしょうね。私抵抗できないんだから他のことしたら嫌よ」

「馬鹿なっ」

彫達は吐き出すようにいったものの、真正直に、この女の言葉に当っていく愚かさをすぐ感じた。

「だが俺も男だからな、或は魔がささないものでもないて、ははゝゝ」

ンティを脱ぐ。豊かな臀部が魅惑的にそこに露出された。それはうぶ毛の光る桃の実に似て新鮮だった。

延びた足、彫達はそれを静かに開かせて筆をとると、墨をとって下絵をいれる。

内股に這う冷たい墨筆の感触に弓子は堪え



彼は針を取った。できるだけ筋彫を進めるつもりだった。

彼は弓子の重い肥った腿のふくらみを膝の上に抱えあげるようにして、墨をふくませた針をそこに入れた。

針が五本束ねられたもので、それは生きもののように、下絵の上を追った。

「あつ、先生っ」

「なんだ、痛いかな、さっき不死身だといったのは嘘だったのかな」

「いいえ、痛いんではないのっ、いい気持よ、とても、ふふふ」

弓子は肉体にもぐる針の痛さに、わざと緊張っていつているのらしかった。

鋼鉄の細い針は、肉体をえぐるようにこじりあげ、片手にした墨筆で墨がつぎつぎと入れられていく。

針の先にも、白い太腿にも吹き出した真赤な血が伝い流れた。

はじめの一針二針の痛みに、眉をよせてこらえていた弓子は本当に不死身の肉体なのだろうか、その痛みがむしろ、胸の乳房の奥に

ひびく快的な痛みにかわっていくのを意識するのだった。自分の白い肌針に破れ、真赤な血が滴りおちていくことも、弓子に妖しい興奮を誘っていく。

「先生、本当にいい気持、なんとなく切なくなるの、もっと慮めてもいいわ」

「うむ、強いな、こうしても痛くないか」
彫達は次第に目をかがやかせ、白い豊かな肉塊にわざと鋭い針を入れてえぐった。新しい血がその針をつきあげるように湧いた。

めおと蛇身

彫達は偶然にも探し求めていたゆう子に逢った。ゆう子ももう四十はとうに過ぎた女になっていた。

山手線のホームであった。桐生で働らいているうち、ある織物問屋の主人に思いをかけられ、今はその男の世話をうけて東京に住んでいるのだと身の上を語った。

「いや尋ねていたんだ。もうあれから何十年たつか、ともかく懐かしい。それに逢った

らぜひ話したいことがあったな」

彫達は何から話していいか、と迷いながらもゆう子との再会は胸のつかえがおりたようにうれしかった。

「あんたの身体に彫ったわしの刺青のことだが、ぜひ彫り足したいところがある。近いうちにわしの家へ来てくれないかね、これはわしのぜひ聞きとどけて貰いたい願いじゃ」
彫達はゆう子に手を合せんばかりの哀願のしかただった。

「ゆう子にとっては、彫達が話した、いま自分と同じ絵柄の刺青をしているという若い女のことに興味をひいた。

「きつと行きますわ」
そういつて別れた。

弓子は三日おき、五日おきくらいに彫達の許に通っていた。針はだいぶん進み、大蛇は赤い腹をみせて、弓子の太腿をもう二巻きも巻いている。

針を入れるたびに、弓子はゆう子とちがって、むしろその痛苦に酔っていくようだった。微げしく胸を被打たせ、上気した顔、顔

に汗を玉のように浮かべて、彫達の一針一針に声をうわすらせた。

此頃では彫りが進んでいるので、弓子は両手も両足も動かないように縛られていた。そうしないと弓子は血のさわぐまゝに全裸のまゝ部屋をころげまわるようなこともあるのだった。

弓子のやわらかい腹部に頬をつけるように彫達は目を近づけて彫る。老いた彫達も、もりあがる肉体の魅惑に危うく針を誤りそうになることも幾度かあった。

ある日、ゆう子が訪れてきた。

「あんたにもいつか話した、この人があんたと同じ刺青をしている人だ」

彫達はそういって弓子にゆう子を紹介した。「まあ、見せていただきたいわ、その刺青」弓子はいった。

「どうだな、二人で見せ合ってみては、こちらもだいたい進んでいるんだ」

ゆう子に、彫達は弓子の方を指さしながらそういった。

「そうね、同じ刺青をするなんて何かの縁

だわ、お見せしましうよ」

ゆう子は立って帯を解いた。

若い盛りの色香はあせたが、反って年増の肉が豊かにのっていた。相変らず美しい肌であった。

ゆう子は弓子の前に、大腿部に彫られた大蛇をみせるのだった。

「まあ綺麗、すばらしいわ、私のもこんな風に仕上るのかしら」

弓子は感嘆の声をあげた。

大腿部の白い臘のような肉体を三巻きして鎌首をあげている大蛇、火焰の舌の赤さがあざやかに、ゆう子の身体全体を凄艶にみせていた。

ことに背部からみると、もりあがった臀部の下に、青黒い背をみせて巻きからむ大蛇はそのまゝゆう子の肉体を膚にして締めあげている凄さがみえて、ゆう子ののたうつ悲鳴までがそこに聞こえそうである。

「あなたのもみせてよ」

ゆう子がいった。

弓子も帯を解いて、いつものように裸体に

なってみせた。

まったく同じ絵柄である。ただ違うところは、ゆう子の場合左の太腿であるのに、弓子のは右であることだけだった。だから二人を会わせるとちょうど一対となった。

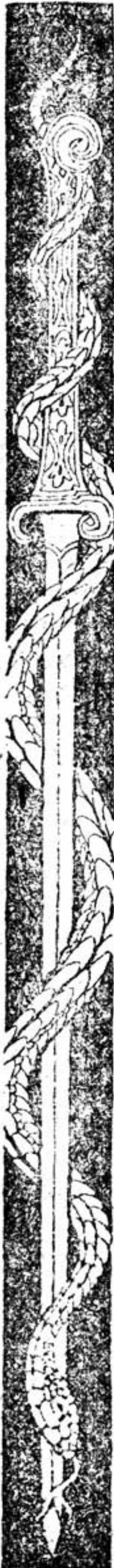
「こうして絡ませてみたらどんなかしら」ゆう子は自分の白い太腿を弓子のそれに近づけてみた。そこに集まった二匹の大蛇は、友を得たよろこびに互いに身をすりよせて、呼吸までも交しあうように生き生きと蛇身にくねらせている。

「まあ、素適、私お姉さんの妹になるわ、それともこの二匹は夫婦なのかしら」

弓子はゆう子の腰に両手をかけて、ひしと抱きしめた。

ゆう子はその力に押されて毛せんの上に倒れながら、やはり弓子の肉体をいつか堅く抱いていた。

血をしぶかせて彫りあげた二匹の白い肉体を巻く大蛇は身を重ね合い、からませあってそこに喘ぎ、悶えつづけた。それを見る彫達の目もあやしい歓喜にぬれ光るのだった。



巴^パ里^リの女^{おんな}は深^{ふか}情^{なさ}

——フランスお色氣囃^{いろけばなし}——

中^{なか}村^{むら}新^{しん}太^た郎^{ろう}



上^{じやうりく}陸^{だい}第^は一^は步^は

私^{わたし}が巴^{パリ}に渡^{わた}つたのは

昭和拾年の春で、帰国したのが今年だから結局十七年間をパリで暮したということになる。ちょうど私が巴里に行ったときは、一フランが十銭ぐらいの対^{たい}外^{がい}相^{さう}場^ばだったから、百フランもあれば、一カ月はのんきに暮せた。今から考えると夢のような話だ。たしか行く時の船賃も、二等で六、七百元程度で、大いにブルジョア気分を満喫できたのだから、思えば楽しい時代であった。巴里と女——これは切っても切りはなせない、因果関係にあるらしい。まして、西

も東もわからないエトランゼーに、上陸第一歩の接觸は、先ず女からといっても過言でなからう。

私はマルセーユに上陸して、荷物のことなどで一晩泊ることになったのだが、時間つぶしの一ときを、カンビエール大通りのそぞろ歩きに費していると、一人の妙な男が傍に寄って来て、お定まりの猥寫真をチラつかせてくる。いくら私が若くとも、興味をひくほどの珍品ではない。取合わずにいると、次の誘いをかけてくる。これが、ブルシネマといわれる猥映画であった。はじめ私も馬鹿にしていたが、一、二巻物の短篇ながら、トーキーで画面もなかなか美

しく、話の筋も仕組まれているから見ていて結構楽しいのである。すっかり気分の出たところで、いつの間にか傍らに寄り添って来た若い娘が、やる瀬ない吐息と共に前のボタンを外してくる、という具合いだから、まさに至れりつくせりだろう。

映画が終ると、女のほんのり上氣した顔が近寄って来て、

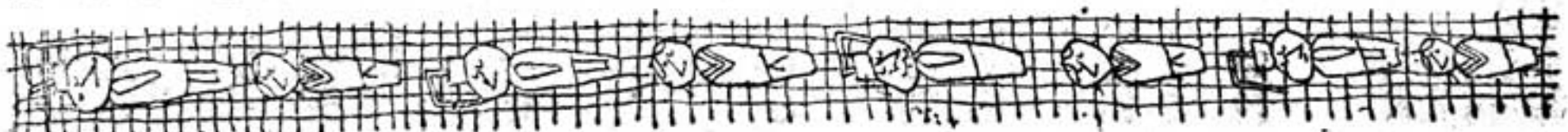
「ねえ、二階へ行きませんか？」

と熱っぽくささやくのである。男子たるもの、ここに至って応ぜざる木念人ありやと言いたい。そこで、フランス第一夜が明ける……というわけである。

モ^もデ^でル^る珍^{ちん}談^{だん}

いうまでもなく、私の渡仏の目的は繪の修業にあったので、パリに着くと、先輩の住んでいたモンパルナスに下宿した。

ここに、グラランド・ショームエールという下宿屋がある。そこに行けば、いつでもモデルが集つていて女の裸は描くことができると、値も安い。しかし、私が一番驚いたのは、西洋人の女の毛深いということであつた。むろん頭髮が金髪ならば、下の毛



も金髪であるが、手入れをしていないために、赤茶けた不潔な色をしている。

ところがモデルによると、胸毛を生やして、それがずつと下まで続いている。その上、背中には背中で、密生した毛が下まで続いていようというのだから、日本人に比べると、西洋人の方がはるかに動物に近いと思った。

間もなく私は、商売女だけでなく、フランス人、アメリカ人、デンマーク人等々の女性の画学生達とも知り合いになった。

すると或るとき彼女等が、私の裸を描かしてくれ、と云う。だいたい私の身体は、日本人の標準^{ひょうじゆん}としては背も高く、肉体も逞ましい部類に属していたので、目をつけられたらしいのだが、断わることもないの

で至極簡単に引受けた。そこで或る日、指定されたアトリエに出かけた。もう女繪描きの仲間が五、六人、私のくるのを待ち構えていた。

恰度寒い冬のことで、ストーブには石炭がじゃんじゃん焚かれ、部屋の中はムツとする温気である。私は早速裸になって、台の上に立ったのであるが、ピチピチとはち

切れるような若さを包んだ女性達の体臭にグルリを身近に取り巻かれて、ポーズをつけている気持は、なんとも言いようのない妙な気分で、常には思いもしなかったモデル稼業のむづかしさを、しみじみ体験したのだった。

そのうちに私は、大変なことを発見した。その連中が私を描きながら、足を組んだり股を開いたりするのだが、それがぜんぜんズロースを穿いていないのである。よく見ると、誰も彼もみな御同様のノーズロースで、しきりにあそこをチラつかせる。見ま

せが、いとオヤジは一身にして二心なのか、私のせつなる努力もむなしく、むらむらと勃然たる反抗を見せようとする。ストーブはがんがん燃えているし、こらえんとする努力は内訌^{ないこう}してくるし、顔から脇の下からタラリタラリと脂汗が流れて来る。すると又、彼女等は私の発情をおおるように「暑いわね」とかなんとか言いながら、着物を脱いで行くのである。しかし態度はあくまで生真面目に、台上に仁王立になった私の素ッ裸を盛んに描いているのだから始末が悪い。

激斗数刻……ついに私はフラフラになって、ベッドの上にひっくり返ってしまった。その後のことがどうなったか、私は今でもわからない。とにかく、その翌日、ドームとよぶ繪描きの集るカフェで、みんなと顔を合わせたとき、彼女等は至って満足

に気がついた。そんな肢態に好奇の眼を見はるほど、初心な私でもなかったが、この場合は全く事情を異にしている。相手の連中は、私の春情を煽るために行っている態度だから、いやでも私の注意力は一方的に集中されて、真ッ赤になって自分の一物を眺めるのだが



好色音楽狂奏譜

楽園は艶事も
鳴りもの入りて



楽壇雀

好色の双壁

音楽界というのは、全くスキャンダルの集

窟みたいなところで、いづれを見ても惚れた
はれたの桃色事件ばかり繰り返している。

事実 楽壇の大御所と云われる山田耕作の
息がかからなければ、楽壇に立てなかつた時

代があり、又オペラの方では藤原義江の御許
しが出なければ、大舞台が踏めぬといわれる
ほどのところである。

山田耕作などは、若い頃からアノ方につけ
ては、その酒の量と御同様に、ぞん分に羽根
をのばしたものである。それかあらぬか、近
頃は半身不随となりはしたが、昔からの妻君
は離別して、若いソプラノ歌手近墨子を妻君
にしている始末である。

もつとも、病気になる前の山田耕作と云え
ば、日本ばかりでなく外國まで鳴り響いてい
たのだから、事大主義の日本人などは、特に
女などは、小指の尖で一コロだつたに違いな
い。

その弟子筋にあたる近衛秀雪が、御同様に
浮気の方では天才で——兄貴の近衛文雪も人
後に落ちぬアレの達人で、小唄の市丸姐さん
なども、間のびのした馬のような公卿面にな
かれて寝た経験があるらしい——人の妻君だ
ろうが誰れであろうが、寄らば斬るのスキ者
である。

好個の例が、映画俳優の岡譲二の妻君で、
矢張り女優の沢蘭子（昔々「籠の鳥」という
卑俗な映画で大スターになつた。宝塚出身）

が、アメリカ見物へ行っている時に、まふまふのものにして、子供まで生ましたのだが、前後して日本へ帰つて来た時には、もうポイと捨て、北沢榮（ソプラノ）と懇にしているという早業。

兄貴の文臍も千代子夫人をして、空閑の嘆きを見せたが、この秀磨も夫人とは名ばかりで、次から次へと浮気の連続である。

五攝家の筆頭だかなんだか知らないが、とにかく近衛家というのは、おそろしく浮気が好きらしい。その血筋なのだろう。文磨の娘が野口某という和禪師と一緒にいるために、婚家先の島津家を跳び出している。

閑話休題とお許し願つて、樂壇の話に戻るが、音楽家というものは、どうも我々のような俗人と違つて、とかく一風も二風も變つてゐる。頭のスツ天ペンから声を出したり、無暗に指尖ばかりに神経を集中するせいか、奇怪な行動に及ぶし、官能的にも確かに異常性があるらしい。

臍の下三寸

藤原義江の妻君になつた秋子夫人も、今で

こそ藤原がオペラを種にして、ひんびんとして家をあけるので、空閑の情もだし難く、嫉妬の角をニョキニョキさせているが、昔をただせば、歴とした亭主を振りすて、藤原の所へ逃げ込んで来たのだから、所謂因果應報ということになる。

藤原は世間周知の如く、オランダか英國かは知らないが、とにかく三分の一程度の混血兒で、外國人的風貌の持主で、世間の荒波をエツサエツサと渡つて来た苦勞人だが、そこが親不孝声を絞り出す商賣だけに、アノ方も異常だ。若冠二十才位の時に、浅草オペラに飛び込んで、とたんに年長上のぼつちやりした安藤文子と出来て、近所の飯屋の娘を袖にしたり、外國に渡れば渡るで、当るを幸いと撫ぜ切りにして来た男である。

とにかく、藤原オペラに出演ができて、ブリマドンナの地位を護られれば、一應音楽家として獲められることになるので、女流音楽家たるものは、自分の貞操——そんなものがあるかどうか——なんか、馬に蹴飛ばされようが、どうしようが、全然問題にしていなない女類であるから、スキ者の藤原がチヨイチヨイと來れば万事O・Kというのが、最近の不文律に

なつたてゐるそうだ。

例の「土曜婦人」で流行作家になり、忽ちヒロボン中毒から、肺結核になり死んでしまつた織田作之助が幾分経済的な意味で結婚した麻「和子」なども、この離婚で有名になり、その後必死の勉強をつづけ、上京して来て、東京の樂壇に登場したのだが、こういう女性を、商略的にしろ何にしろ忽ちオペラに出演させるなどという商魂を、藤原は女の方にかけての逞しさと同時に、最近ではスツカリ身につけてしまつたらしい。

世界中の女を知り盡し、美人中の美人を妻君にしても、あの道ばかりは別物らしい。その道の通人に云わせると、アレばつかりは美人不美人の差はなく、美人でない方が、どうやら具合がよろしいらしい。

歌唄いというのは、腹の底から声を絞り出す必要上、自然に臍下三寸に力を入れるから——臍下丹田というではないか——あすこの具合も、特別な筋肉の発達をうながすものであるそうだ。閑話休題——。

今度のアメリカ行にしても、誰を連れて行くかで、本当にもめたらしい。とにかく、藤原歌劇に次から次へと登場したブリマドンナ

を、読者をそれぞれ頭の中に想い浮べて頂ければ、彼が如何にソノ道にかけても達人であるかが想像されるだろう。

それらのソプラノ歌手の幾人かが、藤原義江に關係があると思えばいい、と、某消息通が語つていた。

ところで、今度は話を樂器の方に移そう。

樂器といへば、音樂界では、

「どうだね、彼女の樂器は？」

「いや、素晴らしいもんだ。どうだ一度奏てみては……」

などという隱語が用いられている。説明するまでもないだろう。樂器とはアレのことなのである。

ヴァイオリン奏鳴曲

諏訪根自子というのは、どうも名前通りにネジレているらしい。彼女ももう三十を越しているのだから、もう恋愛沙汰の一つや二つはあつてもいい筈なのに、全くそんな氣振りがさえない。洋歐十余年で敗戦後、戦犯の大島大使などと一緒に帰つて來た。

ヴァイオリンの技術にかけては当代一かも

知れないが、それは飽きでも樂譜通りに弾くだけで、少しも人間らしい感情のないものである。だから、丁度精巧な機械としか考えられない。

それというのも、彼女のお袋さんというのが、娘を賣り出すのに、無類の商魂を發揮して、なんとか虫のつかぬようにと、必死に防衛しているからである。だから、彼女は世間なみの恋愛などをしようにもしられないのである。それだから自然にネジれてしまつたものらしい。

それと対照的なのが、大阪の辻久子で、これはお袋さんならぬ親父が、大阪流の賣り出しに懸命で、樂壇のエゲツナイ鼻ツつまみになつてゐる。

諏訪根自子にしても、辻久子にしても、こんなお袋や親父が後に頑張つていたのでは、満足に恋も出來ぬから、弾くものにしても、さつぱり情味がなく、カサカサしたものになるのだという噂である。

この二人が男を知つたら、きつと今よりは素晴らしい演奏をして、聴かせてくれるに違いない。もつとも、辻久子の方は親父の目をぬすんでナニをしているか分らないが……。

もう一人の女流ヴァイオリニスト巖本眞理となると、仲々に人間味が横溢していて、ある地方での演奏会が経つてからの宴席で、自分の恋人に刺身を箸にはさんで食べさせたなどという奔放さを見せている。

諏訪と辻とが片輪なら、巖本はとにかく大人である。

ピアノ狂奏譜

ピアノでは、今日のところ原智恵子と安川加壽子ということになつてゐる。そして、この御兩人ともミセスであり、相当の美人ときているから、いろいろ噂も多い。

原と安川との違いは、原の御亭主が表面に出ないと云うのが、原が完全にシリにしているからで、亭主だのマネージャーが乗り出す余地がないのである。それほど彼女は硬軟両面に渡つて、その疎腕をふるつてゐるからである。

乱行だの艶聞をといた註文なのだが、どうもいづれもチャツカリ夫人で、ボロを出さないのだから恐れ入る。

もつとも、安川加壽子の方は、亭主の安川

定男が参謀格で、いろいろ策動しているが、どうも、それが加壽子とつてはマイナスになつてゐる点が多いらしい。

樂壇というところは、文壇だのナニ壇だのと云うところよりも、表面は如何にも藝術家面をしているけれど、その競争の醜さというものは凄じく、他から見たり聞いたりしたところでは、ゾツと肌に粟の生ずるような争いを展開している。

もつとも、これは人間社会と御同様で、弱肉強食がスキらしい。だから、原爆だの水爆が發明されても、戦争準備に各國が狂奔しているのと御同様だろう。

原にしても安川にしても、ある場合には強慢無礼だし、ある場合には卑屈なほどペコペコしたりする。實際に手のひらを返すというが、余りにもその態度がアツパレなので、惚れてみたくとも、何日豹変するか分らないとなると、浮かずに口説くわけにも行かなくなるのである。

渡米した藤原歌劇團

ところで、これは、極く最近のニュースだ

が、渡米中の藤原歌劇團が、ニューヨークのシテイ・オペラ座で出演して、上演した『マダム・バタフライ』が大好評だつたということだ。

主役の蝶々さんには、三宅春恵が扮し、スズキには川崎静子で、その他、十人のコーラス・ガールがいづれも、揃いの振袖にだらりの帯で、陽傘を手にして現われ、珍しもの好きのニューヨーク兒から拍手を浴びたというのである。

日本オペラの海外進出というので、藤原義江は大いに気を良くしているらしい。

ところで、この最初の公演が終つて、各員が手にしたギャラだが、三宅春恵が五十一ドル、川崎静子が四十一ドル、コーラス・ガールが十二ドル五十セントというのである、ところがこの連中の一日の滞在費が百五十ドルというのだから、全然ソロバンに合わないことになる。

そんなことは、出発前から分つていたことで、到底貧乏な連中では、お小遣にも足りない出演料で、アメリカへ行くことなどは、考へるまでもなく冒険中の冒険で、テもアシも出なかつたらしい。

それを敢然として出かけて行つた三宅、川崎と十人のコーラス・ガールの背後には、それ相当のバトロロンが控えていなくては、どうにもなるものではない。

川崎は鶴沼に大邸宅をもつた大家の令夫人で、一子まである歌手だから問題はないし、三宅もまあまあ一應は筋の通つたバックがある。

それに一度アメリカの檜舞台を踏んだらという野心があるから、どんな無理をしても行つたのだろうが、僅か十二ドル五十セントの出演料で遙々出かけて行つた十人のコーラス・ガールは、どんな目的で出かけたのだろうか。

これもアメリカ病にとり憑かれた女達の果敢ない夢なのかも知れない。いづれにしたところで、所詮海千山千とまでは行かなくても、それ相当の强者ぞろいだから、今から彼女等がさまざまなウワサ話を作つて来るだろうと、手具すねひいて待つてゐる連中が多いのだから、御用心がカンジンだ。

とかく浮世は歌につれ、歌は世につれという諺があるから、ノギコリの目立や親不孝声をハリ上げて金もうけをするに限る。



白亜の殿堂に燃えた灼熱の恋

——園田直松谷天光光愛慾の裏面史——

吉岡 要

★エピローグ

戦後の政界の桃色事件には、「玉座の陰の恋」で有名になった、川西清と三木清子があり、永江一夫と松尾トシの噂あり、さては、泉山虎大臣と山下春江のキツス事件あり、また参院では、不正金消費で宿の女中と逃避行をした鈴木議員ありで、その大小を思い合せただけでも、何十件にもものぼるものであるが、そのスケールといふ、事件の組立といふナンバーワンと折紙がつけられるのは、現改

進黨議員園田直と、前改進黨議員で、今回の選挙に落選した、松谷天光光の事件であろう。

この事件は、大きく婦人代議士の可否論までに発展し、婦人団体などからも、鋭い反響をうけたものであるが、その反響は、女である天光光に強く、園田に対してとかく寛大であつたようでもある。

というのも、報道前面にたつのが男性であり、また古い日本の男尊女卑の風習の抜けきらない封建的思想にもあるといわれたようであるが、ともかく、この事件が、何故このように輿論を浴び裁判問題までになったのか？

この事件で報道されない事実までもまとめて紹介しよう。

★そもなれそめは

松谷天光光と園田が知り初めたのは、天光光と同区、東京七区出身の三木清子^{なみきよこ}が前改進黨議員が、天光光を園田に紹介したことにはじまる。

二人の仲が発展して新聞ダネになつたときも並木は、

「とんだ出雲の神になつたもんだ。人間の運

命なんてものは恐ろしいものだ」

とその猛然な発展ぶりに舌をまいていつたものである。

また、厚生委員長であつた小野孝も、一段高い委員席から二人の席を見ていると、何となく、たゞでは済まぬ怪しい空気があると感じていたというから、紹介されてからの二人は、互に、急速に好意を感じ合つていつたのであつた。

党派を越えて、二人の語り合う姿が議事堂のソファの上で見られるようになり、また、園田に寄りそつた天光光が、澁谷の人混みの中で発見出来るようになったし、澁谷松濤の園田の住宅にも天光光は出入りしたし、天光光の自宅にも園田が門をくぐる姿があつた。だが、彼女の父は、党派の違ふ（当時彼女は労働党であつた。彼女が何故労働党に走つたかは、別に一項をもうけて説明しよう）人間との接近を、心よからず思つていたのであつた。

★女たらしで有名

園田とはいつたいどんな人間であらうか。

「園田という男は、一つのことを思いつめたら、何が何でもそれに打ち込んで行く男であるし、女に惚れられる要素を多分に持つてゐる男だ」と批評した人があるが、まづたく、この言葉はピッタリとしよう。

少し小柄だが、澁いマスクの好男子で、どことなく色っぽい空気を持つており、おつとりと構えているところなどは、どう見ても女にもてるタイプでもある。

彼が政治的な牽引力をもつて行動を開始したのは、芦田内閣が別れて、あとの首班を誰にするかという問題のときである。このとき彼は一年先輩の川崎秀二、^{かわさきひでじ}権熊二郎^{けんくまじろう}などとともに月曜会の参謀となつて、山崎首班実現のために大奮闘をしたものである。

こうした彼の行動は、川崎、権熊がかつては青年將校といわれたが、今では、園田や帝石事件で名をあげた中曾根^{なかそね}などがそのお株を奪つたとまで云われたのであつた。

だが、このような政治的な反保守合同派の彼の私生活は、妻子を選挙区に残したまゝのひとり暮らしで、住いも旅館と料亭兼業の家に陳取つてゐるので、多少の浮気は別としても彼の友人も語つてゐるように、園田の女たらしは、チヨイと程度が強すぎる———というのである。

当時三十七歳の青年代議士。学歴は郷里の天草の小学校を出ただけだが、頭は悪くないし、男ぶりはよいし、満州で会社員をしたり田舎の政治をやつたりして、度胸は既に出來上つてゐる。

俗に、天草女は情が深い。天草という土地は、淫風滔々としてゐる土地で、

「さすがに園田ハンはやりなはつたバイ」

ということ、あんまり選挙民も氣にかけないというから、まさに色男は地の利を得たということが出来るよう。

彼は次から次々女をつくつた。つくつては捨て、行つた。だが、この男に捨てられた女は誰一人としてグチを云わずに、好意を持ち続けているというのだから、この道にも癖と云ふものがあるのかも知れない。

次に必要な金だが、これも悪くはない。これはと思つた女には惜しみもなく金を使う。どこかの女から廻して使うのかも知らんといわれた程だが———おまけに女には非常に親切である。

これ等の條件は、戦後の女性の求める條件

にピッタリと一致している。

天光光とて女である。どこに魅力を見出したかを問う方が野暮であろう。恋の相手に園田を選んだことは、他の女が彼を選んだのと何程も変りはない神経だったのだ。そしてまた、捨てられて行く身になるのだろうか。

★政治節操もない女

昭和二十一年の戦後はじめての選挙に、日本に全くはじめての女代議士三十余名が登場して来たのであるが、その中に、最年少婦人候補と銘打って

「二十七歳の乙女捧げん」

と、生々しいスローガンで街行く人の足を止めさせたのが、誰あらん、やがて恋に身をやきつくした天光光であつた。

その不思議な名前と、どんな場所に出ても季節を度外視した黒のモンペの上下で通す一見して小柄な身体で縁なし眼鏡、蒼白の顔の冷たい理智的な容姿は、魅力的な代議士、それも若い婦人代議士とあつて、大きく人気を浴びたのであつた。

なるほど、黒いモンペの彼女は他の女代議

士に比較して異彩ではあつたが、或る人はとりすました表情を浮べた彼女の蒼白い顔と、貧弱な体をながめて成程、知的であろうけれど、豊かさや女らしさは全く感じられないといい、逆に或る人は、親しみやすい、むしろ脆そうな女だと評している。

さてそういった風貌は別として、新光クラブから社会党に入り、さらに社会党を脱党して黒田壽男らの労働党に走つた。松谷の本質は何か？ はじめ、立候補前に、松谷は民主党（当時進歩党）に入ろうとして、或る人を通じて、犬養健のところへ、入党を申し込んだことがあるそうだ。

そうして保守党の人間になろうとした彼女が、何故無所属で立ち、社会党に入つたかその間の事情は少しも明らかにされていないが、こうした経緯を見ると、彼女につねに思想的に右往左往しているのではないかと思われる。社会党書記長、右派の総師西尾末廣が五十万円の土建屋の献金を受取つたことが問題となり、西尾の政治生命が不当財産委員会や検察廳で叩かれはじめた時、はしたなくもこの松谷もまた、西尾からその土建献金の一部を貰つてることが判明した。そこで或る

人は、

「すると、松谷は社会党の右派ですか？」

と、疑問を抱いた。だが松谷はレツキとした左派の五月会で、その証據にはやがて追加予算の運賃値上げに反対して社会党を脱党し労働党に走つたし、のちには無所属となり改進黨員となつた。

松谷は、西尾から受取つた金は、選挙の陣中見舞だといふ訳はしているものゝ、こうした松谷の行動の中に、政治家としての矛盾と欺瞞、非論理性を感じないわけには行かない。

彼女は苦学して女子大、早大を出た。彼女を政治家にすることを念願した彼女の父親は彼女を「男性的」に育てあげたのである。

★変態的に育てられ

彼女の父は満州あたりの大陸渡りをしたことがあり、院外團的なこともやつており、多年自分の政治への望みを、娘の天光光に托して生きた男である。それだけに、賣物にならないうちは、決して虫をつかせてはならなかつたのだ。そのためにはいろんな術策が講ぜら

れていった。

先ず彼女が最年少として打つて出たところ彼女と同年の立候補があつたので、当時では異例の満年齢を名乗つたり、演説原稿なども父の代筆であり、会場で拍手をおくるのもさくらとなつた父であつたといわれている。

このようなところに、彼女の盛り場人氣というものが湧き、有権者は、知らず知らずのうちに、その作戦にかけられていつたのだ。彼女はひたすらに父のスピーカーとなつて議事堂入りをしたのである。

父の夢は実現した。父は彼女の一挙手一投足までカンシの眼を走らせた。父が彼女と一緒ににいないのは議席だけだといわれるくらい父は遊説にも旅を共にし、宿も室も共にしたのであつた。

父は彼女には特別の好意を示し、他の妹達にはカユを囁かせても、どこからか彼女のためには米軍のパンを求めて與えるし、彼女の母も彼女にはオバサンと呼ばせていたのである。

このような変態的な父のもとに育つた彼女は中性的であつた——という人もいるが、その外に、彼女の母は実母ではないのではない

かという疑問を興えてもいたのである。学校も、無理をして女子大、早大を卒業させているし、父の彼女に対する狂信ぶりは実に想像も及ばないものであつた。

このように、彼女の脳は父の脳であり、肉



体は單なるウツロであつたのだ。云いかえれば、少し足りない——という言葉がピッタリ

するかも知れない。

★遂に嚴肅なる事實

その彼女がはじめて恋を知つたのである。

今まで父親には絶対服従であつた彼女も、恋の魔力と、園田の甘いさゝやきの前には、單純な一個の女となつてしまつたのである。

園田との関係を知つた父は、朱をそゝで、激怒した。そして、泣くように、娘の反省を求めたのである。

主義思想が違ふこと。相手に妻があること——などが理由であつたが、もとより彼女に思想があろう筈もなく、相手に妻があろうとなかろうと、妻など別れてしまふさ——という、男の言葉の方が、どんなにか彼女を夢中にさせたものであつたか——

父の嚴しい監視の眼をぬすんで、園田との逢う瀬を楽しんでいたが、遂に二人は肉體關係にまで発展していたのである。

「嚴肅なる事實」

は既につくられていた。

今は園田の生命を母体に感じる彼女にとつては、父の言葉にはげしい反撥をさえ感じは

じめたのである。学生時代にも、夜遅くなる
と、叱られるなどのしつけ方をした父も、男
にひかれて行く女としての天光光を見ては、
まったく手のつけようもなかった。

——あゝ、竹の夢が消えて行く——彼は崩
れ行く己れの野心に齒を噛みしめて叫んだの
である。

遂に來るべき日は來た、天光光は園田のも
とに父を捨て、生家を捨て、〃曉の脱走〃を
敢行したのである。

輿論は、興味・好奇心をもつて宣傳しつゝ
けた。二人は手に手をこつて恋の逃避行をし
たのである。そして彼等は結婚し、議員宿舎
には二間つゞきの、彼と彼女の巢がつくられ
た。

やがて、月満たずして、天光光は園田の子
供を生み落した。

そのことは、〃曉の脱走〃結婚以前に彼と
の肉本關係を明瞭に証明し、ジャーナリズム
は「嚴肅な事実」という新造語を贈つて彼女
の中性から女性への成長に声援を送つたもの
であつた。

議事堂の裏にある第一議員宿舎の庭に、オ
シメが、道行く人の興味を呼んだのである。

園田には四人の子供があり、一人の女の腹か
ら出たものではなかつた。その最後の子供は
彼と天光光が關係中には、まだ彼女の腹の中
にあつたのである。

このような女好きの園田は、彼女にもいつ
た。

「今に家庭は解決つけるから——」と。

それだけが、今は天下に結婚と嚴肅なる事
実を公表化した天光光の、たつた一つの望み
であつたのだが、園田は一向に、そのような
ことは知らぬ顔で妻のもとに帰つたりした。

「天光光とは、ちよつとした浮気からだよ。
何も女房のお前、別れるなどということはし
やあしない。どうせ捨てる女だから——」

これが、園田が妻につたえる心であつたの
だ。

「二人妻」これを園田はやつてのけた。産後
の床にある彼女に、「もう政治を止めなさい、
こうなつたからは、世間のこともあるし、一
主婦となつて暮すように」という、天光光フ
アンからのことばが届けられたのだ。しかし
当然、議員を止めるであらうと思つた天光光
は、頑として止めなかつた。一説には、止め
れば生活費の出どころがない——ともいわれ

たものであるが。

このような彼女の態度は、あげて婦人層の
反對をうけた。ときもとき、平林たい子によ
る「榮夫人」なるモデル小説が、大きく世
論の中に發表されたのである。

★波亂呼ぶ天光光

この小説のモデルは、主人公が松谷天光光
であるとして、大きく騒がれ、平林は單なる
小説ですから——と澄まして口をつぐんでい
るが、その中の主人公が、もし天光光である
としたら、天光光という女性は、こんな性格
の女性になる。

- 1 彼女は父親のロボットで政治性のない
こと。
- 2 彼女とその父は、自分の利害のために
は何でもすること。
- 3 彼女は過去に子供を生んだ経験がある
こと。
- 4 この恋はかけひきの恋で打算的であつ
たこと。
- 5 なぜ代議士を止めないのか、この点は
もつともおかしい。

このなかで、一番興味もあり、見逃し出来ないのは、彼女は既に子を生んだ経験があるということである。

女たらしをそのテクニクの上質な園田は彼女と肉体交渉のあと、おく面もなく、「彼女は処女だつたよ」と語つたといわれているから、園田ともあろうものが、処女か、そうでないかは、判りそうなものだが、さすれば天光光のテクニクがよかつたかと、好色連中が論じたものであつたが、一時問題を起した市川房枝女史の発言に、

「彼女はひとの妾だつたという噂ですよ」

ということばがあつた。これを聞き込んだ父娘は早速、天下の市川女史なら、宣傳にもなると裁判所に持ち込んだが、遂に流産となつた一幕もあり、かえつて、市川の弁護士が天光光の弁護士を通じ、かゝりつけの医者からきいた言葉だが、

「あの身体は子供を生んだ身体ですよ」

と聞かされたといわれているし、この相手をめぐつて某政治雑誌は、その相手は、父がそれとも彼女と昔交際のあつた神谷隊くずれか、また、天光光の選挙資金を出したという電元社の石井社長か、それとも他の人間か？

として、その妊娠の裏づけを行つてゐる。

彼女の父の変体的な愛情からか、またバツクとしての石井か、情熱的にカーツとなる彼女であり、戦争中は海軍省の嘱託で工場などを廻り、戦後は飢餓防衛同盟を作つたりする彼女だけに、神谷隊員か——といろくと思



像はされるが、妊娠の公算は大きいようである。

★果して園田だけの？

天光光は既に処女ではなく、厳肅なる事実、第二の事実である——とまたこの報導は

興味を呼んだ。

このようななかで、園田の妻は里の千葉に逃げ帰れば、園田はその後を追ひ、園田が、天草に帰れば、妻も、天光光も後を追うと、まことにめまぐるしい、二人妻のシーソーゲームがつゞけられ、世のもてない人間をして啞然たらしめたものである。

こんな話がある。天光光が園田を追つて天草に行つたとき殊勝にも島に上陸せず、「私は、夫園田？を国会に送られた有権者の皆様のお許しがなければ、上陸することが出来ません」とブツた。

上陸しない人間が、天草くんたりまで行くのはおかしい話だが、ソレ、そこはさすがに政界でキタエた腕である。

これを聞いた淫風滔々とした天草の連中いたく感激し

「あゝ、実に見上げたもんバイ」と手を取り足をとつてかつぎあげたとは、ちよいと大きすぎる表現だが、このようなエピソードが陰にあり、今後の園田当選の原因にもなつてゐるようである。人気というものは恐ろしいものではないか。

また、彼女の子供が、生存している——と情報を書きあるいた博士がいる。この博士追放中の身でありながら、かつて自分の女秘書である美人に、よつて袖にされ、あまつさへ、自己の反対派の学者のたむろする群に走つたことに、可愛さあまつて憎さが百倍となり、なんとか彼女をやつてしまえ、それに付けては、彼女が、天光光の戦争中に関係していた団体の役員の某女が、天光光と同性愛といわれているし、その秘書はその女のグループで、一緒にお談義をまいた中ではあるし、天光光を揺さぶることが、ひいて彼女にも及び、ここに恋の仇討ちも出来るものと、とんだ「江戸の仇を長崎で」と、自分に好意を寄せる出版社に、かくは情報提供となつたわけである。

とんだ追放学者ではあるが、その出版社の記者に問いつめられて、とうとう真相を白状し、どうぞ内密にして下されと、泣かんばかりに謝つたというから、とんだ罪作りの天光光ではあつた。

天光光の子供が生きているとすれば、もう小学校の一年生になる頃である。

——それを知るものは、この日本にたつた一

人、腹をいためた天光光しかないのだが——

★ファイナール

しかし、今はむかし、天光光は、ガンとして母となつた心臓を發揮して、今後の選挙に望んだが、その間二人目の子供の母となつた彼女も、昔の筋書き通りには行かず、彼女の恋の紹介役となつた並木芳雄は当選し彼女は落選してしまつた。

このように、今や天光光の時代は過ぎようとしている。悲しい情熱のアプレ女性代議士への国民の批判は、落選という、厳肅なる事実をもつて、彼女への贈りものとしたのである。

天光光よ、あなたは政治家になるまえに、善良な妻であり、母でなければならぬのではないか。

また、このような婦人議員とともに、廣く男性議員に対しても、厳しい批判の眼は忘れられてはならないことも勿論である。



幸福すぎる

デコ

「稲妻」では最近めずらしく、彼女は絶賛された、フランスへ行くより、下町に住んだ方が得だつた、なんて云われたが「カルメン純情す」ではフランス帰りの木下恵介と意気が合つて、フランス旅行の値打が解つたそうだ。

二十八才の彼女は、何時迄たつても、娘役しかやれない、会社には調法だらうが、見る方はソロソロ、飽きている。そこが彼女の悩みで、色々苦心を重ねてはいるが、さつぱり生かされない。自分を大切にしない典型的なスターで、スター意識が鼻について、気色が悪いのだそうだが、スターと云う存在は、その程度の事を、自惚れて満足する位の神経で居なければ、務まるものではない。一時だから彼女は、宙に浮き上つた感があつた。ファンなんて馬鹿みたい、とか言つて、仙女にならんとした。幸運すぎて下積みの苦勞を知らぬ所が、彼女の最大の弱点である。

海外



こぼれ話



提灯をかかげよ！

英国の老宰相チャーチルが豪華船クイーンメリー号にのって渡米するといふ直前の去年の暮のことだった。ボストンのオールド・ノース教会あてに北ダコタ州選出上院議員レインジャーという人が、「クイーン・メリー号出航の報あり次第、教会の鐘樓に提灯を二つかかげられたし・ポール・リヴィアの愛国の提灯の歴史をもたれる貴下の教会はその伝統にしたがい国民に警告をあたらせるものと信ず」といふ電報を送った。

この謎のような電文は、米國獨立戦争の英雄ポール・リヴィアが一七七五年にもし英国が海から侵入してきたら提灯を二つ、藍から

来たら一つをオールド・ノース教会の鐘樓にぶらさげもって米国民に警告するよう命令した、という史実によるもので、つまりレインジャー氏は、チャーチル氏の訪米を、まさに「敵襲」であり「祖国の大危機」であるという見解だったのである。

流言のとは？



しかし結局教会の鐘樓に提灯はぶらさがらず、老宰相は無事ワシントンへ到着したが、思いがけなくもこのワシントンでは、いとも奇妙な提灯にひがともった。それといふのは、六年ぶりの賓客、それも大英國の老宰相をむかえるに足るはあまりにエチケットを知らない奇妙な流言といふ提灯にひがともったのである。

曰く「トルーマンは、チャーチル渡米の意気が全く不明で困っている」曰く「トルーマンはチャーチルが来ようが来まいが夜の九時になったら寝てしまおうつもりだ。と英国大使館に通告した」等々。

この無禮な流言に腹を

たてた英国新聞記者は、本國に向つて次の様に打電した。

「この流言は、国内問題で頭がいっぱいになって



とてた英国新聞記者は、本國に向つて次の様に打電した。」「われ金を

チャーチル老いた

「この流言は、国内問題で頭がいっぱいになっているホワイトハウスの一員が、この際チャーチル、トルーマン会談で何か新しい協定でも出来たりして野黨にしてやられるような結果が生じては大變と、チャーチルを招かれざる客あつかいにしつくりだした流言だろ」つまり米國側は「チャーチル恐るべしの感が強かった」というわけ、ちょうど大統領選挙を十一月にひかえている米政府の神経がチャーチル來訪によつていっそう

求めず、鉄を求め来れり」とチャーチルはいったが、まさか大英國宰相が、鉄鋼百万トンを得るだけの目的で大西洋をはるばる渡つたとは思われない。ところが一月十六日突如發表された吉田書簡は英國が米國の國府援助政策を承認することに屈服したことを意味するから、レインジャー議員の提灯はいらざる心配で、むしろコーンウォール英國の海岸にかかげられるべきだったのかもしれない。



潜望鏡なんてのがあったっけ

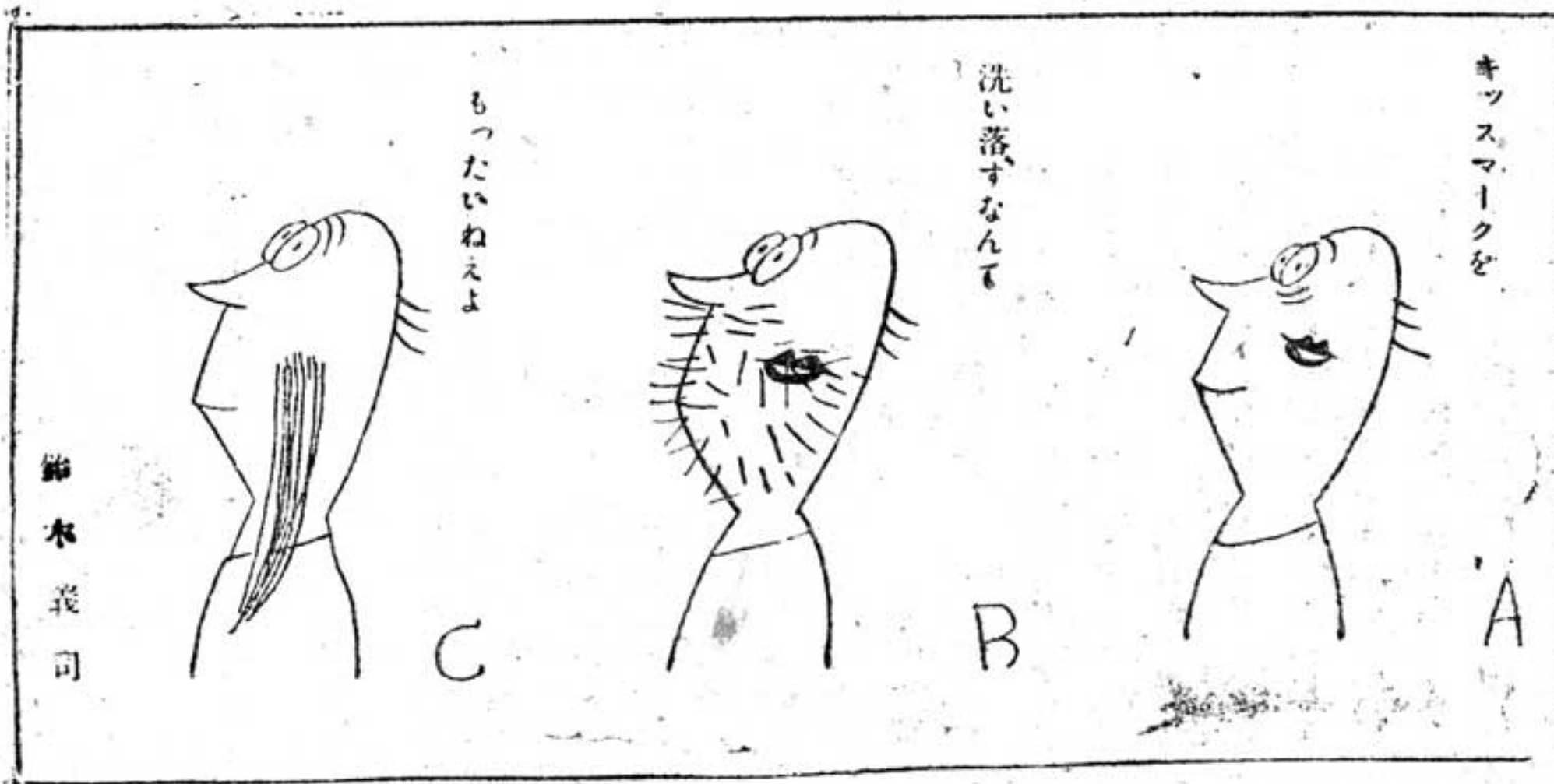


坂みのる

この作品のアイデア
はですね、つまり
お嬢さん



かまえ つねいち



キッスマークを

洗い落すなんて

もったいねえよ

鈴木義司

風^{ふう}
流^{りゅう}
ア
パ
ー
ト

亀^{かめ} 榛^{しん}
山^{さん} 葉^は
博^{はく} 英^{えい}
画^が 治^じ



(一) アパートの人たち

「風流アパート」というのはだれがつけたのか、ほんとの名は、アパート清風荘というのである。

私鉄沿線のある駅にちかい静かな住宅街に、桃色にぬった木筋コンクリートの、なかなかスマートな二階建てのアパートが建ったのは、三年ほどまえだろう。「風流アパート」というしやれた名は、いつの間にか、この界限では通り名になった。そこに住む人が、画家や雑誌の婦人記者や、三文作家、映画の助監督といういわゆる文化人——ペレー帽種族が多いのも、この別名には、なんとなくふさわしい。

ところで、このアパートの所有者は、金山さんである。見事に頭が禿げているが、まだ五十になったばかりの金山正道は、終戦後まで、九州の郷里で小学校長をしていた。だいたい家は素封家で、なに不自由ない身分だ。息子は大学を卒業して、市の銀行につとめたし、娘は医者いしやの卵と恋愛結婚して、東京に新居をもった。やれやれと思ったとたんに、二十五年オシドリみたいによりそってきた妻が、ぼっくり死んだ。再婚の話もいろいろもちこまれたけれども、正道は、いっさい、ことわった。なにを考えたのか、山林を売って上京すると、この住宅地に、桃色にぬった派

手なアパートを建てたのである。

「死んだ女房にやすまんが、わしはこれから、第二の青春を楽しむつもりですわい」

二十年間、教壇で修身を説いてきた金山先生は、すっかり禿げあがった頭を光らせてこう宣言し、親籍や友人をびっくりさせたものである。

正道は、そのアパートの階下の事務室兼居室で、気軽な自炊生活をはじめた。人がよくて、世話好きだ。おのずから君子の風があるので、この家主さんは、アパートのだから敬愛けいあいされている。

秋のこの頃、コスモスの咲き乱れたアパート清風荘の庭には、丹前姿の金山さんがみられる。味噌汁に納豆のかんたんな朝飯をすまして、庭に出たところだ。

「お早うございます」

イキな黒のスーツに、羽根のついた帽子をななめにかぶり、書類鞆をさげた竹内夫人が、ハイヒールの音も高く、さっそくと玄関にあらわれた。

「やあ、お早う。早い御出勤ですな。御主人は？」

「まだ寝てますのよ」

三十一、ふちなし眼鏡をかけた女子大出の婦人編集者は、胸をはって街に出ていった。

「あら、お早うござんす」丸顔のふとった細君が、ハタキ



をかけながら、窓から声をかけた。外務省通訳官花岡雪雄の細君だ。

「おじさん、もう、北海道は雪かしら」美術批評家福智さんのハウスキーパー、二十一才のマリが、ネツカチーフを頭にまき、唇の真赤な顔を、窓から出した。

「さよう。今朝の新聞には、函館に初雪降ると出とりましたな。福智さんは、いつ、お帰りですか？」

「あと一週間だけど、わたし、困っちゃったわア。財政欠乏なのよう。いいわ。借金してやるから」

「それは、それは」というふうに、ニコニコした家主さんと、店子との朝の挨拶は、ひとわたりすんだ。階下八室、二階六室のほかの居住者のめぼしいところを拾うと、映画の助監督をしている田中一家。親のスネをかじって小説を書いている独身者の奥村。麗子、妙子、美子という美しい名前をもつた三人の娘がある斉藤かねの女だけの天国、その他等々である。

(二) 画伯、ヴァン・デ・ヴェルデに 悩まされること

正午のボーが鳴った。金山正道が、昼の仕度をしていると、「先生、お邪魔していいですか？」とノックして、奥村がはいってきた。もと小学校長の金山さんは、アパート

トの住人から先生とよばれている。もじ・もじ・頭で丹前を着た奥村のあとには、暖かそうなジャケツを着て長髪にペレーをかぶった竹内画伯が、照れくさそうにニヤニヤ笑って立っている。

「深刻な問題でしてね」ドストエフスキーを崇拜している奥村は、なんでも深刻にするのが好きだ。

「こと夫婦生活の機微に関するんで、問題は微妙だが、といて竹内画伯の悩みは深刻ですよ……」

理論家の奥村は、深刻に眉をよせると、フンフンと鼻をうごかした。七輪では、金山さん自慢の沖縄料理の豚の足が、鍋でグツグツと煮えている。

「奥村さん、何事がもち上りましたかな？……」

「いい匂いだな。それがですね、ぼくは竹内さんから、秘密の悩みをうち明けられて、困ったです。竹内女史は、苦手だからな。画伯は、女史に悩まされてるんだ。膝坐位だとか、チチタチオだとか、前戯は三十分以上継続しなきゃならんとかね……」

「はア？」金山さんは、口をあけた。「なんですかな、そのシツザイとか、チチなにかいうのは？」

「ぼくもよく知らんですがね」奥村は、竹内画伯をふりかえった。

「チ、チチチ……タチオとは……」画伯は赤くなって、ども

った。「快擦技法と大川先生の著書に出とります。膝坐位とは……」

「要するに、竹内夫人の本棚には、ヴァン・デ・ヴェルデや、そのなんとか性学者の先生の本がずらりとならんで、夫人はそれを全部、科学的に実践しなければやまないという探求慾にもえてるんだな。それで、実験の相手をつとめる画伯は、この通り顔色が青くなって、最近はうんざりして、科学夫人の本棚を見ると、嘔気がするし、絵を描く気にもなれないと訴えるんだ。まったく女と違って、男の場合、大きな消耗だからな……」

「むつかしいことはわからんが、竹内さんは食傷しとるちゆうわけですね。それにしても、奥さんは……」

「あんな細い体で、やえやえした顔をしてるんだからな」

「困ったことですよ。なんとしたもんじやろか」

「どうです？ マツカーシーときて、焚書という手段は？ まったく、あれらの本が悪いんだ……」

おとなしい画伯は、首を縮めた。頭のまん中が薄くなつて、はつらつとしたインテリ夫人にくらべて、四十一才のこの中堅画家は、なんだかしよんぼりしている。アブストラクト（抽象派）の画家としては、才能を期待されているのである。夫人の初世は、美術記者としてこの画伯のところに通ううち、その才能にうちこんで、強引に結婚した。

喰うや喰わすで、わけのわからない絵を描いていた竹内がめきめき注目され出したのは、結婚してからである。彼の絵はほとんど売れないので、働き手は、もっぱら夫人の方だ。ところが、結婚二年目のこの頃、彼は元気がなくなつて、なんだか女に飼われる動物みたいな気がしてきたというのである。それも、竹内夫人の旺盛な科学精神の結果だ。初世夫人は、なんでも科学的、合理的でないと気がすまない。

「画伯はいうんだ。やっぱり、あれは科学じゃない。もっと秘密な、情緒的なもんだ、とね。合理的な御飯の炊き方という工合に、本と首っぴきにされちやかなわんよ。ところが、竹内夫人は眼鏡をかけて、本のページをめくるといふんだから、画伯はへボ医者に扱われる実験患者みたいな寒々とした気分になって、味気なくなるというんだ。それにその本によると、三六八型あるというんだからね」

「ほう、三六八型！毎晩として、一年かかる勘定じゃね。ところで、奥村さん……」こんどは、金山さんが深刻な顔をした。「いまどき若い女性は、そんなに科学精神に燃えとるのかね」これでは、わしの第二の青春も、簡単にはいかんわいと考えたのである。いくら沖繩料理の豚の足で栄養をつけても、三六八型の実践を迫られたんじや、追っつかない。

「どうも、そろらしいですね。この頃の若い女性は、高校あたりから、だいぶその方面は、研究してゐるらしいから……なにしろ、参考書は、山とあるし……」

「ふうん……」金山正道は、うなづいて腕組みした。

「とにかく、先生、画伯のこの問題を、どう解決すべきか、考えておいて下さいよ。あの夫人、僕は苦手だ。ふた言目には、ぶらぶらしてないで、いい作品を書きなさいよ、いつでも紹介してあげるわよ、というんだからね」

丹前の奥村と、しよんぼりした画伯とは、出ていった。

(三) 毒をもって毒を制すること

——または、新版「地獄」——

竹内画伯の顔色はますます青く、眼はどんよりと光を失うばかりだ。

初世夫人の出勤中に、画室兼居室をのぞいた奥村は、カンプスに向つてわけのわからぬ曲線をぬりたくっている頭の真中がうすい画伯を見た。竹内画伯は、「科学的、科学的……」とつぶやいていた。奥村は、このことを金山さんに話した。「困ったもんだのう」と正道はため息をつき、二人は腕を組んだのである。

ある夜、奥村のドアをノックするものがあつた。階下四号室の熊谷で二十七才の彼は、九州出身のまじめ

な官吏である。金山さんの知人の紹介で、二カ月前にこのアパートにはいった。弁護士試験を受けるつもりで、大学の夜間部に通って熱心に勉強している。

「実は、いい難い話ですが、奥村さんは、小説を書いていられますので、僕のことでもわかつて頂けると思ひまして……。奥村さん、ぼくは、ぼくは、汚い人間です。ぼくは、どうしたらいいでしょうか？　ぼくは大学で講義をきいていても、そのことが眼にちらつくし、勉強していても……」

「まあ、そう興奮しないで……。いったい、どうしたんですか？」　机に片ひじついた奥村は、不精ヒゲを撫ぜた。

「夜になるときこえるんです。それも、両方から……。それにかべには隙間があるんです……」

小説修業中の奥村には、すぐ察しがついた。

「ははア、「地獄」ですな。バルビユスの……」

「は？……」

「いや、それで、君は、騒音に悩まされ、人生の真実を垣間みるというわけですね」奥村は、竹内夫人を思いだして、へんな顔をした。「まったく、ここの建築は、みかけばかりよくって、雑だからなあ。金山さんも、案外チャツカリしてるよ……」

「いえ、ぼくは、金山先生の非難をしているわけではありません」熊谷は、ニギビの赤い痕がある額を平手でふく

と、揃えたひさを両手でつかんだ。「ぼ、ぼくが悪いんです。しかし、この頃、勉強ができないんです、神経衰弱じゃないでしょうか？……」

「失礼ですが、君は童貞ですか？……」

「は、はア……」

「あの室のとなりは、ええと、田中助監督に、花岡さアます一家か……。はははッ、ムリはねえや。しかし、これは君にとつては大問題ですよ。そんな生活が毎日続いたら、勉強はできなくなるし、ひとりで楽しむと、尙更、からだに害がありますよ……」

「は、はア……」熊谷はなにを思い出したのか、ニギビ顔を赤くした。

熊谷問題の室の東隣は、東西映画会社で助監督をしている田中為夫の室で、新婚二年目である。田中為夫は助監督で、将来は監督になるというが、撮影所では、なにをしているかわからない。一説では俳優のお昼の弁当を聞いて注文するという風な使い走りをしているという噂もあるが、当代一流の男優、女優を友達扱いにし、その私生活を面白おかしく聞かせるので、アパートの細君のあいだでは人気者だ。田中為夫の若い細君も、亭主に似てお人好しで、喫茶店の女給仕をしていた、すこしおひきずりである。天気の良い日には、シミのあるシーツをかけた布団を、平気で

窓に干すのをみても、熊谷を不眠症にさせるこの若夫婦の私生活の猛烈さは察しられよう。この頃、女の子が生まれた。自称助監督は、さつそく「田中絹代」と名前をつけた。

さて西隣りの花岡夫人は、「さあます夫人」で通つてゐる。花岡は外務省の通訳官で、上海からの引揚者である。

「主人のような外交官は……」というのが、夫人の口癖だが、法科で勉強している熊谷は、同じ外務省の役人でも、通訳官や書記生は、外交官のうちにはいないということを知っている。お玉ジャクシも蛙の子、ではない。

良子夫人は、三十の女盛り、丸顔の色白で、顎のくくれが色っぽい。子供が二人あるが、夫妻は、夕食のあとで、子供をほったらかして、ポータブルの流行歌にあわせて、

頬をつけ、よくダンスをしている。子供をしめこんで、二人だけで映画を見にゆく。

「私たち、アメリカ式生活をしていますのよ。これから、なんでもアメリカさますものね。子供にも、英語教育をしていますの」

食事は、いつさい茶碗と箸を使わず、皿とフォーク、スプーンだ。良子夫人にいわせると、箸は原始的であり、フォークは文化的である。味噌汁をスープといい沢庵漬をジヤパニーズ・チーズと呼んでいる。細君は、毎年妊娠するくせがあつて、こんど、五回目の人工中絶をした。産制では、一見識ありとアパートでは、自他共に許しているインテリ夫人である。

だ、番頭苦笑いをして

「古いおなじみですから、たいていのご無理もお聞きするつもりですが、どうもこんな物じや五兩どころか、二朱だつてご用立てできません」

「そこを何とかして貸しておくれよ、よう番頭さん、拜むよ」
「拜んだつていきません、お断わりです」
と言つてゐる処へ、奥と店の



風流 一頁版 後家の質屋

ある質屋へ若い男がきて、
「番頭さん、すまねえが、これで一ツ五兩貸してお呉んな」といつて出したのは、はり形

境のノレンの影からこの屋の女あるじが

「番頭さんチョイト」

「へい何でございます。おかみさん」

「おなじみさん
なんだろう、大分困つておいで
のようですだから
貸しておあげなさいよ」

「へい左様でございますか、け



ど、あんな物は受出しつこないんですが……。熊さん、折角ですから、特別にお貸しします」

「そりやア有難え」

客は喜んで帰つていった。番頭は品物を手に取り上げて

「何だい、これが五兩か、馬鹿馬鹿しい、おかみさんだつて、こんな物旦那さまがお存生なら百文だつてお取りになさりやアしなかりう」

「熊谷君、君も運が悪いよ。あの二組にはさまれちゃね」奥村は嘆息した。それから、ムリに嚴肅な顔をしてみせた。「とにかく、君の話を、一方的に信じるわけにはいかんからね。そうだ。いいことがある。今夜、君はぼくの室に寝たまえ。ぼくが、君の室に寝る。事実を確かめなくちゃならんからね。今日は、土曜日だな」奥村は、意味ありげな顔をした。

「はア、お願いします。ぼくは靜かに眠れます。自分は、自分のあの室がこわいんです」

熊谷の眼には、ほんとに恐怖の色があつた。奥村がいつた通り、勤め人にとつて、土曜日とは、一週間のオアシスである。明日はゆつくり朝寝坊ができる。奥村は、熊谷の室に毛布とウイスキーのびんをもつてゆき、熊谷は、いそいそと六法全書と大学ノートをもつてきた。そして、翌日……（筆者は、読者といつしよになつて、ここで他人の私生活をのぞき見るつもりはない）奥村は、不眠の赤い眼をして、熊谷を起した。

「なるほど、あれじゃ、君のからだがもたんよ。これから、金山さんとこへいこう」

金山正道は、奥村の報告を聞いて、「ふうむ……」と腕を組んだ。「こまりましたのう。あの方々もお若いのじやし、すこしひかえてくれともいえんしのう」

考えこんでいたが、ふいに正道は、ハタとひさを打つた。「奥村さん、名案がありますぞ。例の竹内画伯は、奥さんのその科学的精神とやらに、まだ悩まされとるち。う話でどわしたな。いいかな、毒をもつて、毒を制すじや。画伯になんとかうまいリクツをつけさせて、熊谷君とへやを交換したらどうじや。いくら竹内夫人のその旺盛な科学精神もじや、そら、あんたらのいう客観とやらで、その實際を知れば、顔負けするち。うわけですじや」

「なるほど、名案だ！」

奥村も、ひさを打つた。

採光がいいからというような理由で、へやを交換してから、画伯の血色はよくなつた。仕事にも油がのつてきた。夫人は、それを採光のせいと思ひこんでいる。

竹内画伯の話では、初世夫人は、

「まア、あの人たち、いやらしいわね……」と、もらしたそうである。

夫人は、画伯の情緒的生活の主張をうけいれて、実証的、科学的追求はやめた。彼女の書棚から、なんとか先生の浩瀚著者が消えたことは、いうまでもない。

（四）美しい三人姉妹の話

——またはひかげの花——

風流アパートの美人三人姉妹とい
えば、この界限では有名だ。

二階三号室の斎藤かねの娘たちで、
長女の麗子が二十八、次女の妙子が
二十四、末の美子が十七の高校一年
生である。母親のかねは、最愛の一
人息子が戦死してから、あたまがす
こしへんになった。戦災で焼け出さ
れ、染物職人だった亭主も死んだ。
焼け跡に小屋を建てていたが、この
アパートに移ったのである。

長女の麗子は、ある新興化粧品会
社で、ポマードやクリームをつめる
女工をやっていたが、社長秘書にな
った。社長は、五十すぎた酒肥りの、
頭の禿げた男だ。この郊外に工場を
もつ戦後のしてきた新興化粧品屋で
ある。いつかの秋の祭礼に、美人事
務員や女工を選んで、化粧品の名入
りの揃いの半被を着せ、ミコシをか
ついでねり歩かせたことは、いまで
も町の話題にのこっている。



麗子は、一週間に二度ぐらい、泊ってくる。

「社長さんが病気で、看病してきたのよ」

と、そのたびに母親にいいわけした。

かねもまた、そのたびに、

「うちの麗子は、昨夜もまた社長さんの看病をしてきたそうですよ。社長さんは、ほんとに御病身で困ります——」

と、アパートの細君に話した。相手が、笑いを殺しているのには、気がつかないのだ。かねは、酒肥りの社長を見たことはない。麗子が秘書になってから、この女ばかりの一家は、焼跡の小屋から、出ることができた。妹たちも、姉のことは、母親に黙っている。

というより、つぎの妹の妙子も、証券会社のタイピストの給料のほかに、専務から特別手当をもらっているのである。一年ほどまえから、指輪、南京虫の時計、服、と急にタンスのなかみがふえた。母親は、妙子には仲のいい友達がたくさんいて、妙子が遊びにゆくと、いつも泊っていきなさいといって放さなのだと思ひこんでいた。

この三人姉妹が、姉は酒肥り社長好みのいきな和服、つぎの妹は専務好みのすらとりした洋装、末娘は軽快な高校生服で、仲よく肩をならべて、アパートを出てゆく姿は、まるで裏通りに花が咲いたようで、道ゆく人をふり返らせた。

日曜の午前、お化粧をしていた妙子が、

「ちよっと、ちよっと、お姉さん」と呼んだ。流行の靈友会を信じている母親は、近所の信者の家へいつていた。

アパートのそばの家にとまった自動車に、紋付の母親に付添われた花嫁が乗るところだ。近所の人が見物していた。

「ふうッ……」窓から見ていた姉の口から、長い息がもれた。二人は、べたっとすわった。

「いやね、お姉さん、結婚なんて……。苦労していくようなものだわね。わたしはちの方が、よっぽど気楽でいいわねえ……」

なにか考えこんでいた姉は、鏡台に向った。

「そうね。妙ちゃんみたいにな、品物をふやす楽しみもないしね……」

「ふッふッふ、ほっほっほ……」二人は、泣き笑いに似た顔で笑った。そして二人は、同時にもう一度、いま見た花嫁姿を眼にうかべた。自動車の音が遠くなった。妙子は立って、新調のスーツの後姿を鏡台に映した。

「今夜、泊るの？」

「母さんに、うまくいってね……」

「あんた、気をつけてるでしょうね。何、使ってるの？」

クスリ？ 男の人は、酔うとよく忘れるから……。私たち、子供ができたら大変よ……」

四ツ違いの麗子は、姉らしいきつい顔でいった。妹は、ハンドバックを開けてみた。

「大丈夫。じゃ、いつてくるわ」

妙子は、廊下で揚子をくわえた丹前姿の奥村に会った。

「お出かけですか？」モゴモゴという奥村に、「お早うございます」とていねいに頭をさげると、妙子はハイヒールを鳴らして出ていった。奥村は、まわりが白くなった口をあけていたが、頭をふって洗面所へいつた。妙子が通ったあとに、外国物らしい香水の匂いが残っていた。奥村は、妙子に会うと、固くなってものがいえなくなるのだ。

洗面所では、高校生の美子が、アメリカ・ジャズ曲をハミング（鼻声）で歌いながら、洗濯をしていた。

「妙子姉さん、お出かけだね」

「どうせ、専務さんとかかへいくんでしょ」

「君、お姉さんたちの生活を、どう思う」

「どう思うって？」美子は、白痴みたいにすんだ茶色の眼で、じっと奥村を見た。

「ああいう生活……ひかげの……まだどっちも若いのに、ブルジョアの享樂の対象にされてだね……」奥村の話は、また理論的になつた。

「あらっ、おかしいわア！」高校生は、かん高い声で笑った。「享樂だなんて……お姉さんたちのあれは、ビジネス

よ。アルバイトよ。女には最も簡単にできるアルバイトよ。だれも干渉することはないわよ。奥村さん、妙子姉さんの悪口いうと、姉さんにいいつけるわよ」

「いや、その、僕はだね、ただ、君の姉さんの生活のあり方をだね、理論的に分析してみてだよ。美っちゃん、映画にいかないか……」

「ありがとう。でも、今日は先約があるからだめ」

高校生に軽くほんろうされて、奥村はすこすことひきあげた。

つぎの土曜の夜のことだ。もう十一時を廻っていた。新宿で飲んだ奥村は、ムサシノ館横の通りで、

「あ、美っちゃん！」と思わず呼びかけた。

美子が、四十ぐらいの男に腕を支えられて、ふらふら歩いていった。ひどく酔っているらしく、ベレー帽をかぶった頭が下にたれている。

「美子さん、どうしたんだー」奥村は、そばへいった。美子はうすく眼をあけると、「あら、奥村さん！」と彼の首にしがみついた。「私、酔ったわ」

「君は、なんだい」四十男がきいた。「あんたこそ、だれです？女学生に、こんなに酒を飲ませて！ぼくは、このひと同じアパートにいる者です」

「ふん、そうか。もういいや。じゃ、君、頼むぜ」男はう

すく笑うと、さっさと離れていった。

奥村は酔つてはしゃぐ美子を自動車にのせた。

「美っちゃん、君はお酒を飲むの？」

「ええ、飲むわよ。ときどき」

「さっきの人、知ってるの」

「ううん、映画館で話しかけられたの」

「あの人と飲んだの——」

「そうよ。面白かったわ。わたし、酔っちゃった」

「美子。それからどうした？」

「まあ、こわい顔！ ホテルへ行ったらわよ」

「ホテル？ 君は、君はそんなことして、なんとも思わないのか」

「わたし、お金がほしかったからよ。私生活に干渉しないでよ」

「そんなこと、姉さんたちに知れたらどうする」

「うちの姉さんたちだってやってることじゃないの。わたしが、なにをしたって、叱る権利なんかないわよ」

「ふうん……」奥村は、うなづいた。

「ねえ、奥村さん、こんど、私と遊びにいかない？ 新宿の番線グループの人たち、紹介するわよ」

「番線グループって、なんだい？」

「あら、知らないの？ 駅の何番線ってホームがあるでし

よ？ そこでいっしょになるグループよ」

「なるほど、桃色組か……こいつあ書けそうだな。いや、カストリ向きのでだめか？」

「なにをブツブツいつてるのよ。ねえ、奥村さん、あんた、妙子姉さんが好きなんでしょ？ わたしじゃだめ」

美子は、奥村の首に片手をまいた、奥村は、顔をしかめて、腕をはなした。十七の女学生の媚態が、青くさい青虫でも踏みつぶしたように不快だったのだ。

アパートの美子の室につれていった。ドアを開けた妙子をちよっと呼んで、「ぼく新宿で美子さんと会ったんですが、四十男とホテルへいったというんです。気をつけた方がいいですよ」と教えた。

「ま、美子が？ ホテルへ」

青くなった妙子は、ドアをしめた。しばらくして、姉妹の室で、女の悲鳴、どたんばたんという音がきこえたので、奥村はそっちへいった。「なんでもないんです。美子さんが財布を落して叱られてるんですよ」と顔を出した細君たちにいった。

「奥村さん！」

奥村は、妙子に手をひかれて中にはいると、ドアをしめた。

「美子が、美子が……さっきの話ほんとですか？」

美子は、髪をふり乱して、畳にうつ伏して泣いていた。

霊友会のジュズをもった母親がうろろしている。妙子は青い顔をし、うなだれた麗子は眼にハンカチをあてていた。

「美子！ もう一度云ってごらん！ あんただれのおかげで、大きくなったと思うの？ 麗子お姉さんが苦勞して働いて、あんたを大きくしたんじゃないか！——」

「何度でもいうわよ。麗子姉さんはお妾よ。あのデブ社長しゃちやうの妾よ。もつと云ってやる。妙子姉さんもお妾よ。麗子姉さんの真似をしたのよ」

「お妾だなんて、美子、口が曲るよ」

「ほんとよ、お母さん。知らないのは、お母さんだけよ」

「ほんとかい？ 麗子も、妙子も、お妾だなんて、死んだお父さんがきいたら、なんというだろうねえ。親不孝者めっ！ ああ、わたしやどうしよう」

かねはダンスの上の仏壇ぶつだんに向って、ジュズをこすりはじめた。「南無妙法蓮華經、………」と唱える声が、だんだん高くなった。奥村は、この三人の女の声を、ぼんやり聞いていた。いつの間にか、妙子がひざにすがって泣いている。奥村も、その細い肩をさすっていた。

「御先祖さま、可愛い娘を、三人ともお妾などという自墮じだ落なまねをさせて……。わたしや、貧乏した方がよっぽどよろこびます。南無妙法蓮華經………」

かねの白髪頭が、ふるえていた。

「ぼくのへやで、すこし落着きませんか？」

妙子は、涙のたまった眼でうなずいた。酔った美子は、ひろがった髪に頬をつけて、スウスウと寝息をたてている。「あんなこといっても、やっぱり子供だな……」

(六) 星は見ている

星の美しい静かな夜だった。

金山正道は、寝るまえに、アパートのなかをひとまわりし、外を見廻るのが、習慣である。

金山さんは、ひと廻りしてから、庭で、ながながと焼酎しょうちゅう臭い小用をした。アパートの上には、青空がひろがっている。窓の燈は、ほとんど消えていた。明るいののは、熊谷と奥村の窓ぐらいのものである。その奥村の窓の明りも、消えた。

その暗い窓々を眺めて、正道は思わすつぶやいた。

「さかんなるもんじやのう。人間の営みいとなみというものは。こうして、みんな生きとるのじゃ。大いに、人生を楽しむがええ」

正道は、道路に出ていった。踏切の横に、この頃店を出した焼鳥屋へいくのだ。そこの未亡人という女主人が、アパート清風荘の持主に、ひどく夢想めいそうがいいのである。

山道鏡



寸釈すえつむ花物語

陣出達朗
小島功画

雲の上の花

1

すえつむ花は、初編五百三十一句。
式編六百二十一句。参編五百九十四句。
四編五百八十五——合計式千三百三十
一句という、たくさん句から成りた
っています、そのうち、歴史的実在
人物を詠んだ句が、相当の数にのぼっ

ているのを、こころみにあげてみます
と、

弓削 道鏡
在原 業平
生島新五郎
中納言行平
小野 小町
——右の五人が、句数をかせいでお
ります。

中でも弓削道鏡を詠んだ句が圧倒的
に多いのは、まことに、われわれ男の



功

子としまして心ずよい限りでござい
ます。

道鏡にしても、業平にしても、新五
郎にしても、行平にしても——いずれ
もヤリ一筋にものをいわせ、過去の異
性を、この上もなく悦ばせた善行者で
ございまして、その時代々々の女性
に、人気投票させたならば、必ず第一
等になる、つわものばかりでございま
す。

そこへゆくと、小野小町はいけませ
ん。

彼女は穴なしとまでののしられるほ
ど、世の男性へ一顧をもあたえなかつ
た性的ドンランの罪は、川柳子の筆に
よって、コッピドクやつつけられてい
るのでございます。

まことに善行はほどこすべく、悪徳
は世に遺すべきものではないことを、
これらの句を読むうちに、しみじみと
感ずるのでございます。

なお、抜粋しました句の文字使い

は、昔の人がつたえのこしたまを書
き移すことにつとめました。テ、オハ
なども随分と妙なのがあり、あて字も
相当ありますが、それは勝手に直さず
に置きました。

それがそれで、また一つのユーモア
を生み、また、別な味を覚えさせるも
のがあるのを面白く思つたからであり
ます。

——さて、弓削道鏡ですが、道鏡の
ことは私たちは小学校時代には、日本
で一番悪い人間のように教わりました
が、道鏡はし果て、そのように悪い人
間であつたでしょうか？

悪人善人の詮さくはさておきまし
て、道鏡は、相当の傑物であつたこと
はたしかです。

彼の驕傲さは、平清盛に比すべきも
のがありますが、ある一面に於ては、
清盛以上だつたかも知れません。

彼は女帝、称徳天皇の信任をあつく
し、太政大臣禪師という、かつてなき

称号を授けられ、ついに法王の位まで
うけたので、世の人々は、彼と女帝の
間まで怪しいとさえ言い出しました。
そして、それを裏がきするような、う
がった話を、数かぎりなく製造をしま
した。

女帝は道鏡の一物の逞しくもまた素
ばらしさに、すべてのものを投げ出し
て、道鏡を愛したとさえ伝えられてい
ます。

俗に坊主MARAといひます。坊主
の一物はとても大きい——という俗説
が、その代表選手である道鏡の持ち物
を、この世に於ける最大のものとさ
え、こじつけて了ったのでした。そし
て、それをフェンして、そのような道
具を受け給う女帝のものも、さだめて
素晴らしいひろいものである——など
と下賤な考えまでおこすことになった
のでございます。

これからあげてゆきます道鏡に関す
る句を読まれる方は、右の定説をよく

胸におさめておいていただくと、ほと
んど説明の要のないほど、すらすらと
句意がのみこめるのでございます。

2

どうぞ不敬の罪はお見逃して下さ
い。句意を物語るには、どうしても、
ミカド称徳さまの私事を描かなくて
は、それが果せないのでございます。

称徳さまは、大変立派な、そして
收容力のひろいお部屋をもっていられ
ました。ミカドといえども、空ケイの
目を、来る日、去る日に持たなくては
ならぬ、という掟はございません。ミ
カドも人間でございますゆえ、そこは
それ、お部屋に伽の者を入れては、お
たのしみ遊ばしましたが、何しろ、何
十人も收容出来るほどの立派なお部屋
のことゆえ、オンリー一人のお客人で
は、頼りなくて、どうにもなりません
でした。

「世の中とはなんという味気なきもの

よ

ミカドはお欲きになられたかどうか
は存じません。が、しかし、そこへ道
鏡という、一人で十人くらいの場所を
占領する、逞しい体の所有者を迎えら
れてからは、急に、この世があかる
く、たのしいものとなったことは、申
すまでもございません。

称徳さまは、道鏡のものを味わいあ
そばしてから、心の中で、しみじみと
お思いになられました。それを句に表
現しますと、

道鏡が出るまで牛蒡を洗うやう

ということになるのでございます。
八丈敷きの部屋へ一人客ばかりを迎え
ていられた称徳さまは、道鏡という十
人相当の身軀の客を迎えられて部屋が
せまくなる思いをされてたことに相違
ございません。

で、ございますから、道鏡の一物の

巨大なを知っている人々は、

「まあ、あのような原子砲的巨砲を、平気でうけられるお方さまで……なんとという広い入れものをお持ちなのでございましょう」

と、感嘆これを久しくしたというのも、全くでございます。そこで、川柳子は、その感嘆を句にするのでございしますが、なかなか上品なうまい句でございします。

ひろい事ゆげのたつのを請け玉う

ゆげのたつほど、りゆうりゆうたる逞しいものを受け給うお方様の、その御幸福そうなお顔が見えるようでございします。もちろん、この場合のゆげは湯気のゆげですが、別に道鏡の姓の弓削をきかせているのがうまいのでございします。

実は、道鏡自身もミカドを知るまでは、世の中の女性の持っている部屋の

せまきに失望していたところなのでございしました。一説には、道鏡の持ち物が余りに巨大なので、どこへ持つていつても通用せず、この世に失望のあまり出家したのだとも言われております。それでございしますから、ミカドのひろい部屋へ客人として通された道鏡はそのお部屋のお見事にもひろいのに一驚して、あとでしみじみとした口調で、

道鏡もうき世ハ広イ物ト言イ

そんな風な述懐をしたということにございしますが、さて、道鏡はいかにしてミカドに認められ、その信任を得たかといえますと、さきにも述べましたように、道鏡は、おのれの一物の、世の中に通用せぬのを欺いて、葛城山にこもって、十人組を行つて、わずかに生き甲斐を覚えていたのでございします。十人組と申しましても、一寸お分りにくい事と思ひますから、これを

にして、五人組としましょう。五人組ならお分りと存じます。つまり五本の指……片手を使用して、目的を果すあれでございします。

しかし道鏡のは巨大だったので、両手で——つまり、十人組という次第でございします。

そういう気の毒な僧がいることをきこしめされた称徳さまは同病相憐れむのたえ、

「可愛想である。召すべし」

と仰せられ、道鏡を召されたのでございします。同じ悩みのもの同志ですから、すぐに同情と相なったのは、自然のなりゆきでございします。

をかいてる所へちよくし来る

なかなか、ずばりでございします。一物の力によつて内道場へ上ることをゆるされたのは、ケダシ昔から道鏡一人でございましょう。

へのこにて内のせうてんゆるされる

すると女帝にたいして、下々の者はこんなことを言い出しました。まったく不敬なことでございます。

女帝は九十六ひだおわします

というのでございます。これだけでは、べつだん不敬とも思われませんが、その句意を知れば、矢張りいけません。別の句に、

四十八ひだとはよくぞ数えたり

と、いうのがございます。女性の部屋
の入口にかかっている、ハワイ帰りの胸のレイのようなあの飾りは、四十八ひだあるという話です、がよくぞ数えたものです。もっとも、別説には、これは表門の飾りではなく、うしろ門

のひだの数だというのもありますが、矢張りこれは表門の飾りの数でございます。ましよう。

四十八ひだというのは、普通一般の女の部屋かざりの標準数なのですが、女帝のは道鏡を迎えられるほどの立派なひろいお部屋ゆえ、おそらくその倍の九十六ひだはあるだろう——と、まことに下賤なヤツガレ達は、しょうのないことを想像申しあげるものでございます。

氏よりも道鏡ハへのこのそだち

氏よりそだちと申しますが、全く道鏡は、へのこ育ちといったほうが適当でございます。ましよう。

で、ございますから、道鏡の己れのものの大きなのを鼻にかけるの余り、殿中でも、公卿衆を見ると、頭から馬鹿にしてうのでございます。

道鏡の眼からみれば、公卿たちの持

っている品物など哀れ小さなものにか見えなかったのに違いありません。

めらと公卿をてうらうす

なんだ、お前らはへのこと申せないぞ。ちつぽけだろう——と、公卿を嘲弄している道鏡の凛々たる風姿が見えるようです。

このありそうには公卿衆見えぬ也

これも、前句と同じ意で、道鏡にとつては、公卿衆が十人揃ってかかって来られても、びくともしないだけの自信があつて、大勢の公卿衆をなめ切っているのでございます。

原子砲水爆をもつてゐる強大国が、戦力なき軍隊を、騒いでゐる国を嘲つて、馬鹿にしている図に、よく似てゐるでは、ございませんか。

道鏡は、公卿衆を小馬鹿にするばかり

りではなく、官女^{かんによ}たちをも馬鹿にし
ました。ミカドのお部屋へ自由に出入り
出来る彼は、間口^{まぐち}のせまい一丈敷きし
か持っていない官女^{かんによ}たちを見ると、哀

れさげすむ風をみせて、

めゝつてうめらと官女^{かんによ}をてうろうす

——のでした、お前らのものは一人
前ではないぞ。めめっちやうだ。子供
のだ——と、道鏡が大勢の官女を、夕
巴^{ゆうば}にして嘲奔^{ちやうほん}している様子は、さすが



に遅しいものがございます。

こうなりますと、道鏡の驕りは、日に日にすさまじくなりまして、彼は御所の往復には、まるで江戸時代の大名のよう、往來の人々を土下座させたようでございます。

らく中を下に下にと大へのこ

まさか、大きなへのこを祇園祭の山鉾のようにオツ立てて、洛中を行列くんであるいたわけではないし、この光景を川柳子が「道鏡が——」とかかずに、大へのこが通行すると描いたのは妙を得て微笑をおぼえるではありませんか。

さて、道鏡の権勢が日々さかんになつて参ってまいりますと、それにヘツライの心を示すものも現われてくるのも、人情の世界では珍らしい事ではありません。

服食一に供御に准じ大小の政ことと

とくその手に決し、一族の男女の五位以上に叙する者十人に及んだと申しますから、まさに、清盛ならぬ——「へのこ族にあらざれば人にあらず」の威勢振りでございます。

ここにこそ、人には魔がつきございます。即ち九州太宰府宜阿曾鷹が、宇佐八幡の神

を号し、道鏡をして皇位につかしたのか、天下太平ならんと、道鏡に呼びてきたのでございます。まことに、とんでもない宇佐八幡な申出でございませう。道鏡は得たりと、それに応じて、ミカの位まで乗つとろうと計りました。そこで、延では和氣清鷹を九州に派遣して、和意をたしかめさせました。清鷹は覚悟して九州に赴き、かんなんしんくの式でここへ帰り、袴着のこ

「道鏡を除くべし、ど大人のモ平ならん」と考えた。と、宇佐八幡の神勅をモアを舞まし

た。これも恐らく宇佐八幡の報告に違ひありません。

こういうウソ倶楽部合戦を、川柳子は、矢張り男子の一物にくつつけて詠っているのは——いつの場合にても男子の根本精神を忘れない態度として賞揚すべきでございます。

私氣の清鷹ハへのことたてをつき

清鷹は、最後に於て、かろうじて勝ちましたが、土俵上に於ける、その取りくみっぷりは、さぞかし哀れにも貧弱であったことと思います。そういう姿を、

清丸ハしこく小イサなへのこ也

と川柳子はひやかしています。清丸とは清鷹のことであるのはいうまでもありません。一体にむかしの人は、文宇や言葉などに、あまり神経質では

なかつたらしい。清鷹とかくのも、清丸とかくのも、意味が通じさえすれば、それでよしとしていた態度は、のんびりとしていて、いいものでございます。

太閤秀吉が、山科の醍醐で茶会をひらくとき、その召集状を祐筆にかかせました。すると祐筆は醍醐という字を度忘れして、かたわらの人にききますとかたわらの人も思い出せないのです。「たしか後醍醐天皇の醍醐だと思いが」

と、答え、ああでもない、こでもないかとやつていますと、秀吉が筆を置かずして、
「えい、判らなければ、こうかけ」と、いって、筆をとつて、
——大五。

と、大書して、これでよい、といったそうでございます。大五でも意味は通じます。「山科の大五」と読めば、ハハン山科の醍醐のことだなと思いま

す。秀吉はえらかつたので

右の川柳にもあるよ

しごく小イサなへの

は、今の人には変に

けは不要です。それを、

と書いた処に、この句の生命がござい

ます。

小さなことを強調する意味で、この

不要のイサがよくきいて、微笑を覚

るのでございます。

われわれは、先人の残していった文

字のあやまりを、かるがるしく訂正し

てはいけません。

あやまりを、あやまりとするの

は、なぜこうあやまりつたえ

ていふことを考えてみるところに、古

い書物にたいするものが、

後人の礼儀でもあろうというもので

ございます。



ます。

育丸は

イサ

イサだ

と小イサ

と書いた処に、この句の生命がござい

ます。

小さなことを強調する意味で、この

不要のイサがよくきいて、微笑を覚

るのでございます。

われわれは、先人の残していった文

字のあやまりを、かるがるしく訂正し

てはいけません。

あやまりを、あやまりとするの

は、なぜこうあやまりつたえ

ていふことを考えてみるところに、古

い書物にたいするものが、

後人の礼儀でもあろうというもので

ございます。

でございました。

4

道鏡は、即ち怒つて、大隅の国へ清鷹を流してしました。しかし、皇位は万世一系にたもたれる事が出来て、まずまず、

すての事へのこの御宇成る所

と、朝野一同は、胸を撫でおろしたことでございましょう。やがて、間もなくミカド崩じ給い、道鏡は下野国薬師寺の別当に貶せられ、さしもの大へのこの法師もここにホコをおさめざるを得なかつたのでございますが——後世の俗史家は、かの百人一首の猿丸大夫こそ、道鏡の変れるのちの姿である、と、まことしやかに伝えたものもございましたから、

百人一首でかいへのこも壹本有

という秀句が生れるゆえんとなったのでございます。

道鏡が、このようにして、一代の巨物をもっていましたから、世人は、道鏡の母のことまでに考えを及ぼし、あれほどの巨大物をもっている子供を生んだ母は、並々ならぬ大部屋の持ちぬしであろうと思つたのも、理由なきことではございません、それで、道鏡の母が死ぬと、世の人々は、彼の母へ馬にチナンダ号を奉りました。すなわち

弓削の母馬の内侍とおくり号

これなど、なかなかシヤレタ句でございます。ちよいとしたフランス・コメントの最後の結びにしたいほどの秀句ではありませんか。また一説には、この馬の内侍——いや、道鏡の母は、子がほしく、三七——二十一神仙に念じ、その満願の日に

天王馬のむと見て僧を得る

となつたのだとも伝えられています。天王馬を呑んだ夢をみて、あの巨大物をもつた子を生んだ母は、さぞかし満足であつたことと推察するのでございます。

で、ございますから、大人の道鏡の一物は馬のものであるとし、道鏡が普通一般男性のもち物程度のサイズをしていたのは、おそらく、道鏡の子供のころであろう——などとうがった憶測をする者も現われるのでございます。

袴着のころが道鏡へのこ也

袴着と申しますのは、男子五才の時に祝うゲンシユクなる。さういふ。さういふ、道鏡のモノがちやう。と同一の、じ太きさであつたらう。吾の人は、なかなかもつてユー。併して

いた、すぐれた連中だつたのでございます。

袴着の式を、これから始めようとし、子供の道鏡に袴をつけさせていた、彼の母なり、また乳人などが、五才の道鏡のモノを見て、どんな気持ちであつたことでしょう。さぞや、その見事さに驚いたこととございましょう。

宝龜三年四月二十八日、道鏡は配所に於て（その光輝ある）生涯を閉じました。龜の頭に似たその宝物を土にうずめるとき、立ち会つた男や女たちは、それぞれタメ息をもらして、それを埋めることに、惜しさを感じたことは、推量するまでもございせん。宝龜三年という、そういう年号に死んだというのも、何かの因縁でございましょう。

道鏡のつかから出たかさまつたけ



どこまでも、川柳子は道鏡の一物を追っかけます。かさ松茸の大きなのが道鏡塚からニューウツと生え出たとしたなら、その光景は、ケダシ見事なものであつたに違いありません。

江戸時代には、もつばら道鏡のモノが、この道の対照となりまして、張形などでも、超特大のサイズのものを、ゆげ形と申しました。

小間物屋が、大奥なソへ、小間物をかついでゆきまして、張形、とは申さず、ゆげ形と申したのは、ゆかし陰語ではございませんか。それを使用する女達も、弓削形だというと、なんとなく道鏡のものを頂戴におよんでいるような気分にはたれますし、羽化登仙の境にでもいたれば、みずからがミカドにでもなった錯覚におちいらなことも限りませんので、ゆげ形はなかなかさかんに売れたものでございます。

ゆげ形はきらしましたと小間物屋

なかなか商売のうまさを想像出来る句でございます。

このようにして、でっかいことを、弓削道鏡の如し、という事になって来ますと、いろんなシヤレにも、道鏡が引き合いに出されて参ります。

弓削の道鏡参内イと市の客

道鏡がミカドの御もとへ参内した時の光景ではございません。これは年の市で縁起棚の大きな飾り物を買った客が、その足で登樓する光景ですが、客は、デッカイ飾り物を道鏡の一物にみたてて、「道鏡参内イ……」と、しやれたのでございます。なかなか乙な句でございます。

ところが、こういうシヤレのある客に限って、その持ち物は貧弱なもので、遊女と一緒に寝て、

「あれ、ぬしさんのもの、子供みたいではありませんかえ」

と、さっき、道鏡参内イとやつたのを皮肉られると、件の客は、

「なにさ、これでもテクニクでもって、おめえなんぞ泣かしてみせる」などと、強がりを言って、途中で運動を中止し、鞘から抜いてみせ、次のようにシヤレルのでございます。

どうきやうでなくてもぬけバゆげがたつ

客はかろうじて、女に理くつで勝つというわけでございますが、まことに哀れかなしき次第でございます。

すえつむ花の中に点在している道鏡に関する句は、以上のものでございますが——これを、靜かに按じてみまするに、これを詠んだ人たちは、道鏡の一物の偉大さに多少の羨望の念をもっているということは、隠すことが出来

ない事実と思ひます。道鏡を皮肉っているようで、実は、内心大變に妬いている心の姿がよく見えて、とても面白いのでございます。

誰しも、心の中では、「せめて道鏡の半分くらいはの逞しいものが我が身にあれば……」

なことと思うのは人情。道鏡の文字こそ、イムボの男の子の、マスコットとして、肌身はなさずにいるのも亦、なにかの御利益をうるものと私考する次第にございます。

誰か「弓削教」という新教をトナえて、世の貧弱男子の帰依をあまた得んとするどきようのある御仁の出でざるや？ 筆者のごときは、それを待つことと弓弦の矢のごとし——と、最後に音を吐くのでございます。

草村に咲く花

1

道鏡をかけば、当然つぎには、業平、生島、行平——と、この連中を引き出さなくてはならぬのでございますが、余り紙数ありませんので、右の諸君には、来月出演という事にしてもらって、あとの残りすくないスペースで、落穂ひろいをしてみたいと思います。すえつむ花の中に、キンキン一票か二票くらいしか稼いでいない歴史上の人物で、なかなか面目をほどこしている人達がたくさんいるのです。

武内宿弥は、長生きをした人物としては古今に最たるものでございましょう。彼に対する逸話も、かなりあります。世人は応神天皇の御母君の神宮皇后と、宿弥と何かがあったようにも言っていますが、あれはウソの事でございします。なぜなら、武内宿弥は、ある日、しみじみとした顔つきをして、

二百年このかたせぬとすくねいひ

二百年もシナかった宿弥の道心堅固さは、まことに立派なものでございします。それを、神宮皇后とどうのこうのと、けしからぬおくそくを奉るのは、まことにいけないことでございします。

これもたった一句でございしますが、衣通姫の句は、優秀でございします。衣通姫は允恭天皇の妃で、名は弟姫と申しましたが、容姿絶美、肌の色が衣を透すほどでありましたから衣通郎姫と呼ばれたのでございします。つまり衣通姫とは、弟姫のペンネームなのでございします。

皇后さまが、大変にお妬きになつて、家庭争議をたびたびおこし、天皇はそのために、衣通姫を河内の茅渟にうつして、そこに住まわしめ給うたがあります。

いんぎやうていは入れる也

説明申し上げるだけ野暮でござい

す。衣通姫ほどの美肌のもちぬしだけに、しもをあらわすという言葉が、ひじょうに効くではございせんか。まるでジャン・コクトウの短詩をよんでいるような、心うるわしくなる句でございします。この句の作者のごとく、川柳子の上を敬するの念のあつき、その例のすくないのを、しみじみと思うのでございします。

弘法大師も一句うたわれております。大師は空海としてあまりに有名であり、能筆家として、日本三筆の一人であることは、三才の童児も知つてゐる処でございします。

空海は唐へ渡り、大食国とかで、五本の筆を一ぺんにつかつて、文字をかいてみせ、さしもの文字の国民も、その達者さに一驚したとつたえられております。

すなわち、口、両手、両足に筆をはさんで、ワン・ツウ・スリーで、一挙にかいたのでございします。ところが、

川柳子は、空海に、もう一本の筆をもつことを望んだわけで、

くうかいへのこ斗が無筆なり

とやりました。空海がきいたら「しまった。アレも一本くくりつけて書くのだつた」と、あとのまつりのホゾをかんだこととでございましょう。川柳の面白さは、こういう隙を美事に斬り込むところにあるようでございます。

空海のひらいた高野山にゆかりのある句を一つ御披露いたします。刈萱道心はもと九州の太守、加藤左エ門尉ですが、その本妻と妾が、表面はなごやかに見せていましたが、一たび胸の中を割れば、互いにシットの炎をもやしていたのでございます。

あるとき、つれづれなるままに、二人は双六かなんかをやりました。が、盤上の争い以上に、二人の心の中の炎がもえ、それが、ついに蛇心となって

黒髪にうつり、黒髪が蛇の形となつて、互に宙で争っているのを左エ門尉が障子にうつる影によつてそれを知り「ああ、悪いことをした。罪ほろぼしに出家せむ」

と、高野山へはいつて刈萱となつて了つたのでございます。もとはといえ、二人の女性が男子の一物を争つた――までの事でございます。

への子あらし黒髪が蛇に成り

まことに、へのことという一物は、罪なものでございます。

さて、高野山にチナンだついでに、もう一つ山にチナミましょう。

させようがわるいと童子酒にクミ

これは大江山の酒天童子を詠つたものでございます。

酒天童子は、女を山へさらつて来

て、気に喰わない女は殺して裂き、そしてその血を酒に汲んでのんだのでございます。

それで、さらわれて来た女が、童子の意に従わなかつたりすると、すぐに酒にしてのんで了う――まことに、身の毛のよだつ、すさまじい光景ではございませんか。

その大江山の鬼退治で名を売つた、渡辺綱のシンセキの渡辺渡。その渡の妻が袈裟御前。その袈裟に横レンボしたのが遠藤盛遠――のちの文覚上人。

盛遠が袈裟に惚れて、積極的に出たことは、ついに渡辺渡の首を斬つて了つたのに徴してみても判ることでございます。

おばが聞イているに遠藤させろなり

あんまり上品な句ではございませぬ。しかし、いかにも荒武者、遠藤武者盛遠らしい攻勢振りだと、この句に

は好意ある笑いをもちよさないわけにはいかないのでございます。

歌聖、紀貫之も、川柳という、失礼なゲイジュツ使いにかかると、さつぱり威厳がございません。

むしかへしをする名也きのつらゆき

紀の貫之——を、気の速ら行きとかけて、二度も三度もオルガスムスになるような名前だと言っているのは、歌聖の名譽のためにとらない処のものであります。

和泉式部も亦、このご難にあつて一人であります。

たんと出しそうな名いつミ式部也

いつみ式部は、いづみ式部の手落ちであります。その奥からいづみの如く湧き出するもののあるのを感じる名である——と川柳子はノドを鳴らしていますが、王朝の才媛が、それほどの水

量をたくさん蔵していたか、これは疑問でございます。そうじて、才媛とか美などというものは、情にうすいものでございます。小野小町、九条武子など、その好例と申さなくてはなりません。

名前を詠んだもので秀句は、静御前の母、磯前司の、

よくきけはいそのぜんじにへのこな

があります。磯前司というから、男かと思つたら、静の母だったのか——と、呆れているさまを男的証拠なし、とやつたところに妙味があるのでございます。

すえつむ花は、われわれにいろいろの歴史的うら話を教えてくれますので、大変タメになる教育の書でございます。

道鏡の出世街道は、ひとすちに男性の一物につながっているようでございます。こういう荒々しい世ともなれ

ば、男といえども、生きてゆくのに、並々ならぬ苦心が必要でございます。腕、智能、そんなものに物をいわせて出世するよりも、道鏡の如く、ヤリ一筋で立身するのも、一つの方角かと存じます。

近ごろの学生に、大学を卒業するとすぐに、

「どこか、よき養子の口がありませんか」

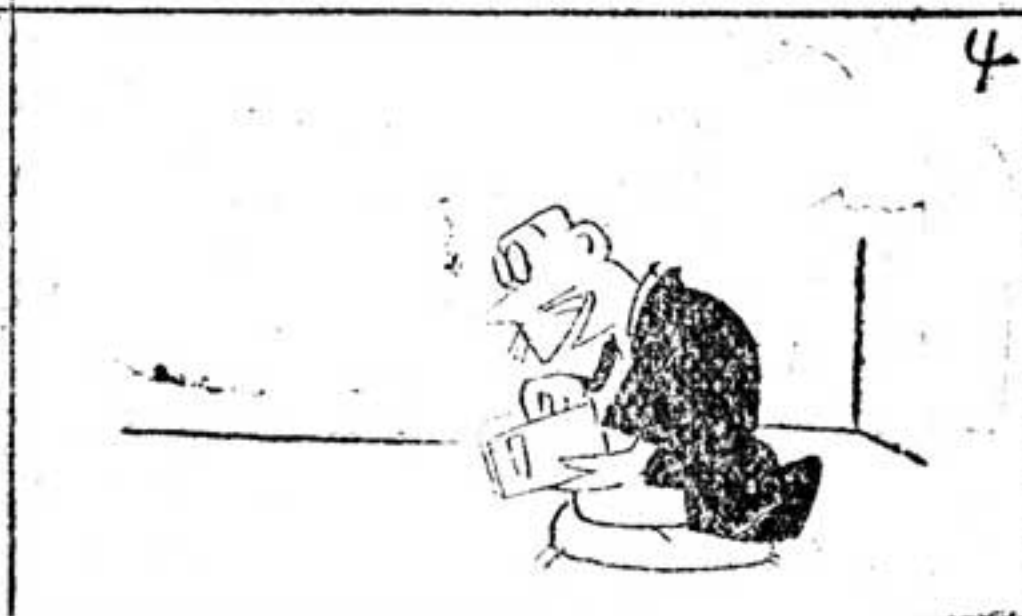
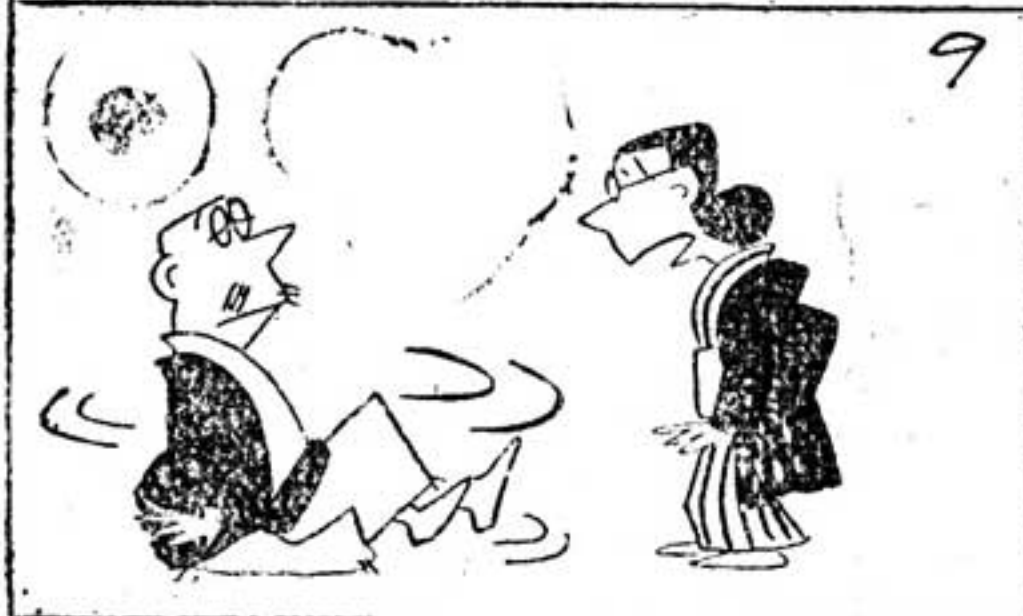
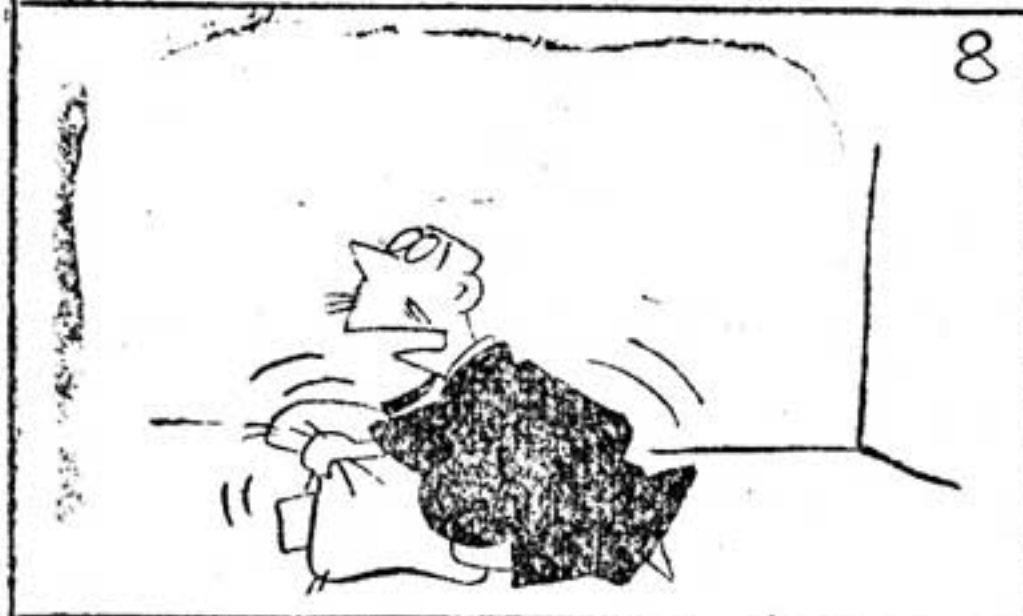
と探すのが多くなつたと申します。これなどサラリーマンで苦勞するより家つき、大金つきの娘のところへ、卒業証書一枚もつてゆき、あとはヤリ一筋に生きたほうが、手つ取早いという、道鏡的精神のあらわれなのかも知れません。

——くり返して讃美します。道鏡はいいですね。日本一の幸福者は誰かと問われたら、私は道鏡なりと、そくさに答えるであります。

写真家



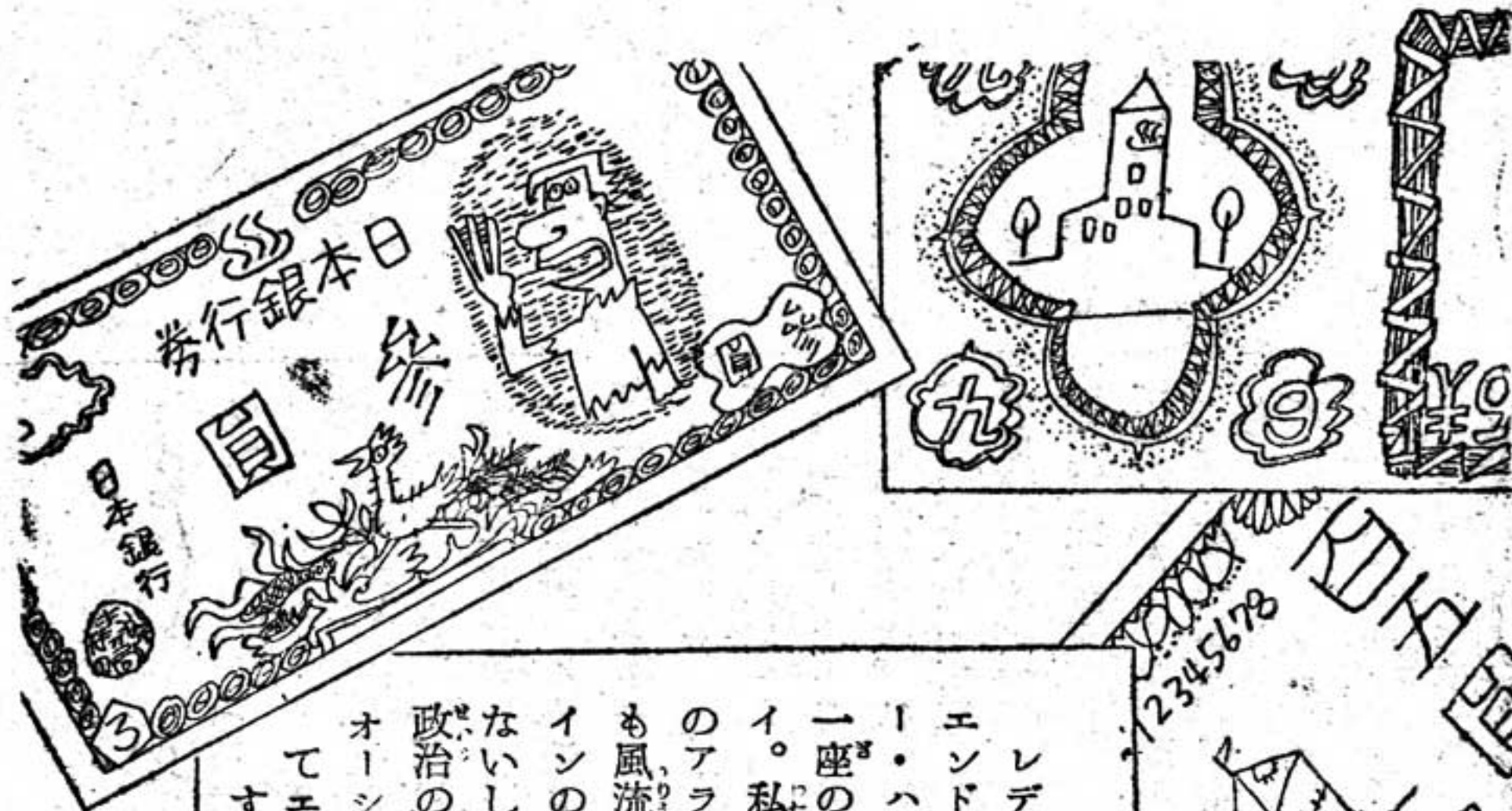
取りかかると



拾銭

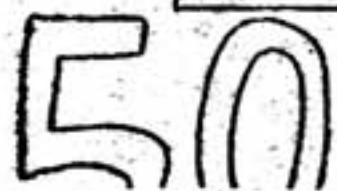
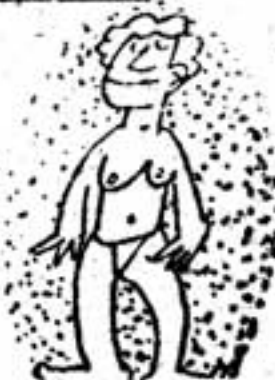
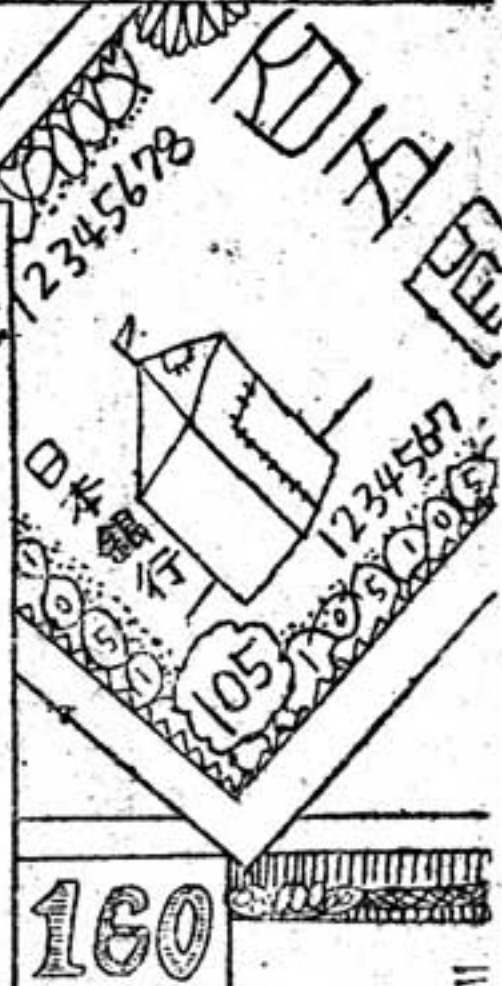
56

本讀流風用実



卷頭言

レデイス・エンド・シエントルメン・
エンド・おとつあん、おっかさん、ハロ
ー・ハウ・ドウドウ・でやんす。さても
一座の野呂共よ、アラ失礼キューズ・ミ
イ。私のアイがつらつら、おもんばかり
のアラエッサと考えるさんすが、そもそ
も風流とはでやんす。雲がかすみか、レ
インの雨をてな、もんじや生きてゆかれ
ないし、役にたたないさんすヨ。つまり
政治の貧困でやんすネ。でさんすから、
オーシャン太平洋のあちらでも通用する
てエ風流読本がオンリワンのこれさん
すドウ・ユウ・アンドスタン



男性篇

男は生殖器をもっている



イイワケの

仕方について

夜おそく帰った時、又朝帰りの時、キミは決して女房をおそれてはいけない。「女房なんかこわくない」と言う童謡まで出来ている現代である。きみは決してあわてず、「今日は会社で一番キレイな女房をもっている奴の人民投票があつてボクが一番になっちゃったんだよ」とか「帰りに皆んなと一緒に帰ってきたら、むこうからキミの奥さんが来るぢやないか、と言うんだ。そうしてすれちがったらそれが原節子だったんだよ。うれしくなっちゃってね飲んぢやったよ」とやるのである。



五圓玉二つて

口説く方法

先づ穴のあいた五圓玉と穴のない五圓玉を一つづつ用意して彼女の前に現われるのである。そうして手品の口上よろしく口説くのである。「とりいだしましたる穴のない五圓玉。ヤキイモ屋へもっていきましても紙芝居屋へもっていきましても五圓は五圓でございます。さーてさて、こちらにとりいだししたる穴のあいてる五圓玉。夕刊賣りに見せたつてクツミガキ屋に見せたつて五圓にや間違いありやせん。

そこで調子をかえ

てささやく様に「ねえ。そうでしょう？ そうなんですよ。穴があいていたって穴があいてなくなつて五圓玉は五圓玉 ☆ て便利なんですよ。きみ。そうでしょう？ ねえ。てな具合である。種もしかけもない手品でアル。



☆ で、決して価値なんかさがりやしないですよ。かえって穴のあいてたほうが、耳にはさんだ時よく聞こえ



クドキ文

句について



口説き文句は今古東西、いろ／＼な粹人が粹をこらしたのであるが、あまりシヤレてはいけない。「ボクはアナタと一緒に朝ゴハンが食べたいのです」なんて言つたたん、「あらーん。そんなに早く起きるの？ お晝頃まで寝ていたいワ」てな具合にテイよく断わられるからである。
ユメ。シヤレル。ベカラズ。

取引きついで



あなたが恋人とホテルへ行ってそつと、彼女に知られない様にお値段の交渉をするとき、又街角でヒソヒソと今宵かぎりのお値段の交渉をするとき「なにこれだけ？」とか言つて五本の指でチョキを出したりパーを出したりする。そんなときにペンリなのが、六本指や七本指の手袋である。交渉は片手でスムーズにゆくわけである。「六本も七本もあったら不便だ」なんてヤバナことを聞くのはヤメたまえ。あまつたところへは薬でもお金でもなんでもいれておけるではないか。



いろ／＼なホルモン料理をあさりはじめるが、たいがいのは、バカバカしいくらいインチキなのである。

「バナナの丸のみはきくね」

「人蔘のなまがいいよ」

「マツタケの丸焼きがいいね」

どれをみても「立つている」か「立つ」の聯想からきている子供だましである。

そんなものにお

金をつかうなら、

いっそのこと電信

柱かポストでも食

べたほうがお得で

ある。

それなら少々 ☆

と思うのでアル。

BANANA



☆ 胃をこわすぐらいで安あがりによくと言うものである。

昔から「立つてるものは親でもつかえ」とか言うのだ。

何かこの辺の事情を物語っているのではないか



ホルモン料理

について

人間も五〇の坂を越える

とアレのほうがめつきりお

とろえはじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

はじめる。そうして

夜這いの成功法

ギリシヤの哲人ソノヒグラ氏が「夜這いの味を知らずして人生を語る勿れ」と言ったのは、あまり有名ではないが、なにしろ一度は経験して置かなければ人生を語れないのが、この夜這いです。

その成功法は彼女の部屋にしのびこんだら絶対に口をきいてはいけないことです。「沈黙は金なり」と言うわけです。

そうして彼女がいくらさわいでも、あなたは「そうですか。だめですか。さようなら。おやすみなさい」

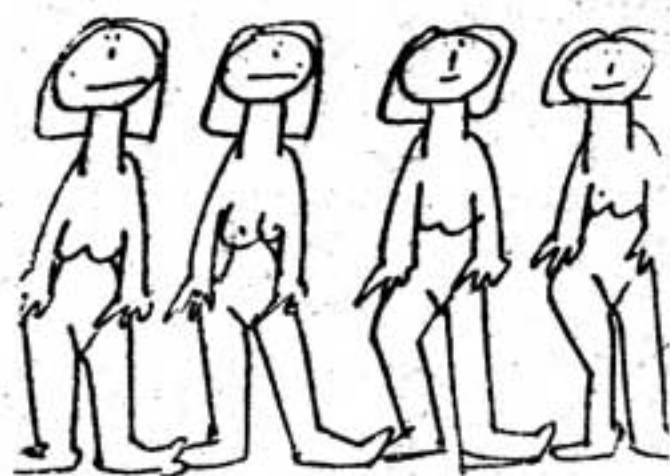
なんて帰っちゃだめです。

あなたは手をついて彼女の前で無言の行をやるのです。

何時間でもがんばるのです。
やさしく言えば要するに押し賣

りのコツです。

でありますからあなたの奥さんがいつも押し賣りの品物を買わされていたら、あなたの留守中、夜這いの可能性があるわけです。



先ずホメルベキこと

「キミの眼は宝石だ」

「キミの耳は探偵だ」……

……

なにしろ女は

ほめられるのが

大好きである。

「あなたの ☆

このくらい正体なく喜ぶものである。

オソロシキモノデアル。



☆ 鼻はクレオパトラの様だ。

あなたの鼻が、あと二寸（誤植に

あらず）ひくかったら世界の歴史

は変つてしまつてなことを言つた

ら彼女。感謝のあまり早速ペチャ

ンコに整形？ してきたと言う。

男のアクセサリ

60才!!
20年!!

時計や万年筆はいいものをもつべきです。

さりげなく見えるものにお金を

つかうのが、ほんとうの風流紳士

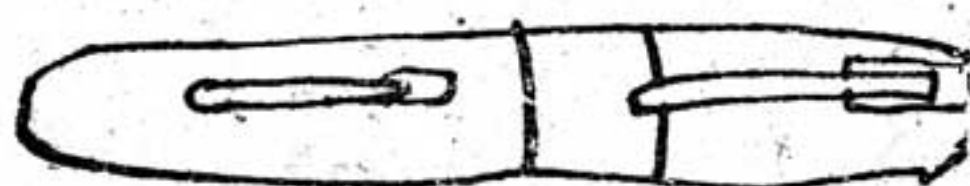
と言うものです。

それに外国製のパーカーは（日

本製もありますからな）二〇年間もちます。

だから今すでに六〇才の方は買って損だと思ひます

お気のどくながら安物を買うべきです。



女性篇



生殖器官は
女をもっている

総論

男とは、煮ても焼いても喰えるものです。
男とは、女性が神より給わりたるお手玉なのです。

しかし上手にお手玉遊びをするには、すべからく、コツがあるのです。つまり、鞭の一振り、ライオンに命令できるコツのようなものです。いかに有利に、いかに快適に、肉を斬らせて骨を断るべきでしょうか——ここからさきは、女性のための実用記事なんです。とにかく読んでチヨウダイナ。



敵を知り己れを知れば

百戦危うからず

1、男とは裸を見ればニタニタするものなり。

☆女とは自然の素晴らしい失策である。

2、男とは鼻の下の伸縮する動物なり。

☆女とは十才で天使、十五才で聖者、四十才で悪魔、八十才で魔女となる。

2、男とは、女をケイベツしながら、女にうつつを抜かしてしまふものなり。

☆女とは、どんなに愚かな女でも、賢明な☆



☆男をもあやつることができるものである



溜息は深くつくこと

悩ましい眼差し、そして、深い溜息！
それだけで、男は、「この女はにやりとして、「俺に夢中になつてゐる」溜息の深淺度が、男の惑乱の

度合となるのである。女性よ！
タメ息は深くつけ。で、その方法は洗面器に水を満して顔をつけ、苦しくなつて、顔をあげれば、実にチャーミングな。

溜息を出せるようになる。ユメ！
溜息の練習をおこたるなかれである。

ヤレヤレフツツ。



○は女の武器である

「オイ、お前、今日誰と歩いてゐた」

「あら歩いてやしない」

「ペカ！ 俺がこの目で見たんだ」

「歩いてないワ、ゼッタイ！ ゼッタイ

ヨ」

この位、ハッキリ、ネタが割れてても、白々しく嘘をつき通すこと。「そんなこと、嘘！ 嘘ヨ、あたしの彼女はあなただけ！」これで男はぐんなり、トロツとするものである。

「すみません」とあやまるとつけあがる。あくまで嘘をつき放せばあなたの勝であるこれはずっとたいホントである。ネ！ホントだヨ。

男がふりむくウイंक

男の後方から、ウイंकを送って、ハッと男がふりむくほど物凄いういんくは如何です。

ちよッと好い男だ

と思つたら、やりす

ごして、たちどまり

ギョッと片眼をつむ

る。

と同時に、バ ☆



☆ チンと両手を叩くのです。

大体の男なら、ハッ

として、振りむくか

ら、不思議なもんで

す。



燕（ツバメ）の飼い方

若き燕、これは、私の大好きな言葉だ。若の者

アコガレである。（昔は櫻に鑑イ……）ところで

ここには、飼い方、あれこれでなく、一つの実例

によつて、その範としようと思う。推察を乞う次

第である。

四十二才のマダムオバチャンが、二十四才のツバメを飼えて。まづこう云った。

「あたしと八年間、つき合つてヨ。八年すれば、あたしの機械はメになる。あなた

は、その八年、なんの生活の心配も

しなくていいの、

そして、好きな絵

を勉強しなさい。

八年かかれば ☆

しを満足させてヨ」いろいろ指折って御計算の向きもあるが、奥に

適切、合理的なツバメの飼い方

では、ありませんかである。



☆ なんとか、一
應、世に出られる
でしょう。そのと
きあたしが、いい
お嫁さんを世話し
てあげるからネ、
それまでは、あた





殺し文句のコツ

それは、クリスマスのパーティでも、どこでもいいが。

たまたま、君の胸に差した一ツのバラの輪花を、一夜の思い出に所望する青年があるとする。

君は手ずから、このバラの花を與えちゃあやボになる。つまりエンゼンと笑ってこられるのだ。

「御自分でおとり遊せ」
なかなか意味シンである。全てこの要領が殺し文句となるのである。



マリリン・モンロウの歩き方

男を悩殺する、モンロウの歩き方は勉強しておいても損はない。ところでそのコツはである。

つまり、両手を買物を一杯抱へて、押し合いへし合いの電車に乗りこみ、僅かな座席の間隙に割込む要領――

つまりお尻で左右に押しする運動を、連続すれば、マリリン・モンロー位の魅力を発揮することは、いと、雑作なきことでありつる。

暴力女給のために

最近、嫌な噂を立てられて、お困りでしよう。

そうでもしなければやつてゆけない、生活の辛さをお察し致します。ここで一番揃えやすい男性を御紹介しましょう。

従来まで、狙った男は、鼻の頭のテラテラした四十五十のおやじか、ベリッとした青年紳士でしたがもう、あなたの手に負えなくなつて、しまいました。

それは、あなたが磨きを、かけたようなもんです。



☆ 金吉、木念仁
といった。おとなしい青壯年に、ムダだと思つて声をかけて御覧なさい
実はこいつが、カ
ンタンについてく
るのです少々ばか

り御生大事に持つてゐるんです。

そして前者の連中のように腕にヨリをかけなくて、まるでハナウタ調子で、樂々と、まきあげることができなのです。

まあ、だまされたつもりで、当つて御覧なさい。不思議にピタリと当ります。

買物のコツ

勿論、玉ネギの買い方じやない。彼とデパートの閉店十分前に駆けつけるのである。

「困った時間がないワ。あたし、こっちでクリーム買って来るから、あの向うの三段目の赤い帽子と隣の靴賣場で九丈七分の黒のパンツ買ってよ」忙しいのである。

彼氏大いに、あわてて、立替へて買物をすませて、

「はいこれ」と渡すと閉店のベルである。「いけない、早くでましよう」外へでる。「おかげで助かったワ。じゃ、あたしお友だち、待ってるから、失礼するワ、サヨナラ」

これだけでよろしい。

おわかりかな。

女とゆうものがなかつたら男は野郎で、粗暴で孤獨なものとなるであらう。そして彼は愛の微笑だけにしかない優雅を知らなかつたであらう。
女は男のまわりに人生の花を飾る。あたかも桜の樹の幹に匂い高い花紐をまきつける森の薫のように。
(シヤトウプリアン)



體位はいろいろある

さて生々しい課題に入ってきた。

ま。ゴクリと、その唾をのんでください。

つまり、体位は、各々の個性を発揮し欠点をかくす形にとらなければいけない。

1、つまり、お顔の美しい人なら、背中を下にした姿勢がよい。

豊富な弾力のある腰が魅力なら、それを彼の眼前にクローズアップすべきである。

2、牡鹿のようにすんなり伸び☆げてはいかがでしよう。

びた脚なら、彼の肩にかけ

5、両腿と双つの乳房が

若さに、はちきれてゐるなら、背を反らして、のけぞってごらんなさい。

4、あな

たが小柄

7、お腹にシワが寄っ

なら、乗馬

たときは……背中を見せ

5、大柄なら、両膝、両

ヒシをついて、心持ち頭をかし☆

るんですな。





☆値段が上がる話☆

○アラの神の恵ゆたかな、平安の都バグダッドに、むかし、一人の富裕な商人が住んでいました。老妻と一人息子のマブーバと、親子三人みずいらすの、なに不自由ないくらしでしたが——ただ一つ、莫大な富の力にも思いにまかせないものがあつた。

それは——息子のマブーバが、商賣にばかり熱心で、年頃になつても、いっこうに嫁女を欲しがらないことでありました。降る星のような縁談に、耳を傾けようともしない。



○そこで、ある日——商人の夫妻は、マブーバを呼んで尋ねました。
「マブーバや、身体からだの工合はどうかね」
「毎日ごらんの通り変りございせんが——」
「いや、それには、わけがある——身体が丈夫でなくては、つとまらぬ用向きをお前に頼まねばならぬのぢや」
「そういつて、父親は、マブーバの若く逞ましい肉体を、まぶしそうに眺めるのでした。
「その御用を、おいいつけ下さい」と、商賣熱心な若者は、身を乗り出しました。



○「外でもないが——」と父親がつづけた「クレーファの町まで、反物を賣りに行つて来てもらいたいのぢや」
「お安い御用ですよ」と若者は答えました。
「いや、お安くはいけない——最高の値段でなくては、困るのだ」
「商品は、何でしようか」
「絹が、七反ばかりある」
「最高で、さよう、金五千枚がいいところですね」と、息子は胸算用をして申しました。
「いや、安すぎる」と父親がいいました。
「どうしても、浮氣一本でなくっちゃ」



○「浮気一本——ですって」と、若者は老父の顔を見上げました。聞いたことのない値段だったからです。すると母親が、息子の不思議そうな顔をみて、口ぞえをしました。

「それにね。お前。ユダヤ人や商人や、お婆さんでは、いけませんよ——なんといっても娘さんでなくつちや……」

「生娘が、一番、高價だからな——さあ、では、さっそく、出かけて呉れ」

うむをいわさず、若者は、旅の仕度させられました。そして、その日のうちに、クラーの町をさして出発させられました。



○クラーは、ユタフラタスの西岸に臨んだ美しい町でした。市場には、沢山の商人が群れていました。一人のユダヤ人が近づいて

「旦那。なにを、お売りですかね」とたずねました。マブーバは肩をすくめて

「なんでも、ないんだ」と答えました。次には商人が来ました。

「何ですかね。御商賣は——」

「いや、なんでもないんです」

——すると、そこへ一人の美しい娘が通りかかりました。そして、マブーバの若く美しい姿に魅せられたように近づいて来ました



○「なにを、お持ちですの」と、娘はマブーバに尋ねました。

「上等の絹です」とマブーバは答えました。

「どのくらい、ございますの」

「七反です」

「それで、いかほどですの」

「浮気一本です」と若者はいいました。

「あら、まあ——でも、もう少し、お安くありませんかしら」と、娘は、聞いたことのない値段に、びっくりして訊ねました。

「いや、これが、ギリギリの値段です——浮気一本で、これを全部さしあげます」



○美しい娘は、美しい若ものの顔を、戸まどうたように、眺めていましたが、やがて、ニコリと微笑んで申しました。

「お荷物、家へ運んで下さるわね」
「おとどけます」

それから、二人は連れ立って、娘の家へ参りました。荷物を運び終ると、娘は、召使にいいつけて、軽い食事の仕度をさせました。軽く酔いがまわったころ——娘は、寢室へ入って、マブーバを呼びました。
「さあ、若旦那——お好きなことをして頂戴
思いつきり、たのしくね」



○マブーバは、たいへん商賣熱心な若ものでしたから——この取りびきにも、落度はありませんでした。あまりの高い値段に、ついには娘さんが、悲鳴をあげるほど、マブーバはつとめました。
若い二人の情熱が、それぞれに満されたとき——マブーバは、娘さんに取りひきの御礼を申しました。すると、娘さんも、うっとりとした様子で、同じように答えるのでした。
「本当に有難うございました。来月の市日には、もう商品なしでいらっしやいませ。あれは二十反ぶんも、ございますものね」



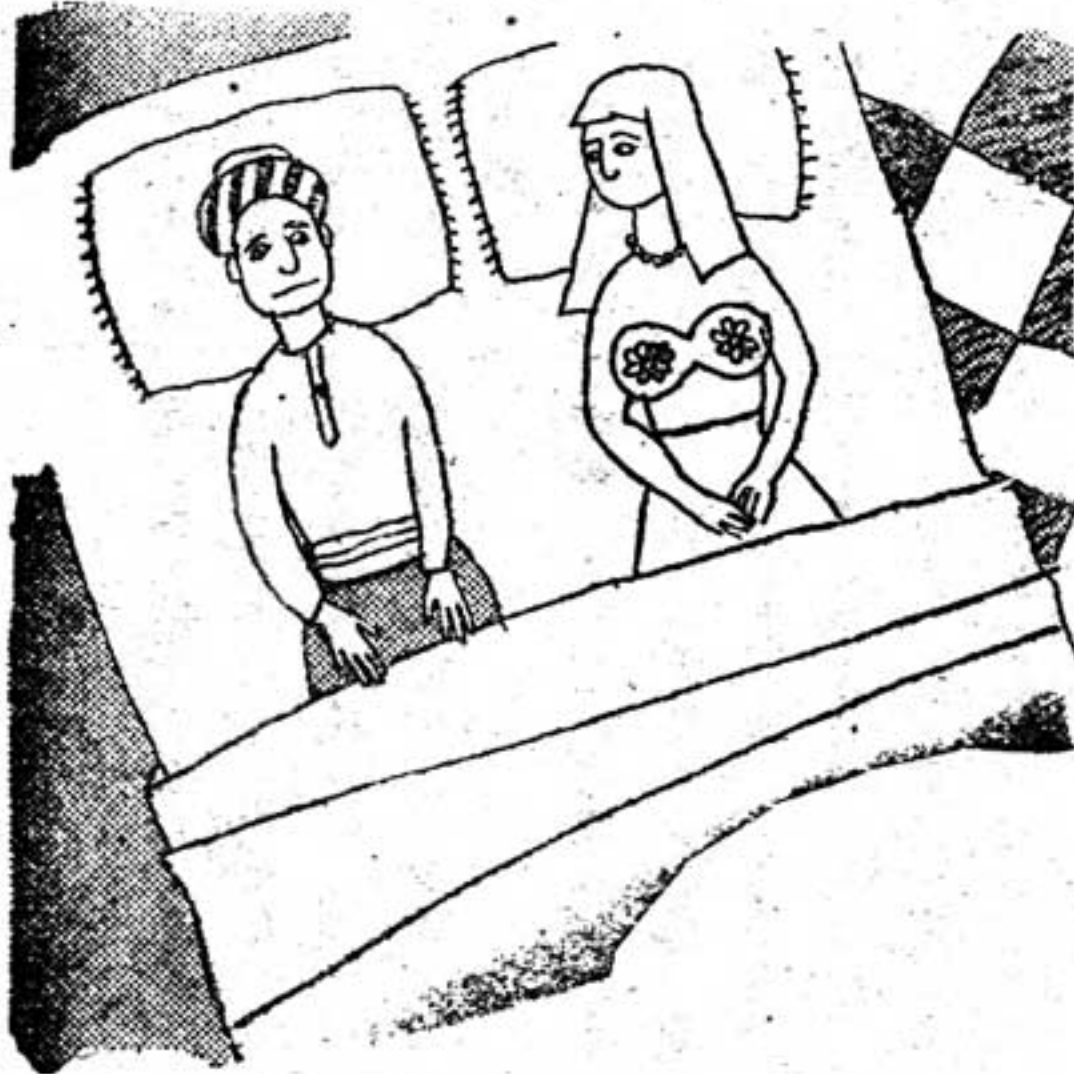
○マブーバが家へ帰ると、両親は尋ねました。
「どうだ、絹は賣れたかい」
「賣り切れました」
「ほう——浮気一本かね」
「なかなか」と、若者は胸をそらして答えました。「——お父さん。いくらだと思えます。五本ですよ。浮気五本ですよ！」
——というわけで、翌る月の市日には、両親を伴ったマブーバが、いそいそと、将来の「無限本」の取引のために、娘さんを訪れたことは、いうまでもありませんでした。



☆簞笥へ上がる話☆

○ところで、マブーバは、幸いにも身体ばかりではなく、頭も心も、健康な若者でしたから、万事、好都合だったのでございますが——同じバグダッドの、アルダワイの場合は、そうはいきませんでした。

アルダワイは、顔も身体も、また家からもうたいへん健康で裕福でございましたが——たつた一つ、頭のはたらきだけが、若干、健康を欠いて居りました。いささか智力に欠けるところがあったのでございます。



○御両親の嘆きも、さることながら、なにも知らずに嫁入って参りました、花嫁のソフィヤには——それが、新婚早々の第一夜からのなやみのたねだったのでございます。

体力だけは、並はずれて強健でしたが、いっところに、それを運用する方法を知りません——といって、新婚の花嫁が、それを知ってるわけもございませんから、第一夜は、むなしく明けた。二本の丸太ん棒のように、新郎新婦は寝台の上に、きちんと並んで、明日のお天気ぐあいなどを、語り明かしたただけだったということです。



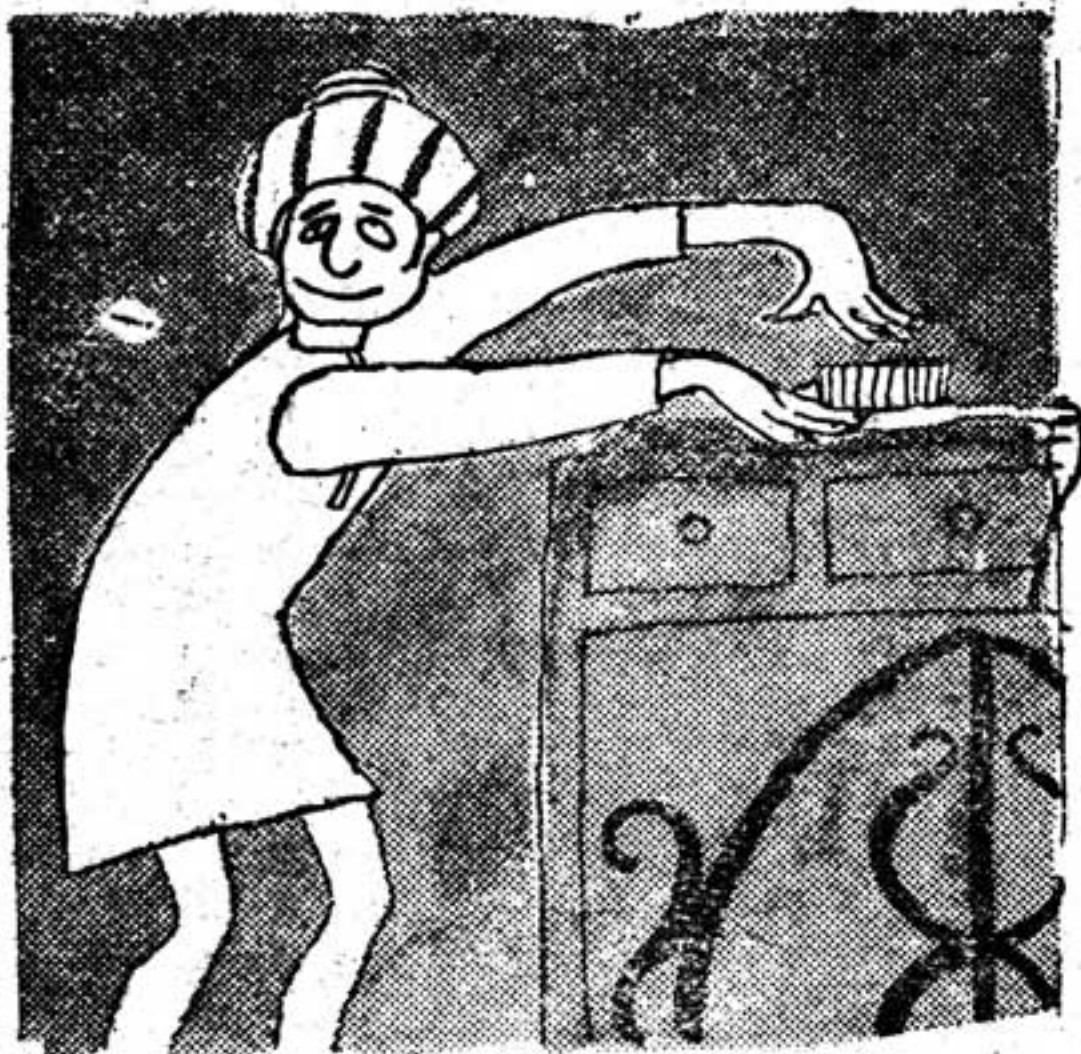
○さあ、そこで、心配したのは、御両親がたでした。朝になっても、アルダワイは、昨日と同じように、なんのこともなく、早々と起きて市場へ出て行くし——花嫁は、花嫁のしるしを見せぬばかりか、すっかり、しよげこんでいます。やむなく、花婿の父親が、息子に事情を訊くことになりました。

「悴や——」と、父は市場から呼び戻したアルダワイを、一室に入れて訊ねました。

「お前はだな。まだ、夫婦というものが、どうするものか、わきまえておらん様だが」「知ってますよ」と、花婿は答えました。



○「ほう——それは、なによりじゃ。それで
 なにかな、お前は、その……」
 「一緒に、一つの寢台へ、ねればいいのでし
 ょう——その位、ぼくだって……」
 「うん。まあ、それはそうだがな——ただ寢
 るだけでも、いかなのだ。つまり、だな、そ
 の、入れなければ、いかなのだ。お前のな、
 ……………」
 「入れるんですか。——へえ、それあ初耳
 だ。どこえですか、いったい……」
 「うう、その、なんだ、毛のある所じゃよ。
 さわってみてだな。つまり……」



○「ああ、なんだ、そうか」と、若者は申し
 ました「そんなこと、わけないや」
 やがて——夜。若者は、ひと寢入りしてか
 ら、むっくりと床をけって起き上りました。
 そして、そろそろと、部屋のなかを手さぐり
 で捜しまわりました。しかし、どこにも容易
 に彼の探すものは、みつかりません。あれや
 これやと捜すうちに——ふと、若者は、簞笥
 の上の刷毛をみつけました。
 彼は、簞笥へよじのぼると、その上で、刷
 毛を、まさぐり初めました。そして父親から
 教わったことを実行にうつしました。



○翌る朝——様子いかにと、駈けつけた親類
 一同が、父親を代表にして、扉の外から、花
 婿に呼びかけました。
 「忤や——どうちゃったな。見つかったかな
 例の毛は……」
 「ああ、あったよ」と、花婿の声。
 「うむ。それで、入れたかな」
 「うん。やっただよ。むずかしいね」
 「そうじゃろう。そうじゃろう——それでこ
 そ。花嫁ぢや。ところで、そのあとは、どう
 じゃったな」と、父親は、満足そうに一同を
 振りかえりながら、たずねました。



○すると——「あとだって」と、花婿の声が訊ねます。

「そうじゃよ——お前が、入れたものを、出したあとじゃよ」

「へえ、もう、出してもいいのかい」

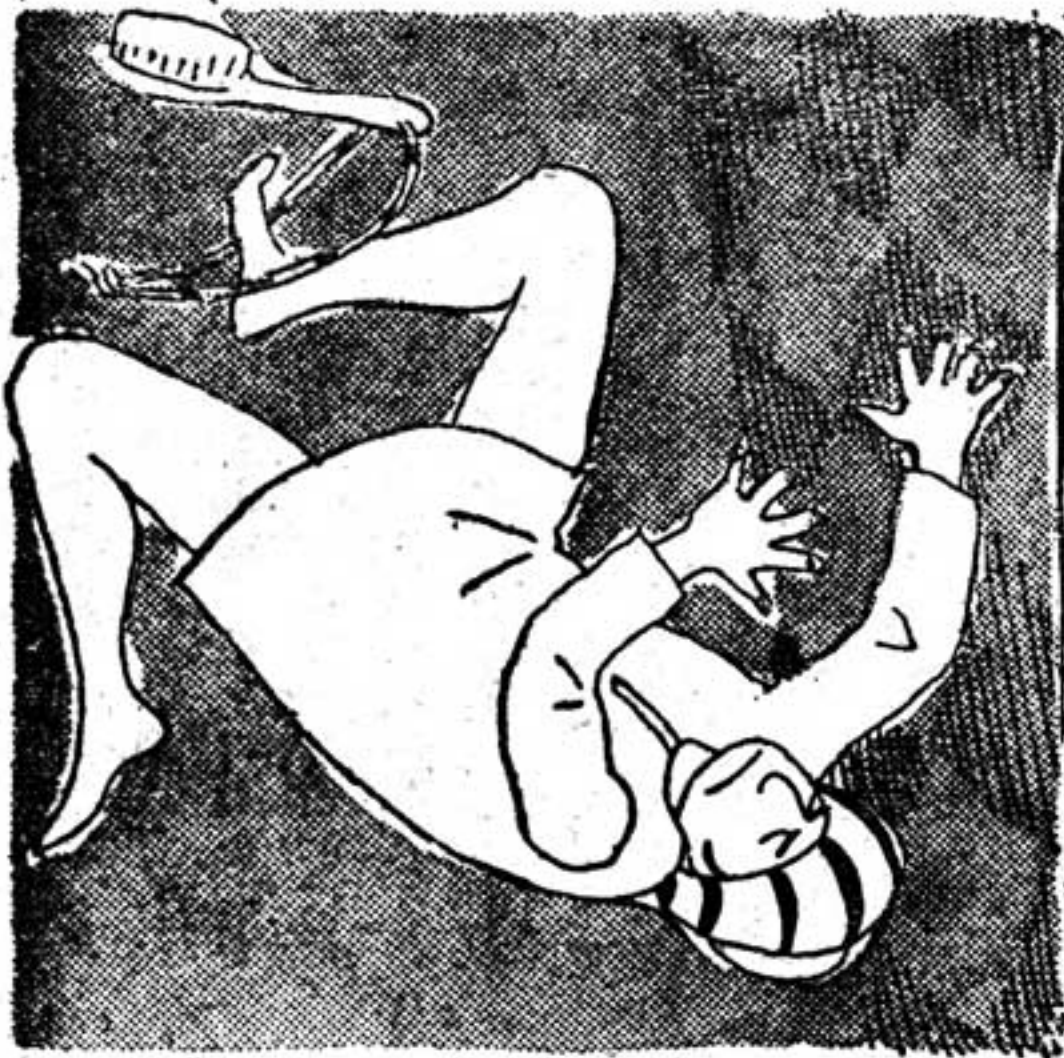
「おい、おい」と父親は驚ろいて叫びました

「まだ、お前は、上にいるのかね」

「ああ、昨夜から、ずうっと……」

「はて、大したもんじゃな——まあ、しかしもう、降りてもよくはないかな、いいかげんにしてな」

「そう——もう、降りてもいいかい」



○ひよいと、身輕に、筒筒からとび降りたはずみに、刷毛の柄についていた紐が、足にからんで——花婿は、簞笥の金具で、額をすりむいて了った。

「大変ないきおいだな」と扉の外では、親類一同、ききみを立てていました。

「降りたかな」

「降りたよ」

「どうだ。よく見るんだ。血が出てるかな」と、父親は揉み手をしながら尋ねました。

「むろんだよ——」と息子は答えました。

「額きわだ、血ころりどろり——」



○ワアッと、よろこびの声をあげて、一同が新郎新婦を祝福するために、部屋の中へ、なだれこみました。そして「——おめでとう」

「——おみごとだわ」と讃辭を浴せかけてから——はじめて一切の事情を知ったのでした人々は、花嫁の万一の場合に備えて持参した傷藥を花婿の額に塗りつけながら——はてさて、馬鹿につける藥はないものかと、思索しあったと申すことでございます。そして、もう一つ慾をいえば、花嫁のために毛生藥を備えるべきであったと、語りあったと申すことでございます。



☆着物を上げる話☆

○しかし、また、パツソラーの町の洗濯屋リ
ヅワンのように、頭のはたらきに欠けるとこ
ろはあっても、身体さえ丈夫なら、充分な場
合だとしてないことはありません。
リヅワンの成功は、主としてヘアリマーの
ような、賢くくて美しい嫁女がいたからでし
た。ヘアリマーは、年こそ二十一才の娘でし
たが、花嫁として欠くところがないばかり
か、妻として夫に足りない頭のはたらきを補
うほど充分に備えていたからでした。



○新婚当時は、ヘアリマーも、ずいぶんと心
いためたものでした。夜どおし、泣きあかし
たこともあります。けれどもヘアリマーは、
賢い女でした。ある日、一策を案じて、夫
リヅワンの仕事場へ出かけました。それはシ
ヤタル河に沿うた、洗濯場でした。
「旦那さま。今日は」と彼女はいいました。
「なんの用かね」と、夫はいいました。
「お手傳いよ。あたし、それに、あなたに手
傳って貰いたいことがあるの」
「ほう——河でかい」
「ええ。身体を洗いたい」



○彼女は、夫の手傳いをして、早目に仕事を
片づけさせました。そしてこんどは、眞裸に
なって、河の中ほどにしゃがみました。
「さあ、いらっしゃいよ。こんどは、あなた
が、お手傳いするのよ」彼女は、そういつて
夫を呼びました。善良な夫は、いわるるまま
に着物を脱いで、水の中へ入りました。
「あらッ」と、妻は叫びました。
「それ、なんですの」と彼女は、わざと驚い
たように、夫の身体を、まじまじと見つめな
がら申しました。
「これ。パイプさ」と夫は答えました。



○「まあ」と妻は、珍らしそうに立上り、手にとりて眺めました。そのとき、彼女の下体が水面に現われましたので、こんどは夫が「それは、なにかね」と訊ねました。

「ああ、これ、パイプ入れよ」

「へえ。珍らしいな」

と夫は、心から珍らしそうに申しました。

「ああ。あなたのために、わざわざ、持ってきてあげたのよ。お嫁に来たときでも——あなた、もっとも使わなかったわね」

「ふうん。寸法は」

「大丈夫よ」と、花嫁は艶然と笑いました。



○パイプ入れは、どうやらリッツワシの気に入ったようでした。翌日は、仕事の区切りをまて彼は、家へ飛んで帰りました。

「お父さん、お母さん——ぼくの女房は、どこにいますか」

「何用かい」と母が訊ねますと

「ああ、ぼくは、したい事があるんです」と云った調子でした。おかげで若い妻は、たいへん満足でした。けれども声をひそめて夫に申しました。

「もうちよつと、お待ちになったら——お母さんが、御馳走をつくってますわ」

The End



○しかし、性急で勤勉で、善良な夫は、だだっ見のように、かぶりを振るのでした。

「ぼく、おながなんかが空いてないよ——というなり、若妻の荷物を掻きあげて、

「さあさあ。パイプ入れ、パイプ入れ」と気ぜわしく、それを捜したと申すことでございます。おなかの空いていたのは花嫁さんだったのせう。世に賢者は飢えることなし——という諺がございますから。

——と、ここまで語り続けたとき、夜がほのぼのと明けそめたのでシェラザードは物語をやめました。

ひぶ・すとおり

なぶられた乳房



歌代は、苦しみもだえながら、そうした男たちの妖しい表情をぬすむように見上げながら両手で、つゝ乳房をおさえ、苦しい表情を夢見まよひに……

机 吾 郎

和 木 紀 子 画

銀座の探女

一ぱい客が入っている銀座のビヤホールの前までくると、一大寺歌代は、

「ああ、苦しい！」

と、大きく叫びながら舗道上にすんなりした体をくずし、ブラウスの胸をかきむしるようにはだけながら、夏の夕空を見上げて倒れてしまった。

シミーズもなく、乳おさえもしていない生地のままの白い胸元には、異常に大きい乳房がそこだけ活潑に生きているように大きく波立っていた。

「ああ、く、く、苦しい！」

再び叫ぶと、歌代は恥ろろ様子もなくブラウスをぬぎすて半裸になったまま蛇のように体をくねらせた。

「大変だ、美人が暑さに当って倒れたぞ」

「テンカんだ、卒倒だ」

と、口口に叫びながら、通行人やビヤホールから出て来た酔客たちがたちまち彼女のまわりを取りまいてしまった。だが、誰れ一人として彼女を看護する者はなく、男たちは、この上品で美しい若い女の白い肉体、ことに

異常に発達し、妖しくうごめいている乳房え好色に光る目をくらいつくように集中していた。

歌代は、苦しみもだえながら、そうした男たちの妖しい表情を、ぬすむように見上げながら、両手でぐっと乳房をおさえ、苦しい表情を夢見るような楽しい顔に変えた。

「奥さん、どうしました、さあ、病院え行きましょう」

群衆の中から、五十二、三才のでっぷりした紳士風の男が飛出してくると、彼女の体を抱きおこし、親切にもブラウスまできせてくれた。

「すみません、ちよいと気分が悪くなったものですから、もう大丈夫です」

歌代は礼を言いながらニヤリと妖しく笑って立上った。

「では、お宅までお送りしましょう」
「そうしていただければ助かります」

歌代は、紳士の言葉に甘えた。知らせをきいて警官が駆けつけて来た時は、歌代は紳士が拾ったタクシーにゆられていた。

銀座の舗道で多くの男たちの前に半裸を惜し気なくさらした一大寺歌代とは一体どんな女なのか――。

彼女は元男爵一大寺徳光の妻なのだ。病弱な夫が転地療養にかねて長野県のリゾート園を経営しはじめたから二年、別居生活をしている斜陽女性なのである。

だが、経営の成績がよく、月に三万円の送金によって彼女は小さいながらも一軒の洋館をもち好き自由な生活をしていた。こうして名門に育ち、今なお生活にめぐまれている名流夫人ともあろう者が、何故あの醜態をさらしたのであろうか。

それは、彼女と神様よりほかに知る者はないのだ。

「エキザビショニシムス」俗に「露出症」と言われる変態性慾者がいるが、彼女はその病いに取り憑かれていたのである。

自分の美しい肉体を異性の面前に露出し、それを見て喜ぶ相手の気持を想いながら、自分自身が性的歓喜を感じると言う病気だ。ことに彼女の異常に発達した美しい乳房は、夫徳光が、性器以上に魅力を感じ、それを愛撫したと言うすばらしい隆起だったのだ。

然し、それは単に大きく美しいばかりでなく、手や足のように自由に動き、興奮すればいちぢるしく乳首が突起し、乳房がゴム仕掛

のようにふくらみ強く張って来ると言う「生ける乳房」でもあった。

夫との別居による不満から、彼女が、この魅力的な乳房を露出することによって僅かに慰められるようになったのは、別れてから半年目だった。

今も歌代は、銀座において仮病による露出で、下着をぬらしたほど心よい汗をかいたほどである。

それは全く、正常な女性では考えられない性行為であった。その変態性慾者一大寺歌代の病気を信じて自宅まで送って来た紳士との間にどんな事件が展開されるであろうか？。

不思議な乳房の魅力

「わざわざすみませんでした、でも、車にゆられて来たためでしょうか、また気分が悪くなりましたから、少しの間失礼させていただきます」

歌代はそう言いながら、居間のカーテンをあけ、寝室になっっているベッドの上へ、無難に体を投げ出し、

「本当に胸が悪くて」と、またも、叩きつけるようにブラウスを

ぬぎすて、ふうつとなやましそうに息を吐いた。

その乳房を、外国タバコをくわせながら、紳士はむさぼるように見つめていた。

「医者を呼びましょうか」

やがて、彼は言った。

「いいえ、もう、大丈夫ですの」

乳首が急激に突起し、豊かな丸い肉がぶるぶるとふるえた。

「奥さん！」

紳士はぐいと立上った。歌代は返事の代りに美しく笑って見せた。

「あなた、御主人は？」

「長野県でリンゴ園を開いていますの、女中もいません、私、一人だけですから、御ゆっくり」

「僕、お願いがあるのですが」

「どのようなことですか」

「こう言う者ですが……」

紳士は名刺を出して、歌代の手に渡した。

それには、三田村興行株式会社、専務取締役三田村作造と印刷されてあった。

「実は、失礼かも知れませんが、僕は浅草に女体座と言うストリップ劇場を経営しているのですが、出演料はお望みだけ出しますから

舞台に出ていただけないでしょうか」

三田村は真剣な調子で声をはずませた。

「えッ、私が、ストリップになるのですか」

歌代はベットのの上に起きなおった。

「その乳房が実にすばらしい、それこそ一見千金の値があります」

「フッフッフ……ありがとう存じます。あなた、私の乳房を御覧になった感想は？」

「いや、本当に興奮しましたよ」

「そんなら、私の方からお願いがあるわ」

「と、言いますと」

「私を楽しませて下さる？」

「では、僕とあなたが……」

「いいえ、直接関係するものではありません。

フッフッフ、私の乳房を見ながら、あなたが御自分で、ホッホホホ、お分りになりましたでしょう」

「ほう、驚きましたな、するとあなたは」

「そんなことをして喜ぶ女なんですつまりエ

キザビショニシムス……」

「結構です、その代り、僕の言うことをきいて下さると言うのですね」

「勿論ですわ、私にとってこの乳房を好色な

男たちに見せて、楽しませることは、私自身

の喜びですもの、今まで、ストリップに気がつかず今日のようなことをしていたなんて少し頭が足りなかったのですね、私の方からぜひお願いしますわ、私、本当に嬉しい……」

女にかけては猛者として自他共に許していたさすがの三田村も、歌代の変態ぶりだけに度胆をぬかれた形であつたが、彼自身にとっても若干異常性があつたためか、「生ける乳房」を見ながら、歌代に言われる通りにした。

「ハッハッハ……」

三田村のクライマックスを見て、彼女は蛇のように体をくねらせて高く、そして妖しく笑つたのである。

恐ろしき人気

一大寺歌代が乳房にちなんで「ミルク歌子」の芸名で「女体座」の舞台に登場したのは、それから十日後のことであつた。

先輩の「オッパイ小僧」も及ばない乳房の偉大さと、美しさと、その妖しい動きは、たちまちものすごい人気となつて多くのファンを集めてしまった。

ステージにおけるストリップの妖しい演技よりも、客席における男客がくらやみでひそかに行くことの方が激しいと言われるストリップ劇場の座席には、歌代が登場して以来、終ったあとの客席には、いつもより多く客がおとしたり忘れて行った汚れた紙やハンカチまでが残されていたのである。

「男って本当にスケベいよ」

と、同僚から言われる度に、彼女はさながら自身が楽しんでいるような喜びさえ感じた。

そして、日がたつにつれて、舞台上にいても、カブリつきの客たちがひそかに楽しんでいる行為が手にとるように分つてくると、彼女の喜悦も増し、ストリップになったことをつくづく嬉しく思った。

彼女がストリップパーになって一ヶ月目に、彼女の乳房を呼び物として「オッパイはあなたにのませる」と言う劇で、歌代が、乳房と口とをふりながら猥褻している最中、すぐ下のカブリつきにいた男が、堂々と楽しんでいるのを発見し、彼女は思わずぶるつと体をふるわし、演技を忘れるほど興奮して来たのだ。

すると、ライトに照し出された大きい乳房

が風船のように次第にふくらみ、ピク、ピク、と僅かな時をおいて弓なりにそったり、下ったり妖しい運動を展開した。

客席からは、不気味なうめきや、息を吐く音までが大きくきこえて来た。

歌代自身も、もう体が動けなくなるほど胸さわぎがしてくると、彼女はそのまま、

「ああ！」

と、妖しくうめいて舞台えうつぶせに体を投げ出し、歡喜の絶頂を経験した。その時、

「ミルク歌子ッ！」

と、叫んで、さきほど露出していた工員風の男が舞台上に駆け上って来た。びっくりして立上った歌子の乳房を見ると、男は大きく口をあけ、さながら兎に飛びつく狼の如くかみついて行った。

「何をするのさッ！」

歌代はその瞬間体をかわして、よろける男の体を力一ぱい突き倒しながら楽屋へ駆けこんで行った。

翌日の新聞には、

「ミルク歌子、暴漢に乳房を襲わる」

の大きい見出しで、五段ぬきの記事が出た。そして「女体座」の支配人の談話として、

「乳房の人気はありがたいが、こうなると、いつ歌子の乳房はかみ切られるか、もぎとられるか分ったものではない。」

と、かかげられ、また本人歌代は、「こわくなって舞台にも出られません、人気を集めた乳房が命取りに変わっては大変です」と、談話をのせていた。

事実、歌代は、満足を与えてくれる露出が逆に命までも危くすることに大きい不安を感じ出したのである。

然し、その思いは日がたつに従って、彼女にスリルと言う快感を与え出した。それは丁度、夫に感付かれる不安な気持ちを抱きながらも、好きな男とひそかに楽しんでいるような想いであった。変態性慾者は、何かのショックによってより一層変態的になって行くものだ。

そのため、歌代の演技は乳房を看板にしてますます妖しく濃厚になって行ったのである。

乳房に罪あり

九月末のことである。徹夜の舞台稽古が終え歌代は疲れ切った体を引きずるようにして

家に
帰って
来て、裏口
の戸をあけよ
うとしてカギを
出すと、戸がはずさ
れてあったのにびっく
りして家の中へ飛びこむ
と、

「あッ！」

破れるような悲鳴をあげ、ぶ
るぶるとふるえ出した。勝手元の
横柱にやせた男が首を吊ってぶらさ
がっていたからだ。

彼女は、ガタガタする足に力を入れて
やっこの思いで向う側にまわって男の顔を見
ると、

「あッ、あなたッ！」

と、再びカン高く叫んだ。長野にいる管の
夫徳光が苦痛に満ちた表情で、鼻をたらし
たまま硬直していたのである。

「一体、ど、どうしたと言うのです……」

歌代は、生きている人間に言うように声を

ふる
わせて
あたりを
見ると、本
箱の上に一通
の手紙が置いて

あった。

それを手にとると、遺書と表に書かれ裏に
は徳光としてあった。

彼女はあわてて封を切った。

「歌代、私は三年目でリンゴ園の経
営に失敗し、三十万円と言う借金
までした。その上体の具合も悪
く、リンゴ園を再起し、お前
に生活の保証を与えるだ
けの力がなくなってい
ました。」

私は、お前のこと
についても新聞
や人の噂で
知り、実
は、一
大寺

家の大きい恥として死ぬほどの心配をしていたのだ、だが、職業に貴賤のない時代のことと思って我慢していたが昨日上京してお前の舞台姿を見て私は自分の恥を多くの人たちの前にさらしているような気持になった。

色々と相談しようと思って上京した思いも消え、私は、これ以上お前の姿を見ることが苦しいので、再起出来ない悲しさと一しよに死によって清算するべく首を吊ったのだ。

あれ以来、お前のすばらしい乳房を愛撫出来ないのは残念だが、私はその命より大事なお前の乳房を他の男によって愛撫されないうちに死んで行くことが、僅かの慰めだと思っている……」

と、レターペーパーに三枚ほどの遺書が綴られてあった。それは斜陽族の弱さを証明するような生活力と闘志のない心の表現だったのである。結婚して一しよに暮したのは僅かに三年足らずであったが、夫の自殺はさすがに歌代の心を悲しくゆすぶった。

「あなた、許して、許して、あたしがこんな女になったのは、別居生活がいけなかったの、一しよに暮していればよかったわ……」

歌代は夫の死骸を畳の上に横たえて泣き続けた。

「あなた、だけど、あなたが宝物だと言ったこの乳房にも罪があるの、私は、この乳房故に、恐しい露出狂に墮落しなければならなかったんだわ、あれ以来、あなたに愛撫されないで、多くの男たちの情慾を満足させて来たこの乳房、あなた、最後に愛してちうよだい。ねえ、あなた……」

歌代は、胸元をはだけて両の乳房を出すと、夫の口元に近づけた。だが、冷たくそしてかたくとざされたそれは答えようとはしなかった。

「あなた、何故、死んだの、この乳房は、もう誰れのものでもない。あなたのものよ、あなた……」

と、泣き伏した歌代の耳に、
「ごめんなさい、ごめんなさい」

と誰れか尋ねて来た声が玄関からきこえて来た。だが、歌代はそれに答えようとせず夫の冷たい体にとりすがっていた。

「いらっしやらないのですか、ごめんなさい、一大寺さん」

激しく戸をたたきながら叫ぶので、歌代は涙を吹きながら立上って、玄関の戸をあけた。そこには、黒眼鏡をかけた右腕のない怪しい男が突っ立っていた。

「何か、御用ですか」

「ミルク歌子さん、お願いがあつて来ました」

鋭く言う男は玄関に入って戸をしめた。

「どんな用なんですッ！」

「歌子、俺はお前の乳房をもらいに来たのだ」

「えッ、私の乳房！」

「俺は、お前の乳房を見てから、毎晩ねむられず苦しみ続けているんだ。俺に一晚でもいいからその乳房を可愛いがらせてくれ」

男は、歌子の胸のふくらみえ眼を光らせながら、片腕でそれをつかみとるようにして近づいて行った。

「フッフッフ、そんなにこの乳房がほしいのかい、とれるものなら取ってごらんよ」

歌代は一步一步後にさがりながらブラウスをとり、スカートまでぬぎすてた、そして男を客室の中え誘いこんだ。

「この乳房は、もうお前たちを満足させるほど安っぽくなくなったんだ、さあ、夜もねむられないほど苦しんだと言うその苦しみを私の前で見せてごらん」

歌代は、今、一人でも多くの男を乳房によってもたえ苦しませるのは、乳房のことを心

配して死んで行った夫に対するせめてもの供養だと思つたのだ。

男はギリギリと、ズボンの尻ポケットからヒ首をひきぬいた。

「これほど思っている俺をからかおうとするのか、そんなら、お前を殺してまで乳房を可愛いがるからそう思えッ！」

片腕の男は、なやまし気に顔をゆがめながら、ヒ首をふるって歌代の身体に躍りかかって行った。

「自由に出来るものならしてごらんよ」

歌代は女豹のようなすばしきで右に逃げ左によけた。歌代が逃げれば逃げるほど激しい情慾にかき立てられた男は、ぶるんぶるんなやましくゆれる乳房を追いつながらテーブルを倒し、歌子を蹴って情鬼と化して追つたが、不覚にも倒れたテーブルに足をとられ、

「あッ！」

と、叫びながら、うつむけに倒れると、続いて、

「ギヤッ」

野獣のようならめきを上げ、自らの手でヒ首を突き刺した胸から血を吹き上げて苦しんだ。

「ヒッヒヒ……」

歌代は妖魔の如く不気味に笑うと、男の腕からヒ首を引きぬくと、下着一枚つけたままの裸体で、気が狂つたように表えハダシで飛出して行った。

露出狂空を飛ぶ

風呂屋の煙突を見上げる黒山のような群衆は手に汗を握りかたずをのんでいた。煙突上には夏の陽光を全裸に浴びた歌代が恐れる様子もなく下を見下していた。

「一大寺の女房は気が狂った」

「いよう、すばらしいぞッ」

驚きの声と、野次が入りまじって、白昼、しかも裸体の煙突女に興味をひかれる男たちがあとからあとと続々と集まって来たのだ。警官までが出動して、

「おい、降りて来なさい」

と、やさしく声をかけたが、歌代は只ニヤリと笑って受けただけだった。

彼女はヒ首を握ったまま両手を空高くのばし尻を出し胸をそらせた。胸元からぐいと突き出された乳房が陽光にかがやき、大きく呼吸するよう上下に妖しく動いた。

彼女はそれを片手でおさえると首をまげて

ぐいと伸ばした右の乳房を自らの口で吸った。弾力があり偉大な乳房は彼女の口の中で自由にもてあそばれた。

「ハッハッハ……」

それが終わると、興奮しているであろう群衆を見下して高らかに笑うと、彼女はいきなり下着をはずして下界へ投げた。一糸もまとわぬ白い肉体が空に美しく光って見えた。

「よく見てごらん、この乳房は、もう、お前たちの慰めとはならないのだ。これは永遠に私の夫のものなのだッ、これから誰れにも指一本さされないよう、永久に見られないようこうしてやるッ！」

大きく叫んだ歌代は手にしたヒ首で、ぐさりと右の乳房を、そして左を力一ぱい突き刺した。奔流のように吹き出した鮮血は無数の微粒になって下界へ散って行った。

同時に歌代の全裸は大きく股をひらいたまま煙突上から空中へ乱舞した。むごたらしい死体をさらすまでの瞬間、彼女は夫の霊に抱かれて空中を乱舞するような錯覚に酔うことが出来た。

一大寺歌代の「異常死」を理解するものは極端な「エキザビショニシムス」のほかにはいないであろう。



スキ 紳士必携

○スキ者のあいだに、「午後三時丸ビルから有楽町駅を歩いてみな面白いぜ」の評判がある。つまり逆光線に浮出す、うす着の女性はアイトリップをかけた佛像みたい

に、からだの線がよく見えるからだもあり、ナイロンのブラウス、セルのスカート・デシンの上下、ことに外國婦人にいっそうの興ありという。

○もう、ひとつ！ 雨の日、駅の階段下で遊んでいると、けっこう楽しめると評判。ラベソール流行で、いそぎの淑女が、スベる、コロぶ、マクれる……の三拍子が見られるという寸法——。

カートの長さを推量するもよし、スリッパの清潔さにおどろき入るも勝手だが、なによりも、「タダより安いものはないさ」の精神に徹底すべきだ、とは恐れ入る。

この手帳の利用法

○街を歩いていて、尿意をもよおした御仁は、公衆電話のボックスへ……が、いまや公然の秘密だともある。但し、これには術があるそうで、目ざすボックスがあったら、わき目もふらずとび込む。さて

おもむろに右手でポケットの手帳をとりだし、電話番号を調べる風をしながら、右手でボタンを押して、用がすんだころ、「いけねえ、この電話、こわれてやがらあ



きな穴があり、となりが劇場の婦人WCであることをお忘れなくば結構楽しめることうけ合い。但し隣りの婦人便所からランランたる好奇心のマナコがのぞいていることをお忘れなく……。

！てなことをいいながら、飛出すという寸法。

○但し、夜はこれほどの遠慮の要なしだ、とあり、アベックして中に入り、そのあとは、どんなことでも御随意という寸法——。大井町の某ボックス使用のさいは、大

新・オール20

○川崎駅前のパチンコ街で、パチン、パチンとやっていて、出ないでくさっていると、いつの間にか



隣りにきていた年増が、「お気のどくさまネ！」と皿のなかに、それこそジャラ、ジャラと二、三十個のタマを入れてくれるという。そして、「いかが、ぜったい入るオール二十へゆきませんか」とさそいかけてくる。ついてゆくと、

つれ込まれる部屋には、年増も女学生風なもの、洋装も和服もいるという。ここの相場は、オールナイト二千圓、待合、温泉マーク、遠山の温泉行、どこへでもつれだしは自由、但し、費用は一切、お客もちだという。

○もち合せが少いときは、女の下宿を借用するオール十五もあるという。その場合は部屋代は前拂いだ、サービスは満点、この家に集る女性群は総勢十二、三人で、

若い娘はモデルの口もかかって来るとか、マダムへの手数は二割いっさいがオープンでなかなか感じがいいという話だ。悪くない服装で、おうようにパチン、パチンとやっている、三度に一度は、このマダムに出くわすそうだから一度お試しあれ。

セミプロ二題

○東銀座は、Cなる大衆お座敷の文中頭は、頂けるよし。三十五才二兒ある未亡人だが、客に明言するは、「生身ですもの、独身をつづけるなんてヤボいわないわ。だけれど、つばめにさし支える交際なんていや。第一、第三日曜なら、いつでもよくってよ。独立したらこれぞと思う男をオンリーにして可愛がるの。あんたツバメになる？」てな工合。

○彼女、第一土曜日の来客の中から



ら、これぞと思う男にトロロをねだるのが習性で、カンのいい男が「そうかい」とやれば、翌日はOKというアンバイ。体験者の言によれば、トロロをおごったカイがあると、鼻の下を長くするは必定

とのこと——。だが、かの女の述懐に曰く、「男って血のめぐりが悪いのネ、せっかくナゾをといたくせに、からっきしなんですもの……」だと。但し、屋号は特に秘す。

○和服姿、エプロンなどを羽織り

人によっては買物カゴをさげたみめよき人妻風の女が、行さずりに流し眼をすれば、たいていセミプロと断じてよろしい。これは蒲田大井町、目黒、市川など、住宅街をひかえた駅附近に、近ごろはらんしだした新型。不景気の生んだ産物とある。同じ千圓をけずむなら、プロのあつかましいのより、アルバイトじみた初心者の方が、「よっぽど、ええ」という心理を逆用したとも、かり込み防止の手とも諸説ふんぶん。

○夕刻、陽のあるうちにぶっつかるものの中には上玉あり、場合によつては、「おアシなんか、いいですわ。満足させて頂ければ……」てな奇特な御仁にぶっつからぬともかきらぬ。蒲田西口マーケット内に、ときおりアマチュア選手出現ありと、スキ者の間に大評判。

×

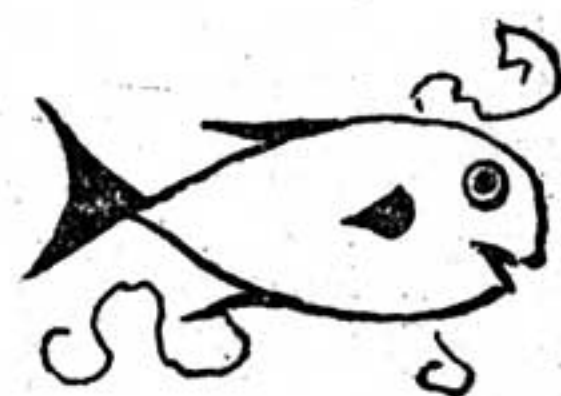
銀座デマ
デマ集

○銀座七

丁目の有名

なレストラ

ンC堂には

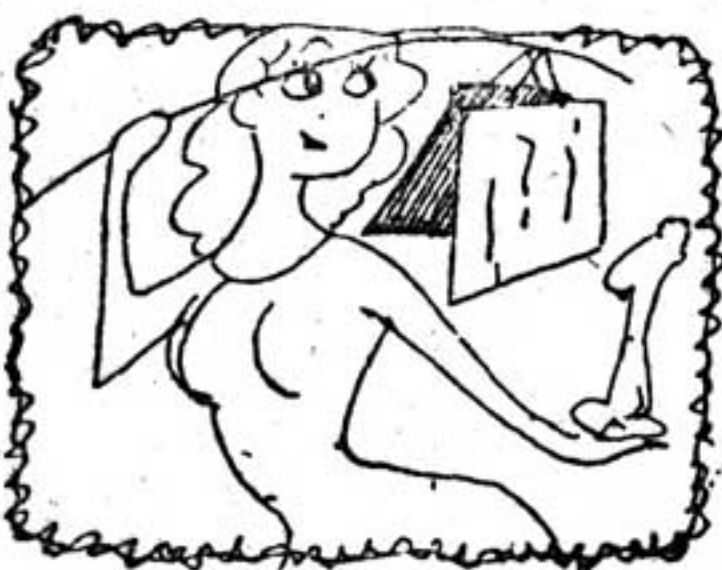


夕方になると、美しく着かざった
た有閑マダムや御令嬢がわんさ
おしかけ、ウの目、タカの目で、
お相手をうけたまわる若き男性を
物色するという、もっぱらの評
判。容姿に自信のある学生など、
下手なアルバイトをするよりは、
ここへ通ってさえいれば、たちま
ちユウワクの手がのびて、けっこ
う月謝ぐらいは貰いでくれる女性
を見つけることができるという。
いちど、あやかってみたくと思い
せいぜいオシャレして出かけて見
たら、なんとニキビ面のニヤケ学
生やイカレ紳士が、キョロものほ

しそうにしているばかりで、それ
らしい御婦人は、カゲをひそめて
いた。どうも昨今では「お相手の
ほしい御婦人は、銀座C堂へどう
ぞ……」の宣傳文句も、変更の要
がありそうだ。

○夜ともなれば、銀座交詢社下の
某ビヤホールは、詩情ゆたかだと
通人の間に評判がある。映画を見
たあと、ジョッキをあわせて、さ
て、右せんか、左せんか、の人生
の岐路に立たされた婦人の表情を
見るは、一興だとあ

る。一直線に野心を
達せんとの企みをも
つ御仁は、ワッハッ
ハッと、高笑いにま
ぎらわして、ふんだ
んに相手に飲むこと
をすすめる。ダン
スホールをめざす組
はしみじみと飲みあい――、相手



相手

のスタイルも立派である。「お時

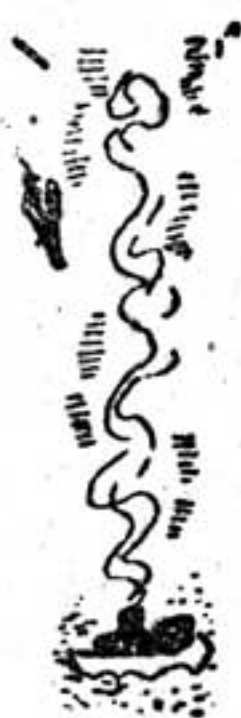
のほしい組は、唇をヌルヌルさせ
てあたりを見まわす……の次第で
一人よし、アベックよし、同性一
團となって押しよせるも、また一
興。これぞと思う相手に存在をみ
とめさせておき、前後して灯の街
へ出れば、さき廻りして全線座附
近の暗がりでは、「どこかでお会い
しましたネ」とでもやれば、さき
様の体内のアルコールが、燃える
という寸法。お試しあれ――。

○「こんな美人が澁谷あたりに」
と驚くほどスブラシ
イのが、都電澁谷終
点の公衆電話のわ
きから「お遊びに
なりませんの！」と
声をかけてきた、白
いスーツもよく似合
うし、ハイヒールを
はいた五尺二、三寸

間で千円、お泊り三千円よ」とい
うから、「君ぐらいの美人なら、
なにもこんなところに立たないで
銀座のキャバレーにでも出たら、
鼻下長紳士から、もっと高い金を
しぼれるのになあ」というと、
ニッコリ笑って答えたものだ。
「そのつもりなんですけど、秋か
ら冬にかけての衣裳ができるまで
ちよいとネ……、来月の七日から
八丁目の好一廊へ出ますから、そ
のときは、どうぞ、ゴヒイキに……
」銀座のキャバレーの女性の前
歴とでもいうべきか、御要心！
御要心！

日本版・キンゼイ報
告「人妻篇」

○近ごろ、人妻族のあいだに、隠



語流行のきざし著しいとある。たとえば「Aさんの奥さんB氏にチャタレられたらしい」など。つまり「A夫人とB氏の

仲があやしい」の意味で、澁谷駅は二番

線ホームに夜な夜なあらわれる、残んの香も失せないオバさんに誘われ、芝高台の「人妻クラブ」を訪れると、トニー・

谷的隠語もきかれるという。

「禁贅時代」ですもの、フティの輩だって、一人ぐらいいはもたなくちや……。穴カシコよ、ホッ、ホッ

ホ……」といった工合。

○いう意味は「キンゼイさんも人妻中四〇%は、フティを働いてるっていうじゃありませんか。一人くらいボーイフレンドをもってもいいでしょう。チャタレ夫人の



恋人では、あその場面が検閲にひっかかってるけど、見たい、知りたいのは人情、ホホホ……」には恐れいりました。

流行三題

○「大女罷り通る」

時代到来の声がある今までなら、「五尺四寸七分た」でけな「てんで、見あげられこそすれ、大

して相手にされないのが例だが、今やあそこがれのマトになりつつある。突破口をつくった殊勲者は、伊東絹子嬢でミス・ユニヴァース三等賞獲得から、ガゼン、「大女時代」現出とあいになった。これあつてのち、バスト(胸囲)八六センチ、ウエスト五六センチ、ヒップ九二センチ胴のくびれた女王蜂たらんと天下の女は浮身をやつし

ているのはこわい見たい。

○骨のあるオッパイが現われた、といっても、これはブラジャーの話。ナイロン全盛時代のなせるワザだとあるが、スリッパと肩ヒモ

のついたブラジャーがダブると、みつともないことが、この種の流行のもと。この装置、きわめて簡にして要、クシラのヒゲなどを使用して二つのオッパイの谷間をう

めれば、中なる人造オッパイが脊中に廻

ることもないのが、ミソ。ハリウッドな

どでは、とうに使用ズミのもの。中にス

ボンジ、線、ハリガネなどを入れれば、釣鐘型、ピラミッド型その他もろもろのオッパイが製造されるは、いうまでもない。秋のセーターは、からだの線を存



分に出すのが流行とあるから股方受難時代は当分解消されそうにな

い、あー

○江戸時代に「それ突け」という見世物があつたが、これは、女が裾をまくって坐っているのに向い客が二三間先からタンポ槍で突きうまく女の陰部に当たると賞が貰えるというものである。これを真似たわけでもあるまいが、橋柳あたりに遊ぶ高級種属を相手に始めた女があるそう。これが時宜に投じ今や大流行といわれ、一頃のシロシロ以上の興味と昂奮度があるそうである。突くしろ物はバナナの皮をむいた奴だとは、どこまでもふざけた話。



有名女優の亭主は
幸福か？いいえと
んでもありません

高

橋

晋

誰が爲に女房は居る

近頃、恐妻病など云う言葉が流行している。恐らく奥さんなど眼中になさそうな人達が、恐妻家を自認して、自虐 自己満足、強いては奥さん、横縦法に利用している。

しかし自分では、

『僕は恐妻家でしてなあ、どうにも女房の尻の下から逃れられんのだよ、君い』

なんていつているくせに、他所にお妾を飼つたりしているので、

『恐妻家だなんて飛んでもないデマですよ、僕は女房に対しては暴君の態度で望んでいますよ、嘘だ』思つたら僕の家に来て下さい』

なんて、薄い胸板を叩く連中こそ、眞実の恐妻家が多い。特に、飛ぶ鳥を落す勢、一度びスクリーンに当场すれば、ミイハア族をして、恍惚没我の境に誘い込んでしまふ、妖気と魅力を持つている『花形スター』を吾が女房にしている亭主共の性能は、如何なるものであろうか。

『奴は大したモンだよ、妻君のおかげで僕の家には住むし、自家用車はあるし、何不自由

花

形

ス

タ

ア

を

女房に持てば……



ないんだから」

さどといわれ、他で見れば、これ程羨ましい話はない。女房を毎晩中との伴として、あゝ、世にこれ程の幸福があるであろうか、誰でも一應は考えるが、さてその内幕はどうであらうか。

女房の花形スターにとつて、先づ一番大切なのは、映画会社のプロデューサー、監督さんで、この御両人の好意的且商業的協力なくして、スターはその眞價を發揮出来ぬ。

次に大切なのが、仕事のスケジュール、金銭関係の掛け引き、税金問題の交渉、ファンの取扱ひまでやいてくれる、自分のマネージヤ。これがしつかりしていないと、損ばかりして、海千山千のカッドウヤに喰われてしまふ。——だからスターはマネージャアを大事にする。そして、第三に大切なのが専主と相成っている。この順序は大體、性質、個性、それぞれ異つていても、スターたる生活上、順不動である。

さすれば専主は、スリラー映画よろしく、『第三の男』、云う事に相場が決つてゐる。専主を第二の男、マネージャアにしてみたり、第一の監督やプロデューサーにしてい

るスターも居るが、色眼鏡で見られたり、他の監督やプロデューサーが敬遠したりして、商業的ではない。特にマネージャアでは、品も悪いし、鬼の女房に夜叉の専主だなんて陰口をきかれるくらいが落ち、そこで、スターはこれ又、なん、云い合した様に、出所進退の朦朧とした、蔭の角みみたいな人物を選択して専主としているのも、人気稼業の成せるわざかも知れぬ。

それでも、専主が財界、藝術、医学と、映画とは掛け違つた世界の第一人者——かゝん——か云われる場合は、マダ——結構だが、彼女の専主たるや、名もなき一介のサラリーマンにして、その存在たるや、

『君いー奴は東宝映画の〇〇スターの専主なんだぜー』

なんて、刺身のツマみたいに、引合に出される身分では、ナンジョウモツテたまるべきやで、その心境、正に風雪二十年、慟哭、お茶漬の味、以上の苦衷苦悶、これに過ぎたるはない。

むかし佐伯秀男が女房の霧立のぼるこ東北地方へ旅行した際、ある宴席に、自分の名前が見当らず、よく——探したら、霧立のぼる

の席の隣に、小さく「霧立のぼるご主人」と席が指定してあり、佐伯がくさつたという有名な話もある。

とにかく花形スターの玄関に立てば、その専主の眞價は認識出来る云うもの——。先づ表札がない。あるのは洒落た女房の方の表札で、専主の客は裏口から、女房のは表口となつてゐる。

あゝ誰が爲に吾が女房は存在するのである、恐妻なんて、まだ、樂者の寢言みたいなもので、事ここに至れば、殺妻家とでも云うより手は御座いませぬ。

孤閨悶々の嘆き

スターの仕事と云うものは、およそ女性的ではない、花形ともなれば、二社や三社の掛け持ちは常識、するに家で食事をしたり睡眠を取つたりなんて云う、小市民的、オママゴト生活は、存在しない。時間から時間、ギリギリに制限され、これではスターの専主たるもの孤閨悶々の嘆きに泣かずには居られない。

野上千鶴子の専主は彼女と同じ新東宝のキ

カメラ助手、三十二歳の若さから、貝原益軒の養生訓通りに、換算してみても、四日に一回、いや三日に一回は、アノ道を行つても宜しいと云うことになつてゐるのに、

『僕等は年中途中下車なんですよ』

と、精氣蓄積過剰で青ブクレになつてゐる。彼にいわせると、サテ、今晚は云うので、彼女の方のO・Kを取り、システムの方法上、前戯など弄してゐると、愈々と云ういまわのキワに、乳房のベルならぬ本物の電話のベルがリンリンと鳴り出す。電話はすべて女房専用、これが明日はロケーションなんて云う前の晩だ、大変な騒ぎ、当分は孤閨に落ち入るので、彼氏の方もこの際思いを遂げようと焦慮つて、ことここに及ぶが、電話の方も、まったく、その邪魔をする爲に掛かるが如く――。

明日の天気はかような塩梅でして、气象台に間に合しました所、雨量がイクラで、寒冷前線が何ミリパールでと云つた調子、延々とやられる。すると他社から、明日のロケが雨で流れたら吾が社はセツトに入りますから、あの本のアノ箇所はこんな風に直しました。今読みますから筆記して、憶えて来て下さ

いと、長い長い通話で、後から――、これでは、シャカモコのシャカリキになるのは享主ばかりで、女房の方は冷鬱、氷の如くなつてしまふ。雰囲気も環境も閑房もあつたものではない。そこで、途中下車と云う仕儀になつてしまふ。

関千恵子の享主で、一寸なかなかの辣腕家で通つてゐるO君にしてからが、

『女優と云う物は、実に良く睡りますなあ、



家に居る時はグウ／＼睡てばかり居ますよ。それに、時たま早く帰つて来てくれた時は、今日は生理日で顔が変つちやつて、お仕事にならないのよなんてブラ／＼してますよ。そんな日には、こつちだつてお仕事になりませんや』

顔が変わると云えば、スタアの顔はカメラを通すので、肉眼以上に生理的変貌が的確に影写される。だから、明日のスケヂュールでは、顔のアップ(大写)があると云う前の晩は、女優さん断乎たる決意のもとに、享主の年中無休のホルモンの要求を却下してしまふことになる。

『明日の撮影はアップがあるのかい』

なんて、訊く時の享主の心情たるや、正に察するにあまりある悲劇ではないか。

大映の三條美紀の享主で、土建会社の社長だつた藤川豊彦も、事業不振以来、一介の享主連の仲間入りをして、この苦衷を味つてゐる。『女房との間の睦言に、やれ自動車の月賦がどうしたの、今月は所得税の閉切りだのと、経済的会話が多くてネ。どうして女優と云うものは、自個に立ちかえると、あんなに現実的になるんだらう』と、悩んでゐる。

いづれの享主も精蟲過剰で孤閨悶々が通り相場になつてゐるが、逆の立場もある。

強き者よ汝の名は



性道德だの、性倫理だのというモノは、タ
イトルとして重要だが、実践実行に望んでは
各人のリミットの強弱に頼る以外に方法はな
い。スタアはアノ道も強い、というのが昔か
らの常識、それが二十代やそこいらの女優さ
んだく、美容の問題だの、仕事熱心の功名心
だの、自制自戒して、享主の精蟲を頭上に

まで昇らせるような現象は表わすが、三十を
越えた、云うなれば、ナスの色気の年増の味
は、なんて状態になると、美容もクソもあつ
たものではない。美味美食、収入は多大で生
活は安定し、撮影所流行の、脳下垂体ホルモ
ン療法だの、注射だの、タタールステークだ
の、九龍蟲だのと、性慾補助剤を次から次に
吸収するのだから、爲に女体がシヤカモコの
シヤカリキになることは理の当然。
ホルモンスタアの異名は、伊達や酔狂では
ない清川虹子のオールホルモンの、オールナ
イトシーンに、帯夫よく立ち向うで、受け身
ながら奮闘した三枚目の伴淳三郎は、結婚二
年目に、孤軍力闘の田斐なく、世の中が朦朧
となり、朝つばらから天地眞ッ黄色に、晴れ
渡った天日に砂塵の雲がかかったりして、ホ
ルモンに憑かれた帯夫の末路で、終いには眼
精疲労炎とかで、精力が衰え、妻妾八十何人
で、生ませた子供が五十何人、果ては精力つ
きて此の世を去った、徳川十何代かの賢慮將
軍云われた、徳川家斉の二の舞だ、泣く
泣く、この天下の逸物 離別するウキ目とは
相成つたのも、アンバランスの結果である。
『だらしないわネー他で浮気するわよ』

なんて恐迫されるものだから、身にあまる
大役を乗り切ろうとしたのが身の不運、虹子
女史の進むホルモンの前に飽氣なく倒れ、危
く此の世を去る所を、かろうじて一命を止め
たのは、スタア女房を断念した賜物。

こんな事で女房に捨てられた享主と云うも
のは実に大い。轟々起子がヒロボン中毒で、
賢慮になつてマキノ雅博を離れ、年甲斐
もなく、タフ、ガイな奔馬を気取っている馬
耕二の下に走つたのも、今更ら男つぷりや、
氣立てにマイツた訳ではない。六十何人かの
女群を撫で切りにした股間の逸物に魅せられ
たにすぎぬ。

『オヤジは最近耳が遠くなりましたよ。それ
程の齡でもないのに、矢張り過ぎたるは及ば
ざるが如しで、寄る年並で自然現象には勝て
ませんネー』

と、息子の片山明彦が、オヤジのムスコを
嘆くのだから、タフ、ガイも、奔馬も、矢張
り末路は八ッ目鰻の御厄介と云う所らしい。
三宅邦子が邦技完二と、スキヤンダルを騒
がれたのも、彼女の享主が、老いらくの身
で、女房も大切、盆栽も大切なんて、喝の当
る所好みな老境を、トボトボしていたからに

他ならぬ。邦枝の子供だと云はれている一人息子を抱いている亭主の像は、北極のオットセイの生活を思はせる。

山田五十鈴が亭主を轉々として、青い鳥を探すが如く、放浪したのも、結局は吾れに適する代物と何処で、深刻複雑な情況は、何んの肩託もない連中が後で考えに出来事、現在の夫が加藤嘉が、悲凄なまでに、瘦せさらばえても、なおかつ、赤旗ならぬ、彼女の赤い腰巻を握つて離さないのは、分別さかりのサカリは強いと言言の如くである。

あゝ強き者よ、汝の名は……である云うべきである。

○
『僕は彼女の生活には、なんら干渉致しません。それが僅達の生活のタブーです』

新劇界のベテラン、四十年増の杉村春子と結婚した、三十歳の新夫は斯様に仰るが、藝術院賞まで貰った、彼女の芝居を干渉してはじまらないだろう。

『般の相違は問題ではありません、今度の結婚で、しみじみ感じました』

彼女の は、感じているが、しみじみと性慾のバランスを感じたので、生活はこれか

ら、五十、六十になつても、一件がシヤカモコとして、女性を欲する男の生理を、七十婆さんになつた彼女が、バランス・シートを保てるかどうか。最近、司年配の亭主を持つて、衰弱症や、性欲萎縮症にかかられて悩むよりは、思い切つて、若い燕的な、亭主を持つ事が、スタアの間で流行している。

全身は独尊できぬ



シワの中に目がある様、飯・蝶子婆さんでさえも、ホルモン療法のお蔭か、兎に角、急に若返つて、

『あたしやあゝこの年になつて、急に男が恋しくて、恋しくてネー』

なんて、色気狂の前驅的症情を表はし、亭主の桑原フォン氏を多量にさせている。

入江たか子が松竹大船の監督を亭主にしたり、水谷八重子が大映演技課の、昔なら一銭五厘で呼び出されて、ピンタの一つも喰つている様な二十一、二歳の青年を、ペペペなんて呼んだりして、愛撫している。斯様な亭主共の心境たるや、一体全体どんな了簡なのだろう。

愛慾と呼ぶには、あまりにもババアチイし経済的に見るには、あまりにも個性がなさすぎる。要するに、性力相的中した結果、華飾の典となつたのだろう。こゝばかりは、おゝそれながら、出雲の神様に訊いても、『スタアの亭主の心持だけは分らねえよ』と云われそうだ。

月丘夢路の亭主で、女房が浮気ばかりしやがつて、ヤケクソになり、契約金 所々ガ々からカスメ取り、揚句の果てに、フリーダ松木に云う、ストリップパーとかけ落ちした、永田君に云はせると、

『大失敗でしたよ、つまり有名人を征はする独専慾みたいなので、僕は学生時代から、世間の奴等が、スタアを神様みたいに願う』

つて、サインなんか貰うと鬼の首でも取つた様に喜んでゐるのが、癪にさわつて仕方がなかつたんです。其処で世間の奴等をアツと云わして羨やましからせてやろうと思ひましてネ、斯様な訳ですよ。

そんな所が大方の所かも知れない、高根の花を、手折る心境、あゝ彼女、寝たならばこゝろの、映画ファンの男性が憧れのスタアに寄せる妄想は、こんな所だ。それを現実に見よう、という功名心が、スタアの亭主には蔓延している。其処で、女房大事に、女房のズロースまで洗濯する様な破目になる。

探がしてえ歩く

リール、リールとくれば、何処に居るのか、何処に居るのか女房と云うのも少くなくない。

イサム・ノグチが山口淑子の金的を射止めた後、半年位は、彼氏、酒も煙草も断つて、もつぱら性力の蓄積に心掛け、撮影中は、ズウツとつきそつていた。徹夜もした。一語も喋らず、ただ、女房大事に、女房の一挙一動を見守り、撮影所の連中をして、

「あの色キチは、啞じやあねえか」

なんて、本当に思われた。その位、看視してないと、何処に居るのか、女房ツ、てな事になつてしまふ。

『丘は花ざかり』『彌太郎笠』『千羽鶴』『ギラム』と同時に、四本掛け持ちで出演している木暮実千代は、こんど家に帰る暇がない。この間も、パパさんの和田旦那が、息子を連れて撮影所に表われたが、あいにくと――。

丁度、彼女は、其の一寸前に、『今日は特種撮影につき、スタッフ以外入室厳禁』と称する入浴シーンを、ビニールのズロースも、ブラジャーも取つてしまい、全裸でどんぶりと入り、スタッフ連を、しんとろりとさせた挙句に、『みんな、三助だと思えばいいのよ』なんて、モジモジしてる杉葉子を、アフツて次なる撮影所に消えてしまつた。

「気の毒だなあ、大映だろ、違ふかな」

方々電話で問い合わせたが、消息不明だつた。スタアの亭主たるもの、梢然たるを得ない。だから、夜一人で寝ていても、今頃女房はなんて、考えると、一睡も出来ないそうさ。そうか、云つて女房の側にへバリついていては、女房の人氣にも触るし、第一女房に嫌は

れてしまふ、付かず離れず、常に看視してなければならぬ。

関千恵子は最近まで独身だこぼつかり思われていた。亭主操縦法宜敷きを得てか、亭主の存在たるや、一寸した猿飛佐助だつた。

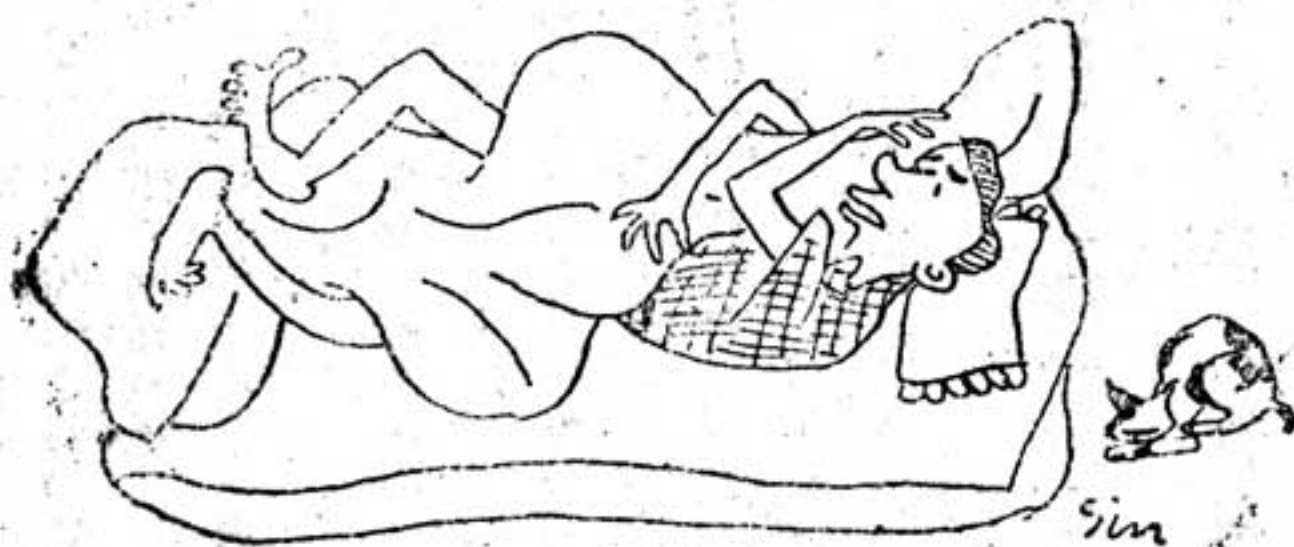
「正門から出入りしては駄目、應接に灯りがついている時は、会社の人か雑誌者の人が來てるんだから、絶対に家に入つては駄目、モシ家に居た時に、人が見えたら、では失礼致しましたと、早々に退参するのよ、会社には、家が火事になつても來ては駄目」

以上の様なタブーが嚴密に守られたに違いない。だから、慧眼だか闇眼だかの、巨匠山本嘉次郎先生が、バンビ、バンビと彼女をイタク可愛がり、一旦亭主持ちがバレると、ソツポを向いてしまつた。これが本当のバンビ休すである。

あゝ亭主早までり

若山セツ子の亭主に監督の谷口千吉がなつた時、カッドワヤは口を揃えて、『オオ、美女と野郎だな、あのコンダテは』と驚いた。

空白の八かなをよ



—(145)—

飲み屋マダムと

文士たち

Z・Q



文士と飲み屋は六変因果関係が深い。

戦後の日本文学は、東京の下真中の、新橋新宿あたりにならび立つたカストリ屋台を背景にして誕生したといつてもいい。

カストリの屋台のままの時代には、日本の戦後文学も、非常にカストリ時代であつた。文士どもは酒ずきの連中なら、大家・三文文士を問はず、このカストリの屋

台の縄のれんをくぐり、悲しいような、敗戦のカストリ小説を書いたものである。

それから五六年たつた。

カストリ屋台はだん／＼綺麗になつて行き、いまはもうカストリ屋などという人間はない。——立派な呑み屋になつたからである。何でもある。特級酒でも、泡盛でも——。まア、ケツコーな世の中になつたものである。

カストリ屋が綺麗になり、汚らしいお内儀さんが、小綺麗主婦人になり、やがて艶っぽいマダム

になるのと同じように、文士の小説も、だん／＼ロマンチックになつていつたのであつた。

かくて当然、その飲み屋のマダムの罫りで、鼻の下の長い文士連中が、にや／＼しながら酒を呑む仕儀とは相成る。

まず、新宿の「マコ」という店の、マコという女性と、藤原審爾が火の子をあげた。——政治家や財界人などは、なるたけ火の子を見せまいとするが、文士はその点浅ましい。いや、浅ましいというよりも可愛らしいという方がいい。——あまり女の子なんかにもてたことがないものだから、喜んで、すぐに小説に書いたりする、書くからすぐに分つてしまふ。

同じく新宿の「道草」のマダムと、梅崎春生が、このころ大変にアツイという噂であるし、また新宿の道草に近い「ナルシス」のマダムは、ちよいとツンとした、

男の好きそうな女で、田村泰次郎や草野心平などが、鼻の下を長くして通つていた。

飲み屋から、更に、バーとなる、これはもう、完全に独立した日本の、悲しくも植民地的な表情を反映してしまつて、そのマダムはいとも怪しげなのが多いが、その中でも、銀座の「エスポアル」のマダムは、ひどく妖艶で、一とこ、丹波文雄や、東郷青児や白州次郎など、通つていたし、マダムは／＼寝に／＼か、その後で白州にも寝に／＼か——いろいろ噂のある女狐である。

その他にもいろいろあるが——とにかく、まア、カストリ屋台が、バーにまで発展し、カストリ小説がバー文学にまで昇格したのはまア喜ぶべきことになつたのもあろうか。呵呵

☆

☆

すどみあ 男 娼 無 慘 絵

丹阿彌春彦

桜井 光 画

臀部を鞭打たれる籠った鈍い音は何度も續いた……感覚がしびれるまで鞭打った哲子の肉体に、無帽の男もやがて……

樹皮に裂ける肌

葉子は浴槽に洗んで、湯の中にひらめいて、白い下肢をじっとみつめていた。

かがんでいるので下半身はことさらに短く、畸型に見える。それが湯の波の輪が拡がるたびに、ゆらゆらと揺れた。波間に裏がえる鱗の腹の白さを幻覚させるのだ。

美しいな——とわれながら思った。静かに下腹部に手を当てた。湯の波はまたひとしきり動いて、女のようにむっちり肉づいて太腿をひらめかせた。

笹見葉三は、今夜からもう男の葉三ではな

いのである。葉子として、女の媚びを粧い、初の客席に出ることになっていた。

葉子は下腹部に延ばした手に、悲しい男の性をみつめる。脂肪が厚く、色白に肥っている。胸の乳房も普通の男性に比べては盛りあがっているが、そこにもやはり女体にあるべき丸味は失われている。葉子は葉三であった昔から、男の体質であることが悔まれてならなかった。女でありたかった。物心ついてから十九の今の年令まで、男でありながら女に対しては全く不感症だったといっている。唯男に愛される切なさを感じるとき、昂奮が潮のように胸を突上げるのである。

葉三の実家は兵庫の山村で、貧しい生活を

していた。十五才の時、農家の手伝いに出され、その作男が春の苗田で逞ましい脛をむき出しに泥田を歩く姿をみて、彼は初めて欲しい動揺を胸に覚えた。不思議な快感であった。その逞ましい足、踵の下の泥に寝て、その泥土にまみれながら踏みくだかれるまでに圧力を受けたとしたらどんなだろう。五体はしびれ、肉は血を吹いて裂けるかも知れぬ。血と泥にまみれながら、男の力というものを十分に感じられるだろう。そう思うと、十五才の葉三の目は昂奮で赤く血走り、全身が何か目に見えぬ魔の力で強く引締められるようであった。彼は初めて感覚したその不思議な魅力に憑かれたながら、作男の脛の毛にま

つわりついた泥を、秘かに、いつまでも盗み見ていた。

やはりその農家で、入つになる女の子が無雑作に放尿する姿を彼は見たことがある。農家の前庭の両水はけに一筋堀りとおされた小溝のところである。女の子のしぐさは可愛かった。だが、その姿をみつめているうちに何ともいいようのない不快な念が葉三を襲っ

た。何と醜い姿態であったことか、ぞっとする程その女のものが厭になった。

彼はある日、裏の松林に秘かにわけ入った。そして一本の太い逞しい松の幹を前にして立つと、手にしていた荒縄で三重、五重と自分の身体を松の幹に巻きつけた。そして余った縄の両端を両手に持つと、それを力のあらんかぎり引締めた。息も苦しい程になった。彼

の布子一枚の肌は木の荒れた肌にびったり密着してきしり痛むのだが、彼はそれをなおも苦痛に堪えながら絞っていく、すると、やがて胸にも両腿にも、わななくほどの快感が走ってくるのだった。

彼はこれ以上の痛苦には、とても堪えられそうもないといった苦悶の表情を浮かべ、その苦悶の身悶えを増しながら、快感に陶然と



酔っていく。作男の泥にまみれた足、殺倒する男の力を描きながら、彼は快感が極点に達していくのを味わった。

葉三は思ったとおり、この計画で満足できたのをよるこんだ。

自分は女であるべきだったのだということ、を泌々おもう。いま浴槽の中の下腹部に、男の性をさぐって、悲しい嘆きが溢れるのも、そうした思いからである。

「おい、いつまで湯につかってるんだ。もう出掛ける時間だぜ、先方はお待ち兼ねだっ」

荒い胸間声が浴室の外に響いた。葉子を初めて客の前に出そうとする葉田の焦れた声であった。

息づまるの撫

葉三は兵庫の田舎から人買いブローカーに買われて、尼ヶ崎に売られた。尼ヶ崎はもとも男娼の土地である。葉三はそこで十分に仕込まれた上、客を取らされる筈だったが、その一歩手前で葉田に買いとられ、東京に連れてこられたのであった。葉田には葉田で、この廻り出しものの葉三を向ける先が、ちゃんと目鼻に組んであつての仕事だった。

葉三改め葉子、風呂から上ると、洋装のカラー、粋な和服が待っていた。春のショールを肩に、白足袋を履いて立つと、五尺二寸、小肥りの彼は、もうどこからみても女だった。赤いルーージュも冴えていた。

「やっぱり粋な味はトバ(和服)に限るな、これならあの難かしい親爺もおんの字だろう、イヒ、」

葉田は葉子の女らしい丸い腰を眺めて目を細くして笑った。

「さ、行こう、あんまり焦らさねえうちに顔を見せねえことにゃあ……」

後の半分は独り言で、葉田は吸いさしの煙草を大鉢の灰の中に荒っぽく突き差すと、そういつて立ち上った。

明石町の葉田の自宅から、隅田川畔の待合「銀月」まで、ほんの一またぎであった。

その一間で、株の興津で知られた興津証券の社長、興津孫兵衛が待っていた。

てらてら光る禿げ上った頭、でっぶり肥って、ゆがんだような童顔は赤く酒焼けしていた。

「葉田、馬鹿に手間をとるじゃあないか」「へへへ、何せ、おめかしに時間をかけましてな」

葉田は葉子をそと押しやるように興津の側へ坐らせた。葉子は五十年配の興津を素早く盗み見て、さすがに身体がふるえた。どんなことをされるかは知らない。しかし何れこの身は人身御供である。目の冴めるような女裝に、ほんのり酔ったようなよろこびを抱いていた葉子だったが、この肉体を自由に委せる相手がこのヒヒ爺のような男であつたことを知ると、葉子は恐怖に追われるもののように

おののきの意識は、はつきりとした形にはとらうてい掴めない。しかし、それは初めて肉体を犯される処女が抱く恐れに似たものである。にちがいがなかった。葉子はもとより、処女が初めて身を許す恐れを知るはずはなかった。にもかかわらず、それが同じもののように思えた。いや、逆にいえば、葉子は本当の女の

気持で、初めての男に肉体を捧げねばならぬ恐怖を、持っていたといつていい。そしてこのような、理由のはっきりせぬ恐怖というものは、それこそ本当の女の初夜にもあるものだらうかと思つたのである。

葉田はいつの間にか姿を消して、興津が葉子の手を取った。「ふふ、柔かい手だ、さ、まず酌をして貰

おうよ」

舌なめずりと共に、興津は露骨に葉子の顔をのぞき込みながら、舌をつき出した。

八畳の、一間に床の間に背に安坐をかいだ興津は、既に酒の酔いも十分のようであった。

「どうだな、いままでも相手をしたことはあるかな、繁田の話だと、まだ何も知らん様子だ」といいよったが、本当なら今晚はゆっくり教えてやろうよ」

興津はそりいながら、固く握った葉子の手をとって膝の上に引寄せると、今度はその頬を抱いて、酒臭い口を近づけ、葉子の綺麗な描いたルーシユの唇を割って、分厚い唇を無理矢理にねじ込み、口中を荒く酒の浸みた舌でひっかき廻した。

「あっ、ゲッ」

危うく吸った息と共に、興津のさし込んだ舌をのどぼとけまで吸い込み、葉子は激しくそれを吐き出した。

「はは、そんなことではとうていわしの相手は勘まらん、どれ、もう一度」

葉子の白いのど首は興津の太い腕に抱き込まれたまま、益々力が加えられるのみだった。もがいてその手を振りほどこうとして

も、葉子の力ではどうにもならない。そのうち、また酒のたっぷり浸みた舌が、急激に咽喉の奥を襲った。葉子は脳の奥を舐めまわされるような感じを受けて、失神するのではなにかと思うほど気が遠くなった。

「さ、お前もわしを喜ばせてくれ、お前が今知ってるだけのことで喜ばせて貰おうよ」興津はそりいとう、のしかかるように葉子の上に覆いかぶさった。

覗かれた秘蔵

葉子は興津にその夜目茶苦茶な愛撫を受け、玩弄された。そしてそれが女の役を果す男として、葉子の開眼であった。興津は特定の葉子の客となった。だが繁田はヒモになって、興津の用のない夜は葉子に客を取らせるため、浅草六区の盛り場を泳がせるのだった。

「葉ちゃん、今夜はあぶれるよ、パンがみんなさらっていったんだ」

何時の間にか、葉子の後に立った哲子が話しかけた。顔馴染になった同じ男娼仲間だった。

「あら、そう、もう今からないかしら」

客の潮をパン（売春婦）がさらって行った。

パンの安売りで、盛り場は男娼がだんだんフリーの客から見離されていく傾向があった。

「まあね、でも、葉ちゃんみたいな可愛い子はわからないけど、まあ、いいやないの、今晚はあたいに付合ってお茶にしないな」

哲子はしきりに誘った。いつか煙るような春雨になっていた。

六区から馬道の方へ哲子の後について行く、とある寺院があった。その本堂にこっそり哲子は履物を脱いで昇った。

「おいで、此処は絶対に大丈夫なの」

葉子も上って、二人して本堂の隅に座った。正面には金色の仏像が戸外のかすかな光を受けて浮き上っている。

「葉ちゃん、あたいはあんた見たときから、好きで好きでたまらんかったんや、ね、今晚は思いきり遊び合おうよ、いいでしょ、あたオタチやってあげるわ」

「オタチって何ですの」

「あら、知らへんの、オタチっていわば男よ」

哲子は息をはずませるようにいう。

「ね、遊ばせて……」

「あら、姉さん、本当なの、遊ばせて……」

葉子は倒れながら、信じられないように聞いていた。客を遊ばせる商売の男娼が、おたがいに遊び合う、そんな無駄な労力を使っているものだろうか。

「本当よ、本当よ、あたいはもう、あんたの身体みるとたまんないの、好きよ、だから……」

哲子はとぎれとぎれにいった。

戸外は静かに春雨が煙っている。騒音も消えた夜更けだ。まさぐり合う二人の女装の畸型男たちを静かに見守っているのは、正面の金色の仏像のみであるように思えた。

誰に遠慮する必要も感じない。哲子は狂おしく葉子の身体をまさぐり、自分のハンドバックからウビガンの小粒を出すと、それを葉

子の下腹部に撒き散らした。

甘い香料の香くわしいにおいが、葉子の下腹部から漂い出て、やがて堂のうちにひろく参みひろがって行った。

哲子は葉子の白いふくらんだ喉の肉に、強く唇を押しあてると、甘い花の液でも吸うように、其処を吸った。そしてお互いの楽しいフェラチオもいつ果てるとも知れぬ程続いた。

たわむれ合ううちに、葉子も何時か哲子の情熱に負けて、受者の精を目覚めさせていくしびれるようなよさ、それはあの興津などには到底味わえぬものであった。

「葉ちゃん……」

「哲子さん、いい」

二人は囁きながら、その悶えをいつまでも続けてゆく。

その時であった。誰も居まいと思われた本堂の須弥壇の陰から、若い労働者風の男が二人あらわれて其処に立った。

「あっ」

葉子が驚ろいて撥ね起きた。哲子も思わず起き直った。

「あは……、いや、面白いところを見せて貰ったよ、だがおいっ、おめえたちは一

処を何処だと思ってやがるんだ。ふざけやがって、兄弟、こいつら縛って、ひとつ返事を聞こうじゃあねえか」

一人の男がいうと、他の一人も合点とばかり、それぞれ哲子と葉子の腕をとった。そして堂の四辺にあった幕の麻紐をとると、素早く両手を後手に縛りあげた。手拭いで猿轡もかませた。そして其の場に荒く肩先を蹴っころがした。虚脱のうちに、哲子も葉子も何をどう抵抗する気力もなかった。あつという間に、もう二人の自由は完全に奪われていた。

暴虐

葉子は戸外から射し込むほのかな光りの中で、わずかに毛脛を浮かびあがらせている男たちを見た。一人は無帽で、一人はハンチングを着ていた。二人ともトックリのジャケツトを着ている。労働者であることにまちがいはない。宿にあぶれて、やはりこの堂を頼って来ていたのだろうか。

「あたいたちを縛って、一体どうしようってんだい、手荒な真似をすると覚えておくよっ」
哲子がづりおちた猿轡を噛みながらいった。





「へっへっへっ、いうことがいいや、俺たちはこれから関西へ飛ぶんだ、覚えていて其処までもついてくれりゃ可愛いもんさね」

労働者はあざ笑った。そしてゆうゆうと猿轡をかけ直した。

「さ、これでじたばた出来やしねえんだ。ゆっくり夜の明けるまで、東京のお名残りを惜しもうじゃあねえか」

「あっ」

葉子の目に哲子の白い太腿が目射た。自分とても同じことだった。露わになった腿の肉の白さが、この若い労働者たちの目にどううつるだろうか。

「あっ、よしてっ」

思わず葉子は叫んだ。そして両膝を固く合せ、腿を密着させて男の手がそれ

以上入るのを拒んだ。

「おっ、こりゃあ駄目だっ、足も縛ろう」

男たちはうなづき合って、二人の跳ねおどる足を押さえ

るとエビのように背に吊りあげた。再び男の冷たい手が、葉子の丸い両膝をつかむ。

今はもう観念するより仕方なかった。すると幾らか気持が落着くようだった。労働者に対する怒りは、憤怒でありながら、また被虐のこゝろよさにも変っていくのだった。

労働者のほんやり浮き上った毛脛が、逞ましい男の表徴のようにみえて、葉子は不思議な感情のうごきを味わっていた。

だがそういう間にも。労働者の好奇に充ちた視線や動作は少しも休んではいなかった。その楽しみ方は、子供が丘に上った河童をつかまえて、弄ぶのに似ていた。

乳をまさぐり、下腹部を調べ、尻の肉をつまんだり、弾いたりした。

「おい兄貴、少しの間向うを向いていてくれよ」。

無帽がハンチングにいった。

「あはムム、そうか、いいとも、いいともどうせお代は要らねえんだ、ゆっくり遊ぶがいいさ、それとも競争といこうか、どうだ」ハンチングがいった。

「うん、それもよからう」

無帽は哲子のエビのように背に吊り上げた

足だけ解くと、今度は丸柱にくくりつけた。哲子はそうされながら、次に来るものが何であるかを知って、

「うっう、う、うっ」

と低く唸いた。が、もう、もがくだけで、再び猿轡はすり落ちるようなこともなかった

獸欲の犠牲

哲子の露出された臀部がほのかな光りに丸く見えた。

腹這いにねじ伏せられ、両手は後手に、両肢は左右に開いて縛られている哲子は、それでどう抵抗することも出来ないだろうと思われた。だが、サシズムの快感に充分に酔った無帽の労働者が、さて哲子の肉体を求めようと焦りながら、いっこうにその欲情は燃えられそうになかった。

彼は哀れに、唯醜い姿をさらすだけであつた。哲子が必死に拒否をつづけているのであつた。男は汗を流した。そして哲子にいどみつづける。しかし、唯焦りが昂まるだけのようにはみえた。

「兄貴、とても駄目だよ、こりあ、どうにもならねえ」

無帽は遂に悲鳴に似たものをあげた。

「あはっはっは、たらしがねえぞ、よし、見てろよ、こりやるんだ」

ハンチングが、今度は葉子に迫った。不可解な感情をもて余していた葉子だったが、男の突然の行為に、やっぱり無意識的な拒否があつた。しかし葉子には哲子のような芸は出来なかった。激げしい男の力を肉体に感じながら、歯を食いしばって拒否を続けているつもりなのだがハンチングは無帽の男よりも巧みだった。

その変化のある苦痛に、葉子は遂に堪えられなかった。

「おいみろよ、こりやるんだ」

ハンチングの男は凱歌をあげて征服した葉子の肉体を自由に弄んだ。

「よおしっ」

それを見た無帽の男は唸った。そして腰の皮バンドをとると、それを哲子の臀部の上に一振りした。皮バンドは恰好な皮鞭であつた。それはびしりと音立てて鳴った。丸い哲子の臀部がびくりと波うち、うっううっうとめく声が洩れた。

男はなおも二振り三振り、その皮鞭をふりおろした。哲子は苦痛に喘いで、縛られた四肢をのた打たせた。明るい家の中で見たなら

哲子の柔かい皮膚は皮鞭に破られ、血をほとばしらせているかも知れない。葉子は自由になるなら、駆け寄ってその血をすすり取ってやりたいとさえ思った。いや、できるなら、哲子の代りに自分の肉体をその無情の男の情欲のもとに供してもよいとさえ思った。

それほど哲子の苦悶の喘ぎは痛ましい。薄暗い堂の中で、臀部を鞭打たれる籠った鈍い音は何度も続いた。そして、遂に哲子も最後まで拒否する力を失っていたのだ。感覚がしびれるまで鞭打った哲子の肉体に、無帽の男もやがて凱歌をあげた。

哲子は唯、男のなすがまゝに肉体をまかせながら、失神していたのだった。

男たちはやがて立ち上った。

「おめえ、名は何ていうんだ。東京に舞い戻ったらまたヒイキにしてやるぜ」

ハンチングの労働者は、ぐったりした葉子の頭に手をかけて顔をあげると、その疲労にうっとりした目にそう話しかけた。

葉子の脳裡には、そのハンチングの男が、嘗てこの肉体を乱暴に扱った興津であるようにもふと思えた。そしてまた、いつか故郷の泥の苗田でみた、あの遍ましい小作男であるようにも、――

(終り)

獵寄篇 洗城と貞操

勝ち誇った、軍隊が、占領地で掠奪、暴行をほしきままにするのは、宿命的な戦争の惨禍のひとつだ。

中国が統一されていなかった内戦の暗黒時代には、同民族のあいだにさえ、これが行われた。中国ではこれを「洗城」といって、司令官は、勝った軍隊にボーナス的な意味で、この洗城を黙認した。かちいくさ御苦勞さま、というので、ある期間をかぎって、掠奪、暴行をやらせるのである。

日本の軍隊も、この洗城令こそないが、大陸の戦線ではかすかすの惨虐の記録を残した。平常おとなしい人間でも狂的な戦場心理に支配されると、惨酷な行為を平気で行う。筆者は大陸戦線のある地点で、廃屋の壁にはりつけられてある、挟りとられた××をみたことがある。

その××の持主が、おそろしい惨虐を加え

られたすえ、無惨な死体となって遺棄されたであろうことはあきらかだった。附近の廃屋や、池などを探したが、それらしい死体は見当らなかった。ただ、ある池を探索していると、××に棒をさしこまれたまま、水ぶくれになって浮いている、年増らしい女の死体があった。

暴行した兵士が、その相手の女を殺すのは憲兵隊などに密告されてその事実が発覚するのを恐れる点もあるが、狂的な暴行心理の延長で、相手を死にいたらしめる場合も多い。戦場馳驅のあいだに抑圧されていた兵士の本能が、たまたまそうした機会にバク発したとする。

しかし、本能のマンゾクは、予備行為や、平常の馴致が行われていないと、完全でない場合が多い。

ながい禁欲期間のなかでポツンと一回こっきりの発散があったとしても、うまくいかなかったことが多いのである。

したがって、兵士たちは、暴行によってもなおみだされないう本能の飢渴をおぼえる。まして、暴行などは、緊迫した、おちつきのない環境で行われるから、なおさらである。その不満感、たやすくサディズムに転化する。

殺さなければ蟲がおさまらないという心境である。

かくて、暴行し去った後、その対象を惨殺したいという願望がうまれる。

こうした戦場の惨劇を一掃すること、それは結局、戦争そのものを一掃することによってしか、得られないのではあるまいか。

本社 責め写真 特選 百態集

一見恍惚！再見陶酔！被虐地獄にのたうつ豊満な裸女の姿態！絶対に他社の追従を許さぬ傑作写真集！
最新版第一集より第五集まで出来！

キャビネ判・高級厚口印画紙
焼村、各集三枚一組三〇〇円
(送料共)

讀者のための秘密ロサン

よ

に

あ

通

信

向後等



一 少女愛好狂の中年男

三十二才の会社員です。妻帯者、五才の男児があります。二年ほど前より困った病氣にとりつかれて、そのため夫婦生活もうまくいかない状態です。

それは、少女でなければ恋愛的感情も性欲も起らないという病氣なのです。その原因らしいものを考えてみますと、三十才の春、薄給で生活が苦しいためアルバイトに家庭教師をしてからです。

最初に頼まれたのが、近所の十四才になる女子中学生の勉強を見てやることでした。そ

の父親というのは会社の重役とかいう人で、広い邸に住んでおり、娘の部屋も両親の居間とは、はなれた二階の隅にありました。そこで、その少女と二人きりで、英語やら数学やらを見てやっていると、私は彼女の汚れない清純な顔や姿態に、成人の女性からは味えぬ大きな魅惑を覚えるようになってしまったのです。

私はいくたび彼女に手を伸ばそうと思ったか知れませんが、伸ばそうと思えば呎尺の間にある彼女なのです。しかし、無理に抑えつけました。

それから私の少女狂愛癖がはじまったのです。道を歩いているとき、或は電車の内など

で、十四、五才の可愛い美しい少女を見ると、私はもう堪らなくなって、尾行したり、傍に寄ったりしてしまふのです。

このままこの病癖が昂進すれば、かの樋口芳男やウグイス男のような犯罪をしでかさぬともかぎりません。私はそれがおそろしいのです。

(北海道 池野約一)

(解答)

少女偏愛は男のサジーズムから来ている。少女は、大人から見ると、ひ弱さ、可憐さがあふれる。そのひ弱さ、いじらしさが、成年男子のサド的欲情をかきたたせるのである。あなたが家庭教師中、教え子の少女の清純

さに魅惑を覚えたというのも、やはりあなたのサド性から来ている。それは成年の女性では得られぬ清純さに対する征服欲であり攻撃欲である。

男も三十四十になると、性愛の心理が非常にサジックになって来る。そのサジックな愛撫欲を満足させるには、少女が最も好対象なのである。

或る女学校で、生徒の誘惑被害の状態を調べたところ、電車内などで女学生の臀を撫で、り手を握ったりの性的な悪戯をするのは、三十才から四十才位までの男（それも紳士風の男）が、断然首位を占めていた。これによっても、少女好愛者は中年男に多いということが分る。

こうした少女好愛が、盲目に入ると、病的な色情的少女愛好狂となり、少女姦などを犯すにいたるのである。

あなたの場合は、文面によると、一度も過失を犯したことがないらしいから、自制心の強い人といえる。

私の知人に少女好愛症の男があつて、彼は妻を常に少女風の髪形、服装にさせて、辛く

も己が性癖の脱線を防いでいるのがあるが、そのような附焼刃より、一度精神科の医師に相談されることをすすめる。

二 女の悪臭に

陶醉する青年

僕は婦人の体臭に特別の狂崇を覚える廿五才の青年です。

独身者ですし、比較的收入の多い仕事をしておりますので、時々芸者遊びなどもしますし、キャバレーや特飲街にも出掛けますが、その際相手の女の体臭を嗅いだだけで充分満足してしまふのです。

相手の女の肉体から発する女性特有のにおい、それは髪油や白粉などの匂いの混じったいわゆる芳香よりも、むしろアクの強い臭いの方に欲情を唆られることが多いのです。そうした意味で、僕の最も好きな女の臭いは、

- 一、わきがの女の臭い
- 一、月経時の女の臭い
- 一、男の肌を知らぬ女がもつ特有の臭い
- 一、性的疾患をもつ女の臭い

一、女性のあらゆる分泌物（排泄物ではありません）の臭い等々です。

長年の経験から、私は、女性に会うと、その臭いを嗅いだだけで、この女は今メンスだとか、この女は婦人科的疾患を患っているとか、或はこの女は男を知らぬなどということ、すぐ見別けられます。

ですから、女遊びの際にも、以上のような臭いをもつ女とだけ性的交渉をするようにして、それ以外の女とは文字通りの遊びだけにとどめておくのです。

私のような男が他にもあるのでしょうか？

（東京 岡松史郎）

（解答）

体臭と性愛とは大きな関係のあるものである。香料として尊ばれている麝香が、交尾期に異性をひきつけるために、麝香猫、麝香鹿、麝香鼠などの動物の身体に発生するものであること、或はもっと手近な例では、交尾期の犬猫が互いに仲間の異性の尻を嗅いで歩くことによつてもそのことは明瞭だが、それは動





物だけでなく、人間においても同じである。

異性の体臭から性欲を誘発されるという例は非常に多い。決してあなたばかりではない。ただ、体臭の微弱な日本人の間では少く、その強い欧米人に多いようだ。

東洋人ではインド人や中国人に多い。たとえば、インドでは相愛の男女がおたがいに汗の浸みた寝巻を交換しあって着ける風習があることも、その一例である。

わきが、(腋臭)も、普通の人には嫌われる悪臭だが、中には、この臭いを嗅ぐとすこぶる興奮をそえられるという人もある。

或る女性は、ふだんは異性の体臭に興奮を覚えないけれども、愛人の腋臭を嗅ぐと、たちまちオルガズムすると告白している。

あなたの云われるように、体臭でその人の処女か否か、或は病気が否か、或は月経時か否かなどを嗅ぎ分けることができるという学者もいる。

ただ嗅覚は人によって非常にその感じ方が違うもので、自分の感じを他人に云い現わしにくい。たとえば、或人は或る臭いを腐ったバタのようだというし、或人はそれをチーズ

のようだというように、一定しない。つまり

その臭いの如何は、当事者の主観的のもので、一般に分るように表現しにくいものなのである。

あなたの場合は、相当狂的な体臭愛好者と云っていいだろう。

三 偶像狂の女性

二十三才の独身女性です。職業は中学校教員です。

忘れもしません、女学校四年、十七才の秋でした。修学旅行で東京に來まして、ちょうど上野の美術館で開かれている美術展覧会へ行ったのですが、その彫塑室で、一つの男子裸像を見たとき、私は、いままで生身の異性からも覚えたことのないような恋情と、正直に言えば性的興奮をすら感じたのです。

それは銅製の等身大の彫刻で、体軀全体、筋肉が隆々と盛り上り、その顔形も魁偉とでも表現するような強面の風貌で、しかも銅彫なので、全体がテカテカと黒光りし、今にも握みかかってでも来そうな力強さを現わしてお

りました。

実際、私は、そのとき、その像に握みかかれたように錯覚し、思わず身震いしたくらいです。全身が痺れるような、快い身震いでした。私はその像に完全に恋着してしまいました。

そして出立前に自由行動を許可されたとき、引率の先生には親戚の家へ行くからと偽って、ひとりで上野の美術館へその彫刻をも一度見に行ったほどです。

旅行を終って家に戻ってから、しばらくはかの裸像を忘れることができませんでした。或るときその幻を思い浮べてひとり楽しんだり、夢にまでも見ました。

それから私は、生身の男性よりも、かの裸像に似た彫刻やら仏像を愛するようになってしまったのです。

学校を出て、職につくようになってからは、見て巡るだけでは我慢できなくなり、少い給料の中から貯金して、その金で或る彫刻家に頼んで、自分のアイデアを話し、上野美術館で見た裸像にそっくりの彫刻を製作してもらい、それを自分の部屋において、朝夕、

恋人に接するうちに愛撫してというよりは、自分の気持では彫刻に愛撫されて、何よりの愉悦としております。

私はこの彫像さへあれば、生身の異性などすこしも欲しいとは思いません。

(戸部 紀子)

の像に恋慕して、これと交ったという話が記されている。江の島の弁天像は、一般には非公開だが、一絲まとわぬ裸像なのである。

船員などが長い航海中に、寂寥を慰めるために使うといういわゆる「胴人形」なども、異性の代用物のためではあるが、反面一般人の中にもある偶像姦の現れと見ていいだろう。

偶像愛好性は一般の人の中には、多少はあるものだが、あなたの場合は、完全なビグマリオリズム(偶像姦)といえる。そもマゾヒスティックな偶像狂愛者である。

昔、ギリシャの彫刻家ビグマリオンという

人は自分で製作したガラテアの像に恋着し、ついにはその像に生命が通って夫婦になったという伝説から、この言葉が生れたのだが、概してこの偶像姦は女性よりも男性に多い。昔の像の本には、或る浪人が江の島の弁天



私が考えるのに、あなたの場合は、一種の男性恐怖から、現身の異性を避けて偶像に恋着するようになったのではないだろうか。もし、あなたの前に、上野美術館で見たという彫塑のような、容貌魁偉、筋骨隆々たる生身の男性が現れて、あなたに求愛するならば、あなたの偶像狂愛性は治るのではないかと思われる。

四 女性の脚を

狂愛する男

私は女性の脚に狂熱的な愛慕を抱く男です。

女性を見ると、私の眼は顔や姿よりも、まずその脚に注がれます。そして、惚々や或は睨みするうちに、それに見惚れるのです。

といっても、いわゆる大根足といわれるような格好の悪いそれは嫌いで、あくまで脚線の美の整ったものでなければなりません。美しい脚ならば、それがむきだしの脚だろうとナイロン靴下の脚だろうと構いません。

シットリと脂ののった色白の美しい脚、考えるだけでも生唾が出て来ます。そのような脚を見ると、それに触れてみたい衝動に駆られてなりません。

ストリップ・ショウなどを見に行っても、私は、他の男の観客のように、乳や臀などには目もくれません。注視するのは脚脚脚です。よくストリップバーが、観客の獵奇欲を満足させるために客席へおりて来て、手を握らせたり乳房に触れさせたりすることがありますが、そんなとき、私は思わずその踊り子の脚に触ってしまい、失笑されたことが度々です。





読者の中の私と同じ脚マニアよ、お便り下さい。
(崎玉 岩本生)

(解答)

久米の仙人は、洗濯をしていた女の白い脛を見て、通力を失って下界に落ちたという話は何人も知っている。しかし、それがほんとうの話だということを知っている者は少ない。

いずれも架空の作り話だと思っている。これは現代人の疑い深い悪癖である。

久米の仙人の話はほんとうの話だが、勿論天界の仙ではなく、仙の法を修行していた者なのだ。それが、或日高所から女の白い足を見たために、フラフラとなって女の前に落ちたのである。

久米は後にその女を妻としたといわれている。久米仙人のごとき修行者にして然り、況して煩惱(もろもろの欲望)に支配されているわれわれが、女の脚に魅惑されぬわけはない。フェチシズムの一つである脚フェチシズムは非常に多いのである。

試みに電車の内、或は駅のホームの階段な

どを昇り降りする男性の様子を窺ってみるがいい。その大半の男の目が女性の臀部でなく、脚に注がれていることに思い至るであろう。

が、単に見て楽しんでいるうちはよいが、これが、マニヤックとなると、女の脚を幻想しながら自慰したり、或は、女の脚に強いて



触れたり、又は女の足に蹴られ踏まれることを欲求したりする。

このように男には脚フェチシズムのものが多し。女性たるもの、脚の美容に留意すべきであらう。

五 色情老昌症の老婆

私の親戚に今年七十六才になるおばあさんがいるのですが、この年令になって、誰彼となく男を欲しがり、独り住居の隠居所へ始終男をつれこんで、村中の噂の種をまいている仕末です。

相手になる男は大抵四五十の人が多いのですが、中には二十三十の若い男もある様子です。

縁につながる者として、恥しくて困るのですが、このような年令になっても、そんな気が起るのはどういふわけでしょうか。又そんな老婆でも男女関係ができるのでしょうか。

(千葉 多々羅元)

(解答)

その老婆は色情老昌症といって、老年になってますます性欲が旺盛になる病気である。勿論、性欲というものは、個人個人みな違ふので、八十才以上になっても、性生活をいとなむ人もあって、かならずしも病気とはい

えないが、それにも程度があり、夜毎に異性を欲しがるというようなのは、病的といってよい。

このような老婆は、大抵が幼時に性的早熟であつて、月経も人より早い。月経が早ければ閉止期も早いものと多くの人は思っているようだが、事實は閉止期が遅く、五十五六才から六十才ころになつて閉止する。

女性の性欲は閉止期とは関係なく、大体閉止後十年位は盛んなのであつて、六十七十におよんで男がなくては淋しいという女は案外に多い。

以上がこのような老令になつても男の肌を欲しがるのはどういふわけかという問に対する答である。

次に、そんな老婆でも男女関係ができるかとの質問であるが、普通の老婆の場合、性的器官の分泌物がなくなるのだが、老昌症の老婆は、非常に滑沢で、又緊張力もなくなつていないのである。

こんな老婆の実例がある――

それは八十二才の高齢に及ぶ老婆で、彼女は初めの夫と死別以来再婚すること五回月経

閉止は六十一才のときだったが、閉止後もますます盛んで、五回目の夫がなくなつてからは、夫をもつよりも独り身でいた方が、性的対象に不自由せぬとして、その後は独り暮らしをつづけた。

八十二才のとき、街で不良のような若い男を数人ひろつた。金を遣るからと老婆にせがまれて、青年たちは、面白半分に、老婆の相手になつた。若者たちがフト気がついたときは、老婆はすでに冷たくなつていたので、あわてて医者と呼んだり、警官が来たりして大騒ぎになつたというのである。

又、更に高齢なのでは、百余歳の老婆で常に男の肌を求めてやまぬという例がある。

その老婆は十三、四才の少女時代から多淫を以て村中に有名であつた。

独り娘なので養子をもらつたが、いくら健康な養子をもらつても永續させず、死ぬとか、逃げだすとか、凡そ二十七、八人も養子がかわつた。

老齢になつても、性の欲望は一層盛んで、

近郷近在の青年を相手にしていた。

それを彼女は、「稽古代」と称していた。

すなはち、未婚の青年に性的行為を実験によつて教える、その実験が稽古代なのである。

未婚の青年ならば、どんなときでも快くこれを教え、拒んだことがなく、伝受された青年の数は、長年月に亘るため、無慮数千人と推定されるという。

そして二十数人も養子を迎え、又この稽古代（老婆が青年にそれを教ふるのである）のために、代々裕福だった家産の大部分を失つたといふことだ。百余歳の高齢に達して、朝夕殆んど床に就いたままで、時々遺尿するようになつていたが、それでも顔には白粉を塗つてシワを隠して、ウワ言のように男の肌を欲しがり、年若い青年を物色しかねまじい意気があつたという。

（附記）

以上の数例が示すごとく、凡ゆるマニアの通信を歓迎します。なるべくできるだけ克明に自己の習癖について記してください。年令職業なども附記されれば、尙結構です。宛先は春光社内マニア通信係向後等宛のこと



日本慘虐刑罰史（第二回）

妖美やわ肌呪縛

葛飾八郎

近江歡画

宙に垂れた兩足首には、タクアンほどもある太石をこれまた宙ぶらりに吊るし股に食い込む木馬の激痛にお梅は――

はりつけ（磔）談議

むかし、江戸の刑場は、千住せんじゅの小塚原と鈴カ森にあつた。

小塚原では、吉田松陰や橋本左門や頼三樹三郎らが切られ、鈴カ森では丸橋忠弥、八百屋お七、白井権八らが処刑されている。

首切り専業のベテラン浅右衛門の秋水一閃、すはッとやられるのは、まア楽だが、非

人のサビ槍で、ずぶり、ずぶりは、たすからない。いわゆるハリツケ（磔）の極刑である。

罪木と呼ばれるハリツケ柱はおよそ十尺。

イエス・キリストは、両手、両足にクギを打ち込まれたというが、日本のやりかたは、すこし違う。柱を寝かせて罪人をしばらくつけ、柱の根もと三尺ばかりを土に埋めて、垂直に立てる。

罪人の着物の両脇は引き裂かれて、腹のま

んなかにタバねられ、ほとんど胸は露出してゐる。妙齡の毒婦か何んぞの場合なら、むっちり盛り上がった乳房の双丘ふたかが、陽にしらじらと、かがやくわけだ。

槍を持った非人がふたり、左右にわかれて、そのひとりが処刑者のまえに、槍の長穂を突きだし、罪人の胸をドンと打ち、

「ありや、りやアッ」

と、まず威嚇の声をかける。これを「見せ槍」と云つて、氣のよわい罪人は、これだけ



でもう喪心して
しまふ。見せ槍
が引かれ

と同時に、他の非人が、もういちど、
「ありや、りやア！」
と呼んで、処刑人の胸脇から肩先へ、ずぶ
ツと突きとおし、ひとひねりひねつて槍を抜
く。

すると、他の者が反対側からずぶり。こ
れを、かわるがわる繰りかえして、

数十度から三十度におよび、さ
いごにノドを左右から突き、
とどめをさして処刑を終る
のである。惨虐至極な
やり方だった。

この槍かず
を、二、三
十もくら

うのは、よほどのしたたか者だ。たいてい
は、二、三槍から十槍くらいで絶息した。皮
肉なことに、宝蔵院流の槍の名手といわれた
慶安異変の丸橋忠弥は、たつた、ひと突き
で、まいつてしまった。連日の石抱き、え
び責めなどの拷問で、極度に体が弱つていた
からである。

二代將軍、秀忠や、三代家光の命令で処刑
されたキリシタン宗の男女は、おびただし
集團受刑であつたが、慶安事件の翌年（承応
元年）九月、ハリツケにされた由井正雪の残
党もまた、家族を合せて五十七名という多数
だった。したがつて、さすがの非人たちもク
タクタになり、不覚にも中の一人を、突き洩
らしてしまつた。中山義秀が「奇蹟」という
小説に書いているのがこの男だ。

その夜八時頃、備前岡山藩の大名飛脚を罪
木の上から呼びとめて助けて貰い、もともと
仏師であつたところから、この男は坊主にな
つて余世を送つたと云われる。

股も裂ける「木馬責め」

「亭主持ちの身でありながら、きさまも役者
買いをいたしおつたであらう。さあ、云え

ッ。相手は誰だ？ 誰と密通いたしおつた！
云わすば体に云わしてくれろッ！」

三角形に切り削がれた木馬の背に、湯文字
ひとつの裸女をまたがらせて、びしり、びし
りと割れ竹で、尻を背中を容赦なく打つ。

「ひいーッ！」と悲鳴がほとばしつた。雪
より白いモチ肌、じゆうおうむじんのミミ
ズ腫れが、世界地図のように、ふくれ上が
る。

正徳四年一月十二日の山村座事件が描いた
波紋のひとつだ。山村座事件といえ、どな
たもご存じの、大奥の老女江島（当時三十一
才。六百石）が、増上寺へ代参のもどり道で、
歌舞伎スター生島新五郎と、淫臭粉々たる大
乱痴氣をえんじ、大問題となつたトラブルで
ある。連座するもの数十人。いずれも死罪、
閉門、追放、改易のウキ目を見たのである
が、わけでも哀れをとどめたのは、山村座の
座付作者、中村清五郎の女房お梅だつた。

幼い時から小町と云われた評判の美人で、
踊りと三味線が上手だつたところから、前將
軍（六代家宣）のとき、召し出されて大奥に
住み込み、七代家継の生母月光院に仕えた江
島に可愛がられたのを恩に着たあまり、清五
郎に嫁いだのちも、江島に新五郎を取り持つ

たのみならず、大胆不敵にも後藤呉服店の長
持に新五郎をひそませ、江戸城大奥の、江島
の部屋へ通わせたのである。

だから、誰よりも憎まれた。水責め火責め
の、あげくのはて、ついに木馬乗りまでやら
されたわけだ。

燃えたつ湯文字も、いまは、ずたずたの乱
れ姿だ。泣けど叫べと、奉行所の拷問だか
ら、むろん誰ひとり助けに來ない。宙に垂れ
た両足首には、タクアン石ほどもある大石
を、これまた宙ふらりに吊るされてある。

股に食い込む木馬の激痛は、しばしばお梅を
氣絶させたが、そのたびに役人は、水をぶッ
かけて蘇生させる。

大奥の乱脈に、役人が極度の反感をいだい
ていたからだ、と云えば、話のスジもすつき
りしようが、事實は、上司からの強制と、お
のれたちの変態性欲が、そういう蛮行を敢え
てさせていたのだから、いやらしい。云はば
、役トクとして、裸女のた打ちまわるのを
享樂していたのだ。

ギラギラと目を輝かせ、たえず唇の乾きを
なめながら、これでもか、これでもかと……
惨虐の筈に、とめどはなかつた。

ふだんはとて手届かぬ高嶺の花が、血

みどろに慄乱する姿は、役人にとって春宵一
刻、価千金の快樂であつた。

哀れや、お梅、微に入り細に入り、自他の
情事を悉く白状したが、
「黙れッ。白状の分量がまだまだ足りぬわ
！」

まるで供出米の不正を発見した検査官みた
いにいう役人たちの妄執によつて、とうと
う、お梅は責め殺されてしまつた。

「かわらけ千山」事件

奉行所役人の惨虐と下劣さを物語る、もう
一つの例証がある。新吉原江戸町二丁目、岡
田屋抱えの遊女千山に対する、寺社奉行、安
藤長門守手付の吟味与力、川部権蔵の暴行事
件である。

時は嘉永五年三月のことだ。——芝増上寺
内、良源院の住職竜音が、僧籍の身をかえり
みず、吉原と品川でしばしば豪遊したことが
表沙汰となり、女犯の罪に問われるにいたつ
たことから話ははじまる。

「上を恐れざる振舞いよな。敵娼（あいかた）
は誰ぞ？」

運の悪い坊主もあつたものである。

・土手に行く医者は上野か浅草か

・愚僧化して医者となる面白さ

・脈を見ておくんなんしに化けが剝け

等々の川柳にもあるとおり「坊主もやつぱり人の子」であるから、医者に化けての悪所

通いは、天下公然の秘密だつた。にもかかわらず、異例の処罰をこうむつたのは、公金費消のしだらがアバかれたためであつたらしい。

問いつめられて竜音は、やむなく、買いなじんだ遊女千山の名を自白した。そこで、ただちに千山も出頭を命じられた。

白洲に現われた千山は、廓内と同様、紫ぢりめん、鹿子ぢりめん、それに茶どんすの三つ打ちかけを羽織つたうえ、櫛、こうがいをおびただしく用いたおいらん鬘という美々しいでたちだつた。

これが川部与力の、虫のいどころを極端に刺戟した。のみならず、何を訊いても、

「知りんせぬ。知りんせぬ」

の一点ばりだつたから、いよいよ心証を害し、ろくに調べもしないまま、荒々しく揚屋入りを命じてしまった。こんにちでいえば、独房のブタ箱に拘留したわけである。

しかし、そのあと、川部の心境は、しだい

に変化していった。矯然たる千山の印象に、猛然たる征服欲をかんじたのである。で、深夜ひそかに権蔵は千山の独房へしのんでいつた。

「竜音が医者と偽つて訪れたとあれば、なるほど、そなたは知らぬはずだ。まあ、奉行殿には、拙者の方から、よしなに、取りはからつてやるゆえ、その代り」

魚心あれば水心のあることを匂わせつつ、露骨に千山を口説きはじめた。

しかし千山は応じる気色も見せず、目じりを下げて、抱きつこうとした権蔵をつき飛ばし、

「あたいやらしい。何をなさりんす。それほど、わちきが欲しうありんしたなら、どうせゼニ金で買われる体。どうぞ大門から江戸町へ大手を振つて来やしやんしておくんなまんし」

こつびどいヒシ鉄砲だつた。川部は赤くなり、青くなつて痛憤した。

「よくぞ、ぬかしおつた！ ようしこのうえは憎さだけが百倍だ。どうすることかおぼえていよう！」

何をするかと思うと、がんじがらめに千山をしばり上げて、むりやり股をひらかせ、一

本々々、恥毛をむしりはじめた。

さすがの千山も、これには血の気を失つた。わなわなと、全身をふるわすばかりである。

「これでもか！ これでもか！」

権蔵は、偏執の悪鬼と化して、前代未聞の「抜き責め」をつづける。

あまりの屈辱と疼痛にたえかね、いつしか女は、唇をかみしめたまま失神した。

「しまった」と思つたものの、忽ち権蔵はニタリと笑つた。そして心ゆくばかり、意馬心猿の劣情を充たしたのである。

この変態的な暴行は、やがて牢番の口から、奉行の耳に伝わり、川部は、お役ごめんとなつて追放された。一ぼろ釈放された千山は、その後「かわらけ千山」と異名をとり、旧に倍する売れっ娘となつた。結局、権蔵は高い女郎を買わされたわけである。

「ブリブリ責め」とは？

遊廊や私娼窟での拷問（責め）については、前号でいささか触れておいたが、もうすこし補足して解説すると――

むかしの遊女には、人権などは、まるつき

り認められていなかった。彼女たちは、文字通り、楼主にとつて商品であり、私有物であつた。したがつて、生かすも殺すも、すべて楼主の自由であり、たとえ私刑をやりすぎて殺してしまつた場合にも、たいてい「自殺」という偽装でケリがついた。

一ばん、かんたんなやり方は打擲である。しかし、平手でナグつたり、キセルでナグつたりするのは、ごくごく軽いほうで、打

擲といえは、普通

遊女をハダカに

して、竹の笞

で肩の肉の

やぶれる

まで、

ぶち

のめすのであつた。

笞をとるのは、ヤリテ婆ア、或いは若い衆にきまつていた。芝居で見る「浦里時次郎」や「馬子のお時」の舞台場面そのままであると思えば間違いない。いや、実際はもつと物すごいものであつた。

打擲しても、なおまだ云うことをきかない場合は、二、三日のあいだアンドン部屋にとじ込めて食餌をあたえず、それでも頑強に反

抗するときは、丸ハダカにして荒縄でしばり、水をぶつかけて、ほうつておく。

濡れた縄は、またたくまにちぢむものであるから、それが全身にギシギシと食い込み、女は泣きさけびつつのたうちまわる。

最も、ひどい責めは、俗に「プリプリ」と呼ばれるやり方だつた。遊女が、大事な客の云うことをきかなかつたり、情夫をつくつて、他の客を拒んだりなどしたとき、この方法が行われる。

リンチの指揮者は、楼主自身である。場合によつては「商品」である遊女が、死ぬか、カタワになるかという重刑なので、楼主も相当、ハラをすえてかからねばならなかつたからである。

女は一糸まとわぬ丸裸とされる。口にサルグツツをハメラれ、両手両足はエビ責めの場合と同じく、うしろで四つにしばり上げられ、梁に吊るし上げられて、ちから一ぱい大きな竹

べらで、ひつぱたかれるのだ。

楼主の丸損を意味する心中未遂はとりわけ烈しく、プリプリにしたうえ、女の口に入嚢を突ツ込むという、目もあてられぬ





念骨ずいに徹したのである。そこで、ごういんに、高尾の体重十一貫何百匁かに相当する小判の山を積んで、を受けだし、山谷堀から屋形船にのせて隅田川を漕ぎくだった。

「停めろ。ここでよい」

永代橋の下手には、その頃、大きな三角洲が、葦や雑草のほか、数本の大木までも生い茂らせて、小島のごとく浮かんでいた。そこへさしかかると陸奥守は、にわかに停船を命じ、

「者共、この女をしばつて、あの梢に吊るし上げよ！」

驚いたのは高尾ばかりではない。命じられた家臣たちさえ、主君の真意を解しかねて茫然とした。陸奥守は、疳べきを募らせ、

「しばれと云うに！ 身受けしたうえは、焼いて食おうと煮て食おうとこつちの勝手ではないか。この女狐に、今こそ、裏切られ者の、怨みのほどを見せてくれるのだ！」

吊るし切りというのは、主として武士の妻が姦通したとき、姦天と共に処刑される奇法であつて、いわゆる『生き吊り胴』という惨虐きわまるものだ。

私刑が加えられた。

売春と『賣め』とは、こんにちでもなお、切つても切れぬ関係にある。

三段飛びの『生け吊り胴』

へおとこよいとて、権体ふるな、男がようて金持で、それで女が惚れるなら、奥州仙台陸奥守、伊達の御殿の殿さまに、まアなぜに、高尾がコリヤ何んだい、惚れなんだ……

という小唄がある。陸奥守というのは仙台藩主、伊達綱宗という漁色一辺倒の和製ド・ファン。

吉原三浦屋の二代目高尾に、ぞつこん惚れこんで夢中に通ううち、高尾には、島田重三郎という情夫があることを知り、

「こやつが！ こやつが！」と憤激した。

君はいま駒形あたりホトトギスなどというテンメンたる俳句をおくられて、悦に入っていた矢先だけに、ひとしお無

伊達綱宗も、これをやつた。

高尾の両手をうしろにしばり、その縄で女体を宙に吊るしてから、

「えいーッ！」

と、大喝して、みずから、その胸を切つた。腰から下が水に落ちたとたん、物理的な反動で、比重を逆転させられた頭部が、くるッと舞い下がつて来た一刹那、重ねて「たーッ！」

と裂帛の気合い一声、すばッと、その首をも打ちおとしてしまつた……。

ただし、これは虚説であるらしい。伊達家のためにも、その方がいい。しかし、三段となつて体が飛びちる、この「生き吊り胴」は姦夫姦婦の成敗に、しばしば用いられた記録がある。だからその真相を知るうゑに参考となろう。寛文五年、金沢藩士の加藤市郎右衛門が、江戸詰め中に密通した妻みつとその相手を「生き吊り胴」にかけて殺したと現に古文書は物語つてゐる。

変態いれずみと女相撲

殿さまと云えば、雲州松江の城主、松平出羽守が、たくさんのメカケをたくわえ、その

一人々々に異例なく、イレズミをさせたというのは有名な話だ。

雪白の肌に、ぷつン・ぷつンと針が突ツ立つたびに、小さなルビーのような血の珠が、ふきこぼれる。一種の惨酷な変態ショウである。痛みに耐えかねた女たちが、おのずと切迫した呻きをもらしながら、鼻いきあらく身悶えする図は、閨房の秘態をさえ、連想させずにはおかなかつたであろう。

デバカメならぬ風流殿様の出羽守は、なおこのうゑ、イレズミ女たちを内庭にあつめて、ハダカ相撲をとらせることが道楽だつた。

ふだん仲良しの女たちは、

「ごめんあそばせ」

「どうぞ、お手やわらかにー」

などと挨拶して、適度に入百長試合をしなことであろうが、つね日頃、犬猿の仲にあつたメカケ同士のあいだでは、そうはゆかない。真紅の湯文字を、嵐の中の赤ハタのように吹きひるがえしながら、蹴る、なぐる、かみつくという、あられもない決闘場面を展開させた。

筆者は、女のケンカや、女流レスリングの非公開試合を見物したおぼえがあるが、そ

の変態的なエロティシズムは、頭のシンがしびれるほど、すさまじいものだ。その秘密な快味を満喫するため、出羽守も譬々相討つ女ズモウにうつつをぬかしたわけであつた。

惨虐という要素は、嫉妬に因づく女同士の血闘の場合、とりわけ色濃く看取せられる。したがつて、それが「責め」の形をとると、いやがうゑにも、甚だしくなるのである。

サディストお時

犯罪に伴う刑罰や、遊廓などでの私刑以外に、「責め」が性的な趣味、道楽として、たのしまれた事実は、すこぶる多いようだ。曾つて一世をさわがせた阿部定の好色事件も、そういう変態趣味の行きすぎであり、また、現に風俗画家として著名な伊藤晴雨氏などは、夫妻合意のうゑで、サディズムとマソヒズムの惨虐的快楽にふけつてゐる。すなわち晴雨画伯は、夫人をしばつたり、宙吊りにしたりして「責め」の研究をつづけているのであるが、研究そのものより、それはむしろ画伯の性癖であり嗜欲であることは周知の事実だ。

古い事例としては、江戸時代の完本「忍草」

のなかに、次ぎのような話が出てゐる。

お時は二十七の美しい女で、どんな男も自分の前に、犬のようにひざまづくものと確信していた。今宵も彼女は、小梅の寮にしのんで来た三五郎という美しい若者を、すッ裸にして、血のように赤いスゴキでしぼり上げ身を切る夜風が吹きすさぶ庭先へ突つころばしてしまつた。骨を刺す寒気と、なさけなさな若者が泣き出すと、

「おや、なぜ泣くんさい。あたしの道楽が、それほど辛いと思われるのなら、これつきり訪ねて来なきや、それで、いいんだ。ふん、意気地なし……」

と云い云い、自分はぬくぬく、コタツに入つて、さかづきを重ねているのであつた。また、

三月の桃の節句を祝つた晩。お時は万弥まんやと呼ぶ美少年をしぼり上げ、しばつた両手を高く頭上にさし上げさせて、二本の燈心に火をつけた油皿を、その手のうえに置いていた。皿が傾いたが最後、万弥の体には油がこぼれて、彼の全身は、焼けただれるかもしれないのである。

万弥はだんだん苦しみに耐えきれなくなり、しまいには意識が茫ツとなつてしまつ

た。お時は、その顔を小気味よさそうに眺めながら、

「ふふふ。万弥さん。ずいぶん、がまんの要ることでしょうね。氣つけくすりを上げましょうか」

と、口にふくんだ酒を、口うつしに男にのませながら、ちからいっぱい、その脇腹をつねり上げた。……

秋になつた或る日、以前、お時の情夫だつた長三というカゲマが訪ねて来て、

「ちかごろは、或る大店の隠居に可愛がられているのだ。氣苦労がなくて極楽みてえだぜ」

と云つた。その一言が、ぐツと胸にきたお時は、妖しいながし目をおくりながら、

「ねえ、長さん。のんきなことをお云いだけれど、私はいつまでも、おまえの体が忘れられなくて、夜もろくろく睡られぬくらいなのさ。……ちよいと、二の腕を見せておくれ」

「どうするのだ？」

「いつぞや、その腕に彫つた、あたしの紋はまだ消えないで、あるかしら？ 消されちゃいないかと、それが何より氣がかりなのだ」

「有るよ。このとおり」

男が二の腕をまくると、お時はびつたりと体をすり寄せ、用意のかんざしを右手ににぎつた。

ぶすり！

刺されて、びつくり。あツと叫んで男が、逃げかけたたん、

「ほほほ。裏切り者は、こうして……」

と、つづいてお時は、男の胸を刺しとおして、突きまくつた。鮮血は障子、フスマに飛びちり、畳は血吹雪に濡れていつた。

「ほほほ。いい氣味なこと。ほほほほほ！」
血の海を這いまわりながら、断末魔のうめきをあげる男を、しり目にかけて、お時は狂氣のように高笑した。血よりも赤い夕映えに、庭の紅葉がハラハラと散つた……

舌を食い切られた新夫

へささ(酒)がこうじて

ついそれなりに

ざこ寝の枕 かりそめの……

という唄があるが、パッション(情熱)が昂じて、思はず血みどろの惨劇をひきおこした例もすくなくはない。

江戸時代ではない、維新もない明治五年

六月のことだ。

神田豊島町三丁目の下駄屋、喜次郎長男、
広島松吉(29)という男が、京橋五郎兵衛町
二四番地に住む政吉の二女、新田よね(31)
と結婚式をあげたその晩に、飛んださわぎが
突発した。

盃ごとが終つて、新郎新婦が床入りしたあ
と、仲人や親族一同が、なおまだ酒をのんで
いると、十時ごろになつて、
「ぎやッ!」と物すごい悲鳴が、閨房の方か
らきこえて来た。

「やッ!」

皆々、総立ちとなつて駆けつけたところ、
驚いたことに、新夫の松吉は赤鬼みたいな顔
で、新婦よねの黒髪をつかみ、組んずほぐれ
つ格闘していた。

あつ氣にとられた一同が、

「わけを云え。一たい、どうしたというの
だ?」

と、たずねたが、松吉は、おびたらしい血
を、口じりから憤きこぼしながら何んにも答
えず、ただ、手まねで、

「その女を逃がすな」

と云いたげに、狂いまわるばかりであつ
た。

何が何んだか分らぬなりにも、とにかく事
件があつたことを察して、仲人がよねの両手
を手ぬぐいで縛り、別室へ引きずりこんでし
らべてみると、意外な事実が判明した。
当時の東京日々新聞の記事によれば、その
テンマツは次ぎのとおりだ。

——婚姻の式果ててのち、閨房に入り……
愉快のあまり、思わず松吉の舌を食い切り
たりと云う。ここに於いて、松吉の物言わ
ざるをはじめてさとり、入院後、松吉に筆
紙を与えて、なおも事情をしたためさす
に、閨房に入りて舌を食いきりしゆえ、事
のここにおよび候なり……云々。

新婦が新郎より二つも年上の三十一才とい
う組合せであるから、むろん、処女であらう
道理はない。

ひよつとすると、安女郎か何かをしたこと
のあるその道の猛者であつたのかもしれない。
い。それにしても、初夜の血みどろさわぎ
は、変態史のなかでも異例である。

へおまえ死んでも墓場にややらぬ

焼いて粉にして、灰でのむ

と云つた年増女の濃情そのもの。かみ切つ
た男の舌を口にくわえて、これまた血まみれ
で格闘する三十女の姿は、さながら鬼女の上

うな不気味さである。

これと反対に、

へ結い立ての髪をこわされ

わしや腹が立つ

むしらせるのは ほかにある

と云つた流儀の、マソヒズム女は、小口
末吉の妻で知られる矢作お米(23) その
他、その無数にある。

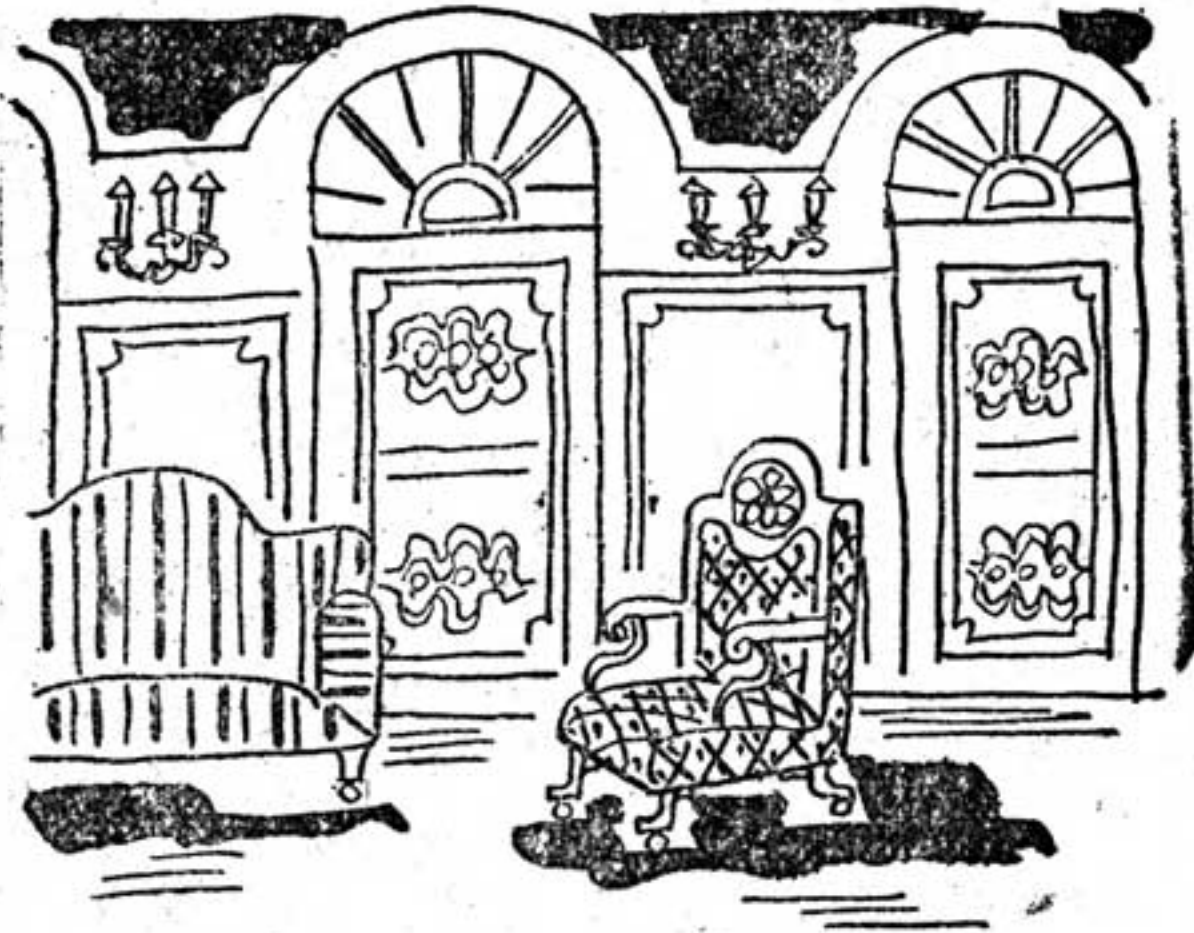
大正六年四月、お米の死体を検死した係官
一同は、

「古今まれに見る惨虐な殺しかたである」

と舌をまいたが、調べの進むにつれて、何
んぞはからん、お米は、みずから末吉に「責
め」を強要して、快楽の極限で死んだものと
分つた。すなわち、死体には、腰のまわりか
ら、下腹部、大腿部にかけて、焼火箸でジ
ーとやつた傷あとが何十条もあり、背中に
は「小口末吉の妻」という大看板のような烙
印が灼きつけられてあつたのみか手の指も、
ほとんど一本おきに切りとられていたのだ。
る。

この惨劇は、日本における空前のマソヒズ
ム事件として、今なおしばしば引合いに出さ
れる。

新劇界色情分布圖



役者が舞台で語る言葉
は嘘ではありませぬ
バリアツチ

夢野十作

新劇と云えば、先づ文学座、俳優座、民藝新協劇團と、この四つになる。そして、いづれも築地小劇場の流れを汲んでいると云つて間違ひはあるまい。

築地小劇場と云えば、もう一昔も前の話で今の若い人達には、夢の世の話にしか過ぎないが、とにかく日本の新劇の発祥地であつた

ことぐらひは、少くとも新劇を語るに際し知つて置いてもいいだらう。
ところで、新劇色情分布図だが、演劇という華やかな世界だけに、千差万別色とりどりで、誠に話題豊富である。ざつとその表皮だけを剝いで見ても、結構ゴロゴロと現われてきて、どの劇團から手をつけていいか分らなくなる。

杉村春子愛慾史

文学座と云えば杉村春子、杉村春子と云えば文学座と云うくらいに、文学座ではこの女性の存在は強力なものとなつていて、別名淀君なぞと云う異名がある。

とにかく、藝術院の会員だか、藝術賞たかを受けたのだから、大いしたものだ。

だが、杉村春子の昔を知っているものは、どうして彼女が、新劇界では先輩の山本安英田村秋子などを抜いて、藝術院の会員に推薦されたのかと、小首をひねりたくなる。

杉村春子は廣島の女学校の音楽の先生だつたのが、ある年の築地小劇場の地方公演を観てから、急に新劇に憧れをもち、その職業を

放擲して上京、築地小劇場の入団試験を受けて、先づ研究生になった。

その頃、築地小劇場は全盛時代で、女優陣も山本、田村、花柳はるみ、細川知歌子、東山千鶴子、岸輝子、伏見直江などが顔を揃えていたから、彼女などはボウと霞んでいた。

だが、何しろ血気旺んな、そして演劇に志ざす若人の集團だけに、恋愛道も華やかなもので、田村秋子がマイエル・フェステルの「思い出」の舞台で、カールハインツに扮した友田恭助（戦死）とほんものの恋愛をして結婚街道にすすんだかと思えば、竹内良一（岡田嘉子の前夫）が三田英児（先代左團次（甥））と若宮美子の三角関係から、駆落ち事件を起すなどして、ともかく、獅々文六の言葉ではないが、テンヤワナンヤだった。

そんな雰囲気の中へ、音楽の先生だった杉村春子が入団したのだから、最初の中こそ演劇一本槍だったかも知れないが、周囲がそれでは黙っていない。

若い研究生の誰彼が、直ちに立候補して、三浦洋平が彼女と恋を囁くことになった。三浦洋平というのは、ちよつと異國的な風貌をした男で、背の高い、一風変つた性格の男だ

つた。それが後年、築地小劇場分裂後に、暫く新興キネマ（大映の前身）に籍を置いたりしたが、何処をどう歩いていたのか伊豆の長岡で、宿屋の番頭をしてみたいというから變つてゐる。ちと頭にきたんぢやないかなぞと、その当時逢つた男が噂していた。

杉村が××性腹膜炎（？）に罹つたのも、三浦洋平のだろうという噂があつたが、眞偽のほどは確でない。しかし、その後彼女が医者とはかり結婚するのも、不思議な因縁である。

三浦洋平の後釜は、先年死んだ医者（亭主）で、彼女は彼の研究を扶けるために、必死の苦勞をしたという美談がある。そして、今度は、十歳も若い亭主慶大医科の石山季彦と結婚し、更年期を忘れたように、若やいだホルモンを発散させて、周囲を悩ましてゐる。

俳優座閨門史

千田是也を先づ筆頭に上げるが、彼は築地小劇場時代から若い俳優の憧れの的だった。とにかく伊藤道郎、伊藤祐司（在アメリカ）伊藤嘉朗（舞台装置）藤伊翁助（音楽家）と

いう藝術一家の四男で、今や俳優座のバックボーンになつてゐるが、戦前に独逸へ勉強に行き、そこで独逸婦人と結婚し、相携えて帰朝したのだが、一子（最近帰朝）を儲けたのに離婚し、彼女が帰独してしまつたら、自分より年上の岸輝子といつの間にか同棲してしまつた。

岸輝子は北海道生れで、前身は看護婦？だったとかだが、とにかく築地小劇場へ入団し、とたんに東屋三郎（光妙寺次郎という



公卿の落胤」と同棲し、東屋が死んだ後の空
間を嘆いていたのだが、それが千田是也と一
緒になつたのは、何うも均こうが取れないの
で、知人はその話を聞いて、些かボカンとし
たものである。

俳優座には、もう一組、どうにも合点の行
かないカップルがある。それは青山杉作と東
山千槩子のコンビだ。

東山千槩子は貿易商の主人を持つているの
だが、築地小劇場以来、青山杉作と影の形の
如くに、相携えて歩いている。関係があるの
かないのか、ちよいと判断に迷うくらいに仲
が良い。戦争中に御殿場へ疎開したのも一緒
なら、戦後出京したのも同時、勿論青山にも
妻君はある。

彼と彼女とは、もつばら新しい恋愛を身を
もつて、われわれに教えてくれているのかも
知れない。所謂「浮気」の典型とはかくの如
きものであると云うことを――

こんな調子で書いて行くと、限られた紙数
が盡きそうである。一つトントンと運ぶとし
よう。

これは俳優座とは関係ないが、舞台装置の
伊藤薫の前夫人伊藤智子（放送の、向う三

軒両隣り」のお婆さん――）の御登場を願お
う。

彼女は其の昔女流画家の団体「朱葉会」の
会員で、白鳥銀子と称していた。そして、そ
の第一の結婚の相手は、比島攻略戦の結果、
絞首刑になつた本間雅晴將軍だつたのであ
る。自由放奔な彼女は、その本間將軍と別れ
ると、今度は永井荷風と同棲し、その後伊藤
薫と一緒になり、遂に演劇界に足を踏み
入れることになつた。



この夫婦関係は相当に長くつづいたが、ど
ういう経緯からか知らないが、離婚してしま
つた。もつとも、その間に彼女は青柳信雄
（映画監督・プロデューサー、坂東義助の兄）
と関係したり、その他もろもろの浮気をした
らしい。現在は放送や映画に出演してい
つ、もう姥櫻だが、まだ仄のりとした色香の名残
を見せているのは流石である。

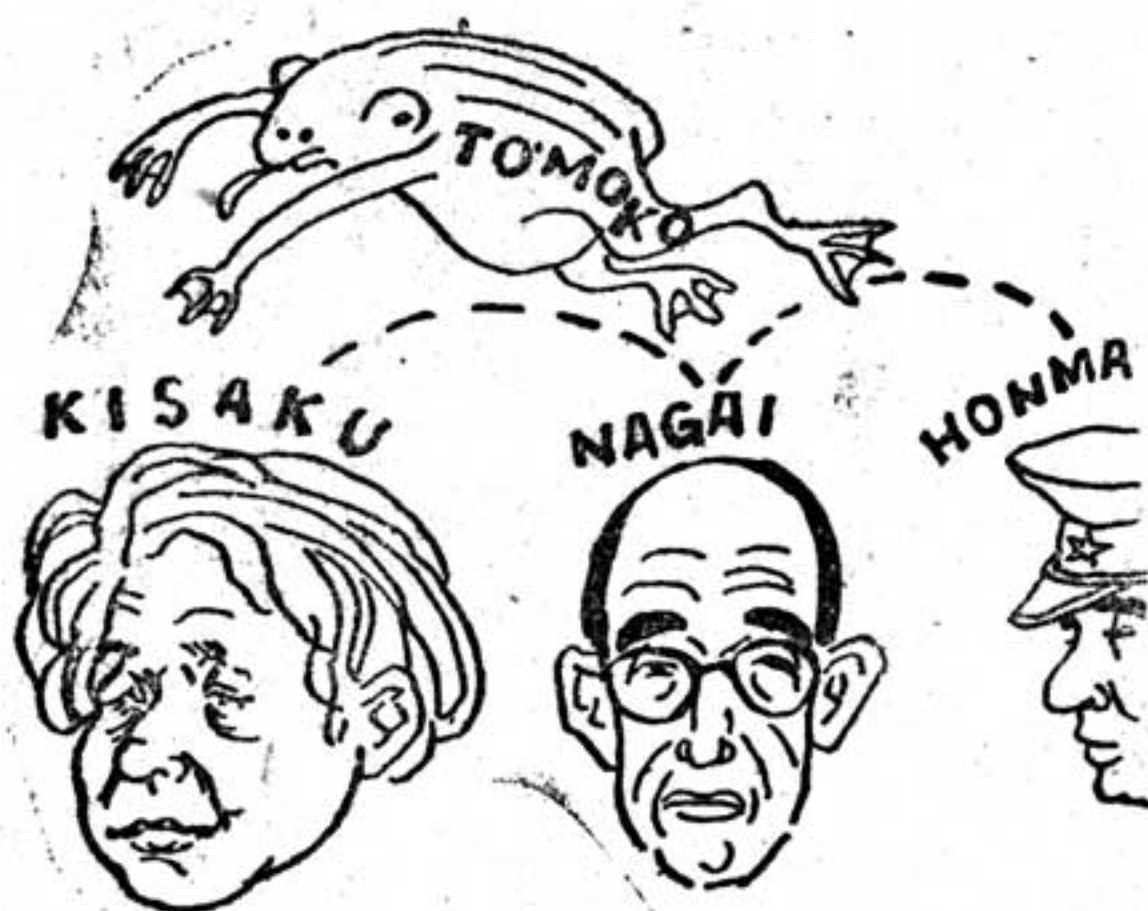
民藝は強者ぞろい

民藝となると多士済々で、誰から手をつけ
て行つていいか見当もつかない。だが、なん
と云つても、先づ瀧澤修だろう。

彼が左翼の嫌疑を受けて、獄中にある時に
亡妻と交した綿々たる「愛の通信」は戦後出
版されて、相当に賣れたらしい。

それかあらぬか、現在の演劇ファンには、
非常に滝沢宗（？）が多い。それほど彼の演
技には一種の魅力があるらしい。先般の「炎
の人」などを見ても、実に素晴らしいものを持
っている。メイク・アップの巧さなどは、お
そらく当代一かも知れない。

これは、まだ夫人の死なないう前の話で、と



にかく愛妻家という評判があり、又新劇の神様として、世間に知られている彼——もつとも、新劇だけでは食って行けぬので、映画出演をしていた——が、美事なドン・ファン振りを発揮していたのだから驚く。

どうものこの噂はほんとうらしい。田中絹代との関係も、真実らしい。それは一昨々年だったかの初夏の頃に上原謙、田中絹代で、木下恵介が「四谷怪談」を撮ったことがある。その時に、滝沢は直助権兵衛で出演して

いた。この間に、二人は浮気したらしい——と、的確な筋から傳つてゐる。他人の色話を詮索しても始らないが、滝沢修も撮影所というところへ現れると、若い女優などは畏敬の眼をもつて見るらしく、それが少し優しい声でもかけられると、ついフラフラとなるらしい。それで据臑と云うことになるのである。そうなれば、喰なきや恥である。

宇野重吉なども、もつばらその方で大々的發展をしているらしい。大体、宇野重吉のよるなボサツとした男のドコがいいのか知らないが、やはり新劇俳優だと云うのが魅力なのだろう。

この劇團には、最近新劇界にカムバックした細川知歌子がいる。今更説明するまでもなく、財界の巨頭藤山愛一郎の愛妾で、その仲に二兒まである。

彼女の愛慾史などは、雄に一篇の小説になりそうだ。彼女が劇界に飛び込んで来たのは生活能力のない亭主と結婚し、何とか食うために、月給二十円でも三十円でもいいということで、築地小劇場の研究生へ應募したのである。それには、彼女の兄の、留木浩（東宝俳優「坊ちゃん」で賣出す。死亡）が勧めたら

しい。ところが、入團間もなく丸山定夫（原爆にて広島で死亡）が、猛烈な求愛をした。丸山定夫という男は、藝も達者だったか、あ



の方も達者で、何しろ水の一杯はいつた鉄瓶を、アレで持ち上げたという男だから、閨房の方も旺盛だったに違いない。

とにかく、この時の丸山定夫たるや、何を捨てても彼女を獲得せずんば非ずという熱心さで、彼女を口説いた。彼女にしても生活能力のない亭主などとは別れたい時だったの

で、サンとは云つたが、板挟みになつて困りぬいたらしい。

それでも、最後には丸山と同棲することになった。

しかし、当時は所謂新劇の受難時代で、二人とも演劇活動、思想活動をつゞけていたが、それやこれやの疲労で細川は、肺病を宣告されて、病床に倒れてしまった。

そこで丸山は、彼女の療養費を得るために、名前をかくしてエノケンの一座へ出演することになった。その間に、丸山に女が出来る、さしもの二人も別れることになった。そこへ嵯峨善兵（新協、東宝俳優を経て、現新星プロ・プロデュサー）が現れ、同棲したが、これには藤山から手切金が出て、嵯峨が渡佛し、細川は天下晴れて、藤山愛一郎の愛妾となつたのである。何しろ二人の男の子があるのだから、藤山が如何た浮気をしようと、もうデンとおさまっている。

妻は妾でも、もうこうなれば大いしたものだ。

新協は古武者ばかり

新協劇團というと、近頃はさつぱり華々しい活動を示していないし、去年だつたか薄田研二が「老らくの恋」で、未だに衰えざるどころを見せていたが、新協を脱退したらしい。

新協といえば、村山知義の独裁だと云われるほど権力をもっているらしい。彼が独逸から帰つて来た時は、ダダイストであり、又表現派の傳來者として、一躍劇界に頭角を現わしたものである。

彼の逞しい活動力は、一つには死んだ壽子夫人だの内助の功によるものだが、とにかく鳴したものである。

現文藝春秋新社社長佐佐木茂の前夫人佐佐木房子が、モダン・ガールの先駆者として知られた大橋姓の頃に、茂索、房子、知義と恋愛合戦を演じそうである。

大橋房子は渡欧中に、山田耕作とも浮名の立つた女性だつた。

村山は小柄でまるまるとして愛嬌があるもので、女性にはもてらしい。

築地小劇場時代に、妖艶な舞台姿で鳴した花柳はるみも自由奔放な女優で、村山知義とも関係し、林房雄、山内光（前映画俳優）な

ぞと恋愛合戦を演じたものである。

花柳はるみが前夫の若杉という競賣新聞社々員と離婚し、目白の駅の近くに一軒貸りて住んでいた頃、前夫のところを逃げ出した細川知歌子とその眼をくらしまして、暫くかくれていたことがある。

その家が、前記の連中——村山、林、山内などが入りみだれて、まんじと花柳をめぐる恋の競争を演じた家である。

恋の競争と云うべきか、肉体の享樂に耽けつていたと云う方が眞実だろう。

とにかく、花柳に云わせると、

「そりや林さんのお道具はリッパよ。知さんの方は、林さんに比べれば問題じゃないわよ。うふふふッ……」

と、ハッキリした批評をしていた。

林房雄よ、もつて瞑すべしと云うべきだろう。

薄田研二の前夫人晴子は、食田百三（出家とその弟子の作家）の夫人だつた。薄田よりは五六歳は年上だつたろう。それだけに、薄田は二十歳も年齢の違ふ若い夫人を得て、ボツとしてゐるらしい。

メデタキ限りである。

—さちずむ・すとおリ—

接吻加虐狂

羽井鯨亭

南夏子画

接吻福

バタバタバタッと舞台から楽屋へかけこん

できた光三平が、自分の化粧前鏡に向うや、その場にダッと俯伏しになって倒れた。

三板目の彼は、楽屋でよくいろいろの真似をしては、狂気にふざけちらすことがあるのでいつものでんだと思い、誰もとりあわなかった。



が三平はそのままシッと押黙ったきり、なかなか起上らない。

「なにやッてんの三ちゃん」

かたわらで顔を扮っていた歌手兼二枚目の

と叫声をあげた。

三田凡二が、おどけた調子でこう声をかけながら、ひよいと三平の方を見たが、

「あッ!」

顔を真蒼にした三平の口元から、タラタラと血が流れおちて、畳を汚しているのだ。

「どうしたんだ?」

三田は三平を揺りおこした。

三平は睡でもいっばい含んでいるように、頬をふくらしたまま、いかにも苦痛をたえているような顔である。

皆周りに寄って来た。

一人が急いで部屋の隅のタンツポをもつてきて、三平の口の下へあてがうと、すぐ彼の口からおびただしい血が、ガツとタンツポの中へ吐き出された。

顔を土気色にして、そのままぐったり三田の腕に崩折れてしまふ三平……

「こいつア、ひでえ。医者を呼んで来なきや」

と体のあいっている東五八が、そくさと楽屋を出ていった。

ちやうどそのとき、隣りの女優部屋でも、騒ぎがもちあがっていた。

清純な美貌を讃えられ、体も手入らずのウブだと噂されている踊り子の月夜サクラが、舞台から戻るなり、自分の洗面器へカッと血を吐きだすと、大声あげて泣きだしてしまつたのである。

「あら、サクラちゃんたら、どうしたの？」
楽屋にいた女たちが、いっせいに訊ねた。



が、サクラは、ただ身悶えして泣くばかりだ。踊り子中での古参株の星野青子がサクラの肩に手をかけて、

「一体どうしたッてんの？
歯でも折つたの？」

「ちがうワ、ちがうワ」

とサクラは子供のように泣きじゃくりながら、

「私いま、舞台上で三ちゃんの舌を噛み切っちゃつたの……だって、ひどいのよ。あの老醜態（芝居の題名）の、キッスの場合は、客席に背後を向けて、その真似だけすればいいってわけだったンでしょう。それなのに……それなのに、三ちゃんたら、ほんとに唇を押しつけたのよ。それも舌まで出して……私、あんなキッス……侮辱だワ。侮辱だワ……」

通夜の席

戯草のストリップ劇場女神座の三枚目光三平は、この接吻禍のために、二十四という若

さで、それから何も死んでしまった。

その通夜の席で、三平がつねに師のように畏敬していた唯美派作家の丹下悪太郎——彼が問題の「老醜態」の脚本を書いたのだ——が、述懐するように云った。

「いい男だが身を亡ぼしちやった。おれみたいにしたら、この男だって死ななかつたんだのに……」

この言葉は、好色物も盛んに書いたゲーテの或る諷刺詩の終りの文句だ。

丹下は、この言葉によって、三平の一本氣を憫みいとほしむとともに、虚偽や策略の多い世間人を振ったのだ。

この「おれ」は、丹下自身をも含め、一般世間人へかけた彼のイロニイ（皮肉）なのである。

其夜、丹下は、携えて来た風呂敷包の中から、一冊の手帳をとりだして、集った一同に示した。

「今夜この席上で、ぼくは、こういうものを皆さんに披露する。この手帳は、光君の死後彼の上衣の二重ポケットからぼくが発見したものだ。この中には、彼の日記がこまごまとためられてあるが、それは彼が阿修羅のようになつて全身で書いた文章で、その一字一

句が、われわれの心臓を殴りつけてくる。……どうして光君は死んだかそれを皆さんにわかつてもらうために、ぼくはこれから、この日記二、三節を拾い読みしてみる。チエツ、そんなよけいなことやめてくれと彼は棺桶の中で怒りだすかも知れないが……」

シロツと満座に一瞥をくれて、丹下は三平の手帳を読みはじめた——。

ジャスミンの唇

一月二十一日

接吻。くちづけ。キッス。ベゼ。呂の字。

おさしみ——同じことでも、色んな言葉があるもんだ。

アレ、まだチュッチュツと音が聞えてきやがる。いつまで吸ってるんだい、デレスケ野郎！ この三平さまは、そんなヌルベタな、オビキズリのキッスはやらねえ。火花の散るような一瞬のスリルを味わいたいんだ。スリルそう、おれのは正にスリルだ。スリルの快だ。

うへ？、まだチュル／＼吸めあってやがるらしいぜ。大みたいな奴らだ。いい加減しろい。

裏々暗闇で、どこでやってるんだか、サッパリ分らねえが、ひとつオドカしてやるか。「わっわーっ！」

ハッハッハッ、キッスの音がやみやがったおやッ、立上った二つの人影。……さては、あいつらか。星の光じゃよく見えねえがすましかえって中折帽なんか頭にのつけた野郎と、ロングスカートの女じゃねえか。

さア、去きな／＼。他人の恋路を邪魔するわけじゃねえ、キッスのあとは、こんな野天じゃお前さんたちにや毒なんだ。体にじゃねえ、この辺にや、それ、ユスリタカリのチンピラどもがうごめいているからね。

彼女はどうしたんだらう、則子とかいう女は。なかなか来ねえナ。女を無理やりやっつけることを強姦というが、おれのは強吻とでも云おうかね。いま、おれは、則子を強吻しようと思ちかまえているんだ。

強吻のスリルに、おれは魅惑されるのだ。接吻マニヤなんだ。キッス・サシストなんだ。舞台じゃ女に頭を叩かれて悦ぶマゾ的な道化役のおれが、実はドンデンがえしたサシストとは、キリストさまでもご存知あるやえ。座の奴らは、どいつもこいつも、三枚目のおれをバカにしゃがる。ナメてやがる。おれ

はそれをジッとこらえて、ビエロになりきっている。いや、なりきってるように見せて、「商売々々」と我慢してる。

「我慢強き人の憤りを恐れよ」と外国の偉い人が言ったそうだが、おれの我慢が怒りとなつて現れたのが、キッス・サジズムなんだ。嗤いたきや嗤やがれ。これがおれのせいっぱいの憤りの表現なんだ。

だから、おれのキッスの対象は、豪然と氣取ってる女とか、人を小馬鹿にしたような眼で冷酷に構えているマブスケ（美人）ばかりを振ふんだ。

則子という女がそうなんだ。この女は三日にあげず客席に見える。パイパン（白塗の色男）の凡さんを好きらしい。いつもパンとした身装りで、いつもカブリッキから三列目の椅子に座りこみ、舞台の凡さんの顔ばかり、喰いつくよに見いつている。

ところが、この女がヒョイとおれを見るときの眼と来たら、冷笑というか蔑笑というか突にザンコクきわまる表情を現わしてるんだ。ところが――

今夜、館が閉場つて楽屋口を出ようとするときだった。口番（楽屋口の番人）の爺さんがニヤニヤ薄笑いを浮かべながら、

「光さん、レターだよ」

と一通の封書をおれに手渡した。ファン・レターらしい。おれにだって、ときどきファン・レターが来るのだ。

おれは口番から受けとった封書をジャンパのポケットにねじこんで、館を出た。歩きながら、タバコに火を点け、深く喫いこみ、フーッと煙を夜空に向つて吐きだしながら、おもむろに今の手紙をとりだしてみた。

オヤ、凡さんに宛てたものじゃねえか。爺さん間違えたナ。それとも、あの爺さん悪戯好きだから、知つててわざとおれによこしたのかナ……。

裏をかえす。「浮尾則」と記してある。男名のように見せてるが、字体はハッキリと女だ。これから楽屋へ、とってかえして、凡さんに渡してやろうにも、彼はもう帰っちゃったあとだろう。ええッ、この手紙がおれの手に渡ったというのも、この手紙の運命を示しているんだ。

えいッとおれは中をひらいた。模様入りの便箋から愛という字がダラダラ流れ出しそう。甘い文章を読み下していくと、

「私はいつも前から三列目の真中の椅子に坐つて……。」

という文句が出て来た。ハハア、あの女かとはじめて分った。

「二十一日夜八時、隅田公園向島寄りの書問橋下でお待ちねがえれば嬉しく存じます。かしこ」

と来たね。この寒空に、選りも選つておかしな所を指定したものだ。彼女、案外変りものなのかナ。二十一日夜……何だ、今夜じゃねえか。

ヨーシ！ おれのサジズムがむくむくと頭をもたげた。彼女の客席でのセセラ笑いの表情が、おれの頭をいそがしくフラッシュした。えいッ、やったれ！

そしておれはいま、彼女指定の場所で待っているのだ。冷え冷えとした寒風が、おれの全身をこわばらせる。

と、そのこわばったおれの肩先を、うしろから軽くたたくものがある。則子だった。真白い頭。フチナシ眼鏡。仄かにジャスミンの香が匂う。

「あら、ごめんなさい。人違いしちゃつて……。」と行きすぎようとする彼女。

「お待ちなさい」
引きとめて、おれは自分の口からマスクを引き剝がした。

「則子さん、この顔、ご存知でしょう」

「あら、あなたは女神座の……」

「左様、三枚目の光三平ですよ。三田のかわりにぼくがお相手しようッ」

ぐいと彼女の肩をつかんだ。

逃げようとする女。どっこい、逃がしっこない。女の肩からおれの腕がすべる。すべった腕が胸へ廻り、そのままググッと引寄せる。女ははげしく身をもがいて抵抗する。だが、それは逆の効果だ。ますますおれの腕の中に締めつけられる。

瞬間、おれの唇が妖鬼となって女の唇へとびついた。全身が唇となる。女の柔かい唇。甘い香。征服の快感が来た。魂が昇天した。えいッとおれは女を引放した。ものもいわずにその場を駆けだした。涙がボロボロこぼれやがる。畜生ッ！ 三平の弱虫ッ！ 怒れ怒れ、怒れ。おれはわわーッと喚きながら、前方の大樹へ駆けごとガーンとぶつかっていった。

ヘリオトロープの唇

二月四日

電車の窓ガラスに、おれの顔が映っている。

おかしな顔だ。グッと目を鋭く。いま別れて来た丹下先生の顔のようになる。

今夜しばらくぶりで先生をお訪ねしたら、

先生は、

「こんど光君を主演とする脚本を書いてみようと思ってるんだよ」

と云って、特徴的な大目玉でジーツとおれの顔を凝視した。先生に見詰められると、

おれは、心の奥底まで見透されちまうような気がする。先生はおれの異常な性癖や行動を、もう観破してるんじゃないかな。

「どんなテーマのものです？」

「そりやア云わぬが花さ」

先生はニヤッと微笑った。

窓ガラスの中のおれの顔も、ニヤッと微笑っている。

新橋からドカ／＼と大勢乗りこんで来たので、おれは、たちまち身動きできぬくらいに押込まれちゃった。おれの鼻の下に、よく手入れのゆきとどいた女の髪が来た。ブーンと香油の匂い。派手なチェックのマフラー。洒落たシヨルダー・バッグ。

女が顔を上げる。甘くヘリオトロープの香綺麗な顔だ。二十二、三。肉付きのいい細面。かなり太い眉。切れ長の眼が魚のように

光る。薄い鼻が冷酷そうだが、しかし、鼻翼のあたりに、ねばっこい淫蕩のかげをひそめている。

女の背後で、サラリーマン風の若い男が、瘦せた軀をごそごそ動かす。女は咎めるような眼でふりかえる。横で脂切った商人風の中男が、荷物を持った腕を上げる。女はキツとなってそつちを睨む。

おれはさっきから誰かに靴をおさえつけられているので、それを拔出そうと脚をもがいた。と、女はわざとらしく脚をよけ、おれがワイセツないたすらでもしたかのように、軀をひねっておれを避けようとする。

おそろしく排他的な女だ。おやめなさい、いやらしい偽善者の真似は。おれは知ってるよ。そんな小むずかしいお顔をなさったって、お前さんのような女こそ、彼氏と二人きりの濡れ場になると、コッテリぬるねばな濃厚さをあらわすことを。

ガッタンと電車が揺れた。はずみで、立っている乗客の軀が、急角度に傾いた。前の女は反りかえり、その上へおれの軀が乗しかかる。ルーシユの紅唇がおれの唇とすれすれになる。とたん、おれは強く顎をつきあげられた。女の掌がおれの喉をおさえた。

けッ、くそッ！ 瞬間、おれの体内を例の欲望がぐるぐると渦巻いた。攻撃欲、サド欲が爆発した。

お茶の水で女が電車をおりた。おれもすぐ

夜も大分更けているので、人通りはなかった。舗装路を踏む女の靴音が、闇の中にリズムカルに響きわたる。

女の姿が、日大医科の横を左に折れて消えた。と思うや、

今の女が一人の男に軀をつかまれてる。男の片手に双物らしいものが光ってる。あのドスの握りようじゃ、ネス公（素人）のタカリだな。なんていうのは、おれだって役者の端くれ、追剣のドスの持ち方くらい心得ているからだ。

男は双物を無器用に女に擬しながら、さっさとバッグを奪った。つぎにオーバーを脱がす。時計、マフラー手袋と手当り次第にひったくる。

おれは見ていてムカムカしてきた。何ンて小汚ねえ仕事しゃがる。今日びのぬすツと来たら、皆これだ。ちっとでも金目の物なら、洗いざらい引ッさらおうとしやがる。我々、慢がならねえ。

飛びだした。男の頬桁をガンと殴った。男がよろよろとよろめく。よろめく軀にガッと



とあとに尾いた。女は聖橋寄りの改札口からホームを出ると、大学街の暗い道を急ぎ足にゆく。

とつぜん「あッ！」という叫声。女の声だ。おれは馳けだした。

曲り角に身をひそめて様子をうかがうと、

組みついた。組みついたまま、いっしょにド
ッと倒れる。ゴロゴロ転がる。スキをねらっ
て、おれは、相手に強くメリケンをいれた。
相手はあっけなくのびてしまった。

おれは立上った。と、のびたと見せた相手
が、くるっと起上った。来るナとおれは身構
えた。が、相手はそのままバツと逃げだした
のだ。

闇の中に消えていく泥棒の後姿をながめな
がら、おれは何ソてこったと思った。こいつ
は、テもなく、子供のころ読み耽った番物小
説の豪傑だ。女の「アワヤ」を助ける豪傑。

塙田右衛門か。おれは苦笑した。

女のオーバーやバッグがあたりに散乱して
いる。おれは女にそれを拾わせ、着けさせた
女はシツとおれの顔を見ている。おれはい
きなり、女の横ずっぽを張りとはした。ハッ
と驚く女の軀をガッキと抱えた。唇へ唇が一
直線に貼けよる。粘着力のある女の唇だ。絞
るように吸いあげる。快い痺れ。女の抵抗。
抵抗がやんだ。と女の唇が押して来た。おれ
の頸に女の腕が廻って来やがった。

おれは女の軀を強くつきとばした。助けて
やった代償？ 感謝？……ぶるる、真っぴ
ら真っぴら、そんなのこめんこうむりましょ

う。オッリはいらねえよ。あんまり安く見る
ねえ、おれはサジストなんだ。

老 酬 宴

二月二十二日

朝、楽屋の扉を開けようとして、おれはハ
ツと足をとめた。内から「接吻」という言葉
が聞えたからだ。よもや、おれの……？と
そのままおれは佇ちどまった。軀中が耳にな
った。

内では四十男の五入っあんと幹部の富士清
の話しで、

「唇と舌とはどっちが敏感かね」

「そりや舌さ。医学上からもそれは証明でき
るンだよ」

ととりすました富士の声。

「そうかなア……そう云やそうだねえ……
そうそう」

とぼけた口調で、しきりに都合点してる五
入っあん。

自分の噂でないことが分ってホツとする
ともに、異様なことを聞いたものとおれは
思った。ただひたすらに俳優修業に専心して
いたため街に出ている性に関する何の本も読
んでなく、また、金で女を買うつてことが何

か卑劣のように思われて、パンスケ一つ買っ
たことのないおれは、性愛のテクニクにつ
いちや、まるで知っていない。いま、この二
人の話を立聞きし、ふしぎな発見をしたと思
ったのだ。われながらダラシがねえ。

おれは勢いよく扉をひらいた。内には、ほ
とんど顔が揃っていた。今日は一同早出して
丹下先生書下しの脚本「老酬宴」の舞台稽古
をする第一日なのだ。

将棋をさしたり、新聞を見ているうちに、
間もなく丹下先生が楽屋に見えた。自身演出
をされるのだ。男優女優一同舞台に集る。先
生と演出助手が、客席の前方に座を占めた。

この老酬宴は、題名の示すとおり、老年の
醜性を描いた物で、先生は世の偽善者を年寄
になぞらえて、その裏面の醜悪さを曝露した
ものらしい。それは――

ここに八十に近い一人の老人がいる。この
老人、うわべは色事を卑しめ眉を蹙めながら
裏にまわると、ひとり枕絵に悦に入ったり、
長男夫婦の寝室を覗き見したりする。

隣家に若い娘がいて、その娘が自分の次男
の大学生を好きらしいのに目を付け、或日次
男の名前を使って、隣家の娘にラブレターを
書き、逢引の時と所を知らせる。

男色喫茶店

の実相



最近聞いたところによると、新宿と銀座に相当組織的な、男色喫茶店があるようです。

スターが、こちらの態度を窺察します。

(行ってみてきた人が何人かあります)人々はこれを、クロクロ喫茶店などと言っています。が、その方法を申上げてみたいと思います。

喫茶店と思いついてきた客に、うっかりモーションをかけて失敗したことがあったからなのです。

ボーイ(もしくはマスター)

この喫茶店は、両方共マスターは四十二三とのことでボーイは何れも二十才前後の美男子がそろえてあるそうです。

客になるには、まずそ知らぬ風をして、その喫茶店に入り、自分が男色を求めていることを態度で示すのです。

すると、ボーイ(もしくはマ

スター)が、こちらの態度を窺察します。

は客がたしかに男色を望んできたものであると判ると、ボックスの隣りに坐ります。この場合完全なる男の姿でいますから、他の客が入ってきてても慌てゝ立ち上ったりする必要はないわけです。

こうして取引がはじまります簡単にその場で済ます客ならば

ボーイはその意を受けて、いろいろと実行しますが、このボックスの場合では、方法は限定されます。

其処で、他にある特定のホテルとか部屋とかに行くことになるのです。

ホテルや、部屋に行けば、野暮なボーイ姿ではなく、いろいろと変った趣向もあり、ボーイも男姿を女姿に変えて、充分楽しめるといふことになるのです。

年も、ともかく二十才前後の連中がそろっているのです、女姿になったのは、そこいらのパン助などよりも余程美しく、男色の味も、仕込まれているので、たまらないくらい、いゝそうです。

おそらく、こういうところは新宿銀座の場合に限らず、相当あることゝ思います。浅草には江戸川乱歩先生がよく行かれる

男色酒場(かげま茶屋)があると言ふ噂がありますが、江戸川先生と一緒に行ったこともないし、見たわけでもありませんから、真偽の程は保証しかねます。

だがそのような噂がある位ですから、かげま茶屋という男色酒場があることはあるのでしょう。

これと反対に、女ばかりの行く、女の喫茶店が、新橋の烏森辺にあるそうです。

こゝは女が女を買いに行くところとかで、男子は絶対に禁止だそうです。



(K)

岩田専太郎をめぐる



…?人の女

黒岩 傳吉

挿画界の大御所イワセンは、永遠の美青年である。明治三十四年生れだから、とつくに五十の坂を越しているのに、三十路会などという会を作つてさわいだ三十年台の彼と、外観は少くも変つていない。
この三十路会というのが楽しい会だつた。

歌舞伎座の近くに、小さな事務所をもち、会員は、銀座へ出てくると、そこを休憩所にした、連絡場所にしていたものだ。
映画の長谷川一夫、落語の金語楼、新派の伊志井寛などがそのメンバーだから物凄い。半玉をひつぱつてきて、事務所で酒をのんだ

り、三十代をたのしく享樂していたもんだ。

イワセンもそのメンバーの一人だつた。そんな当時の縁から、戦後や降出されたイワセンが、一時長谷川一夫の家に身をよせていたのである。

何しろ岩田先生は、十いくつにして、すでに挿画々家として一家をなしていたのである。この点、マンガのフクチャンこと横山隆一御大と軌を一にする。

丁度大正十二年の関東大震災で、東京の出版社が殆んど再起不能にみえた時代があつたそのとき、クラブ白粉で名をうった中山太陽堂が、今だ ばかり出版へのり出した。

戦後もそのときの名をつけて二つの雑誌が生れたが、当時としては仲々のした二大雑誌曰く「女性」曰く「苦樂」。

この「苦樂」の編集長が、今は大映の専務であり、流行作家の川口松太郎であつたことを知る人は少ない。

この「苦樂」も「女性」も、すつきりとした雑誌で、忽ちのうちの東京へのびて行つた川口編集長が江戸川乱歩に「闇に蠢く」という長篇探偵小説を書かせたのも、このときのことである。

この二誌に、イワセン御大、書いたこと書いたこと、殆んど一人で書きまくったのである。その当時の金で、百五十円もの嘱託料をもらつた上に、画料は入る、二十そこそこの岩田先生、大いに羽をのばしたのも、このときの話。

何しろ「一本松」という仇名を南や北の美妓からたてまつられた川口編集長と、白面の挿画々家がコンビで、今日は道頓堀、明日は曾根崎という具合に、縦横無盡、当るを幸いといった調子に撫で斬り。

イワセンが脳病院に入つたのもこの頃であり、イワセンの絵があのように病的な艶めかしさになつて來たのも、それ以來であるのもつばらの評判である。

資本家の中山太一もあそびが好きだから、一党を引き具して、やはりお茶屋に入りびたり、いくら稼いで儲けても、これぢやア経営が成り立つわけはない。結果は予想外に早くきて、二誌は廃刊になつてしまつた。

今のイワセン夫人はこのときの人で、たしか御大より一つか二つ年上である。

何といつても、評判をとつたのは、川口松太郎の「蛇姫様」の挿画を書いたところだつ

たと思う。小説も面白かつたが、非常にエロつばい錦絵風のイワセン挿画が、大向うを唸らしたことは事実である。

そして、戦後イワセン・ブーム時代がやつてきた。

長谷川の家から近くに新しく建てた家へ岩田画伯がうつたところ、何でもイワセン、これもイワセンと、毎日岩田邸は編集者のお百度詣り。

表紙を六つか七つ、オフセットの色物から挿画、何でも行くとして可ならざるものなしで、しかも大衆うけがするんだから、門前市をなすのが当り前。

当時、岩田邸に表紙をとりにつめていた記者の話によると、一番はげしい日は、延五十人の記者が朝早くから夜中近くまで出たり入つたりしたという。

表紙一枚六七万。オフセット見開きで軽く二万三。挿画は三千から五千という相場だつたらしい。物好きな編集者が、先生一日どのくらい稼ぐかと計算したら、一日何枚かかいて、十四五万軽く稼いだ、といつて嘆いてゐた。朝からつめかけている記者は、一万円やつと貰つてないところの話だから、溜息をつい

たのも想像できる。

このある絶頂において画伯が、本宅からそれほど遠くない、道玄坂を上つて大橋へ行く手前に、小さな家を買ひこんだ。

そして、何時の間にか、永年つれそつた夫人と別居のような形で、その新居に移つてしまつた。はじめは、仕事場という話であつたので、知らない連中はそうかと思ひ、知つてゐる連中は、いよゝゝ來たな、と肯づいた。

というのは、その新居に、美しくも若い女性がいからである。

よくみると、どこかで見たような美人である。どこでみたか思ひ出せない男が、家へ帰つて雑誌をよんでいたら、なアんだと膝を叩いて笑ひ出した。

それもその筈、みたような顔であるわけ、イワセン先生描くところの表紙の美人が、その人だつたのだから――。

問題の女性は、銀座のあるバーに働いていて、モデルとして時々先生にスケッチされてゐるうちに、先生の方から打ちこんだのか、それとも女性の方から、利用価値ありとみて食ひ下つたのか、眞偽二説があつて、定かではない。

ここに面白いといつては大変失礼に当るが先生は精進の夫人と、別に離婚して別居したのではないのである。夫人は夫人として、ちやいんといつても御主人の婚りを待つて、本宅におられるということなのだ。

ある筋の情報によると、この女性と先生の関係は、單なる（契約妻）でしかないとい



う。三年間、一日を限り、御兩人の間にある種の了解、協定がついているようである。そして、今、問題なのは、その期限である。三年が、すでに訪れてきているという事実なのである。

四年前の最盛期とくらべて、イワセン・ブームは、いささか下降線をたどっている。人氣の消長は、戦後ますますはげしくなりつつある。

昨日の流行作家も、一夜あければ、ただの文士に轉落し、少しでも仕事を怠けたりすると、もう忘れられて、誰も顧みようとはしない。ということは、次から次へ、新しい人たちが送りこまれてくる故もある。

イワセン・ブームは下まわつたとはいえ、決して先生の價值が低下したというのではない。

出版界には迷信がつきものである。一時は毎月七つ八つもの雑誌の表紙を書いていたイワセンも、極端にいえば、今は一つも雑誌の表紙を書いていない。

先生が表紙を書いていた「サロシ」をはじめ、いくつかの雑誌が廃刊になつてしまつた。

それが迷信一かわり、先生に表紙をかいてもらうと、その雑誌がつぶれるように、いい悪すものが出てきた。

そんな馬鹿な話があるわけではないのだが、雑誌屋は、うれなくなると、ひどく騒ぐ。

ところで当の先生は、そのおかげで、身体が楽になつてしまつた。一時は、坐りこまれて夜の一時や二時まで絵筆をとつていたのに、今はそんなことが夢のようになつてしまつた。

出版界は相変らず不景気である。不景気であれば、直ちにそれが文士や画家の生活にひびいてくる。

無論、いくら栗林正幸などという連中が、先生の眞似をしたところで、眞似は眞似でしかない。

眞似られると、先生はさつさと画法を変えて、追隨を許さない。

三年契約の妻との話し合いの時がきているとき、昔ほどの余裕もなくなつた先生は、近頃大分なやんでおられるという。約束は約束である。

しかし、三年の結びつきは、二人を満更の他人として、右や左へ袖を容易にわかせな

い。
友人の川口松氏が、三益愛子に一過倒をうけて、
けるべき、そして迎えてくれる人をもつて
いるだけ、先生は幸福なのである。

だが、幸いなことに、御本家の夫人は、い
つでも先生を迎えられる態勢で、あたたかく
門戸を解放して待っている。

この女性との問題は、單なる恋愛とか遊戯
とかいうものではないのだ。功利的——とい

うと誤解されるかもしれないが、この方面に
たづさわつてゐる人たちは、或る意味では、
みんな功利的なのである。みるもの聞くもの
を吸収し、消化し、自分のものとして排除す
る。

それがいうところの労作なのである。

若い契約妻を、どの程度先生がこなしたか
は知らない。さはさりながら、イワセン先生も
やがて帰るべきところに帰られることにちが

いない。
帰るべき、そして迎えてくれる人をもつて
いるだけ、先生は幸福なのである。
とにかく、挿画界の大御所として女の一人
や二人ぐらゐはあつてもよからう。しかもそ
の女がモデルとして使えらるゝとあれば、別に文
句もなからう。



中山義秀 の 小唄

気骨隆々たる作風を持つて芥川賞の「厚物
咲」以来、文壇に特異な地歩を占めて、一作
毎に、堅実な歩みを見せている、会津のサム
ライ中山義秀。酔えば拔剣に及んで、劍舞を
やらねば、どうにも始末におえないのだから、

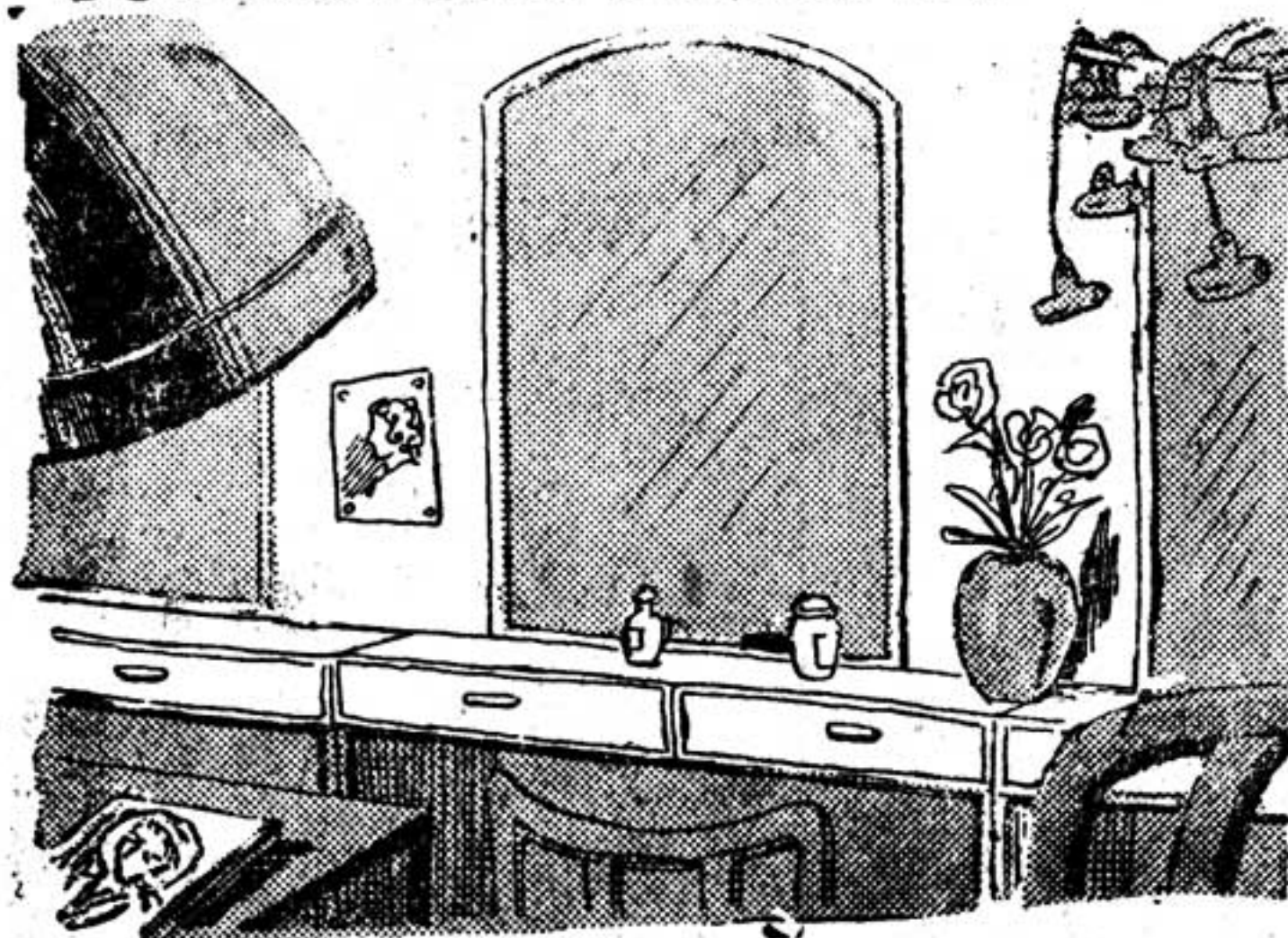
ら、同席の連中は年中ヒヤヒヤしている。
その昔、眞杉靜枝と同棲しない以前に、南
方の従軍から帰つて來た時代、素晴らしい腕
時計をもつて帰り、人毎に自慢していた。
そして酔うと、ビールの中へ投げ込んで自
慢したものである。それが、敗戦の混乱時代
に、長年の鬱積した精力が、俄かに復活した
銀座裏の酒場で爆発して、ある女を口説いた
ものである。

その口説き方が、如何にも中山義秀らしく
自慢の時計を、ビールの泡立つコップへ投げ

込んで、ぐいぐい飲みながら、
「どうだ、おれと結婚せんかッ」
と、怒鳴つたそうである。
これには、流石に海千の女給も驚いたらし
い。

この頃は、中山義秀も酒場趣味がなくなつ
たのか、高野山へ行つたり、会津の山へ行つ
たりしているが、「七色の花」に現れる小萩
さんとやらには、血通を上げてゐるらしく、
彼女の御趣味で濫い小唄だの長唄に凝つてい
るというから、全く変れば変わるものである。

山野千枝子・マヤ片岡・芝山みよか
メイ牛山諸女子とその亭主たち、な
らびにお弟子さんたちのものがたり



美容師^{かみゆい}夫婦は 艶事^{えんじ}がお好き

摩生みどり

美容師という職業は非常に近代的な感じで、時代の尖端をゆく、美しい仕事をする人と思われがちだし、また事実非常に藝術的な職業ではあるのだが、しかし、一皮むいてみれば、やはりむかしのいわゆる髪結いであつて、お客の気に入るように髪を結び上げて、お金をこる職人であることに、変りはないわけだ。

女性といわず男性も含めた、この世の中のあらゆる人間の美しくなろうとする欲望が、この世から無くならない限り、美容家という仕事が消えて無くなることはないのである。

全国美容院数は約三万軒。八千万の日本人口のうち半分以上をしめる女性のうち老人、子供をのぞいても、美容院へ通う数を23とみて、年二回平均二百円とみても、一億何千万

が、美容師の懐に入つてくるわけである。しかも二百円とは現在の料金としては最低であり、特に都会では、戦後次第に生活の安定を示して來た爲、もつと／＼ぼう大な額となつて行くことは間違いない。しかし戦争をかりたてすることに國民の貴重な税金をつかおうとしていることを考えれば、女性が美しくなる事は、多かれ少かれ世の中にうるほいを與えることにもなるのだから、美容師の懐がふくらんで行くというのは、喜ぶべき事なのかも知れない。

以上の次第であるので、美容師の経済的独立という面から考えてくると、下手な男顔負けで繁昌する店の主などは、店を技術者まかせにして、今日は歌舞伎、明日は温泉と遊んでいられる、結構な身分なのである。ところがたゞ女同志での遊び

も面白くななくなつてくる。女ざかりだし、美しく化ける事はお手のもの。昔からのたとえ話に髪結いの亭主は、おかみさんにおんぶされているのが多い。のんびんだらりとしていて、時々電気の具合をみたり、棚をうちつけたり、とにかく無能な亭主でも足りない。男性にしてみても、月々の生活にも追われずになつた頃には、いろ／＼女遊びが始まるわけであるから、女性にしたところで変りない筈。

若い燕をこしらえて、徒弟時代に味わえなかつた青春を樂しもうという了見を起すのも、無理からぬ次第であらう。

妾や若い燕をこしらえるのが経済的な余蘊のある人間なら人間ほど著しいのは、どこの社会とて同じこと。

日本美容界の草分けというべ

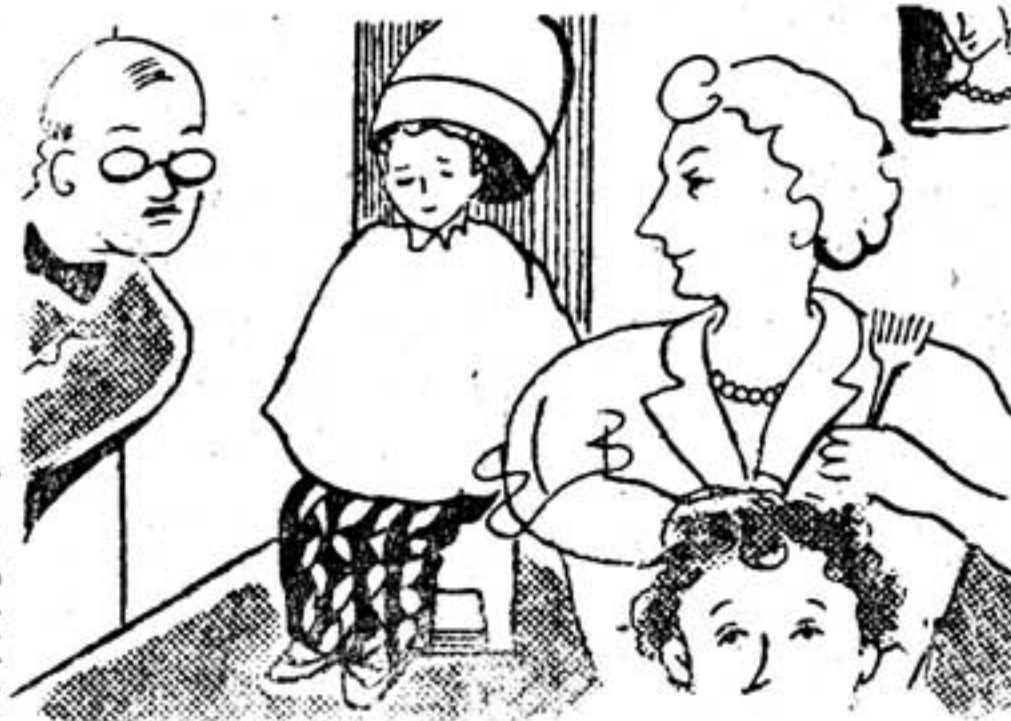
き存在、山野千枝子女史は、もう本年五十七才だが、とてもそんな年にはみられぬ、みず／＼した肉体の持主。美容師としてより、むしろ社交婦人と云つた方が良さそうな位、ありとあらゆる社交の場に、彼女の姿が見かけられる。

若い頃からうたわれた美貌と才知で、あらゆる事に首をつっこみ、結果に於て計画倒れが多いという事は、彼女を動かすマネージャーがない事にもよるのだが――。

多くの美容師が活躍する蔭には、事務的手腕をもつた男性のマネージャーが必要で、夫君がそれを兼ねている場合が多いのだが、不幸にして彼女の夫君は現在別居中なのである。

彼とて二回の渡米の際は、貿易商として同行しているのであるから、まるつきり事務的商取引が駄目という事はない。その別居の原因は何であらうか。

家庭にだけみられる性格でない彼女が、いろ／＼の事業をするに際して、(例えばバーマの



普及。マネキンクラブの設置など)その周囲には常に男性が多かつた。

種々の噂が今日まで続いているが、別居というのも、そんなところから來ているらしい。

彼女の名声とあの異様なみなりが人目をそばだたせ、若い燕と温泉行をする姿は、しばしば筆者の耳にも流れてくる事がある。

尤も彼女があゝの年で、三十過ぎの花ざかりのような姿を保っているのも、これらの男たちから、吸収する若い血潮があるからなのかも知れない。

今は故人となつたメイ牛山(現在のメイ牛山は夫君のハノ一牛山の後妻)の末路は、彼女の全盛時代を知る人には、一驚に値する。彼女が賣出しの頃の華やかさは、夫のハリーによつて後援されたものがあつたにしろ確かに素晴らしいものであつた。その彼女は、夫以外の男性の問題で身をほろぼしたのだ。相手は豊應の学生で、物凄くばかりの情痴関係の末妊娠し、墮胎し、墮胎した体が除々にむ

しぼまれて、やがては夫からは見はなされ、ついに淋しい死をとげてしまったのである。

現在のメイ牛山は、貞淑な家庭婦人らしい。

美容界随一のインテリと云われているマヤ片岡女史は、知的な女性であるが、時々店の従業員に対して、ヒステリーを起すそう。

その原因は、夫君の不身持にあるとのこと、夫中弘氏は、マヤ女史とは文化学院時代のクラスメート。一分の隙もない好男子の彼に、男気のない雰囲気気の店の従業員、研究生が関心をもちやすいのは当然で、従つて問題も起るわけなのである。

マヤ女史と好一对の芝山みよか女史の夫君小中谷達夫氏も、中々の艶福家である。昨年、マヤ、芝山両女史の渡佛留守中には、いろいろはなやかな話題を

残している。

美容師の亭主が店の女の子に手をつけるという例は、有名無名を問わず、非常に多く、美容院店主のなやみの一つでもある。

店の爲に一生けんめい働いてくれる子でも、主人の困い者になれば、今までの信頼は仇敵の

憎しみと変り、首切という結果になる。すると待つてましたばかり、扶養家族である御亭主は金のやりくりで、その子に一軒の店をもたせてやる。

そして日銭の入る商賣ゆえ、小遣いには不自由しないし、適当に肉体の満足も得られてこれほどよい事はないのである。この方法で自分の自由に出

来る店を何軒も持つて、ぐる／＼廻つて歩く発展家も多い。

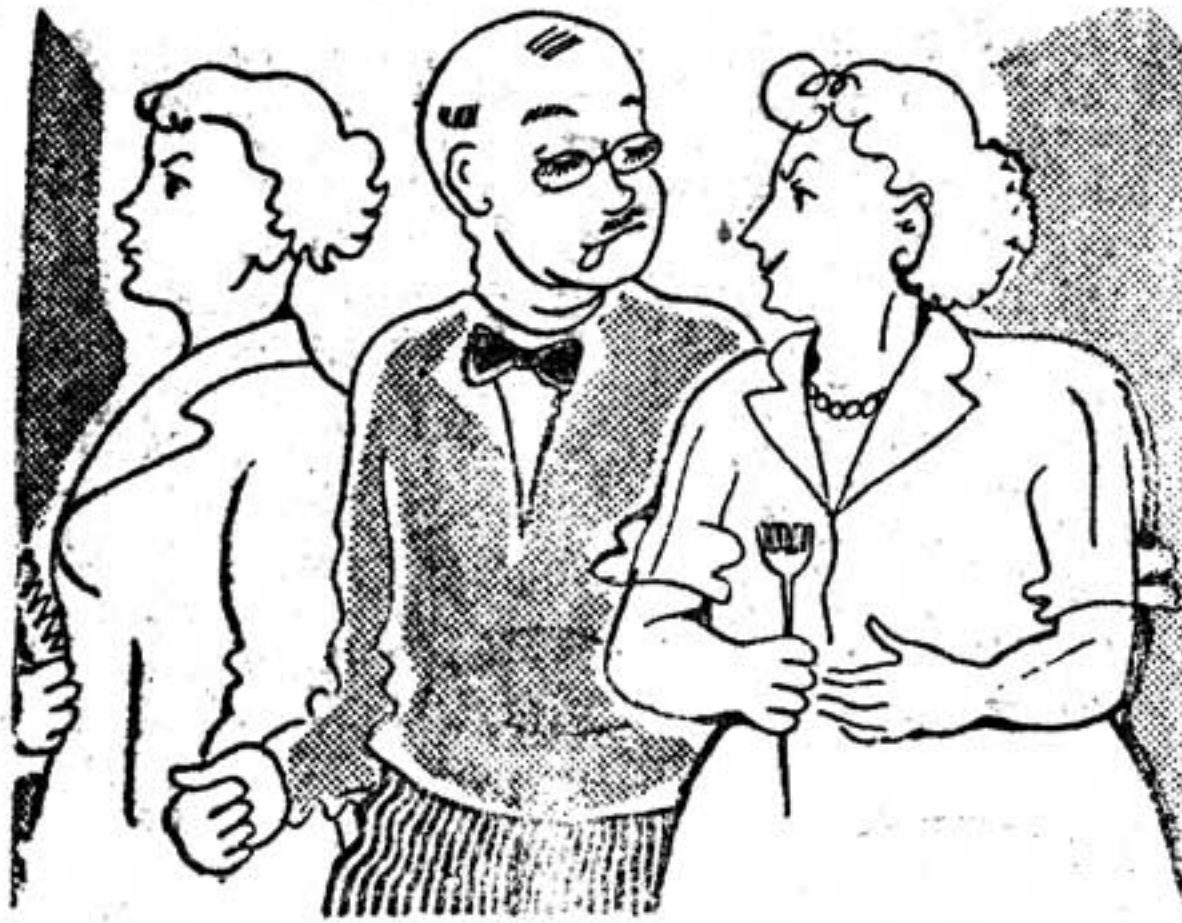
一方そんな亭主をもつた美容師も、案外古風な髪結いでしかないのに、離婚の訴えもなければ、そのまゝ泣寝入りの形が多い。

今まで多くの女性が、男性を十分観察出来ずに結婚し、十年後の予想もわからぬまゝ、なれ合い

ということになつてゐる。そして妻妾が仲好く、研究会に顔を合わしている姿もみられるのである。

が、若い美容師は現在どうであらうか。厳しい店主のもくで薄給にあえぎながら、仲々自分の店を出す力がない。そしてだんだん年も行つて、生理的解決も出来ず、巷に出る美容師が多くなつた。聞く。もつとも晝間事務員で、夜春をひさぐ女も多い世の中であるから、美容師とて変りない筈。性道徳が乱れた中で美容師だけが、聖人ではあるまい。

前日本美容師会々長宮前千代子女史のおだつばさ、色つばさは中々である。彼女は姉の夫と関係して子供を生み、結局正妻におさまつた。某酒造会社重役夫人で、美容業の方はおろそかしい。



山野愛子、牛山喜久子、山本
鈴子、眞野房子各女史は円満な
家庭の建設者である。

一風変わったところでは、一般
にはさして名が出ていないが、
かつて山野愛子女史のトリオだ
つた大野薫女史は、同性愛で有
名である。

店の子を毎晩抱いて
ねるので、びつくりし
て飛出した女の子もい
る。

それに、絶対に男性
美容師でベツトボーイ
がないと寝られないと
いうのがいる。大阪で
フィンガーウェーブの
第一人者云われる有
馬休六がそれだ。彼は
かつてオカマをしてい
たと云われている。女性的男性
だつた。
で、薄化粧し、眉をひき、大
阪弁でものをやわらかに話し出



す。こういう男性は、女性に興
味の無い事は、かの三島由紀夫
と同じく、店に来るお客でも、
気に入った人以外はやらない。
かつて業界誌が、人気投票を
した結果、彼に票を入れた理由
が、エロチックだからというの
は、彼の一面を云い当て、秀逸

味本位にみられがちなものであるが、
欧米では女性より男性が多いの
は、女性美は男性が作り上げて
いくものという点から出発して
いるのであろう。これからも、
その意味で、男性美容師が増加
し女客とのスキンダルも多くな
る事は先ず疑いないと見ていい
だろう。

現にある下町のある美容院で
は、男性美容師にやつてもらい
たくて、わざわざ遠方から来る
藝者があるそうだが、その男性
は、
「セックスアツピールの事は全
然感じない」
と答えている。

それは今日の男性美容師の特徴
として、非常に女性的な人が多
いからで、将来、男性的魅力が
一つの看板になつて、大繁昌す
る店も出現するであろうと思わ
れる。

ヨーロッパから出て、女
客だけの美容院にも男性が現わ
れるが、店によつてお断りして
いる所もある。これは店の子と
の問題をおそれる店主のヘンケ
ンからくる事が多いようだ。
しかし、わざわざ美容院へ来
なくとも、理髪店でもやつてく
れるのだから、出かけてくる男
性には、その目的があつての事
かも知れない。
しかし、この世は男と女の世
界。

どこの社会にしても男と女の
話はつきないのである。
所詮は美容師というものは、
華やかな雰囲気の中につつまれ
ているので、何うしても浮いた
噂のタネを、周囲にバラまくと
いうことになるらしい。
それもこれも、身から出た化
粧の美しさからだろう。

被虐の愉悅を語る……

オールまど女ばかりの座談会



初めて縛られた時の経験

司会 西条さん以外の方とは、いままで文通で交際してきた方々ばかりで、こうしてお眼にかゝるのは今日が初めてですね。みなさ

云う機会はめつたにないことなんですから、今日は一つうんとハメを外してお話願います。浜村さんは京都、長谷部さんは仙台から特に遠路御出席ねがったのですが、司会者としてもこんな嬉しいことはありません。で

は、西条さんあたりからまず皮切りをおねがいしましょう。みなさんの方でも、写真を通じて貴女をよく知っているんですから……。西條 私なんか……駄目。今日はみなさんのお話を拝聴するつて、先刻も云った通りですわ。誰か他の方からおねがいして下さい。司会 最初から尻込みしてたんじゃ座談会にも何にもならない。西条さん、あんたはモデルさんとして縛られた以外に、ほんとうに経験がないの？

出席者

西条ミドリ	(22)	モデル
浜村英子	(28)	会社秘書
長谷部由美	(29)	美容師
深水たか世	(31)	主婦
司会		本社編集部
於		文京区料亭さつき荘

西條 えゝ、だつて相手がいないんですもの……。

司会 最初るとき、私が紐を出したら裸はだかえていたね。心臓の音がハッキリ聞えた。

(笑声)

西條 怖ろしかったんですもの。何かされるんじゃないかと思つて……。(笑声)

司会 可哀相なくらいだつたね。でも私の経験では、そう云う外部的にハッキリ反応を示してくれるひとが一番いい。事務的にどうせモデルなんだからと、無表情に手を後へ廻すようなモデルさんは最後までコチコチだね。色気なんて全然ない。西条さんは感情の変化を全身に見せて、それが実に初々はつはつしいので、あのときの写真はまず成功だつた。この頃は慣れたせい、色気が乏しいですね。含羞がない。

西條 初めて縛られたとき、あとで背中が痛くて、とうとう二、三日他の仕事を休んでしまつたわ。

司会 それほどきつく縛らなかつたでしょう。縄の跡など全然つかなかつたし……未知なものに対する不安から、必要以上に身を固くしたり神経をつかつたせいだね。でも、イヤじやなかつたんでしよう。すぐまた来てく

れたからね。

西條 それは商売だから……。

司会 いや、それ以外にイヤでなかつたと云う証拠がある。

浜村 証拠つて、何ですか？

司会 つまり、歴然とその感情を生理的に残していつたんですよ。西条さんが帰つたあとで衣類や下着をかたつけていると、それが残つていたつてわけですよ、下穿きにね。

西條 嘘、嘘よ、みなさん、そんなこと。

司会 ほお、顔が赤くなつた(笑顔)

長谷部 そう云う感情があつたら、それは当然ね、私なんか食いついてやりたいようなイヤな相手だつたが、やつぱりエレクトロしちやいましたものね。

深水 貴女が初めて縛られたときですの、それ？

長谷部 美容学校へ通つていた頃、もうじき卒業と云う頃だつたので、いゝお点が採りたくてねえ。私、美容体操がとて下手でちよつと自信がなかつたんです。美容体操の先生にニヤけた好かないひとがいたんですが、その先生に騙されちやつて……

西條 どんな風にして縛られたの？

長谷部 「君は美容体操が全然駄目だ。そ

んな成績じゃ、卒業証書はやれないよ」つて云うんです。私はまだおぼこだつたし、泣き出しちやつたんです。そうしたら「いゝよ泣かなくても、放課後に毎日一時間ずつ特別にレッスンをやつてゆきたまえ」つて、その日とうとうクタクタになるまで続けさせられてしまつたんですが、その間、先生は終始じつと私のレッスンを見守つてゐるの。疲れてフラフラと椅子に腰を下ろすと「勝手に休んではいけない、僕がいゝと云うまで続けたまえ」つて、とうとう膝がガクガクするまでやらされてしまつたの。

深水 まあ、相当のサディストね、その先生。

長谷部 そうなんですの。私、そのときまで全然そんなことに気がつかなかつたんです。が……疲れてしまつて、もう物を云うのも憶劫だつたのです。すると「草臥れたでしよう僕がマッサージをしてやるからその長椅子の上へ寝たまえ」と殆んど命令的に云われると私は不思議と、自分で意志しないうちに傍の長椅子に寝かされてしまつたんです。ところがそのマッサージが曲者、疲れていたせいもあつたけれど、先生のマッサージが始まると私はいつかうつらうつら睡つてしまつたの

ね、何とも云えない気持ちになつて……寒い、
と気がついて眼をあけると、胸がはだけ、ス
カートを脱がされているんです。先刻のまま
長椅子の上に寝かされているので、はッと氣
がついて起きあがろうとすると、手と足を縛
られて自由がきかない。急に怖くなつて声を
出そうとしたら、チャンと狼ぐつわまでされ
ているんです。

西條 それで、その先生何もしなかつたの
長谷部 野暮な質問、と云いたいんです
が、実は何もされなかつたわ。その先生、イ
ンボなんですつて……あとで聞いたら「僕は
こうして女のひとを縛つて眺めるだけでエレ
クトするんだ」つて、とても淋しそうな顔を
していたわ。

司会 そうだね、インボのサディストつて
案外に多いんですよ。私の友人に、四十六に
なつて女を知らない男があります。縛りの絵
とか写真を眺めるだけでいゝんです。その友
人に云わせると、縛られた女は、どんな盛装
の美人よりも美しい芸術だと云つています。
長谷部 私、そんなことされたのですが、
それから急にその先生が、好きになつちやつ
て……

西條 それなら、私もほんとうに縛られて

みたいわ。

深水 それから、ちよいちよい縛られた
の？

長谷部 私の身内に睡つていたマゾの血を
目醒ましてくれたのですわね、その先生が
……それ以来、ときには私の方から積極的に
縛られるようになつてしまつたわ。でも、と
うとう他の先生に見つけられちやつて……私
も間もなく卒業してしまふし、その先生もす
ぐ辞めてしまつたし……それつきりになつて
しまいましたわ。

浜村 こんなお話、常態な女性にはわかつ
てもらえませんか。『変態』だつて一遍に
軽蔑されてしまいますから……私は真面目な
会社に勤めていますし、——社長附の秘書な
んかやつているので、それでなくても誤解さ
れやすいでしょう、だからと昼と夜の生活を
ハッキリ分けて、会社にいるときは全然カマ
トトなんです。男のひとがよく女を縛つた
話などしているでしょう、ドキリとして息が
詰るほど興奮してしまふときがあるの。で
も、知らん顔をしてトボけているんですが、
そんな日は家へ帰ると、途端に牀中の血が一
遍に逆流してしまいますわ。もう、じつとな
どしていられないんです。

司会 浜村さん、いまお相手がいるんです
か？

浜村 それが全然。適当な方がいたらお世
話ねがえませんか？

司会 信じられませんか、貴女くらい美
しい方に相手がいないなんて……ねえ、みな
さん。

長谷部 私なんかも、現在は完全に空閑。

司会 ほんとうですか？ どうも信じられ
ないが……もつとも、これが常態の神経な
ら、わけなく相手が見つかるでしょうが、な
まじ神経が贅沢にできているからね。

長谷部 贅沢じゃなくて、規格外特別品じ
やないか知ら……（笑声）

こんな風に縛られてみたい

司会 貴女方のマゾ感情に一番びつたりし
た縛り、つまり被虐の悦びを味わうにはどん
な風にしたらいいでしょう。ひとくちに云
うと、どんな風にして縛られたときが最もエ
レクトするか。と云うことなんですわ。

深水 最近、よく映画なんか縛りの場面
が出てきますね。「スッ飛び千両旅」の嵯峨
美智子はよかつたわね。「縮図」で乙羽信子
の芸者が菅井一郎に縛られる場面が特にいゝ

と思いましたが、あゝ云う映画を見ると共鳴感をおぼえ、無性に縛られたくなつてしまふわね。あの映画を見たあとで、途中で待合へ寄つて主人に縛つてもらいました。

長谷部 「縛り」とひとくちに云いますけど折檻とか拷問のようなものと、合意で閨房の前戯としてそう云うことをする場合とがありますわね。私は映画とか小説で折檻や拷問の場面を見たり読んだりするとゾクゾクするほど昂奮しちゃいますが、自分ではそうされるのはイヤですわね。やはり、たとえ身動きもできないくらい縛られたとしても、そうやって征服されたあとで同衾するのでなくてはイヤですわ。暴力の伴う縛りは、私まだそれまで経験がないので……。

司会 長谷部さんの場合、最初の相手がインポだったので、それが潜在的に一つの形をつくり上げてしまつていゝんですよ。さいわい貴女は、それ以上アブの域に足を踏み入れていないんです。それは結構なことだと思いますね。マゾとしては最も安全だと思ひます。

浜村 私は駄目ね。そんなことくらいじゃエレクトしませんわ。荒々しい男の暴力がどうしても必要、躰が曲るほど殴られ、手足が

千切れるくらい緊縛してもらわないとね。私は完全にアオニストですわ。

司会 浜村さんの場合、確かにちよつとアブの傾向がありますね。でも実際には、その半分も行つていないようですが、どうでしょう。貴女の場合、たゞ縛られただけでは問題にならない、相手の加虐が或る程度必要なんでしょう。ひどい目にあつたことあるんですか？

浜村 実際には、まだそれほどひどい目にはあつていませんけれど……。

司会 いろいろみなさんのお話をうかがつていゝと、とにかく一応は或る程度昂進したマゾヒストですね。まさに水準以上（笑声）

深水 私は撥ぐられるのがいちばん辛いわね。殴られるのは案外平気なんですが……この前ちよつとした誤解から夫婦喧嘩をしちやつて、主人をほんとうに憤らしてしまつたことがあるんです。主人は私を殴つても駄目なので撥りで責めてきたの。縛られて撥ぐられるんですから苦しくて苦しくてどうにもならない、とうとう私、意識のない粗相をしてしまつたんです。座敷の真中で放尿をしてしまつたのですよ。羞しくもあるし泣き出しちやつたんですが、あとで主人の愛撫が大変気

狂いのようでしたわ。とても可愛いつて……

（笑声）

浜村 まあ、やられちやつたわ。（笑声）

司会 手離しとは恐縮ですな。

深水 あら、ごめんなさい。（笑声）

マゾと刺青の興奮

司会 今度は方向を替えて、みなさん取つて置き、誰にも話せない話、つまり、こう云うとき以外にはおそろくお話しする機会もないと思いますから、初めての打明け話と云うことになりましたどうか、それを一人々々御披露して頂きたいんですが……。浜村さん、例の刺青の話、あれからどうなりました？ 恰度いゝ機会ですから、あのお話をみなさんに御披露して下さい。

浜村 あら、あれは困りますわ。

司会 先刻も云つたように、こゝにお集りのみなさんは、あなたに負けず劣らずのマゾヒストなんだ！、いずれあなたに負けない面白いお話を発表していただけると思ひますから……。

長谷部 そうですわ、いまさら尻込をなさることはございせんわ。その刺青のお話ぜひおきゝしたいわ。

司会 刺青のあるものは心理的にはヤッな
さんですね。あの苦痛を忖える快感、あれがい
いじゃないですか。浜村さんはどうでした？

浜村 針を入れられてゆくときの気持、最
初は、たゞ痛いだけで、それを我慢するの
にせい一杯でしたが、二度目三度目とだんだん
図形が完成してくる頃になると、針だ
とか墨だとか刺青のお道具を見ただけ
でエレクトしてしまいそうになりま
す。そうになると、こんどは一針一針に
いゝような不快感が疼痛感とゴツチ
ヤになつて、もう恍惚としてしまいま
すわ。

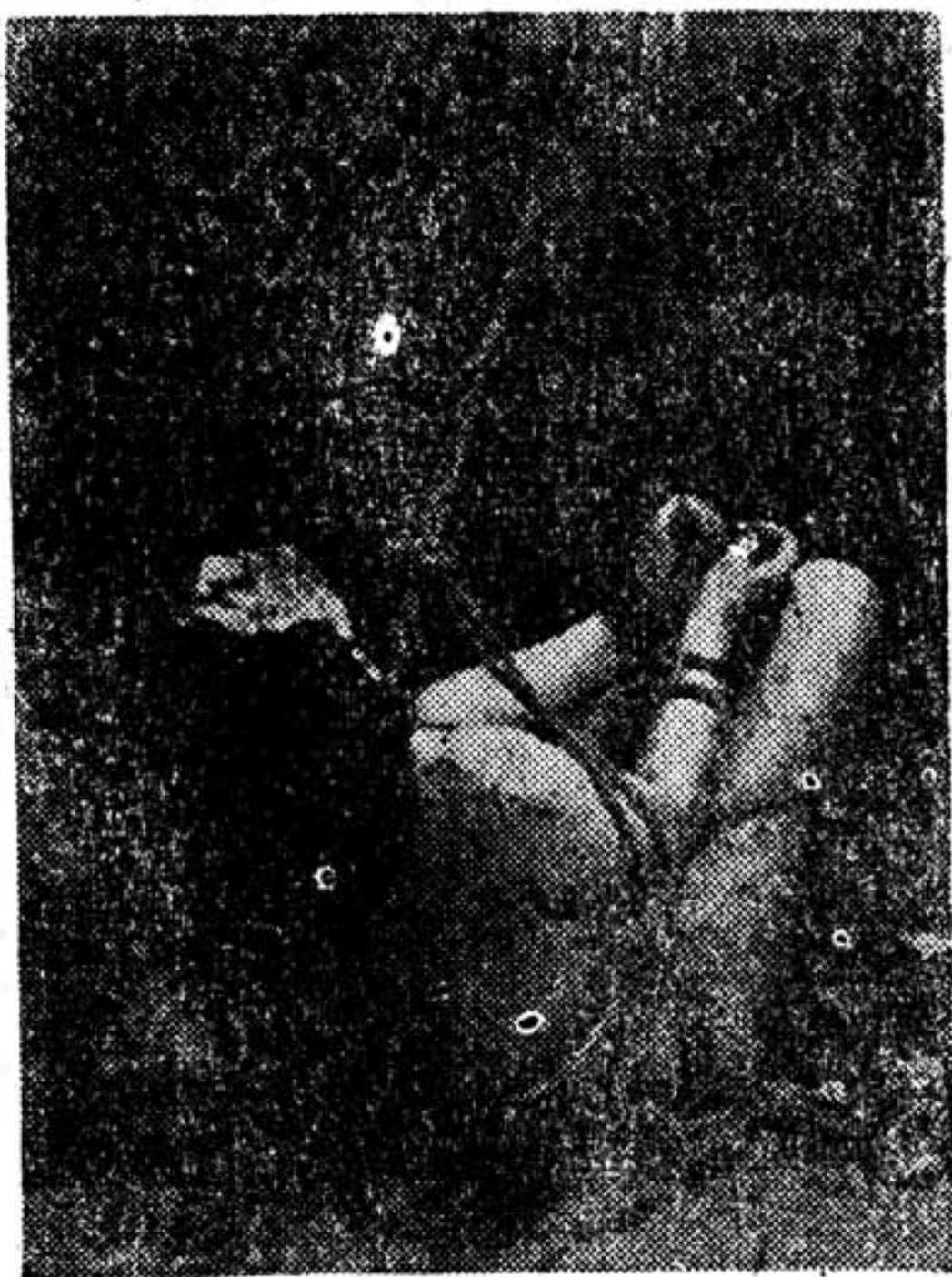
司会 刺青師の話をきくと、刺青は
男より女の方が我慢に強いと思いま
すね。本質的にマゾなんだからそれは当
然でしょう。

長谷部 浜村さん、どこへお入れに
なつたの。よろしかつたらお見せにな
つていたゞけませんこと。ねえ、みなさん。
西條 私、女のひとの刺青、見たことあり
ませんわ。ぜひ拝見したいわ。

司会 そうですね、では速記がすんでから
お風呂の仕度もできているので、あとでお風
呂に入つたときでも……いゝでしょう、浜村

さん。
浜村 あら、大変なことになつてしまつた
わ。

司会 どうせあとで現物(刺青)御披露する
んだからいゝと思ひますが、浜村さんの刺青
はちよつと判りにくいんです。下腹部のどこ



ろで、それも十五糎四方くらいの大きさなの
でちよつと手拭かタオルで前をおさえたらわ
かりませんよ。(笑声)

浜村 イヤですわ、そんなことまでお仰言
つては……実はそうやつて白ばつてしま
うつもりでいたのに……。

深水 その刺青を入れた動機と云うのは？

浜村 そう云う願望が芽生えたのは、確か
女学校の二年のときだつたと思います。その
頃、上級生の間に刺青をすることが流行つて
いましてね、刺青と云つてもひどく他愛ない

もので、十字架とかXとか、或は自分
の頭文字をローマ字で入れる程度なん
です。それもすぐ人眼につくところへ
はしないんです、腋の下とか内腿とか
ね。私は下腹部のすぐ上に十字架を入
れたのです。

あとでX×が多くなればわからなく
なつてしまいますんでね。(笑声)

それがとても愉快なんですわ、内心
ではうれしくてたまらないんです。

毎日、鏡を出して眺めたりして……そ
れを家の女中に発見されたときは、本
当に死んでしまおうかと思ひました。

でも、その女中が、大変なアブで刺青
のことは誰にも云わないからつて、とうとう
同性愛にさせられてしまいましたの。

いろいろなことを教えられて、ズルズルと
レスポスの泥沼に引摺りこまれてしまい、そ
れがとうとうこんなアブニストになつてしま
つたわけです。それからそのアブ女中もお嫁

にゆき、私のそんな秘密は家人にも知られな
いまま、私も二十二のとき女専を卒業すると
すぐ結婚生活に入りましたが、もともと愛情
も何もない結婚でしたから駄目でした。と云
うより、アブの血に毒された私の躰が、とう
てい怠惰な結婚生活では満たされるはずがな
く、三カ月たらずで離婚してしまいました。

それから五年、気楽な独身生活をつづけて
おりますが、気が向けば相手がどんな階級の
男でも……でも、ほんとうのことを云います
と、私の殉愛遍歴は終止符をうつことなく墓
場までつづくことでしょう。結局、私をトコ
トンまで悦ばせてくれる相手にまだめぐり会
わないのです。そんなわけで、私はいま、自分
の躰を自分で縛つて息も詰るような加虐の瞬
間を想像したり、ときには自分の躰に針を刺
したり、太腿や下腹部に灸^{きゆう}をすえて自虐の苦
痛を味わっているのです。

司会 浜村さんは、腹部ナルシス（自己
愛）なんですね。刺青の動機もそこにあるん
ですよ。

浜村 そうでしょうか。いまもお話しまし
たように、私は自分の腹部に異常な愛執をお
ぼえ、少女時代には、こつそり自分の部屋に
ひきこもつて鏡にうつしてみて昂奮したもの

です。こんもりと盛りあがつた自分のお腹を
見ていると、泣けてくるんですの、いとおし
くつて、そしてエロチックなんですわ。とて
も……。

司会 浜村さんの場合でなくても、それは
誰にもあるんですよ。ナルシスはマゾ的要素
を多分にもつている。

浜村 刺青の前置きがだいぶ長たらしくな
つてしまいましたけど、結局、私は自分を満
足させてくれる相手がいない、あるんでしょ
うが、めぐり会わないんでしょうね。そんな
ことから、だんだん自虐の陶酔をおぼえるよ
うになり、針を刺したりお灸をすえたりする
ようになつたのですが、そんなことをして躰
を汚なくしてしまふなら、いつそのこと刺青
をしてみよう、そうしたら針を入れる苦痛と
自分の美しいお腹を汚す自虐の悦びを同時に
満足できる、そう思つたのです。

司会 実は、ちよつと前に写真を送つて頂
いて拝見したんですが、毛彫のなかなか見事
なものです。牡丹に蝶ですが、関西にもあんな
上手な刺青師がいるとは思いませんでした。

西條 私も、そんなの入れてみようか知
ら……。

浜村 いけませんわよ。そんなことしたら

もう二度とモデルさんはできませんから
……。

深水 先刻、刺青をしているひとはマゾヒ
ストだとおつしやいましたが、家の近所にい
る頭なんかそうか知ら。とても元気なひとで
寒中なんかでもシャツを着ない、ちよつと凄
いくらいでマゾなんかには見えないのですが
ねえ。

司会 マゾの性格なんて、そんな外見的な
ものでは判断できませんよ。案外なところで
それがわかるんですが、たとえば血なんか見
たりすると逆に強がつたり威勢を見せたりす
るところが、本人はその苦痛に陶酔している
んです。難かしいですよ、マゾの心理なん
て……。

浜村 本当にそうですねえ。

司会 深水さん、何か特別のお話を……。

深水 あら、何もありませんわ、先刻話し
た擦りの話くらいなものですよ。

長谷部 そう云えば、私も取つて置きのお
話をしてしまつたわけですよ。

司会 うまく逃げられちゃいましたね。恰
度時間もありませんので、ではこの辺で……
どうもみなさん、いろいろ有難うございまし
た。

銀座風流滑稽譚

銀座と言へば、どんな田舎の人でも日本人なら、東京の地を踏まぬ者でも知つてゐる。

しかし、それは銀ブラ（舊い！）が懐しい言葉だよ。する銀座であり、夜の銀座ではないだろう。

處で、夜の銀座は七色ネオンである。なんだ流行歌の文句ぢやないか、正にそりですが、

このネオンの灯るところ、殆んどがキャバレー、酒場、飲み屋、各種各様の要するにアルコールを供する場所である。一體何軒くらいあるのか、しかと數を勘定する程筆者は聞がない。だがね、勘定した閑人がいたのである。彼言ふに、一軒一晚と廻つて、一丁目から八丁目までの銀座通にはたつぷり二年餘はかゝる店の數があるといふ。

成る程ね。銀座を知るものも、こゝまで知るにはなかくであると申されよう。

なんだつまらん、と申す勿れ。話はこれから始まる。そんな數の店が一東京の眞んに概比している譯であるが、店には必ず女の子がいたのである。大キ、バレーには數百人から、小なる店で二三人は明眸紅唇の近代的女性が、夜の銀座には溢れている。これら女性の數となれば一寸想像がつかなくなる。想像がつかぬ位の數の女性がいるからには、たま／＼一人や二人の、あるべき處に毛のない女性が居ても不思議でもないでなくなる。

酒場サロンの夏子さんが、その一人や二人の一人であつたのである。

夏子さんなかくの美人である。人並以上の容貌と申してよい。おまけに近代女性にふさわしい潑刺たる肉體の持主である。毎晩一人や二人の殿方が通つて來てくれるくらい評判の賣れっ娘である。

そんな幸福な夏子さんも、どうしたものか生れつき、眉毛が無いと申してよい位、

薄い。頭髮も多い方ではないかも知れないが、人並には充分である。勿論、他の部分も人並に植え揃つてゐることは確かである。

眉毛は無くとも、毛粧すれば眉墨で思うまま描けばよい。だが、夏子さんの氣持としてはやはり人並な毛波を揃えた眉毛がほしかったと解すべきだろ。

そして、實際に夏子さんはやがて希望通りの毛波を、顔面の一部に突如として或る日出現せしめて同僚を驚かせた。

廿世紀の今日では、あるべきところに毛が無いくらいで憎む事など滑稽といえる。鼻が低ければ高くなる整形術という人間改造をやる近代醫學がある。毛のない方には植毛という植木屋みたいな醫學もある。

筆者の友人で植毛の研究をしている男がいるが、何時か彼の植毛の研究を聞いたことがある。

何んでも彼の話によれば、毛というものは實に巧妙に出來ているものだそうである。造化の神の藝術的な力作であらうか。

毛には大體二種類に分類されると言ふ。例えば頭髮である。これは、のばせばいくらでも伸びる性質のものである。これと同

性質のものか、男性の鼻の下と顎に植える毛である。

尤もこれは毛深いのと、薄いとの程度
の相違はあるが、本質的には同じだそうた
頭髮的性質の毛と異なる種類の毛は、のび
る速度が非常に遅く、そして先端が筆の穂
先のごとくなり、或る程
度の長さを保つ性質のも
のである。例えば男性の
脛の毛脇毛、陰毛と言っ
たものである。

そこで植毛する場合に
い、大體同性質の毛を移
植するのでなければなら
ぬと言ひ譯らしい。とに
かくそんな學説みたい
ものだったか、本當かど
うか。しかし考えてみれ
ば、成程とうなづける節もある。

ところが夏子さんは一體どこの毛を、ど
うして眉毛として移植したか、興味ある事
實ではないか。

夏子さんが醫者のところへ駆け込んで相
談したのかどうか、しかと現場を見た譯で
ない筆者は何とも言えないが、眉毛を植え



るために語るも涙ぐましく苦勞を重ねた事
實を筆者は知つてゐる。

酒場サロンのバーテンが語るに、夏子さ
んがこの店に現れたのが一年近くも前のこ
とになるが、他の女の子と違つてなかく
道心堅固、近來稀に見る珍しい女の子だと

評判をとる程固い女たつ
た。それが半歳程たつや
俄然、「オサセ」と言わ
れる程の有名な女と化し
たのだから、つくづく女
なんてわかりませんと言
う譯だ。

ところで——おさせと
は、一口に云えば男から
くどかれた以上、決して
辭退しない女の こと
である。

あまりの豹變ぶりに、バーテンも何かこ
れには理由がありそうだと、思うが本人に
直接聞く譯にもゆかぬ。

そうした夏子さんの毎度の亂行が三月程
續いた。そして三ヶ月目に夏子さんの亂行
がパツタリ止んだ。と思うと三日程つづけ
て夏子さんは店を休んだ。皆が病氣でもし

たんぢやないかと、噂するうちに、颯爽と
夏子さんは店に現れたのである。

ニツコリ笑いかけて、
「どう、バーテン、どこか私にかわつたと
ころなくて？」

聊か度肝を抜かれたかたちのバーテン、
まじまじと夏子さんの顔を見詰めていた。
が、ハツと氣がついた。なんと素晴らしい眉
毛が黒々した毛波を見せているではないか
かね。夏子さんの眉毛が無いことを知り
悲觀していた事を感じていたバーテンで
ある。

「美しい毛波の眉毛だね」

「よくわかつたワ」

夏子さんは會心の笑を浮べたのであ
る。

後日、夏子さんがバーテンに告白したと
ころによると、三ヶ月の亂行はすべて眉毛
のためだったと。言うのは、夏子さんを
くどいた百人近くの男の鼻毛を夏子さんは
眠つてゐる間に抜いたのである。眉毛とし
て移植できる毛は、鼻毛以外にないのであ
る。そしてどんなチヂレ毛を持つた人間で
も、鼻毛だけは、チヂレしていないさうであ
る。

(三黒瓶太)

文壇早稻田色情地圖



大方壯太郎

文壇に早稲田派なる一派があつて、この派の頭目は丹羽文雄ということになっている。丹羽は確かに頭目たる資格をもっている。彼の健筆は先頃原稿紙二万枚だつたか、二百万枚を、文士となつてから書いたといふので、文藝春秋だつたかに、表彰めいた記事で書かれてゐる。その丹羽と並んで、これも健筆の石川達三がいる。

とにかく、この御兩人ともに、文壇に於いては、正に勇將であり、諺どおりにその聲下に馳せ集う面々を見るに、全く弱卒なしという感がある。

曰く田村泰次郎、曰く井上友一郎ということになる。その他にももろもろの軍勢が後詰めとして控えているが、先づ早稲田派と云えば、以上の四人を挙げればよいと云うことに不文律となつてゐる。

この四人が率先して、後輩のために原稿料の何百分の一かを投げ出して、同人雑誌を出版させてやつてゐるという話を、敗戦後仄聞し、全くいい話だと思つたことがある。

文壇人というものは、何うも政界だの財界だのという煮ても焼いても喰えない代物は違つて、自分の情事などを隠すなんて、應當は

全くもつて不得意らしい。

情事そのものが、飯の種になるのだから、自ら公々然と天下に公表する始末だが、今更何をか云わんやということになる。

丹羽文雄は、今でこそ貴族がついて、デッブリと太つてゐるが、その昔は長谷川一夫か丹羽文雄かと云われたくらい的美青年だつたのだから、彼が早稲田大学の文科に席を置いて、未來の大作家を夢見ていた頃から、女に追いかけられ通して苦勞したらしい。

銀座裏——現在の西銀座——の酒場「トミ」のママだつた富子というのが、その頃の彼を若い燕としていた女である。この女との関係は、相当に長く続いたらしい。

無名の文学青年だつた彼は、執筆に疲れると、この酒場に現れて悶々の情を、酒に紛していたものだ。それは、この酒場には姐御肌のママの客扱いが面白いといふので、有名無名の文壇人や画家が集つて、夜毎派手な騒ぎを見せていた。

丹羽は、この雰囲気の中で、文壇に打つて出るチャンスを手に入れたとも云える。だから、善い意味にも悪い意味にも丹羽はママ・富子から出発したと云えるだろう。



石川達三はその作品「蒼氓」が芥川賞になり、一躍文壇に乗り出すと、その不敵な面魂と同様な逞しさで、ぐんぐんと頭角を現して来た。

彼の一家というのは、相当な社会的地位にある兄弟が揃っているが、どうしたことか、彼は大学時代は苦学のようなことをしている。芥川賞で賣出すまでは、ダンス教師をしたり、ブラジルへ移民船で出かけたりしている。このブラジル行というのは、奇妙な話だが、彼は鶏の雛の雌雄鑑別の技師として行つたというのだから面白い。

彼の妻君というのは、彼が学生時代にダンス教師をしていた時代に、矢張りダンサーをしていたと云うから、所謂糟糠の妻というところだろう。

これで早稲田派の両雄の青年時代を終るが、続いて田村泰次郎、井上友一郎の両将だが、文壇では、この兩人を戦後派に数えている向きが多いが、御兩人ともに戦後派ではなく、戦前派で、戦後賣り出すまでに、文学修業は十年以上も積んでいる。

田村は「肉体の門」で、素晴らしいヒットを憂ッ飛ばしたが、それまでには原稿が賣れな

くて泣く思いをしている。だが、それを彼はその逞しい体力で克服して、あの一作を書き上げたのだ。

あの作品にも見られる通りに彼は夜の女の性態を心憎いまでに描破しているが、これにも十数年の修業があつたのだ。彼は早稲田を卒業して間もなく、就職なんてことには外ッぽを向けて、新宿の大宗寺裏の安アパートに燻りながら、毎夜のように新宿界限をウロついていた。

この大宗寺のアパートというのが、大変なアパートで、この住人の殆んどが、新宿遊廓へ通勤している牛太郎一かやりで婆さんかその界限の安カフェーの女給だつたのだ。

田村はこの生活で、倫落の女の世界を、その頃から詳さに体験していたのである。

加うるに、一伍長として大陸の戦野にある間に、逞しい男としての経験も積んだ訳である。この荒々しい体験が、戦後の凄まじい変貌に露めく夜の女の描写には、びたッ、と來たと云えるだろう。

その時代から、田村は井上友一郎とコンビになつていた。田村はそんな調子で、作家として意志を述ぶるチャンスを握めずに、どち

らかと云えば、機嫌無頼な日を送っていたが井上は今日の東京新聞の学藝部記者をやつていたので、田村はちよくちよく井上を、日比谷公園側の新聞社へ訪ねたものである。

田村はその頃から逞しい体力をもっている上に、面も怪しげなアパートに住んでいるのだから、周囲の情痴絵図を厭でも見せつけられ、屢々青春の乱費を敢行し、有難くないお土産を頂戴した話がある。

「友さん、弱つたよ」

と、彼は井上の所へ感奮な顔を現わして、訴えたものだ。

その井上友一郎だが、彼は田村と違つて小柄で風采のバツとしない男だが、全く人当りの柔い男だ——もつとも、大阪出身のせいもあるうが——地味にコツコツ勉強していた。

この井上が、当時文藝春秋社のあつた大坂ビルの地下室のレインボー・グリの女給仕さんに恋をした。その恋たるや、まことに純情で今日井上が得意のペンに物を言わせて描きまくる銀座裏の女給群などは、どこから出て来たか理解に苦しむほど、可憐（！）な恋をしたものである。

そして、遙々この恋叶つて結婚したのが、

今日の彼の妻君である。この妻君はなかなか良く出来た妻君で、少しも高ぶらず人当りがまことに宜しい。今日では確か一男一女の子持ちの管である。

——と、ここまでは両雄、両將の若き日の恋のゆくたてだが、それぞれ文壇の賣れツ子となつてからの彼等の行状記は、さて何んなものであろうか。

もつとも、田村泰次郎だけは、有名になりかかつた頃に結婚しているが、この結婚にも彼らしいエピソードがある。

ある日、田村が同じ作家の立野信之と電車に乗っている、綺麗な乙女が立野に丁寧挨拶をした。

田村はこの乙女を一目見て、瞬間に心を奪われてしまった。もともと、田村はひどく惚れっぽい人で、美人というところに好きになつて、好きになるだけならいいが、勇敢にも結婚を申し込む事がある。数年前まだ田村が無名の頃、当時可憐な美貌女優だった原節子に結婚を申し込み、あつさり断られたことがある。

彼は乙女が下車するのを待ちかねて、「おい、あの娘、美人だな」

と、讚美の声を上げた。

「そうか。お前、惚れたのか」

「うん」

「ぢや、世話しようか」

「頼む」

話は至極簡単だ、と云うのは、立野信之はその頃、父親の経営していた滝野川の女学校の校長代理をしていて、その乙女は卒業生だったのである。

そして、ここに田村泰次郎夫人が出現したのである。

ここで、この四人のその後の恋愛行状記となるのだが、それは彼等の書く小説を熟読玩味される方が賢明らしい。

この四人の他に、早稲田派の一大嚆將として、火野葦平がいるが、これはあまり女性の方とは関係ないらしく、もつぱら同じ早稲田派の長谷健と二人で、銀座あたりをふらついている。この二人がいつも一緒なので、同性愛じゃないかなんかという向きもあるが、そんなでもない、知つてゐる人は知つてゐるが、そうではない。第一あのパンカラめいた薄汚ない二人の同性愛なんて考へ方がどうかしてゐる。



そどみあ・すとおり

嗜尿木偶

衣紋竿は、うなりをたゝて新之助の腿を摸つた、悲鳴をあげつゝ、彼の欲情は頂點に達してゆくのだつた――

工藤 頼 夫

瀬 木 紀 子 画

公便所で會つた男

新之助が勤め先の丸の内の会社を退けたときは、もう

四辺は夜の闇に馴染んでいた。

新之助は、はじめてホッとしたよ

うな気持になる。勤務から解放され

たという気易さもあるが、それより

も、やっと夜になったとの安心感だ。

夜だけが、彼の秘密を包み蔽い、庇ってくれる。他人にいけない自分の同性愛癖、それ

は陽の光っている白昼では、その片鱗とも現わすことはできない。

ところが、夜の闇は、そうした彼の秘密の性癖を、自由にふるまわしてくれ、他から隠してくれるのだ。

だから彼は夜を愛する。一日中夜であればいいと常に思うのだ。

ひたひたと温く新之助を包んでくれる夜の闇を縫って、彼は東京駅から電車に乗った。

そこにはラッシュ・アワーの混雑が、彼を待っていてくれる。一日の勤めで疲れ荒んだ男たちが、暴力と体臭とで、彼をもみくも

にしてくれる。彼は進んでもっとも混んでい
る車を選んで、その中に入っていく。そして
押されこずかれることに痺れるような愉悅を
感じるのだ。

が、今日はそれもほんの束の間、神田駅
で、電車をおりた。人と待合せる約束がある
のだ。

新之助は神田駅から美土代町の方へ歩きな
がら、その人とはじめて会った一週間前の事
を回想する。

それはやはり会社を退けての夕まぐれのこ
とであった。彼はひとりでブラ／＼と日比谷
公園へ歩いていった。

まず公園の入口の公衆便所に入った。

公衆便所は、新之助にとって、又とない楽
しみの場所である。そこに漂う臭、すえた
ような異臭に鼻を衝かれると、彼は何ともい
えぬ陶酔感を覚える。

そればかりでない、あわよくば、盗み視で
きることさえ、間々あるのだ。だから彼は、
街を歩いていて、公衆便所を見かけると、尿
意を催すと催さぬにかかわらず、遷かれたよ
うにそこへ入ってしまうのだ。その日も彼は
小便所に立って、排尿をおわっても、しばら

くジツとしていた。

便所へは間断なしに人が入って来る。彼の
隣りにも、幾人か男が立って、尿を排出して
いくのだが、どれもこれも、彼の理想のもの
はなかった。

新之助は諦めて、その場を去うとした。と
そのとき、一人の男が駆けこむように入って
来た。

ガッシリした体付の四十五、六、鼻下に手
入れのゆきとどいた美しい髭をたてた紳士態
の男である。彼は尿意をこらえにこらえてい
たものとみえ、合に上るのももどかしそう
に、その下に立ったまま、尿を発射した。

新之助は一目覗くや、足元からてっぺんま
で電流に貫かれたような痺れを感じた。

排出する尿の光り、烈しい音。息を詰め、
眼を細めている紳士の顔、壮烈なまでの排泄
風景だ。

新之助は、見惚けたようにジツと一点に
ながめ入る。

紳士はふと新之助のそうした態度に気付い
たらしく、彼の方を見た。

新之助は、はじめて我にかえり、あわてて
眼をそらした。

(思わず深入りしてしまった。咎められて
は事だ)

こう思った彼は、急いで便所を出ると、公
園へ入っていった。

この公園には、夜になると男色者の集いよ
る場所がある。彼の足はその方え向っていっ
た。

と、背後に、「もし／＼」と呼ぶ声をきい
た。あたりに人影はなく、自分らしい。新之
助はふりかえった。

瞬間ギョツとした。今の今、公衆便所の内
で見たばかりの中年紳士が、そこに立ってい
るのだ。が、次の瞬間にはホツとした。

(男色家だな……)

と解ったからだ。カンで解ったのだ。

「何か……？」

新之助は知らばくれた口調で訊いた。

「イヤ……」と紳士は鷹揚に微笑して、「袖
すりあうも他生の縁、そこらでお茶でもつき
あいませんか」

こう誘いかけて来た。

(もはや少しの疑いもない。この人も自分を
同性愛者と感知したのだ。そして、自分に惚
れたのだ)

新之助はそう解釈した。

彼は自分の容貌に自己愛している。事実、

彼は色の白い典雅な顔と、やや瘦せぎすだが、均齊のとれた肉体をもっている。そんな彼だから、少年時からしばしば異性や同性から恋せられ、思いを打明けられた。彼は異性には何の関心も興味もなく、ひたすら同性の魅力にひきずられて今にいたっているのだ。「それよりも……」と新之助は云った。「そこらを少し歩きながらお話しませんか」

こんな場合、新之助の知っている男色家の多くは、「そうですねえ」と云って、彼の言葉にしたがうのだが、その紳士はそうではなかった。

「いいじゃないですか、君、ぼくの云うことをきいたって」

と云うや、新之助の腕をつかんで、グッとひきよせると、公園の出口の方へ向って、ぐんぐん歩きだした。

その強い握力は、新之助を痺れさせた。彼は易々として、紳士にひきずられていった。

紳士は有楽町の駅近くのある喫茶店へ新之助を伴った。

其夜は、紳士は八時から商用で人と会う約

束があるとかで、雑談をかわすだけで、新之助と別れた。

そしてそのとき、二人は、今日の逢瀬を約したのである。

中年紳士と美青年

神田駅から程近い「パロマ」という茶房のドアを新之助は押した。そこは同性愛者の集る喫茶店として名の高い店である。

日比谷公園で知った紳士——牧はすでに待っていて、新之助を見るより、

「やア！」

と云って手をさしだした。新之助の柔らかな手が又しても強い握力でつかまれた。

新之助は羞恥と陶酔に、思わず頬を染めた。

牧は新之助のために、シンフーズを注文してくれた。

その芳香と冷たさは渴いた喉にこころよかった。酒に弱い新之助は、すぐ赤くなった。

色白の頬がばうッとうすくれないに染った。

「どう、この人なかなかナイスだろう？」

牧は、店のマスターに、新之助のことをこんな風に吹聴している。

新之助はますます赤くなった。牧は、そうした新之助をたのしげに睨っている。嗜虐的な眼だった。

また、新之助も、そんな牧の表情を見るとわれ知らずからだじゅうが興奮してくるのである。彼は早く牧と二人きりになりたいと思った。

が、牧はなかなか腰を上げない。チビリチビリとウイスキー・グラスを管めながら、かなり露骨な冗談を云っては、新之助をからかっている。

やがて、牧と新之助が店を出たのは、もう九時も過っていた。

電車道に出ると、牧はすぐ空車を拾って、

新之助を同乗させた。着いたところは、日本橋の或るホテルの前である。

玄関に出て来た女中に、牧は上等の部屋を命じた。

二人が通されたのは、奥まったところにある洋室風の部屋である。

茶菓をおいて女中が去るや、牧はいきなり新之助に跳びついて押倒した。

「こいつめ！」

云い放ちながら、牧は、新之助の腹の上に

馬乗りになった。

「貴様ほどおれを欲情させた人間は、男にも女にもない。この仕末をどうしてくれるのだ」

ぐいぐいと新之助の喉をしめてくる。

新之助は、あまりの意想外に呆氣にとられた。彼もいままでかなり多くの同性愛者と交ったが、牧のような相手に出会ったことがない。同性との交情の場合、新之助は相手からできるだけ惨酷にとりあつかわれることを望むのだが、どれもこれも彼から頼んで、仕方なく或は厭々ながらそうしてくれるもののみで牧のように自らこのような虐待を加えてくる男には、めぐりあったことがなかった。今夜は余りにも思うツボなのだ。

烈しく喉を締めつけられて、息がとまりそうになるのだが、その苦しさの中で、新之助は目くるめくような歡喜に身が震え、ウーンと快感の呻き声を挙げた。

「うぬッ、裸してくれろ」
牧はこう云うと、新之助の身に着けた物を剥ぎとるように脱ぎ捨てしまった。

女のように真白い柔らかそうな新之助の膚がむきだされた。

一絲まとわぬ裸体にされたことが、新之助の興奮を弥が上にも煽りたてる。牧も極度に欲情している表情だ。

彼は片手を新之助の腰にかけると、強くもちあげた。

新之助の軀が裏返った。むっくりと盛上った双つの丘。

その格好のよい臀を睨むように見据えていた牧は、ポケットから聴診器のゴム管みたいなものを取出すと、矢庭にえいッとはかり新之助の臀へふりおろした。

ゴム管はベタリと臀の皮膚に吸いつき、食いこむ。それを邪慳に引き放して、又、ぴりりと撲つ。

新之助はウームと唸って、快感に軀を震わせながら、座布団にしがみついた。

牧は冷酷な処刑者の表情で、新之助の臀を中心に、背、肩、脚、腕とビューンビューンと撲ちつづける。

見る／＼軀のそここにみみずばれができてくると、牧はそこを狙っては、幾度もゴム管をふりおろす。

新之助は目を細くして、芋虫が子供に弄かれてでもいるように、畳の上をくねり廻り

のたうち廻る。

やがて牧はぐったりと疲れたように、新之助の傍に倒れた。二人ともはじめちて充足りたような顔で、たがいの顔を寄せあい、シツカリと抱きあった。

新之助は喘ぎ呻きながら、体は痺れ、溶けていった。

尿飲の快

生れてはじめて、思う存分に被虐の快感を味った新之助は、この行為に夢中になってしまった。そして、それからというものの、牧との逢瀬のたびに、彼の殴打をもとめ、また牧も加虐を好むらしく、たがいにこの行為をたのしみ、法悦した。

が、同性愛者というものは多情である。新之助は牧から摂取するものを摂取してしまふと——つまり牧による被虐を味いつくしてしまふと、いつしか彼と離れ去ってしまった。

それから間もなく、彼は、或る映画館で正夫と呼ぶ一八の高校生と知り合った。正夫はまだ十七、八であるが、スポーツマンのまうに逞しい体付で、背丈も年上の新之助より高

く、浅黒い陽焼けした皮膚をもっていた。
 新之助は、正夫に対して被虐欲を覚えた。
 或る日曜日、二人は誘い合わして、新宿から京王線で深大寺へビクニックに出かけた。
 人気のない山の上で、二人は携えて来た食事を共にした後、愛撫を交した。正夫は自分より年長ではあるが美少女のような顔付の新之助に対して、能動的置位をとるのを好んだ。



(この分では大丈夫だ)
 心中そう思った新之助は巧みに仕向けて、正夫に自分を縛らせた。
 学校でラグビーなどやっているだけに正夫にはタフなところがあつた。彼は、後ろ手に縛られた新之助の姿を見ると、急に血走った眼付になりいきなり新之助を仰向けに突き倒した。そして縛った紐の先端をもって、新之助を引っぱり廻しはじめた。

新之助は転げ廻り、でんぐりかえる。
 いいかげん引きずり廻すと、正夫は、

「兄さん！」

と新之助を呼んだ。

何だい？ というように、新之助は顔を上げて、正夫を見た。

「兄さんは、ぼくの云うことなら何でもきくと云ったね？」

「ああ、きくよ」

「どんな汚ないことでも？」

「きくともさ。二人きりのときは、ぼくは君の木偶になるよ。いや、木偶になりたいんだ」
 「よーしッ」

云うや、正夫は、

「じゃア、兄さん、ぼくの小便を飲んでくれ」

新之助は領いて、正夫の尿をごくごくと飲み下した。

愛する者の肉体から排泄されたものが、何で汚ないことがある——新之助には、むしろ快かった。

これを機として、新之助と正夫少年との仲は、急速に親密になった。時間と場所を打合せて毎日のように逢った。

逢えばかならず新之助は、正夫に対して尿飲を行った。

前々から新之助は、同性の尿に憧憬をもっていた。便所の異臭が好きだというのも、その表われにほかならなかった。それが、今はあこがれの物を口中にすることができるのである。

新之助は幸福だった。

が、その幸福も長くはつづかなかった。

それから二ヶ月ほどの後、新之助の愛する正夫少年は、風邪が因で死んでしまったのである。

尿を手に入れるために

牧といい正夫少年といい、ひきつづいて加

虐性をもった相手を得たことは、新之助にとって僥倖だったのだ。

二人を失ってからというもの、新之助の好みにかなうような相手とは、容易に出会わなかった。

彼はせめて、好みの同性の尿だけでも手に入れたと思った。いかにしたらそれを巧く入手できるだろうかと、彼はいろいろに頭を捻り、試みた。

たとえば、こんな方法を行った。——

街を歩いていて、自分の好きなタイプの男を見かけたときには、その後を尾行して、もしその男が公衆便所に入りかけると、「もしく」と呼びかける。

「ぼくは尿を研究している者ですが、さしつかえなかったら、この壇にあなたの尿をいただきたいのですが……」

こんな風に丁寧に頼む。

尿研究のためといえば、大抵は厭とは云わない。この方法は九十パーセントまで成功した。

街の公衆便所のみでなく、東京中の大学や高校の男子便所、或は図書館の便所へまでも出かけて、いろいろの人の尿を手に入れるこ

とができた。

新之助は、おのがアパートに帰って、部屋にとじこもると、その日手に入れた尿の香を嗅いだり味ったりして、心ゆくまで楽しむ。脳裡には、その本人の幻像を描きながら……

加虐性の相手を得られないために、新之助は次第に自虐的になっていった。

尿飲のみでは飽足らなくなり、尿を自分の顔や身体にふりかけたり、尿を入れた壇で自分の軀を強打したりする。

極度の嗜尿のために、新之助の強くもない身体は、次第に健康を損ねはじめた。色白の顔は黝みをおびた蒼白さとなり、頬は削いだようにこけて来た。

それでも彼は、男色と嗜尿の快楽をすてることができなかった。

夜になると風に舞う木の葉のように、ふわ／＼と街の公衆便所の周りをさまよい歩いて自分の好みの型の男が便所に入るのを見すますと、すぐちかよって行って、尿をもらいたいと頼む。

が、つかれきった新之助の姿を見ると、相手の男はギョッとなって、返辞もせず急い

でその場を立去ってしまうことが多かった。

勤先の会社で、めっきり衰弱して来た新之助に、当分医者にかかりながら静養するがよいと無期限の休暇をくれた。

(すべては終りだ……)

と新之助は感じた。

(もはやこの世にグッドバイするよりほかはない)

そう心をきめた。

サジ・マゾの二人二役

その翌日、新之助は有名な面作師をさがして、その門を叩き、一つの面を注文した。

それは、自分の理想のタイプのいろいろの男性の顔をミックスした男の面である。

十日ほどしてその面は出来上った。さすが東京でも屈指の面作師の名人の手に成ったものだけに、新之助の案を充分に表現しつくした、生ける人さながらの面であった。

新之助はその面をもってアパートに戻ると部屋に入って、ドアを鍵した。

彼はまず上着を脱ぐと、いかつい格好のジャンパに着替えた。次に、ズボンを脱ぎ、サ

ルマタをとった。

上半身に服をつけ、下半身は一絲まとわぬ裸体という、奇妙な姿となつた。

ついで右手にだけ、黒の大きな革手袋をはめた。

最後に、顔には、例の面をつけた。

新之助はナルシズム(自己愛慕癖)の傾向が強いだけに、女のもつような大きな三面鏡をもっている。その鏡の前に、奇妙な格好で立った。

鏡面中で、「自分の好みの男の顔」が、女のように真白な腿のあたりを、睨むように見据えている。

新之助は、烈しい興奮に、ぶるぶると身震いした。

「大きな掌」は、つぎに「彼」の臀に跳びつき、ハッ裂きせんばかりの強い力で、双つの丘を引き放した。

「アッ、そんなことを……」

新之助は叫んで、「左手の白い掌」が臀を蔽おうとする。

と、「黒い掌」が、惨酷に「白い掌」を撥ねのけて、臀を抓る。

「ウームウーム」

と新之助はしきりに呻く。

「このくらいではまだ足りぬぞっ」

「男の顔」が憎々しげに云い放つと、「黒い掌」に衣紋竿が握られた。と見るや、それはビューンとうなりをたてて「新之助の腿」を撲った。

「新之助」はヒイヒイと悲鳴をあげた。

悲鳴をあげながら、新之助の欲情は頂点に達していた。

「えいッ、おれの尿を飲め！」

「男の顔」がこう叫ぶや、面が引き剝がれ、新之助の顔が現われた。

と、鏡面の中の新之助の顔に向って、烈しい勢いで一条の尿が噴出した。

新之助の顔が、鏡の中でバクバク口を動かしている。

極度の興奮のため、新之助はそのまま気を失って、その場に昏倒した。

こうして、新之助は、サジとマゾの二役を単身で演じて、歓喜の中に絶命した。

■終■

セミ・アンケート

あなたは寝言をいいますか。

寝相・寝言・寝巻のことからちよと寝室
まのぞいてみましょう

問一 あなたの寝相はいい方ですか悪い方
ですか。

問二 あなたはどんな寝言をいいますか。

問三 あなたはどんな寝巻をきておやすみですか。その理由は？

問四 その他ケッサクなスイミン中のくせは？



徳川夢精

- 一、あまり動きません。
- 二、武蔵はじっとかまえた。
- 三、寢室用のネマキでアル。寝るタメでアル。
- 四、ときどきいねむりをします。

越路細雪

- 一、ごらんになればムラムラとする程度です。
- 二、「良ちゃん」と言うことにきめています。
- 三、チャック付きのパジャマです。理由はベンリなのよアンタ。
- 四、マクラを抱くクセがあります。

トーニ谷



- 一、ベリイグッド・アン悪いザンス。
- 二、オッカチャン、カム、ヘアー。
- 三、モーニングのままザンス。グッド・モーニングザンス。
- 四、疊の下へもぐるクセがあるでザンス。

柳家金五樓

- 一、いやなこときくね。ヨシマシヨウそんな話は。
- 二、「月が出た出た……」という歌をうたっています。
- 三、ああ、あれは着てねるもんですか。
- 四、パンツを頭にかぶっています。

ジフシー、スロース

- 一、ナヤマシイデスワヨ。
- 二、モット・モット・モウタクサン。
- 三、お腹がひえるといけないからバタフライをあてています。ハラも身のウチですもの。
- 四、すぐフトンをぬいでしまうクセがあります。

大屋壯一

- 一、どういふのを悪いというのかネ。
- 二、まだ聞いたことがない。
- 三、防弾チョッキだよ。きたいから着るのさ。
- 四、どういふのをケッサクというのかね。バカだねキミは、

花森安次

- 一、寝相スタイルは研究中です
- 二、イヒヒヒ……。
- 三、見たいだろ。さあみやがれ。
- 四、シーツをズタズタにサイダンするネ。



ラブレターの返えされ方

あなたがもしも(もしです)彼女からラブレターをつき返えされるとき、あなたは泣いたりおこったり、さわいだりすることの必要は全然ないのでアル。あなたは静かに十字を切るのです。次に右の手に左の手をそえて、いとも、ゲンシユクな表情で、その返されたラブレターを胸に抱くのです。そして、感極ったところで「バンザイッ」と叫ぶのです。奄美大島だつて返されたときも、バンザイを叫びましたからネ。そして、「ヤ、ありがとう。今夜はチョウチン行列ものでスワ」ケロリとまるで、おこりがとれた調子で引上げるのです。



すてぜりふ名言集

「ばかに高けえぢやねえか。入口にネオンでもつけてるってえのかい。チエッ」
これは、青線地区で、交渉が決裂したときである。
「わからねえんだな、俺の値打が、フン母ちゃんは、ちゃんと知っててくれらあ」
どこでも、モチなかった場合は何時でも使えるのでアル。



「昨日や今日のかけ出しぢやねえやい」
すべってころんだ時である。
「穴が小せえのかよお。玉がでかすぎるのかよお」
パチンコの玉がはいらなかったときである



三行知識

皇太子殿下は独身であるというのはホントである。

日本のキンゼイ報告はゼイキンのため発行できなかったとロイター通信は報じている。

ディオール・ショール・ショートスカート旋風以来、パリではショール・ショート全盛になりショール・タイムが便利になったとパリジエンヌを喜ばせている。

マリリン・モンローの腰のふりかたは時計の振子よりも三十五分の一秒だけおそい。

夏下冬上は炭火のおこしかたではない。夜のオコナイの法則であると東大の小使が発表してセンセーションをまきおこしている。

我が國のメスポリ(いや失礼)婦人警官の数は夜の女の十三分の一である。

源義経の八隻とびは女のことである。一晩のできごとでアル。

日本の越中フンドシはニューヨークの博物館でダタフライトと名がついている。

パチンコの玉のサイズは獅子ッ鼻の穴のサイズと同じ。





奇態風俗雜考

艶本に現われた異常性慾

男の前で親分が娘に無体をする、その様子を子分達が覗き見し乍ら、自分たちに娘を下げ渡してくれんことを空想しつ……

英 陸 朗

荒淫の物語

変態と云えば荒淫だつて変態だけれども春本や秘面に於ける惨虐とか被虐といったものは比較的少く、要するにエロはもっと無邪気で明るいということにもなるうか。

北斎の「万福和合神」の巻頭には陽頭陰面の男神女神の絵があるが、別にそれが妖怪変化にも見えず、「大焦熱開地獄」の図にしろグロで滑稽ですらある。その他斯種の絵で横本二冊もの、艶本もあるが、なかなか面白くてよく出来ていというだけで、

変態的な感じは余り感じられない。

所謂変態惨虐絵と云えば、却って昭和初期の新聞附録絵などによくあった。孕み女を逆さに梁に吊るして、下で老婆が双をといでいる安達ヶ原の鬼婆の絵とか、油屋お紺殺しの場、その他当時巷間に起った犯罪事件を扱った絵に多い。

春本読み和の方にも江戸時代のものにはそうしたものの殆んどないのは、時代のよさという原因もあるだろうが、何にしろ封建社会に於ては密通してさえ死刑になったり遠島に島流しになつて生涯自由の社会には戻れなかつたのだから、強盗殺人などは



そう誰でも思い付きでやる者はなかったらしい。そして享保七年に好色本の板行禁止が出て以来、寛政度の禁令で春画、一枚絵、草紙などの取締が厳重になったけれども、猶ひそかに刊行されていた春本でも、読み和の最後には勸善懲惡的な結びのついているのが普通だった。

「女護島延喜入船」では、三人の男が釣舟で流され、何処とも知れぬ女護ヶ島に漂着すると、そこで女達に連れて行かれて島主朱門公の伽をすることになるのだが、その前後に官位の順に従って之等の男達が下げ渡されるのである。何にして男氣の全然ない女護ヶ屋のことだから、珍らしがって男達を相手に散々な目にあわす、そして遂に男等は足腰も立たず虫の息になってしまふのである。

この話は一種の漂流記風な筋となっているわけで、この他にも艶本「開談遊仙伝」として同様な夢物語りがあるが、要するにこれ等は西鶴の「一代男」などで所謂男娼屋がもしも開業されたら、さだめし女達が沢山やって来るだろうといった空想に因んで如何に好色男でもそんなに相手の女が多過

ぎたり、やはり楽しみでなくて、とんだお苦しみだと云った教訓的な筋を含ませているのである。

相手が多いと云えば、昔秦の始皇帝や随の煬帝は後宮に三千の美妓を蓄えて勝手な荒淫々虐の限りを盡したと伝えられているのである。「迷楼記」という書には此の煬帝の淫行が記されていて、彼は当時一流の名絵師に命じて春画数十面を描かせ、それを私室の周囲に掲げて楽しんだが、それでも飽きたらず後には、臣下から献じた鳥銅の屏風とて高さ四尺、巾三尺の獨立のような鏡を、数十面寢室の周囲に立て並らべてこれを活春宮と呼んでいたという。つまり春宮の活きて動くとの意味だったのであるが、何んのことはない臺の油の文句に出て来る臺のようだったろう。それでも四面八角あらゆる角度からその姿態が眺めらるる悦に入っていたのである。

鏡の間の寢室はこんな故智から起ったのかも知れないが、うぐいす張の寢室や鏡の間の寢所なども確かに変態の一つと云えるだろう。或る地方の妓楼にあった鏡の間の寢室は周囲の壁から鴨居、天井まで全部が

鏡になつていて、特別の客でないと使わせないが、妓と客とは裸体で此の部屋に入り鍵がかかるように出来ていたという。

大物屋彦三郎の話

艶本「童児往来」の一書で、各種のコント説和を収録しているものうち、「三条通の千人切」云々の一話は、京二条通り上る烏丸辺に、呉服商大物屋彦三郎という大商人があつた。何不自由のない身だが、生れつき大物持ち、俗に駄と云われる類で遊所通いをして新造は一度で恐れてしまふのであつた。

そこで彦三郎は金にあかして遊所通いしても女郎があわず、手かけも恐れて近寄らず、腎虚火動でなく腎満過病となり、出養生にと先斗町にお氣入りの腰元一人をつけて移つたが、この腰元も暫らくすると病ついで里帰り、手代男も旦那思いで、あれこれと心配して、入り替り立替り目見得に来るが、皆一度でかたいきになつて逃げ帰るに、今は生きて甲斐なし、この上は思ひのまゝに暴れ廻り、自分も羅切して相果てん

ものと家をとび出してしまふ。ソレ旦那が逆上したと手代の止めるを振払い、さえぎる下女を即死させ、それから我家を差して帰る途中で、女という女は誰彼の見さかいなく引つ捕え、女子の手負死人三四十人、漸くにして氣の静まつた旦那を見て、手代も番頭がこの跡始末をどうするかと案じている。

といった筋である。弓削道鏡と同様な変態者の話で、別に細かい会話や描写のない読み物だが、どこか息詰まる思いを感じさせる。

廻りを打つ話

女一人に数人がかゝる筋のものもあるが、説和ではその一々に女悦の状景が出て来て一向に惨虐のところがない、結局女を悦ばすことによつて男も満足するのであるが、絵の方では山路などで美を取り巻くこぎたない荒くれ男が、相争つて廻りをとるといった図が歌麿にも清長ものにもある。

ある艶本では、近所の小町娘に想いを寄せている商家の番頭が、思い余つた末に一

策を案じて、娘の帰途を人通りの少い場所に待構え、路上に笑ひ絵を折りたゝんで捨て置く、それを娘が何ごころなく拾つて開いて見たが、顔赤らめて辺りを見廻し、見ている人もなかつたので、そのまゝ笑ひ絵をふところに入れて立去ろうとするのを以前から木蔭にかくれて眺めていた番頭、これは出来ると踊り出で、以前からの様子は残らず見た。云うことをきかねば、この話を世間へ云いふらすと脅して、遂に娘を木蔭に連れ込む。するとまたこゝへ通りかゝつた土地のならず者三四人が、これを見付けていゝ所で二人を引つ捕え、娘は親分へのいゝ土産と、兩人を縛つて担いで行く。それから淋しい一軒家に連れ込んで、男の前で親分が娘に無体をする、それを次の部屋から子分達が覗き見し乍ら、あとで自分たちにも娘を下げ渡ししてくれることを空想する。といったかなり惨忍な説和があつた。

「東海道駅路の鈴」では、街道の夜明け方まだ辺りも薄暗い渡し場の茶屋蔭で、内儀と首尾を遂げるが、あとで氣付くとかねて約束した男とは、似てもつかぬ間違いだ

ったというのがあるが、斯様な人違いの話では、ある宿屋に泊った男が、廊下の帰りでフットと部屋から洩れて来た男女のさゝやきを立聞きしてしまった。それは宿の娘と恋仲の男の相談で、今宵時の鐘を合図に娘の寝間に忍んで来るように、部屋には

わぬように帯を入口から自分の床に延べて置く故、その上を伝って来いと云った。これを立聞きした男はその儘知らぬ顔で部屋に帰って寝てしまったが、夜中目を覚まして、かの時の鐘の少し前に娘の部屋に忍び込み、灯を消している闇を幸い、先刻聞いた通りに帯を伝って忍び入り、なんなく首尾を終



えて帰りに帯の端を隣りの老婆の方へ押しやって帰ったのである。それとも知らぬ約束の男が出掛けて、いきなり老婆の方へいったからたまらない、大声で騒がれて娘も初めて間違えを知って驚くといった筋である。

密這の話

横板を切るということが遊里言葉にはある。金山詞から出た隠語だと云われるが、妓が客に隠れて約束の時間中に情夫と他の座敷で逢うことなのであって、或は横に来るとも称し横取りする意味となる。

また間男取というのがあり、忍び込んで知られずに首尾するというわけである。秘画には斯うした図が時折見られ、獵奇的なことであるにも拘らず、絵で見ると頗る滑稽な図である。

「妃多智男比」には、盲目の女房らしいのが三味線を弾いている、その側に習いに来た男が、盲目の亭主の他にも一人座っていて、これが亭主の盲目を幸いに女と戯れている図がある。これも相手に隠れて同じ座

敷で横板切ることになる。

も一つ別の話では、ある宿屋へ泊った男がその内儀を見ると、どうやら多淫らしい女ゆえ、一つしめる気になり、夜中その夫婦が寝ている居間へ忍んで行くと、内儀気がつき彼の意を迎え受けた、というのがある。これが即ち間男取の手法で、斯る法は昔の船中などで雑魚寝の折にも人知れず行える法として述べている書もある。

斯様に密道には、相手が予め承知のものとこちらだけで強行する類とがあり、他に隠れて事を済ますというところに特別の興味をもつ変態ものである。

「文指南」書などの所謂伝授書によく密道の法というのが記されているが、それには首を立てぬ為に障子の溝に水とか油を流すとか、畳の上を足音を立てぬように歩く法として禪とか帯を長く延べて、その上を渡る法のことと述べている。

実話風な一話では、田舎住いの新世帯、夫は今宵は会合があつて、帰りが少し遅くなるというので若妻一人が心待ちに待っていたが、夏の夜のことではあり、眠くもなつて来たので、帰宅まで暫しの仮睡のつも

りで蚊帳に入っていると、やがて夢心地となり、夫が帰つて来て着物を着替え、電灯を消して寝たのも夢うつゝの内に気がついて、それでも若妻らしい態度で迎えた。それからまた暫らくして気がつくと、便所へでも行つたのかと思つた夫が、手土産をさげて今帰つたという。ハテ夢ではないかとよく／＼考えて見ると、先刻のは確かに別人だつたと判つたが、それを夫に話するとは出来なかつた。と云つた罪な筋のもある。

秘語で此の夜道のことを「夜討ち」「夜盗」などとも云つてゐるのだが、本当の夜盗が物盗りと両方を狙うのもあり、恐怖と憎しみのうちに、そして一方から云えばまた冒険と強引のうちに、情交するのは確かに変態に違ひない。恐怖と快感とのスリルには或る点で似通つたものがないとは云えない、だがそれを正当な方法の上に発見されない場合に犯罪となり易いのであるが、

斯様な獵奇心理を想像して、夫が強盗を装つて妻に迫るといった話もあり、後には何かさうした変つた刺激を与えなければ満足出来なくなつたという変態性慾者の例もよく挙げられる。

屍姦と胴人形の話

国貞の秘画で「逢夜雁」の声だつたと思ふが、隠亡が棺桶の中から死美人を取出している屍姦の図がある。

斯の種のもものでは、昭和七年にかの大磯心中を艶本に作つた「天国に結ぶ恋」という現代春本が出てゐる。親の許さぬ恋と無毛症とが原因となつて、遂に若い二人が情死をとげたが、更に漁夫だつたか変態性の男に、この女の方の死体が持ち去られて紛失したから、事件は一層獵奇犯罪的なこととなり、発見された時には海辺の小屋に裸体で同寝された形跡があつたといふのである。

かの秘具を仕掛けられた胴人形の挿話にも、かつて非常に愛妻家だつた一老人が、遂にその妻に先立たれて、悲歎にくれ何日かその屍と一緒に暮したが、その後ある細工物の上手な者に依頼して、生きていた時その儘に妻の等身大の人形を作らせ、自分だけが知る妻の肉体の秘密まで精細に象らせて、所謂胴人形として、獵奇的な愛情を傾け続けたといふ話もある。

狩奇すとおり 妖異腐臭圖

泥と血で、美しい顔を汚しながら人肉に喰いついて、ときどきぶるっ
 と顔を振る。眼は虚ろになり、血まみれの口は耳まで裂けて……

峯 秀 太 郎

久 保 川 祐 画

連れ込んだ女

斬られのお紋、など

と二ツ名で呼ばれ

ている、門倉

京子だった

が、この

とき



ばかりは、

ドキとンした

男だったら畢丸

がチミミ上ると言うところだろう。

うまくタレこんだスケの

つもりが、逆になってしま

った。

「さう、何とでもしておくれ、煮

ようと焼こうと、お前さんの勝手の

ま……御意のまに從います、と

ま……御意のまに從います、と

「いったらいいんだろう」

奥の座敷へ引きずりこんで、少しヤキを入れてやろうかなどと思っている矢先のことだった。

「何だい、へん、大きな口を叩きやがって、吠え面かくなよ。あたいはね、そのへんの、チンピラ娘とは違うんだよ」

お紋は、女を目の前にして、婁んでみせたが、内心ではビク／＼していた。この女は一体何者か、などと言う恐怖心みたいなものが心の中に出てきてしまつては、何時ものように一息に痛めつけてしまうことも出来なくなつてしまつてゐる。

「さア早く何とでもしておくれ。縄張りの仁義のツて、うるさい掟があるんだろう」

女は膝を崩して坐つたまゝ、肩でお紋にすりよつてみせる。崩した膝元からは、長襦袢の赤い裾が乱れ、その間から、肉附のいゝ白い肌がチラ／＼と見えている。

お紋は、自分が女でありながら、それが何ともいえぬ艶めかしさだ、と感じた。

「待つていろよ、あたかも斬られのお紋とか言われているお姐さんだ。仕置は充分にしてやるからな……」

お紋は、そう言つて、すりよつてくる女の

肩を、強く押さえた。

夕方、何時ものように、場所の駅前（駅前）に立っている、この女が来たのだった。小娘のような感じでありながら、何処かに色っぽい若奥さまみたいな様子をみせているこの女に、お紋は氣を惹かれた。

附近では見かけない女だった。流れ者かな、とお紋は氣をつけていた。それなのに、女は別に客を引く様子もない。たゞじつと道端に立つたまゝ通りすぎて行く人々を、呆心したような眼差しで見ているだけなのだ。

人待ちでもなく、客引きでもなく、そうかと言つて街の女でもない。それがお紋の坎にさわつた。

「一寸、姐さん。お前さん一体何だい」

駅前一帯を、自分の縄張りみたいに思つていたゞけに、お紋は癪にさわつて、つか／＼と近寄ると言つた。

「えッ！」

女は困つたような顔をして、その顔を伏せた。面長色白の顔が、小じんまりとした身体に調和して、何となく愁いがあった。

「流れこんできたのか、それともはじめなのかい。見馴れない顔だね」

お紋は、せい／＼婁んでみせた。だが女は

顔を伏せたまま返事をしなかった。それがふて／＼しいように見えた。

「一寸私についておいで……」

その様子をみてみると、お紋はムカ／＼としてきた。仲間の手前、こういう女には、ヤキを入れてやらなければならない。それでないと、たゞさえ商売がやりにくくなつてゐる此の頃、大きな顔をしてゐることが出来なくなるからなのだ。流れ込んでくる女や、素人女のヨルバイトなんか、場所を喰ひ荒されたのでは、商売人の名がすたるのである。

女は、お紋にあごをしゃくられると、しお／＼としながら、後についてきた。

「こつちい、入んな！」

間借りしてゐる、奥の部屋に女を引き入れると、お紋は女を畳の上に突き伏せた。

そのときだった。

「ふゝゝゝゝ」

今まで恐怖に戦（ふる）いてゐるとばかり思つていた女が、急に含み笑いはじめた。

「何だい、何が可笑しいんだ」

お紋は、何時もと勝手が違つて、あわてゝ言つた。

「何もおかしくはないよ。たゞね、あんまりお前さんが威張りかえるものだから、氣の毒

強はない。

愛人或はひそかに恋慕している男性の落した持物とか、又は特定の男性とはかぎらぬが、異性の垢で汚れた肌着其他を手に入れた、それに狂熱的な愛慕を燃やすのである。

或る少女で、男性の足の脂で汚れた下駄や靴に対して狂熱しているものがあつた。

又、少女のフェチシズムで特に顯著なのは、少女歌劇の男役の女優が身に着けた物や持物を手に入れて、それを狂熱愛慕するものが多いことである。

これは同性愛と異性愛の済した心理によるフェチシズムと見ていいだろう。

窃視癖

十代の男女の窃視癖はどうだろうか——これはフェチシズムよりも多く、

男子 三六八

女子 一三八

男子においては、過半数を占めている。

まず男女少年の場合について、その窃視の形態を見てみると、

(1) 両親の交情を窃視するもの

(2) 家人異性の入浴姿を窃視するもの

(3) 家人異性の寝姿を窃視するもの

(4) 家人の上廁を窃視するもの

(5) 他人の交歓を窃視するもの

(6) 他人異性の入浴姿を窃視するもの

(7) 他人異性の上廁を窃視するもの

というような形で現われている。

(1) の場合は最も多く、十二人という数字が出ている。

これは両親と同室で寝る者は眠った風をして窃視する。又、隣室が両親の寝室である者は、襖に耳を当ててその声とか音を聴く、又襖を細目に開いて覗く、障子の孔から覗く等となっている。

(1) は、母親、姉妹、女中其他自家に同居している異性の入浴姿すなわち裸体姿を窃視するのである。入浴中のみならず、脱衣するとき、風呂を出て着物を着けるとときかを覗く。

(3) は便所の窓——主に下の窓からひそかに窃視するのである。

(4) は屋内或は屋外における他人の交情姿

態の窃視である。

或る少年は、駅前マージョットの二階に父母と一緒に寝ているのだが、隣りの二階とはニヤ一枚の境で、そこに小さな節孔がある。その節孔から、隣りの飲屋の女中と客との交情姿態を常に窃視しているという。

又、或る少年は、米人とパンパンが「青カシ」をする場所を知ってからというもの、いつもその附近の木に登って観察しにいくという。

(6) の場合は、都会の少年よりも田舎の少年に多い。田舎の百姓家などには大抵内風呂があり、それも開放的に出来ているので他人の入浴姿を垣間見る機会が多いのである。

(7) の場合は、街の公衆便所或は映画館の便所の窃視である。そこにはよく節孔などが開けられてあるので、少年は好奇心にかられて、つい窃視してしまふのだ。

次に少女の窃視行為を見てみると、
(1) 両親或は同居の兄夫婦の交情を窃視するもの。

(2) 部屋貸している洋パンと米人の交情を窃視するもの。

たはずの雨戸が一枚、開け放たれているのである。彼は、不審に思うと、そっと温い寢床をぬけ出して、廊下に出た。開いている戸の

に釘づけになったとき、思わず声を上げようとして、慌てゝ手で口を押さえた。

人肉を喰う処女

ところから外を見ると、外は一面白雪におゝわれている。そのとき不図彼は、積っている雪の上に、足跡がついているのに気がついた。

其処には、世にも奇怪な光景が浮かんでい

た。

若い一人の娘が、雪の上に膝をついたまゝ、

ものではなく、はつきりとした人間のものなのだ。そしてしかもそれは、外から中へきたものではなく、確かにこちらから出たものにちがいないのである。

雪中で何かを喰っているのである。それが墓から掘り出した、人間の肉であることに、彼が気のつくまでに相当の時間がかゝった。

彼はそう見きわめると、好奇心にかられてしまった。この真夜中に、積雪の中を出ていった者は一体誰なのだろう。

墓の上の掻きわけられた雪が、両側に小高く積み上げられ、その下の土を掘ったあとが黒々としている。月の光に照し出された若い娘が、狂おしく人肉を喰っている姿は、この世のものとは思えなかった。

彼は、身に沁みる寒さも忘れて、その足跡の主を尋ねてみる気になり、素足のまゝ庭の女の上にそっと飛び下りた。

娘は言わずと知れた此の寺の一人娘の妙子だった。妙子は彼が見ているとも見らず、泥

彼は雪中修業のつもりで、足跡を辿って、そろ／＼と歩き出した。高い木の下を通りぬけ、半分雪に埋もれた小川のふちを歩き、しばらく行くと、墓場に着いた。

と血で、美しい顔を汚しながら、人肉に喰いついて、とき／＼と顔を振ったりした眼は虚ろになり、はだけた胸は月の光に雪とみまうばかりに白く光り、血にまみれた口は耳まで裂けているのではないか、と思われた。

足跡はまだ先に続いている。彼は寒さにガタガタと身を震わせ、ホッと一息ついて入口の杉の木の下に身を置いて、先につづいていく足跡を目で追った。そして、その目が一点

耳を澄ますと、クシャ／＼と言う舌づつみ

の音と、時折り骨を折るボキンと言う音が、静かな雪の上を滑って、聞こえてくるようだった。

そして、それと同時に、なまぐさい、何とも言えぬ異臭が、たゞよってくるようにも思えた。

妙子は、しばらく無心になって啖っていたが、やがて、突っ立ち上ると踊りはじめた。天地創生のときに造られたような、不思議な踊りを踊りつづけるのを見て、彼は総身が、慄立ってしまった。

白い雪の上に、白い寝巻。はだけた胸に、狂いまわる手と足。これはそのまゝ、雪地獄の中の、狂女の舞とでもいづけるものであった。彼は、それを途中まで見ると、そろ／＼とあとずさりをして、墓の見えないところまでくると、雪を蹴立てゝ一目散に逃げ帰った。

「南無阿弥陀仏、／＼……」

彼は一心に蒲団の上に坐ったまゝ、祈りつづけた。つむった眼の裏には、血と泥にまみれた鬼面の妙子の影がやきつけられて、はなれなかった。

こうして、心を鎮めながら小一時間もしたときだったろうか、ソッと障子を開けるものがあつた。

彼は念仏を唱えながら、ソツと身を震わせた。悪魔なら念仏の前にひれ伏せ、怨敵ならば退散せよ。彼は一心になって口の中で唱えつづけた。

その甲斐もなく、入ってきた影は、彼に覆いかぶさるようになると、冷たい手を、彼の首にするりと巻いた。

「あッ！」

思わず彼は声をあげた。「見たでしょう」首に巻いた手をそのまゝ坐っている彼の膝にもたれるように身をくねらせると、月と雪の反射する薄明るい部屋の中で、白い顔を微笑ませて妙子が言った。

先刻墓場で見た、あの凄じさは、何処にも残っていないかった。十九才の処女の身体から

発散する、なやましい体臭があるきりなのだし、男の胸の中を逆撫でするような、何とも言われぬ芳香までが、その身体から流れ出している。

彼は、何も言わずに妙子の顔を見た。びつたりと身体にまつわりつく妙子の体温が、心の底にちよこまっている、男の慾情を刺戟してくる。

「見たでしょう」

妙子は、不思議な微笑をしながら又言った。隠しても駄目だと言わんばかりの語気の強さが、その短い言葉の中に含まれている。

彼は、じつと呼吸を止めたまゝ、身悶えた。あの人肉を嗅いだ息が、この女の口からはき出されて、自分の鼻をおそうのが、たまらないと思ったからなのだ。だがそれも永くはつづかなかった。

微妙に呼吸をすると妙子の体臭と芳香が鼻の奥へユラ／＼と吸い込まれた。

「見たでしょう。あれを……」

今度は、妙子は、彼の耳に温い唇を寄せてさゝやくように言った。

「うん……」

思わず彼はうなずいた。脅える心とは別に温かい女の肌を感じている肉体が、微妙なうずきをはじめていた。

「見たことを、みんなに話すの？」

「ねえ、どうするの」

妙子は、微笑をしながら、彼の身体を、自分の胸の中にかいこむようにして、じり／＼と締めつけていった。

「悪魔、化物！」

彼はその瞬間、はじかれたように立ち上ると、妙子の身体を突き倒した。突かれた拍子に裾を踏み、前をすっかりはだけたまゝ、妙子は蒲団の上に仰向けに倒れた。

真夜中の獣物

妙信と後になる信子が、この話を母に聞いたのは、信子が十六才のときだった。

もうそのときには、既に住職の祖父母は亡く、山深い寺に、母子二人だけの生活をして



が鼻の奥へユラ／＼と吸い込まれた。

いた。

有髪

の尼の暮し
をしている、

母の妙子と娘の
信子の二人を並べ
ると、まるで姉妹の
ように見えた。

「……だから、お前のお父さん
は、判らないんです、その夜、私は
叩かれ、そして縛られました。
悪魔の化身だと言ってネ。ところがお



かしなことに、叩かれたり、打たれたりする
ことが一つも苦痛ではなかったのです。私の
身体の中には本当に悪魔が棲んでいたのです
ね。叩かれ、打たれるたびに、私はジ
ーンと身体がしびれて、何とも言え
ぬよい気持になるのです。そ

して喜びのあまり、私は身
体中の血を燃やしまし
た。するとどうでし
よう。あれほど私を

憎んでいはるずのあの
人が、私の身体にしっ

かりとまとわりついてきたの
です。そして悪魔でもいゝ人
喰い鬼でもいゝ、この俺の身
体の快よさは、一体何としたこ
とだろう。と言いながら、しま

いには私の骨がくだけるのではな
いか、と思われる程強く抱くんで
す。そしてしばらくすると、又叩き

はじめました。ついには、私のこゝへ
ガッブリと噛みついてしまいました。

それが二人の昂奮の絶頂だったのです。あの
人は私の傷口から、血をチュウ／＼と吸いな
がら、私の身体を夢中になって、抱きしめま

した。もうその頃には夜は白く夜明けになっていて、雀が軒端でさえずっていたような気がします。私はあの人から、突き放されて、はじめて我にかえりました。すると急に恥かしくなって部屋を飛び出したのです。

疲れの為に、グッスリと自分の部屋に寝込んで、目が醒めたのは昼頃でしたらうか。そのときには、もうあの方は居ませんでした。そしてたゞ一度のことで生れたのが、あなただったのです。だから、あなたは是非尼さんになって頂戴」

高等科を出たばかりの信子は、そう母から言われて、身を震わせたが、そのときには自分からどうしようと言う気にもなれなかった。

そして、その夏、五里ばかり離れた、尼寺へやられた。

庵主は既に七十才に手のとゞく老尼であり、先輩たちは、何れも世の辛惨をなめた揚句、世を棄てゝこの庵を訪れてきた人ばかりだった。

そして、その秋、母が死んだと言う知らせを受けとったが、老庵主は、妙信に葬式の為に帰ることを許さなかった。

あとで聞くとところによると、真夜中に墓場

で獣と間違われて、近所の通りがかりの農夫に、鎌で打ち殺されたと言うことだった。そしてその農夫も、その場で気が狂ってしまつたと言ふが……

母が死んだ原因は、自分がこの尼寺に送られる前に聞いた話を総合すると、思い当るものがあった。

だがどうして、そんな気持ちになるのだろうかと思うと、なか／＼その気持はつかみきれなかった。

妙信は、越えて三月ごろになると、胸の中に耐えきれぬ或るものが、わだかまっているのを感じるようになった。

それが春のめざめであることには、思い及ばなかった。

せむしの平吉

或る温い夜だった。妙信は夜半に眼をさますと、ふら／＼と庭に出た。

山の雪はそのまゝ山膚に凍りついたまゝになつており、木の根方や、塀の横には、積まれた雪が凍ったまゝ残っていた。

だが、今日は、昼過ぎから珍らしく温かかった。

妙信は眼られぬまゝに、あちこちと歩いて、自分の足が、何時か庵の裏側の墓場に向いているのを知ると、不図母のことを思い出した。

すると、急に墓場に行つてみたい氣になった。怖ろしさもなかった。低い灌木の茂みを通りぬけ、砂利を敷いたばかりの小道を、音を立てゝ歩くと、型ばかりの戸を開けて、墓地の中へと入りこんだ。

確か、昨日埋めたばかりの墓がある。そんな考えがチラッと頭に浮び出ると、妙信の足は何時の間にか、その方に向つていた。

自分と同じ年頃の、若い娘の死体が眼に浮んだ。蠟のような白い肌、硬ばった身体。それでありながら、皮膚にのつていたつや／＼とした感じ……

そんなことを思っていると、母が墓を掘つて死体を嚙じつたと言う、奇怪な魅力が、胸の中に起つた。

「私はそんな怖ろしいことはしない」
そう口の中でつぶやきながら、何か惹きつけられるものと思うと、母の血が自分の血につながっている輪ねを思ひ出した。

新墓の前に立つて、ともすれば掘り起そうとする感情を押さえしていると、不意に背を押

さえられた。

「あッ！」

声をあげるひまもなく、妙信は自分の身体が宙に浮くを感じた。開いたまゝの恐怖の眼に、天と地が、二三回逆転したように思えた。

ばた／＼暴れることにもあきて、どの位しこからか、バサツと投げつけられて、妙信はやがて我にかえった。

せい／＼三疊敷位の狭い小屋の真中の、すく／＼けきった天井から、汚れた石油ランプが一つ下げられていた。

「イヒ、、、、、」

担いできた男が、地の底からわき出るような声で笑った。妙信は、それが炭焼の平吉爺さんであることが判ると、急に口惜しくなつて立ち上った。何時も庵に来ては、庵主にペコ／＼したり、他の尼さんの里の用を足している、せむしなのである。

「何をするの、平吉！」

妙信は、つとめて、平静をよそおって、言つたが、せむしの平吉は、たゞ薄ら笑いを、醜い顔に浮かべているだけだった。

「帰るよ！」

妙信は、それを見ると、表に出ようとし

た。すると、それまで醜い顔に笑いを浮かべて、じつと見ていた平吉が、猛然と妙信に躍りかゝってきた。

激しい争いが、二人の間にはじまったが、普段力仕事をしている平吉に、妙信が取り押えられるのに暇はかゝらなかった。

妙信の着ている寝巻の袷は、裾が乱れ、袖がもぎれて、見るも無惨だった。

平吉は妙信の両腕を背後に縛りあげると、締めている帯をする／＼と解いた。妙信の白い全裸姿が、薄明るい石油ランプの下で、ワナ／＼震えていた。

「妙信さん、これから面白いことをやるべえよ……」

それを見下しながら、平吉は舌なめずりをする、傍の小さな籠の中から、一つかみの沢ガニを取り出して、身悶える妙信を仰向けに押さえたまゝ、その白くむっちりしている腹の上に、這わせた。五六匹の小さな沢ガニは、不意の肌の温みに見当違いをしたらしい。立てたツメをきゅ／＼とちぢめると、やわらかい、妙信の腹の皮膚を、キリ／＼とはさんだ。

「あゝッ、あゝッ」

「どうだ、よかんべ。ふゝゝゝゝゝ。今度は

それよりも、もっといいことを教えべえ」

身悶える妙信を、ぐいと引き起すと、今度は自分の膝に抱え込んで、丸い豊かな臀を、武骨な手でピシャ／＼と叩き出した。

この夜を境として、妙信とせむしの平吉の間に、奇体な逢引がはじまった。そして、平吉だけでは済まぬ、妙信のたゞれた腐臭の行脚が、はじまったのである。

「もう沢山よ。それでいゝッ！」

斬られのお紋が、手にした鞭をバタリと捨て、唇を噛みしめて、恍惚としている信子に言った。

「もっと叩いておくれ、折角のところだよ。もう少しで、もっとよくなるんだ。そして、臀でも足でも、喰いついておくれ！」

斬られのお紋が、もう打たないと知ると、信子は。

投げ出した足を、太股まであらわにバタ／＼させて、そのあとを望んだ。

その後、信子は「還俗妙信」の緯名で、お紋の家に居つくようになったが、彼女を買った男は、その夜は喜びながらも、二度とは買う気になれぬと、言っているそらだ。

〓終り〓